静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第177集

入野東古墳群
入野高岸古窯

第二東名No.76～78地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

岡部町

2007

中日本高速道路株式会社　横浜支社

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第177集

入野東古墳群
入野高岸古窯

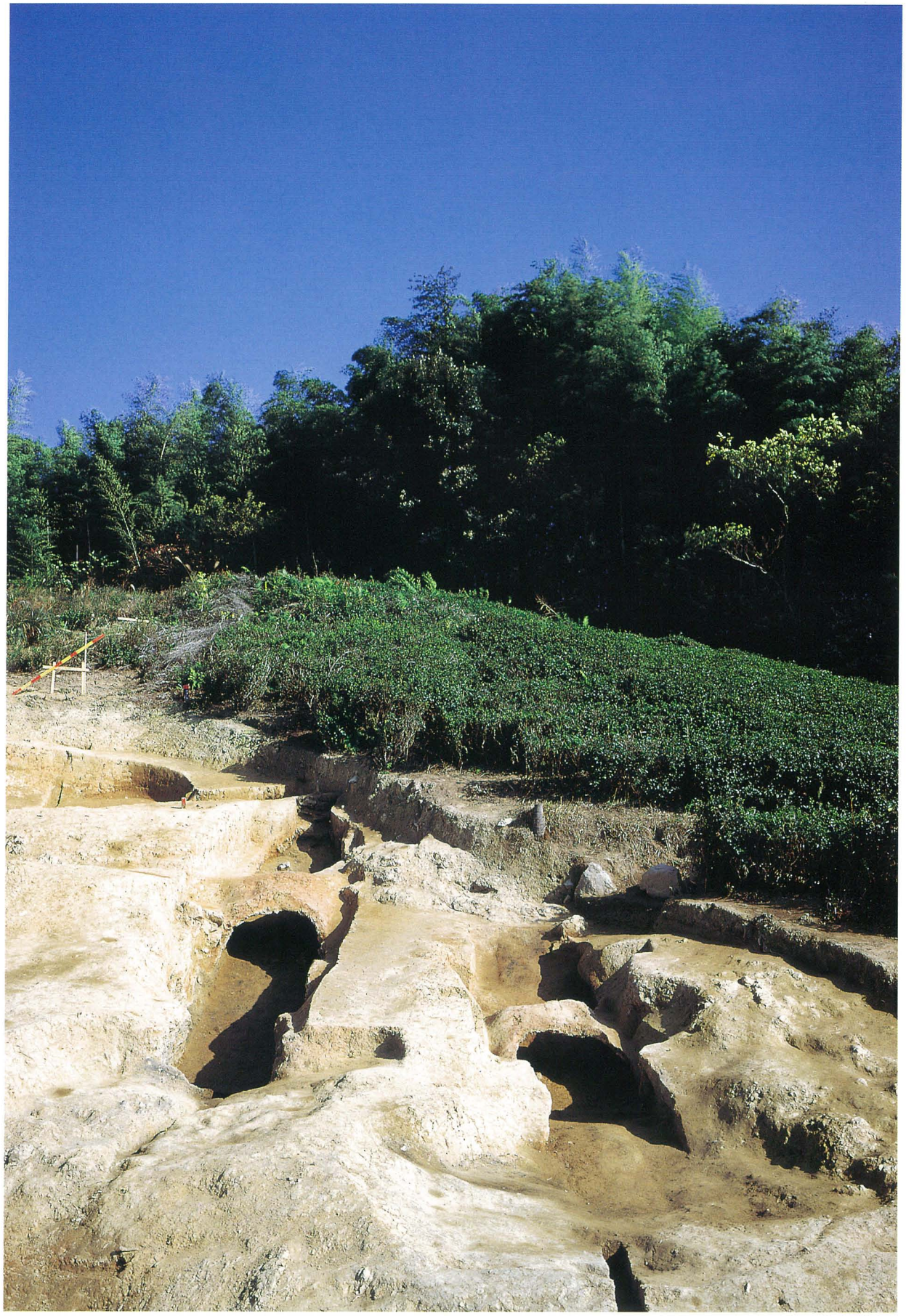
第二東名No.76～78地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

岡部町

2007

中日本高速道路株式会社　横浜支社
財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所



入野高岸１号窯・２号窯全景（西から）

巻頭図版２

入野高岸１号窯

入野高岸１号窯全景（西から）

１．北側壁面の様子１（北西から）

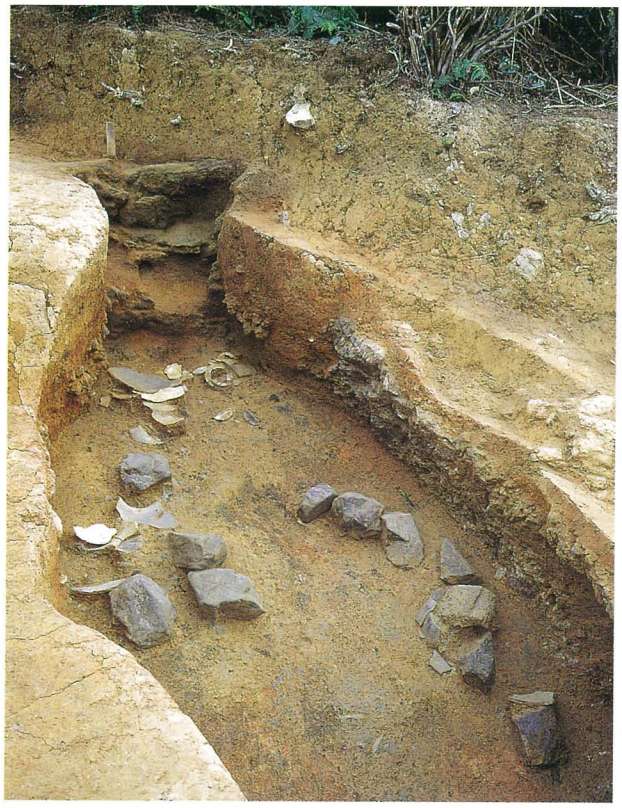
２．床・壁面断ち割り状況（北西から）

３．北側壁面の様子２（補修痕）（北西から）

巻頭図版４

入野高岸１号窯

１．燃焼部付近（北東から）



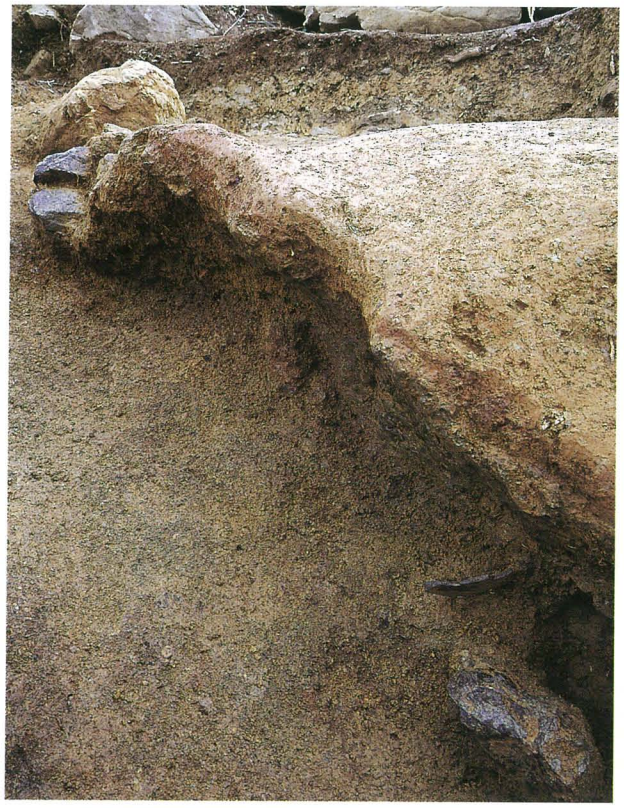
２．煙道部付近遺物出土状況（北西から）

３．完掘状況（西から）

入野高岸２号窯全景（西から）

巻頭図版６
入野高岸２号窯

１．遺物出土状況（東から）



２．北側壁面の様子（北西から）

３．完掘状況（西から）

入野高岸古窯出土遺物

巻頭図版８

入野東９号墳

１．石室全景（南から）

２．出土遺物

序

静岡県は東名高速道路や東海道新幹線など、列島の陸上交通における大動脈が東西に横断している。県中央部に位置する岡部町は、古くは東海道の宿場町としてその名を知られ、現在も国道１号線が横切り、交通の要衝となっている。新たに建設されることとなった第二東名高速道路も岡部町を横断する。第二東名建設に伴い、県内各地では埋蔵文化財発掘調査が行われ、貴重な発見に至った遺跡もある。本書は、志太郡岡部町に所在する入野東古墳群、入野高岸古窯に関わる発掘調査報告書である。共に大きな成果を上げることができた調査であるが、中でも入野高岸古窯の調査成果は特筆に値する。

入野高岸古窯は、この度の調査で新たに発見された窯跡群である。本書で報ずるのは、１号窯と２号窯の２基である。共に、７世紀代の須恵器窯であり、坏身・坏蓋を中心に様々な器種が生産されていたことが明らかとなった。入野高岸古窯が発見されるまで、岡部町はもとより志太地域全体を見ても、古墳時代後期の窯跡は知られていなかった。この発見を契機に、同じような窯跡群がほかにも存在する可能性も考えられるようになった。このような折りに、藤枝市では新たに衣原古窯が発見された。衣原古窯は、同じく第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査によって発見された古墳時代後期の須恵器窯であり、操業時期は入野高岸古窯より若干さかのぼる。この２つの窯跡群の発見・調査は、須恵器生産や流通を含め、志太地域における古墳時代像に再検討を迫るものであった。今後、志太地域の古墳時代については、総合的視野から研究が行われることが期待される。入野高岸古窯の発見・調査が、その契機となったことは喜ばしいことである。

今回の現地調査並びに、資料整理にあたっては、中日本高速道路株式会社横浜支社、岡部町教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位に、多大な御理解と御協力をいただいた。また、多くの方々から調査を通じて、有益な御指導、御助言を賜った。文末ではあるが、ここに記して感謝の意を示すとともに、現地調査と資料整理に携わった作業員諸氏の労をねぎらい結びの言葉としたい。

平成19年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　斎藤　　忠

例　言

1　本書は、岡部町域（以下、岡部地区）における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の総論と、静岡県志太郡岡部町入野250-2他に所在する入野東古墳群、静岡県志太郡岡部町入野243-2他に所在する入野高岸古窯の発掘調査報告書である。

2　第二東名建設事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査においては、それぞれ地点名が付されている。本書は、№76～78地点に関わるものである。なお、入野東古墳群・入野高岸古窯はともに№78地点に相当する。

3　第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（市町村）単位で実施している。本書は志太郡岡部町に関わる第二東名埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

4　調査は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社横浜支社（平成17年度途中まで日本道路公団静岡建設局）の委託を受けて、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

5　確認調査・本調査の期間並びに調査面積は第１章（表４・５・６）に記したとおりである。

6　調査体制は第１章（表１・２）に岡部地区の調査体制として記したとおりである。

7　執筆は及川司、長谷川睦、菊池吉修、福島志野（当研究所技術員）、三辻利一（大谷女子大学）、広岡公夫（大阪大谷大学）が行った。執筆分担は下記のとおりである。なお、第３章第４節－２はパリノサーヴェイ株式会社に委託した分析結果を掲載した。

及川　司：第１章第１節-１（１）　**長谷川睦**：第３章第３節-２・第５節-１

福島志野：第１章第２節、第３章第１節・第２節・第３節-３・第５節-２

三辻利一：第３章第４節-１　　**広岡公夫**：第３章第４節-３　**菊池吉修**：上記以外

8　各地点における助言・協力者については、各章文末に記した。

9　入野高岸古窯の現地調査における写真撮影の一部は、奈良国立文化財研究所中村一郎氏が行っている。その他の現地の写真撮影は各調査担当者が実施した。航空写真の撮影は委託したものである。遺物の写真撮影は当研究所写真室職員が実施した。

10　各調査で実施した委託事項および、委託先は、各章文中に記した。

11　金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室長西尾太加二が実施した。

12　各調査の概要は、当研究所やほかの刊行になる出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。

13　編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

14　発掘調査の資料は、すべて静岡県教育委員会が保管している。

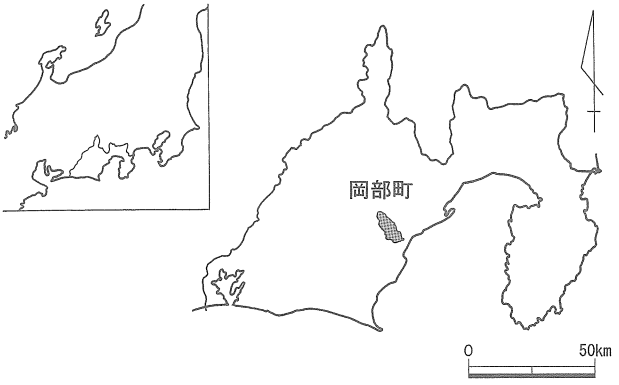
15　座標は、平面直角座標Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。

16　方位は、平面直角座標Ⅷによる方位（座標北）を基準として表示している。

17　遺物番号は、種類・出土遺構・挿図の別にかかわらず遺跡ごとの通し番号を付している。

18　土層・土器の色調は、新版『標準土色帖』1992農林水産技術会議事務局監修を使用した。

19　調査にあたって、湖西市教育委員会後藤建一氏、浜松市教育委員会鈴木敏則氏、富山大学教授（当時：現大阪大谷大学）広岡公夫氏に御指導いただいた。



岡部町の位置

目　次

巻頭図版
序
例　言

第１章　総　論 …… 1
第１節　調査に至る経過
１．第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯 …… 3
２．調査の体制 …… 5
第２節　岡部町の位置と環境
１．地理的環境 …… 6
２．歴史的環境 …… 8
第３節　確認調査
１．確認調査対象地点 …… 11
２．調査の方法と経過 …… 12
３．各地点の概要 …… 14
第４節　本調査
１．本調査の方法と経過 …… 18
２．本調査の概要 …… 19
第５節　資料整理 …… 20

第２章　入野東古墳群 …… 21
第１節　位置と環境
１．位置と地理的環境 …… 23
２．歴史的環境と調査歴 …… 24
第２節　調査の方法と経過
１．調査の方法 …… 26
２．調査の経過 …… 27
第３節　調査の成果
１．概　要 …… 28
２．遺　構 …… 29
３．遺　物 …… 33
４．小　結 …… 34
第４節　まとめ
１．入野東９号墳と入野古墳群 …… 35
２．入野古墳群の位置付け …… 37
３．結　語 …… 41

第３章　入野高岸古窯 …… 43
第１節　位置と環境
１．地理的環境 …… 45
２．歴史的環境 …… 45
第２節　調査の方法と経過
１．調査の方法 …… 47
２．調査の経過 …… 49
第３節　調査の成果
１．概　要 …… 50
２．遺　構 …… 51
３．遺　物 …… 63
第４節　理化学的分析
１．入野高岸古窯および衣原古窯出土須恵器の蛍光Ｘ線分析 …… 79
２．入野高岸古窯から出土した炭化材の年代と樹種 …… 84
３．入野高岸古窯の考古地磁気学的研究 …… 87
第５節　まとめ
１．窯構造について …… 93
２．遺　物 …… 95
３．結　語 …… 102

写真図版
抄　録

挿図目次

図１　岡部町とその周辺の地質図 …… 6
図２　岡部町の地形図 …… 7
図３　岡部町と周辺の遺跡分布図 …… 8
図４　確認調査地点位置図 …… 12
図５　№76～77地点の位置と周辺の地形 …… 15
図６　№78地点の位置と周辺の地形 …… 17
図７　入野東古墳群の位置と周辺の地形 …… 23
図８　志太地域の古墳時代の遺跡 …… 24
図９　№78地点本調査対象範囲 …… 26
図10　基本層序 …… 28
図11　周溝土層断面図 …… 28
図12　調査区全体図 …… 29
図13　石室外の遺物出土状況 …… 30
図14　横穴式石室検出状況 …… 30
図15　横穴式石室展開図 …… 31
図16　石室基底石と掘形 …… 31
図17　石室内の遺物出土状況 …… 32
図18　石室内の出土遺物 …… 32
図19　石室外の出土遺物 …… 33
図20　入野古墳群古墳分布図 …… 35
図21　入野西１号墳石室展開図 …… 36
図22　志太地域の擬似両袖式石室分布図 …… 38
図23　玄室形態別石室分布図 …… 39
図24　擬似両袖式石室の石室規模 …… 40
図25　入野高岸古窯位置図 …… 45
図26　志太地域とその周辺の窯跡分布図 …… 46
図27　入野高岸古窯グリッド配置図 …… 48
図28　基本層序 …… 50
図29　入野高岸古窯全体図 …… 51
図30　１号窯埋土の状況 …… 52
図31　１号窯窯体平面図 …… 53
図32　１号窯窯体断面図 …… 54
図33　１号窯排煙調整溝実測図 …… 55
図34　１号窯排水溝平面図 …… 56
図35　１号窯焼成部平面図 …… 56
図36　２号窯埋土の状況 …… 57
図37　２号窯平面図 …… 58
図38　２号窯窯体断面図 …… 59
図39　２号窯焼成部平面図 …… 60
図40　灰原の範囲 …… 61
図41　SF-３実測図 …… 62
図42　SF-２・SD-１実測図 …… 62
図43　SF-１実測図 …… 62
図44　１号窯Ⅰ次床・Ⅱ次床出土遺物 …… 64
図45　１号窯Ⅲ次床出土遺物 …… 64
図46　１号窯Ⅳ次床出土遺物 …… 65
図47　１号窯Ⅴ次床出土遺物１ …… 66
図48　１号窯Ⅴ次床出土遺物２ …… 67
図49　１号窯窯体内一括出土遺物 …… 68
図50　１号窯前庭部出土遺物１ …… 68
図51　１号窯前庭部出土遺物２ …… 69
図52　１号窯前庭部出土遺物３ …… 70
図53　２号窯Ⅰ次床・Ⅱ次床出土遺物 …… 71
図54　２号窯Ⅲ次床・Ⅴ次床出土遺物 …… 72
図55　２号窯前庭部（改修前・改修時中間層）出土遺物 …… 73
図56　２号窯前庭部（改修後）出土遺物 …… 74
図57　灰原の出土遺物１ …… 75
図58　灰原の出土遺物２ …… 77

図59　その他の遺構の出土遺物　……　78
図60　衣原古窯および衣原11号墳
出土須恵器の両分布図　……　81
図61　入野高岸古窯
出土須恵器の両分布図　……　81
図62　入野高岸群と衣原群の相互識別　……　82
図63　岡部古窯出土須恵器の両分布図　……　82
図64　衣原群と岡部群の相互識別　……　83
図65　秋葉山古窯
出土須恵器の両分布図　……　83
図66　衣原群と秋葉山群の相互識別　……　83
図67　東海版考古地磁気永年変化
（広岡・藤澤2003による）と入野高岸
１・２号窯の考古地磁気測定結果　…　92
図68　器種別組成グラフ　……　95
図69　１号窯蓋坏の分類　……　95
図70　１号窯坏蓋口径別個体数　……　95
図71　１号窯坏身ａ類最大径別個体数　……　96
図72　１号窯坏身ｂ類最大径別個体数　……　96
図73　２号窯蓋坏の分類　……　96
図74　２号窯坏蓋口径別個体数　……　97
図75　２号窯坏身最大径別個体数　……　97
図76　１・２号窯高坏の分類　……　97
図77　周辺古墳出土須恵器　……　99

挿表目次

表１　岡部地区調査の体制 …… 5
表２　各地点の調査年次と調査担当者 …… 5
表３　岡部町と周辺の遺跡地名表 …… 10
表４　地点別確認調査面積 …… 11
表５　地点別確認調査期間 …… 13
表６　本調査実施期間と面積 …… 18
表７　志太地域の主な古墳時代の遺跡 …… 24
表８　入野東古墳群本調査工程表 …… 27
表９　入野古墳群石室計測表 …… 33
表10　出土遺物観察表 …… 34
表11　志太地域の擬似両袖式石室 …… 38
表12　志太地域とその周辺の窯跡 …… 46
表13　入野高岸古窯本調査工程表 …… 49
表14　須恵器分析表 …… 80
表15　採取試料年代測定結果一覧 …… 84
表16　測定年代一覧表 …… 85
表17　入野高岸古窯から採取した考古地磁気試料個数と試料番号 …… 88
表18　１号窯のNRMの磁化測定結果 …… 89
表19　１号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果 …… 89
表20　１号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 89
表21　１号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果 …… 90
表22　１号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 90
表23　２号窯のNRMの磁化測定結果 …… 90
表24　２号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果 …… 90
表25　２号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 90
表26　２号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果 …… 90
表27　２号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 91
表28　１・２号窯の考古地磁気測定結果 …… 91
表29　編年対比表 …… 98
表30　入野高岸古窯出土遺物観察表 …… 105
表31　その他の出土遺物観察表 …… 116

挿写真目次

写真１　No.76地点調査前の状況 …… 13
写真２　No.76地点確認調査の状況 …… 13
写真３　No.77地点調査前の状況 …… 13
写真４　No.77地点確認調査の状況 …… 13
写真５　No.78地点確認調査の状況１（入野東９号墳周辺１） …… 17
写真６　No.78地点確認調査の状況２（入野高岸古窯周辺１） …… 17
写真７　No.78地点確認調査の状況３（入野東９号墳周辺２） …… 17
写真８　No.78地点確認調査の状況４（入野高岸古窯周辺２） …… 17
写真９　遺構検出作業（No.78地点Ⅰ期　入野東９号墳） …… 18
写真10　石室検出作業（No.78地点Ⅰ期　入野東９号墳） …… 18
写真11　遺構掘削作業（No.78地点Ⅱ期　入野高岸古窯） …… 19
写真12　遺物検出状況（No.78地点Ⅱ期　入野高岸２号窯） …… 19
写真13　整理作業の状況１ …… 20
写真14　整理作業の状況２ …… 20
写真15　入野西１号墳（開口部付近） …… 36
写真16　入野西１号墳（玄室内） …… 36
写真17　入野東１号墳（石室全景） …… 37
写真18　入野東１号墳（東壁と玄門立柱石） …… 37
写真19　炭化材 …… 86

図版目次

巻頭図版１　入野高岸１号窯・２号窯全景
巻頭図版２　入野高岸１号窯全景
巻頭図版３　入野高岸１号窯
　１．北側壁面の様子１
　２．床・壁面断ち割り状況
　３．北側壁面の様子２（補修痕）
巻頭図版４　入野高岸１号窯
　１．燃焼部付近
　２．煙道部付近遺物出土状況
　３．完掘状況
巻頭図版５　入野高岸２号窯全景
巻頭図版６　入野高岸２号窯
　１．遺物出土状況
　２．北側壁面の様子
　３．完掘状況
巻頭図版７　入野高岸古窯出土遺物
巻頭図版８　入野東９号墳
　１．石室全景
　２．出土遺物

図版１　入野東９号墳
　１．調査前の状況
　２．古墳全景
図版２　入野東９号墳
　１．奥壁
　２．西壁
図版３　入野東９号墳
　１．東壁
　２．床面の状況
図版４　入野東９号墳
　１．遺物出土状況
　２．基底石と掘形
図版５　入野東９号墳
　９号墳の出土遺物
図版６　入野高岸古窯
　１．遺跡遠景
　２．調査区全景
図版７　入野高岸古窯
　１号窯・２号窯全景
図版８　入野高岸１号窯
　１号窯全景
図版９　入野高岸１号窯
　１．天井残存部の堆積状況
　２．煙道部　遺物出土状況
　３．焼成部　遺物出土状況
図版10　入野高岸１号窯
　１．天井残存部北壁
　２．焚口と排水溝
図版11　入野高岸１号窯
　１．天井残存部南壁
　２．燃焼部付近
　３．第Ⅴ次床面　遺物出土状況
図版12　入野高岸１号窯
　１．完掘状況
　２．排煙調整溝完掘状況
図版13　入野高岸２号窯
　２号窯全景

図版14　入野高岸２号窯
１．窯体横断面
２．天井部残存状況
図版15　入野高岸２号窯
１．全景
２．遺物出土状況
図版16　入野高岸２号窯
１．２号窯完掘状況
２．その他の遺構
図版17　入野高岸古窯
１．SF-３
２．SF-１
図版18　入野高岸１号窯
１号窯主要出土遺物
図版19　入野高岸１号窯
Ⅰ～Ⅳ次床主要出土遺物
Ⅰ次床出土遺物１
図版20　入野高岸１号窯
Ⅰ次床出土遺物２
Ⅱ次床出土遺物１
図版21　入野高岸１号窯
Ⅲ次床出土遺物１
Ⅳ次床出土遺物１
図版22　入野高岸１号窯
Ⅴ次床主要出土遺物
Ⅱ次床出土遺物２・Ⅳ次床出土遺物２
図版23　入野高岸１号窯
Ⅴ次床出土遺物１
図版24　入野高岸１号窯
Ⅴ次床出土遺物２
図版25　入野高岸１号窯
Ⅴ次床出土遺物３
図版26　入野高岸１号窯
前庭部主要出土遺物
前庭部出土遺物１・窯体内出土遺物
図版27　入野高岸１号窯
前庭部出土遺物２
図版28　入野高岸１号窯
前庭部出土遺物３
図版29　入野高岸１号窯
前庭部出土遺物４
図版30　入野高岸１号窯
前庭部出土遺物５
図版31　入野高岸２号窯
２号窯主要出土遺物
図版32　入野高岸２号窯
Ⅱ次床主要出土遺物
Ⅲ次床主要出土遺物
図版33　入野高岸２号窯
Ⅱ次床出土遺物１・Ⅲ次床出土遺物１
図版34　入野高岸２号窯
前庭部出土遺物１
Ⅲ次床出土遺物３・前庭部出土遺物２
図版35　入野高岸２号窯
前庭部出土遺物３
前庭部出土遺物４
図版36　入野高岸１・２号窯
灰原主要出土遺物
灰原出土遺物１
図版37　入野高岸１・２号窯
灰原出土遺物２
灰原出土遺物３
図版38　入野高岸１・２号窯
灰原出土遺物４
灰原出土遺物５

第1章　総　論

第１節　調査に至る経過

１．第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯

(1)　全体の経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年１月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神高速道路とともに、横浜市から東海市に至る延長約270㎞の第二東名高速道路（以下、第二東名）の基本計画が策定された。静岡県内においては東西に貫く形となり、その延長は約170㎞である。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、県教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成３年９月24日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と併行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成４年２月17日付けで文化庁へ通知を行うとともに、平成４年５月11日付けで、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査の手続きの依頼を行った。また、平成４年８月27日付けで日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて県教育委員会は、平成４年９月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成５年３月18日付けで、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あてに回答がなされている。この時点での調査対象箇所は136箇所、調査対象総面積が1,453,518㎡となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成５年11月19日付けで日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取り扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となった。

さらに平成６年度には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査や新たな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象総面積は1,286,759㎡となっている。

平成７年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始につい

てもかなり見通しがでてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取り扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成６年２月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第１回の協議が平成７年12月13日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取り扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公団静岡建設所は平成８年７月１日をもって、日本道路公団静岡建設局に改組されている。

平成８年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成８年９月24日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結、さらに調査実施機関である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成８年９月25日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成８年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真の№94地点、浜北市大平の№136地点、同市四大地の№137地点の確認調査が実施されている。その後、平成９年度からは、発掘調査も本格化し、県内各地の確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町～御殿場市間についても日本道路公団に対し、平成９年１月31日付けで建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成９年12月25日付けで施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により平成６年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年９月２日付けで日本道路公団静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、県教育委員会文化課は関係する市町村教育委員会に平成10年９月25日付けで再踏査の依頼をするとともに、10月２日には踏査の実施に関する打合せ会を行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付けで県教育長から日本道路公団静岡建設局長あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象総面積は108,734㎡であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年３月５日付けで協定変更を行っている。

なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線およびサービスエリア・パーキングエリア、排土処理場について財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路および取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査の事業量の増大に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜北市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

(2)　岡部地区・藤枝地区の経緯

上記のような経緯のなか、志太郡岡部町域（以下、岡部地区）では４箇所が調査対象となった。東から№76-２地点、№76地点、№77地点、№78地点である。

この４地点の発掘調査は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行うこととなり、用地買収が進み、調査が可能となった平成10年度から調査に着手した。調査は平成10年度と12年度に№77地点、平成11～12年度に№76地点、平成12年度に№76-２地点、平成11～13年度に№78地点の確認調査を実施した。№78地点については遺跡の広がりが確認できたため、平成12年度と13年度に本調査を実施した。資料整理は平成16～18年度に実施した。

２．調査の体制

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所では、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査にあたって、日本道路公団静岡建設局各工事事務所の管轄に合わせて工区を設定し、調査にあたることとした。本書で扱う岡部地区は静岡工区に含まれる。岡部地区の各地点の調査では、藤枝市に設置した藤枝地区事務所を拠点として、各現地調査を実施している。

岡部地区の調査は、平成10～13年度に確認調査を行っている。確認調査を実施した地点は、№76地点、№76-２地点、№77地点、№78地点である。このうち、№78地点では、遺跡の広がりが確認できたため、本調査を実施することとなった。本調査は平成12・13年度に実施している。

一連の調査で得られた成果については、平成16～18年度に資料整理を実施した。これは、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、現地調査を優先するという方針であったためである。ただし、基礎的な整理作業（各種台帳類作成、写真・図面整理、出土遺物の洗浄・注記）については、藤枝地区事務所にて、現地調査と併行して実施した。

上述した、確認調査・本調査、資料整理に関わる調査体制は表１のとおりであり、各地点の調査年次・調査面積・調査体制は表２・４に示したとおりである。

表１　岡部地区調査の体制

		平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
所長		斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠
副所長			山下　晃	山下　晃	山下　晃	飯田英夫		
総務部	常務理事兼総務部長	伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫	平松公夫
	総務次長					鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎
	総務課長	杉木敏雄	杉木敏雄	杉木敏雄	本杉昭一	鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎
	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	
	副主任				鈴木秀幸	中鉢京子	中鉢京子	
	主事	大石真二	鈴木秀幸	鈴木秀幸				
調査研究部	部長	石垣英夫	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄	山本昇平	石川素久	石川素久
	担当次長		佐野五十三	及川　司	及川　司	中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川　司 稲葉保幸
	次長心得	佐野五十三						
	担当課長	足立順司	及川　司	及川　司	及川　司	中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川　司
	工区主任							
	主任調査研究員	飯塚晴夫	飯塚晴夫	飯塚晴夫	鈴木良孝	長谷川　睦		
	調査研究員	蔵本俊明	石田　勉 勝又直人	大畑　要 中川律子	深田雅一 中田　出 長谷川　睦 蔵本俊明		菊池吉修	菊池吉修
	副主任							中鉢京子

表２　各地点の調査年次と調査担当者

地点名		平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
76地点	確認調査		飯塚晴夫 石田　勉 勝又直人	飯塚晴夫 大畑　要 中川律子				
77地点	確認調査	足立順司 飯塚晴夫 蔵本俊明		飯塚晴夫 大畑　要 中川律子				
78地点	確認調査		飯塚晴夫 石田　勉 勝又直人	飯塚晴夫 大畑　要 中川律子	鈴木良孝 深田雅一 蔵本俊明 中田　出			
	本調査			飯塚晴夫 大畑　要 中川律子	鈴木良孝 長谷川　睦			
資料整理						長谷川　睦	菊池吉修	菊池吉修

第２節　岡部町の位置と環境

１．地理的環境

志太郡岡部町は東経138度17分、北緯34度５分付近に位置し、総面積は53.42㎢である。南北に約15㎞、東西の最大幅で６㎞と、南北に細長い範囲を町域とする。北は静岡市、西は藤枝市、南から東にかけては焼津市に接している。町の中央を流れる朝比奈川は流域面積94.3㎢、流路延長21.2㎞で、藤枝市との市町境である三ツ野に源を発する。市街地は朝比奈川の支流である岡部川沿いに広がり、町役場が立地するのも岡部川流域である。朝比奈川は、山間部では直線気味に流れるが、下流に向かうにしたがって勾配は緩やかとなり小規模の蛇行を繰り返す。平野部へ至る直前で一旦大きく曲流した後は、川幅を広げつつ緩やかで直線的な流れとなり、藤枝市で葉梨川と、焼津市で瀬戸川とそれぞれ合流し、駿河湾へと注ぐ。朝比奈川が流れる沖積平野は「志太平野」と呼ばれ、その大部分は大井川上流からの堆積物で形成された扇状地である。

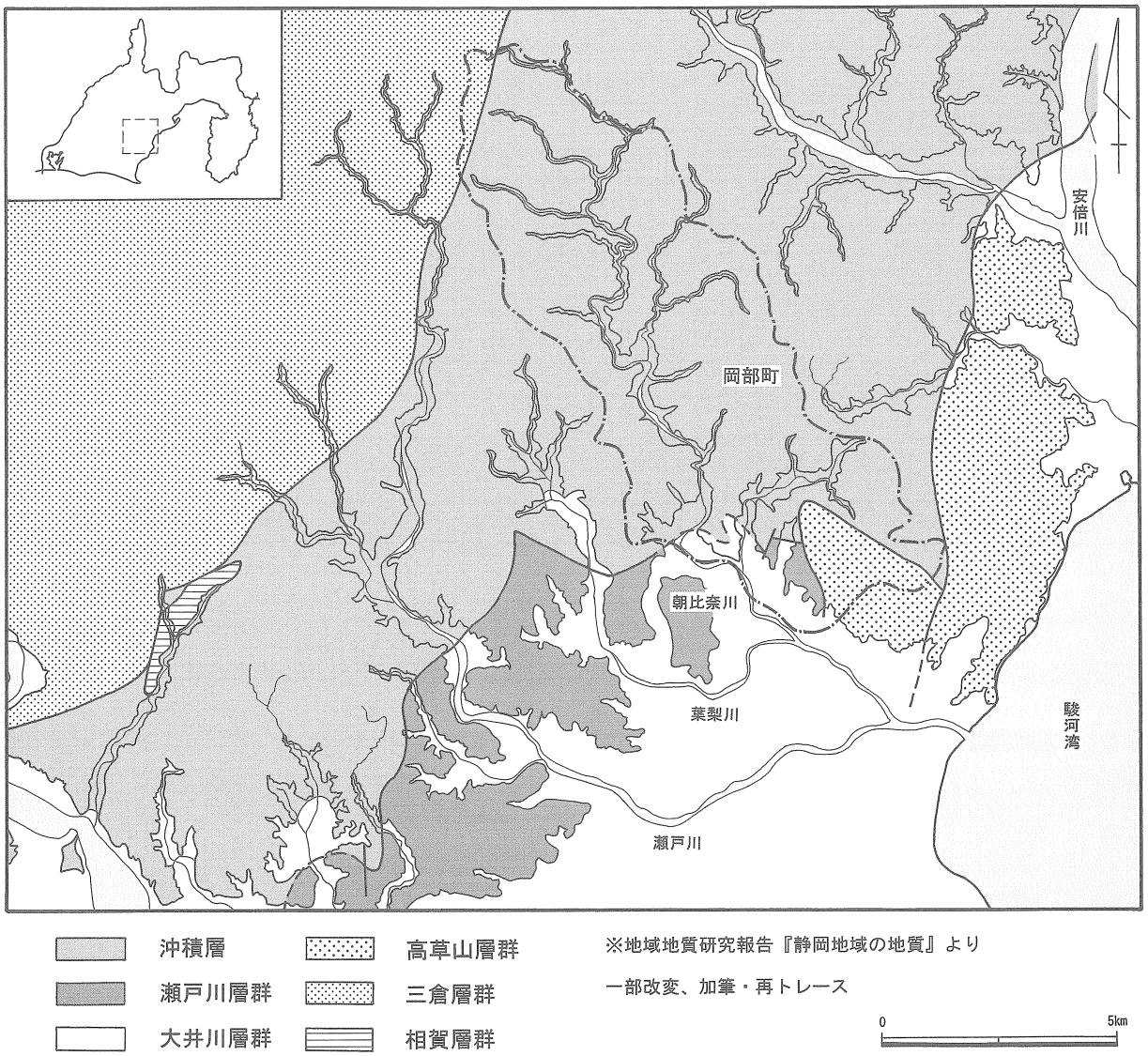
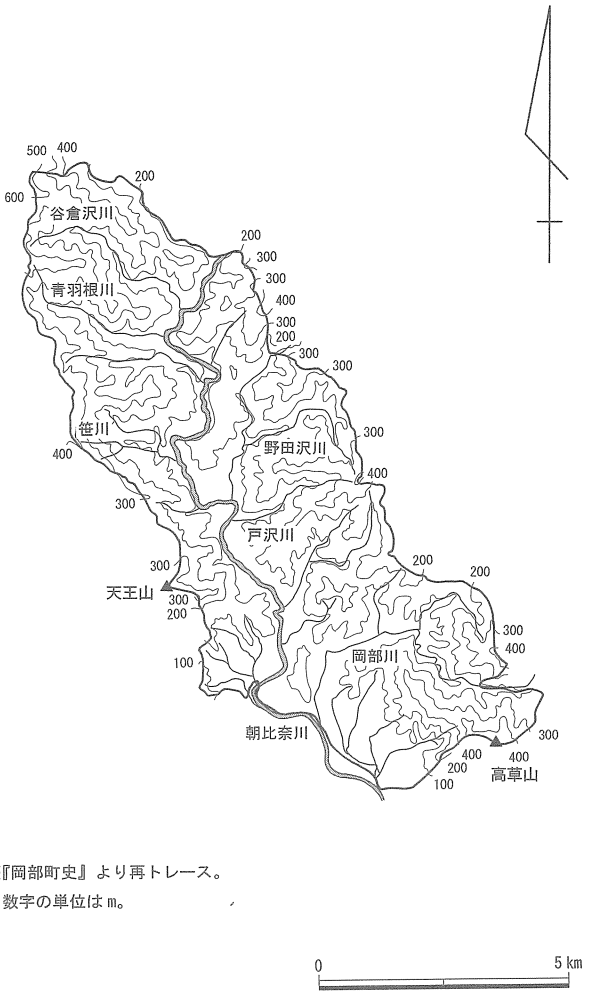


図１　岡部町とその周辺の地質図（1/150,000）

岡部町は志太平野の北縁部にあたり、平野が山地と接する付近に位置する。当町付近は志太平野の中でも大井川の氾濫による影響が比較的弱い地域で、葉梨川・朝比奈川に沿ってできた自然堤防と背後の丘陵との間の低地は後背湿地となっている。志太平野は大井川や瀬戸川などの河川とその支流によって内陸部の平野がいくつかの洲状の微高地に分断され、氾濫などの影響を受けやすい不安定な地形であったと推定されている。中世以降には開発が行われるようになり、江戸時代の新田開発を経て、現在に近い景観が形成されるようになった。なお、古地形は遺跡の立地などと深い関わりを持つため、歴史的環境の項で改めて述べることとする。

志太平野が町の南端部を占める一方、朝比奈川上流および支流沿いの谷底には上流と斜面上部から流れてきた砂礫層が堆積しており、その上層には泥質堆積層が発達している。それら谷底部の狭小な平坦部や後背湿地を利用して水田が営まれている。また、川沿いの山地では浸食によって深い谷が発達しているため、谷に面した斜面は急傾斜を形成する。斜面には天然林や杉・檜・松などの人工林が植生し、比較的傾斜の緩やかな斜面や山頂の平坦な部分では蜜柑や茶樹の栽培が盛んである。



※『岡部町史』より再トレース。
数字の単位はｍ。

図２　岡部町の地形図（1/150,000）

町域の大部分は赤石山脈から派生した山地で占められる。赤石山脈は中新世後期から新生代第３紀前半にかけて厚い海成層が、造山運動と貫入作用によって隆起してできた褶曲山脈で、3,000m級の山々を有する。岡部町の位置する付近では北西端で標高640mであるが、高度を減じながら南西へと延び、駿河湾に面した部分では大崩海岸と呼ばれる急崖となって連続している。独立峰としては高草山（501.4m）、天王山（350.8m）が存在し、おおむね高さ200m以下の小起伏状の山地が連なる。赤石山脈の地質構造は三波川・秩父帯、四万十帯、瀬戸川帯、竜爪・大井川帯から成り立っている。このうち瀬戸川帯は安倍川流域から大井川右岸まで南北に帯状に分布し、岡部町の山地の主体となっているのも瀬戸川帯を構成する瀬戸川層群である。その堆積層は南と北とでかなり異なるが、岡部町以西では砂岩頁岩の互層が主体で部分的に凝灰岩類・蛇紋岩などを含む。

当町は以上のような地形的制約によって静清平野と隔たれた状況にあり、平安時代に書かれた『和名類聚抄』にも藤枝市北東部や焼津市とともに益津郡の一郷として位置付けられている。また、山地を越える手段の中でも、朝比奈川の支流沿いに宇津ノ谷峠を通る道が比較的困難が少なく、古代から江戸時代までは遠江と駿河とを結ぶ東西交通の要所としての役割を担っていた。現在でも国道１号線が通り、主要幹線のひとつとなっている。第二東名の路線は国道１号線の北をほぼ並行する形で岡部町を縦貫する。

2．歴史的環境

岡部町の歴史について遺跡を中心に記す。岡部町では遺跡の調査例が少なく、歴史像を解明するには資料が乏しいため、志太地域の様相を併せて概観したい。

旧石器・縄文時代

志太地域では旧石器時代の遺跡は確認されていない。しかしながら、大井川右岸ではナイフ形石器等が出土しており、今後この時期の遺跡が発見される可能性も想定される。縄文時代草創期から前期の遺跡は瀬戸川流域に数箇所点在する程度である。最も古い時期に位置付けられているのが草創期の天ヶ谷遺跡（59）・南新屋遺跡（58）である。中期には遺跡数がやや増加し分布域も広がるものの、後期には再び減少する。縄文時代の遺跡の多くは遺物散布地で、調査例は少ない。縄文時代全体を通じて段丘や丘陵上に遺跡が分布しており、狩猟・採集・漁労に適した地が選ばれたのであろう。岡部町においても同様の傾向にあり、当地域の遺跡も朝比奈川下流域の河岸段丘に立地している。土器の型式から西ノ平遺跡（６）は前期～中期、小丹原遺跡（４）は中期に比定される。フシムラ段遺跡（７）・御月山遺跡（５）については時期を確定するには至っていない。

図３　岡部町と周辺の遺跡分布図（1/100,000）

弥生時代

集落跡が確認されるのは中期からで、縄文時代と同様に丘陵上に営まれる一方、上薮田川の丁遺跡（34）・郡遺跡（48）など後背湿地や沖積微高地といった低地部にも進出し始める。弥生時代には沖積地が広がったことが要因と考えられている。後期にはいると河川の下流域に面した丘陵上、特に丘陵縁辺部を中心に、それまでよりも飛躍的に遺跡数が増加する。岡部町について見ると、高草山に連なる低丘陵には上原遺跡（12）・丈丸遺跡（13）、後期の西ノ平遺跡が分布する。沖積地の遺跡としては清水遺跡（18）、後期末の東ノ谷遺跡（14）・村良遺跡（11）がある。このうち清水遺跡では中期～後期にかけての土坑、高床式倉庫の柱穴が検出され、また農耕具などの多種にわたる木製品が出土していることから、水田稲作を基盤とした集落であったことが明らかとなっている。（焼津市2004）

古墳時代

古墳時代にはいると遺跡数が増加する。その多くは古墳である。前期初頭の方形墓が確認された道場田遺跡（27）を初現として、前期から中期にかけては瀬戸川流域を中心として分布する。多くは丘陵頂部や突端部に単独で立地するが、それと同時に若王子古墳群（46）・東浦古墳群（36）などの初期群集墳も造営されている。この地域に古墳造営が盛行するのは後期以降である。後期初頭には荘館山１・２号墳（44）や高田観音前２号墳（39）などの前方後円墳が数少ないながらも築造される。６世紀後半以降には平野に面したほとんどの丘陵の斜面に群集墳が築かれる。秋合古墳群（54）・瀬戸古墳群（60）といった前期・中期古墳の周辺に展開する一方で、それまで古墳築造が少なかった葉梨川・朝比奈川流域、高草山の斜面部にまで築かれるようになり、造墓活動は８世紀中葉まで続く。岡部町では５世紀後半の向原古墳（16）が初現であり、その朝比奈川をはさんだ対岸で発見された仮宿沢渡古墳群（42）は中期、高田観音前古墳群は後期初頭に位置付けられる。後期後半になると朝比奈川・岡部川流域の丘陵上や高草山中腹一帯に群集墳が築かれるようになる。

集落遺跡に目を転じると、前期・中期では丘陵縁辺部の微高地や後背湿地を中心に分布している。前期では上薮田モミダ遺跡（33）・下藪田遺跡（37）など弥生時代と同様の立地条件に集落が営まれている。後期になると海岸部に近い沖積微高地に営まれた藤守遺跡・道添遺跡（23）・赤塚遺跡（25）のように低地部へも分布を広げる。後期に群集墳が築かれたことを考えると集落が多数存在していた可能性が高いが、発見例は少ない。岡部町でも松崎遺跡（17）・桜本遺跡（15）・村良遺跡で採取された遺物から集落の存在が考えられているが、実態については不明である。

奈良・平安時代

正倉院文書の一つ、『正税帳』の記述によると当時の駿河国は八郡を管しており、志太地域には志太郡と益津郡が存在した。御子ヶ谷遺跡（52）、郡遺跡がそれぞれ郡衙跡とされている。岡部町は、藤枝市南東部及び焼津市とともに益津郡に属していた。『和妙類聚抄』「高山寺本」によると益津郡八郷の一つとして「朝夷」の郷名が見られ、岡部町朝比奈地区に比定されている。朝夷の地は益津郡衙から宇津ノ谷峠を抜けて駿河国府へと繋がる連絡道に位置する。『伊勢物語』のなかに「宇津ノ谷」の記述が登場するものの、『延喜式』に記載された駅伝名に岡部の名は見られない。岡部の名が初出するのは鎌倉時代の『吾妻鏡』で、「岡辺宿」として記されている。鎌倉時代以降、この経路は駿河国府へ抜ける主要道として利用された。平安時代中期に各地で荘園制が発達していく中で、岡部の地にも御厨が置かれた。伊勢神宮に関する文書・記録を記載した『神宮雑例集』のうちの「建久三年神領注文」や『神鳳抄』に、益津郡内のその他４箇所の御厨とともに記されている。また、岡部御厨があったとされる三輪地区には『延喜式』に記載された式内社の１座である神神社が所在する。

中世以降

古代末になると、有力貴族の末流が各地で武士団を組織していった。岡部周辺でも、藤原氏の系譜をひく岡部氏と朝比奈氏が台頭していた。鎌倉時代に書かれた文献には御家人として岡部氏の名が見られる。今川範国が南北朝期に所領を与えられて以降、駿河国は長らく今川氏の勢力下となる。今川氏は駿府を本拠地としたが、駿府進出以前には直轄領である葉梨庄を拠点とした時期があり、花倉城（29）を築城したのも今川氏とされている（静岡県教育委員会1981）。岡部・朝比奈の両氏は今川氏に仕え、勢力基盤の一端を担った。義元の死後、今川氏の勢力が衰えると、武田氏が駿河国へ侵攻する。武田氏滅亡ののち、徳川家康が駿河国を領有するが、小田原攻略後に江戸に拠点を移すにあたり、中村一氏が駿河に配された。中村氏は田中城（49）に横田村詮を置き、検地や岡部新宿の設置など新しい支配体制を展開した。岡部町では中世の集落遺跡は確認されていない。山城としては朝比奈氏の築いた朝比奈城(68)、宮島城（３）などが残る。一方、岡部氏は領有する岡部郷を見下ろす位置に朝日山城（41）を築いたと考えられており（静岡県教育委員会1981）、その周辺には仮宿館（40）と呼ばれる岡部氏館跡の伝承が残る区域がある。岡部氏は今川氏滅亡ののちも、武田氏・徳川氏に重用された。

江戸時代には幕藩体制の下、田中藩・掛川藩・横須賀藩が志太地域を統括したが、岡部は天領・横須賀藩領・旗本領が混在する状況にあった。また、五街道の整備に伴い、東海道の宿駅の一つとして岡部宿が成立する。岡部宿は交通の難所である宇津ノ谷峠を控えた宿場として栄え、本陣・脇本陣、大小の旅籠屋が軒を連ねた。廃藩置県によって静岡県が置かれたのちは幾度かの町村合併を経て、昭和30年に岡部町が成立し現在に至る。

前項でふれたように、中世以後、平野の沖積化や開発によって、現在に近い景観が形成され始めた。『和妙類聚抄』に登場する地名はいずれも丘陵周辺、あるいは海岸部の微高地に比定されており、少なくとも律令期以前の志太平野は河川の氾濫原や湿地が大部分を占めていたと考えられている（藤枝市教育委員会1981）。古墳時代までの集落のほとんどが丘陵部や丘陵縁辺部の微高地上、河川沿いの自然堤防および後背湿地で営まれている理由の一つと考えることができる。また、平野部では度重なる河川の氾濫により砂礫層が厚く堆積しているために、遺跡の発見に至らない可能性も考慮しなければならない。

表３　岡部町と周辺の遺跡地名表

No.	遺　跡　名	時　代	種　別	No.	遺　跡　名	時　代	種　別	No.	遺　跡　名	時　代	種　別
1	入野東古墳群	古墳	古墳	24	宮之腰遺跡	古墳～中世	集落	47	釣瓶落古墳群	古墳	古墳
2	入野高岸古窯	古墳	古窯	25	赤塚遺跡	古墳～中世	散布地	48	郡遺跡	弥生～中世	集落
3	宮島城	中世	城館	26	小深田西遺跡	弥生、古墳	周溝墓・古墳	49	田中城	中世、近世	城館
4	小丹原遺跡	縄文	散布地	27	道場田遺跡	弥生～中世	周溝墓・集落	50	水守遺跡	古墳	集落
5	御月山遺跡	縄文	散布地	28	小川城	古墳～近世	集落・城館	51	稲ヶ谷遺跡	縄文、弥生、古代	散布地・集落
6	西ノ平遺跡	縄文、弥生	散布地	29	花倉城	中世	城館	52	御子ヶ谷遺跡	古代	官衙
7	フシムラ段遺跡	縄文	散布地	30	助宗古窯群	古代	古窯	53	萩ヶ谷遺跡	縄文、弥生、古代	散布地・集落
8	板沢古墳群	古墳	古墳	31	衣原古墳群	古墳	古墳	54	秋合古墳群	古墳	古墳
9	横添古墳群	古墳	古墳	32	中ノ合遺跡	古墳、中世	集落	55	秋合遺跡	古代	官衙
10	入野西古墳群	古墳	古墳	33	上藪田モミダ遺跡	弥生、古墳、古代	集落	56	滝ヶ谷古窯	古代	古窯
11	村良遺跡	弥生	散布地	34	上藪田川の丁遺跡	弥生	集落	57	鳥越山遺跡	弥生	集落
12	上原遺跡	弥生	集落	35	鳥内遺跡	弥生、古代、中世、近世	集落	58	南新屋遺跡	縄文、弥生	集落
13	丈丸遺跡	弥生	集落	36	東浦古墳群	古墳	古墳	59	天ヶ谷遺跡	縄文	散布地
14	東ノ谷遺跡	弥生	散布地	37	下藪田遺跡	弥生、古墳、古代	集落	60	瀬戸古墳群	古墳	古墳
15	桜本遺跡	古墳	散布地	38	三ツ池遺跡	縄文	散布地	61	岩田山遺跡	弥生、古墳、中世	集落
16	向原古墳群	古墳	古墳	39	高田観音前１・２号墳	古墳	古墳	62	二俣古墳群	古墳	古墳
17	松崎遺跡	古墳	散布地	40	仮宿館	中世	城館	63	駒形古墳群	古墳	古墳
18	清水遺跡	弥生	集落・水田	41	朝日山城	中世	城館	64	落合西遺跡	弥生、古墳	集落
19	笛吹段古墳群	古墳	古墳	42	仮宿沢渡古墳群	古墳	古墳	65	鳥羽美古墳	古墳	古墳
20	花沢城	中世、近世	城館	43	女池ヶ谷古墳群	古墳	古墳	66	鵜田古墳群	古墳	古墳
21	筧沢古墳群	古墳	古墳	44	荘館山１・２号墳	古墳	古墳	67	田ノ谷遺跡	縄文、弥生、古墳	集落
22	塩津古墳群	古墳	古墳	45	白砂ヶ谷古墳群	古墳	古墳	68	朝比奈城	中世	城館
23	道添遺跡	古墳～中世	集落	46	若王子古墳群	古墳	古墳	69	葉梨館	中世	城館

第３節　確認調査

１．確認調査対象地点

(1)　位置と現況

第二東名の路線は、岡部町を南北に横断し、その距離は約５㎞である。岡部町は町の西寄りを朝比奈川が南流する。朝比奈川とその支流の流域には狭小な平野が広がるが、町域のほとんどは丘陵となっている。岡部町における第二東名の路線も、ほとんどが丘陵部を通っている。北側の静岡市から続く丘陵部はトンネルとなっており、町域の南部に至ると、朝比奈川とその支流が形成した平野を横切るように路線が通り、藤枝市へと続いている。

第二東名の路線部分を見ると、丘陵部ではこれまでに大規模な開発が行われていなかったこともあり、本来の地形がほぼ保たれた状況である。現況としては、茶畑として利用されている以外は、植林がなされている程度である。平野部では、水田や畑地、宅地等に利用されている。ただし、宅地等に利用されている土地についても、大規模な削平等は行われず、盛土されたうえで整地されている場合が多く、平野部も原地形がほぼ保たれた状況といえよう。なお、第二東名は岡部町域では、インターチェンジのほか、１箇所のトンネルが計画されている。

(2)　調査地点の選定

岡部地区における第二東名の路線範囲内の埋蔵文化財については、静岡県教育委員会と岡部町教育委員会が、確認調査を必要とする地点と範囲の選定を行っている。その結果、岡部地区では３箇所が調査対象地点として選定され、調査対象合計表面積は52,930㎡である。

３箇所の調査対象地点のうち、№78地点は周知の遺跡である入野古墳群の遺跡範囲と重複する。№76地点と№77地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地ではない。しかし、№76地点は古墳時代後期の古墳群として知られている向沢古墳群に近接する場所であり、№77地点は立地状況や近辺の遺跡分布との関係から遺跡が広がる可能性が考えられた地点である。そのため、遺跡が存在する可能性がある№76地点と№77地点についても、確認調査を実施することとなった。

表４　地点別確認調査面積

地点名		対象面積（実掘削表面積）	面積合計
№76地点	その１	4,100㎡（225.0㎡）	19,150㎡　（874.9㎡）
	その２	7,790㎡（245.6㎡）	
	その３	6,010㎡（366.0㎡）	
	№76-２地点	1,250㎡　（38.3㎡）	
№77地点	その１	8,153㎡（151.6㎡）	11,628㎡　（298.6㎡）
	その２	3,475㎡（147.0㎡）	
№78地点	その１	1,105㎡　（53.5㎡）	22,152㎡（1,110.9㎡）
	その２	2,700㎡（465.0㎡）	
	その３	18,347㎡（592.4㎡）	
総計			52,930㎡（2,284.4㎡）

2．調査の方法と経過

(1)　調査の方法

岡部地区における確認調査は、岡部町と藤枝市に設置した事務所を拠点として調査を実施した。各地点の調査にあたっては、現地に作業員棟や駐車場を設置した。作業員棟は、現地の状況にあわせて、プレハブあるいはテントを選択した。この作業と同時に、対象地点の位置と範囲の現地確認をした。

調査の方法としては、トレンチ掘削を基本としている。ただし、№77地点では、表土・盛土層が厚く、壁面崩壊の危険性が伴うため、テストピット掘削にて確認調査を行うこととした。トレンチの設定にあっては、丘陵部および丘陵斜面では、付近の調査事例から古墳が存在する可能性が考えられたため、地形に則してトレンチを設定することとした。

調査対象範囲が茶畑である場合は、掘削に先立ち茶樹の伐採を行い、山林である場合は、必要に応じて伐採を行った。また、急傾斜地については、土砂の流出防止を目的とした柵の設置を行った上で掘削作業にとりかかった。表土や整地層は重機により除去し、その後は人力による掘削を基本とした。ただし、№76地点と№78地点は急傾斜地である上に、進入路を確保できないことから、重機掘削は行わず、表土除去も人力で実施した。なお、テストピットやトレンチは必要に応じて拡幅を行った。

表土並びに撹乱層を除去した段階で精査を行い、遺構の有無を調査した。検出した遺構・遺物については、検出状況の実測および写真撮影を行い、記録を残した。また、各トレンチ並びにテストピットは土層断面の実測と写真撮影を行い、記録にとった。なお、実測にあたってはトータルステーションを用い、写真撮影は35㎜判のカラーネガを使用した。

調査終了後はテストピット並びにトレンチを埋め戻した。埋め戻し作業は№77地点では重機を使用したが、№76地点と№78地点は重機が進入できないため、人力で行った。埋め戻し作業と併行して、撤収作業を実施した。

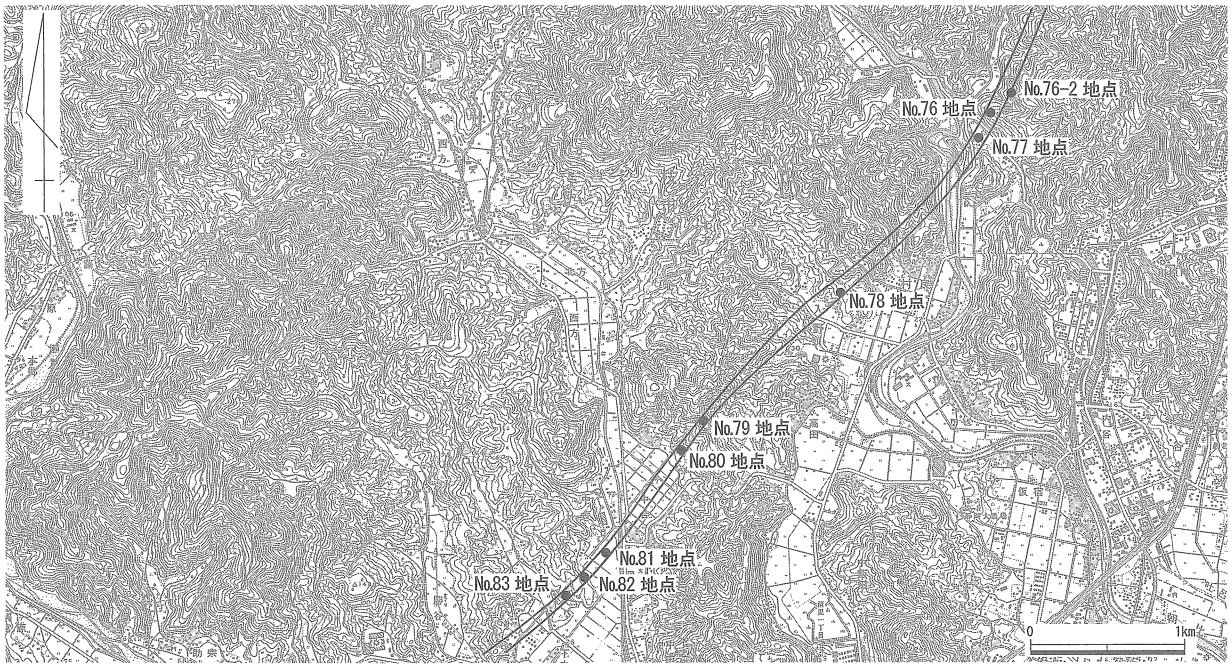


図４　確認調査地点位置図（1/50,000）

(2)　調査の経過

岡部地区における確認調査は平成10～13年度に実施した。確認調査は、調査条件がそろい、要請があった地点から、順に実施した。ただし、調査条件整備や、道路建設工程の都合により、一地点内を部分的に数度にわけて調査を実施することとなった。なお、この場合は、「No.78地点その１」等として、調査を実施した。

各地点の調査期間は、表５のとおりである。各地点とも、先述した調査の方法に従って確認調査を実施し、遺跡の有無と範囲を検証した。No.76地点とNo.77地点については、遺跡の広がりは認められなかったが、No.78地点については、遺構・遺物を確認でき、遺跡が広がることが明らかとなったため、本調査を実施することとなった。

表５　地点別確認調査期間

年度		10		11												12												13											
月		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
76地点	その１																																						
	その２																																						
	その３																																						
76-２地点																																							
77地点	その１																																						
	その２																																						
78地点	その１																																						
	その２																																						
	その３																																						

写真１　No.76地点調査前の状況

写真２　No.76地点確認調査の状況

写真３　No.77地点調査前の状況

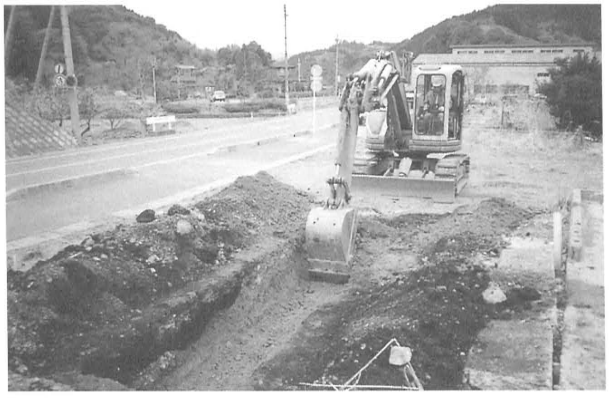


写真４　No.77地点確認調査の状況

３．各地点の概要

(1)　№76地点・№76-２地点

位置・立地と状況

№76地点・№76-２地点は志太郡岡部町桂島834-1他に所在する。岡部町には第２節で述べたとおり、町域の西部を朝比奈川が南流している。朝比奈川はその中流で、北東から支流である谷川が合流する。この２河川の合流箇所の東には丘陵が存在し、№76地点と№76-２地点はこの丘陵上に所在する。№76地点はJR焼津駅から、北北西に約８kmの距離である。標高は約60～120mで、その約0.1km北東に№76-２地点が所在する。№76-２地点の標高は約120mである。なお、№76地点の250m北側、№76-２地点の南西70mには向沢古墳群が存在する。№76地点と№76-２地点は共に、巨石が調査対象範囲内に露頭することとあわせ近接地に古墳群が存在することから、古墳群の存在が想定された地点である。調査前は茶畑あるいは山林となっていた。

調査方法と確認状況

№76地点の確認調査は３回にわけて実施した。平成12年２月14日～３月31日に4,100㎡を対象として行った調査が「№76地点その１」、平成12年４月14日～５月９日に7,790㎡を対象として実施した調査が「№76地点その２」、平成12年８月16日～９月21日に6,010㎡を対象として実施した調査が「№76地点その３」である。調査対象面積の合計は、17,900㎡である。№76-２地点の確認調査は平成12年４月14日～５月９日に実施し、調査対象面積は1,250㎡である。

先述したとおり、№76地点と№76-２地点は古墳群の存在が想定された。そのため、この調査地点に隣接する地に所在する向沢古墳群の様相を踏まえて、調査を実施することとなった。調査区外に広がる向沢古墳群の中には、横穴式石室の一部が露頭しているものもある。この石室は、斜面下方に開口部を向け、石室の主軸は等高線と直交する。この状況を踏まえ、№76地点と№76-２地点の確認調査は、地形に則したトレンチを設定して、それを掘削することで、古墳の存在を確認することとした。

確認トレンチは、「№76地点その１」では８本、「№76地点その２」では27本、「№76地点その３」では14本設定し、実掘削表面積はそれぞれ、225㎡、245.6㎡、366㎡である。№76地点の確認調査における実掘削表面積の合計は836.6㎡である。№76-２地点では５本のトレンチを設定し、実掘削表面積は38.3㎡である。

調査開始前に茶畑であった箇所については、茶樹を伐採した上で掘削作業にとりかかった。いずれの調査においても、トレンチ掘削は人力で実施した。表土の厚さは10～50cmであり、調査開始前に茶畑であった箇所については、30～70cm前後の開墾に伴う撹乱層が存在した。これらを除去すると地山である黄褐色土層となっていた。いずれのトレンチにおいても、遺構・遺物ともに何も発見できなかった。調査終了後は人力で埋め戻し作業を実施した。

結果

いずれの調査においても、遺構・遺物ともに何も発見できなかった。当初、調査区内に存在し、古墳に関わるものと推定された石材についても、古墳とは関わりがないことが判明した。

(2)　№77地点

位置・立地と状況

№77地点は志太郡岡部町桂島870他に所在する。岡部町は町の西部を朝比奈川が南流している。№77地点は朝比奈川中流の左岸に所在し、朝比奈川とその一支流である谷川が合流する地点の南側に位置する。調査対象地点となった範囲は朝比奈川と谷川が形成した平野が丘陵に接する部分である。200km北東には№76地点が所在する。調査開始前は調査区東半が水田あるいは荒れ地となっており、西半は宅地となっていた。標高は30m前後、JR焼津駅からは北西に約7.2kmの距離である。

調査方法と確認状況

№77地点は平成10年度と平成12年度に確認調査を実施した。調査対象範囲のうち、東部と西部の8,153㎡を「№77地点その１」として平成11年２月22日～２月25日に調査を行った。調査対象範囲の中央部3,475㎡は「№77地点その２」として平成12年４月24日～５月10日に調査を実施した。調査対象面積の合計は11,628㎡である。

調査はテストピットを掘削することで行った。「№77地点その１」の調査では、５m四方のテストピット、「№77地点その２」の調査では７m四方のテストピットを設定した。それぞれの実掘削表面積は151.6㎡と147㎡である。掘削にあたっては、表土や中間層は0.7BFと0.25BFを併用して除去し、人力で精査を行った。なお、調査対象範囲は低地部であるため、常時湧水があった。湧水については、水中ポンプを用いて排水作業を行った。掘削後は重機で埋め戻しを行った。

確認調査の結果、最上層は２～３m程度の厚さをもった盛土あるいは耕作に伴う撹乱層であり、その下層は河川堆積層となっていることが明らかとなった。各テストピットは精査を行ったが、遺構・遺物について確認することはできなかった。

結果

確認調査では、№77地点の調査対象範囲内においては、河川の流路跡を確認することはできたが、遺構・遺物は共に何も発見することはできなかった。

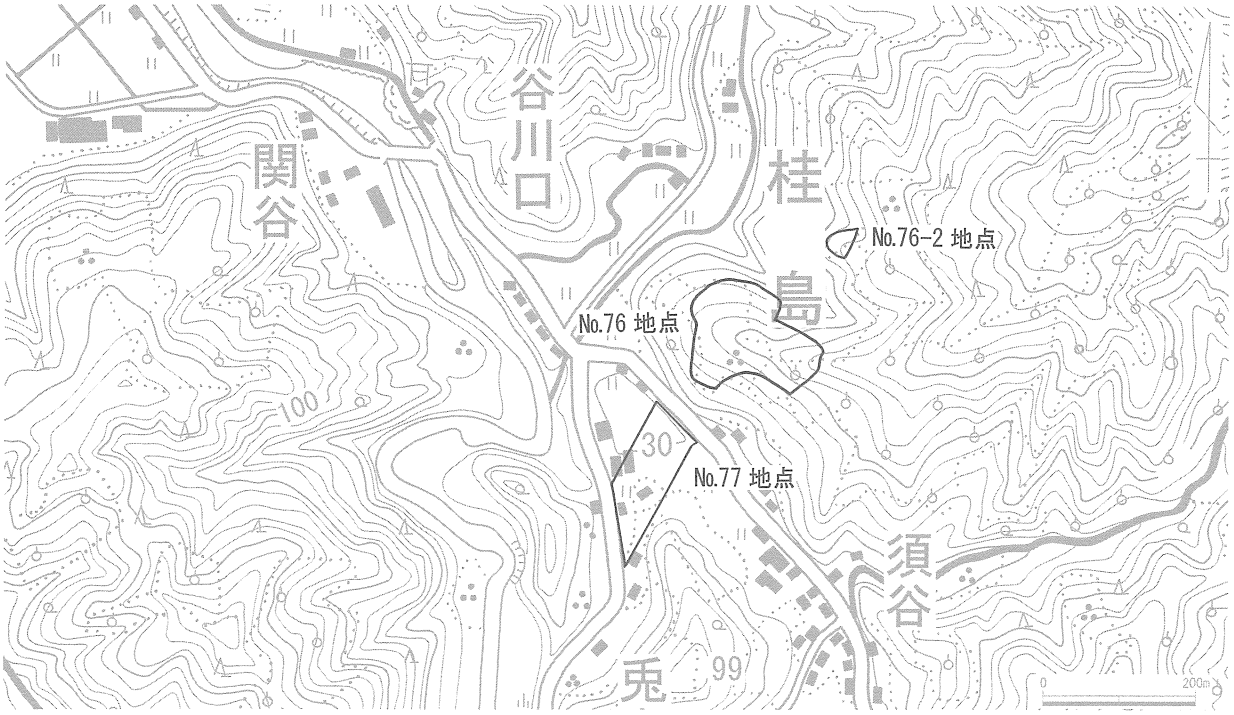


図５　№76～77地点の位置と周辺の地形（1/10,000）

(3)　№78地点

位置・立地と状況

№78地点は志太郡岡部町入野243-2他に所在する。入野地区は、朝比奈川西岸においては志太平野の最奥部となる地区である。入野地区は北側と西側を丘陵に囲まれており、丘陵上には周知の遺跡である入野古墳群が存在する。古墳群の中には、石室が露見している古墳も存在する。第二東名の路線は、北側の丘陵を通るように計画された。路線の計画範囲と入野古墳群として周知されている埋蔵文化財包蔵地の一部が重複したことに加え、周囲の調査事例により尾根筋には木棺直葬墳が存在することも考えられることから、この地を№78地点として確認調査をすることになった。路線が通る丘陵は北から南西に向かって稜線が延び、次第に高度を減じて平野へと繋がっている。この丘陵からは、眼下に朝比奈川と入野地区の平野が広がるが、南方約1.1kmには標高204mの独立丘陵である潮山が存在することから、志太平野全体を眺望することはできない。調査対象範囲となったのは、この丘陵の西側斜面で、その標高は30～80mである。調査開始前は茶畑あるいは山林となっていたが、大規模な土地の改変を受けておらず、本来の地形がほぼ保たれた状況であった。調査対象範囲内には、石室の構成材と推測される石材も露頭していた。なお、JR焼津駅からは北北西に約7.1kmの距離で、1.5km北北東には№77地点が所在する。

調査方法と確認状況

№78地点の確認調査は３回にわけ、平成11年度、平成12年度、平成13年度に実施している。調査対象範囲全体のうち、南東端部の1,105㎡は「№78地点その１」として平成12年２月23日～３月31日に調査を実施し、中央部の2,700㎡は「№78地点その２」として平成12年６月14日～８月７日に調査を実施した。残る18,347㎡については、「№78地点その３」として平成13年５月１日～７月31日に調査を実施した。調査対象面積の合計は22,152㎡である。

調査はトレンチ掘削で実施することとし、幅0.5～1.0m前後のトレンチを設定した。「№78地点その１」の調査では４本のトレンチ、「№78地点その２」の調査では43本、「№78地点その３」の調査でも43本のトレンチを掘削した。それぞれの調査における実掘削表面積は53.5㎡、465㎡、592.4㎡であり、№78地点の確認調査における実掘削表面積の合計は1,110.9㎡である。

先述したとおり、この地は調査開始前、茶畑あるいは山林となっていた。このうち、茶畑部分については茶樹を伐採した上で掘削を行い、山林部分は必要に応じて伐採を行った上で掘削作業に取りかかった。掘削は表土除去を含めて、すべて人力で実施した。表土並びに耕作土の厚さは10～100cm程度あり、これを除去すると、黄橙色あるいは黄褐色の地山となっており、地山の上面で遺構の有無を確認した。調査の結果、「№78地点その２」の調査では、調査対象地のほぼ中央部で横穴式石室を主体部とする古墳を１基検出した。「№78地点その３」の調査では、調査対象地の南部で古墳時代後期の須恵器窯を１基検出した。なお、「№78地点その１」の調査では、遺構の広がりは確認されなかった。各調査終了後は、人力で埋め戻し作業を実施した。

結果

平成12年度における「№78地点その２」の調査で検出した古墳は、入野東９号墳の名称が与えられ、古墳とその周囲225㎡について、同年度に「№78地点本調査Ⅰ期」として本調査を実施した。

平成13年度における「№78地点その３」の調査で検出した窯跡については、入野高岸古窯として遺跡登録された。また、更なる遺構の広がりが考えられたため、750㎡を対象として同年度に「№78地点本調査Ⅱ期」として本調査を実施することとなった。

図６　No.78地点の位置と周辺の地形（1/10,000）

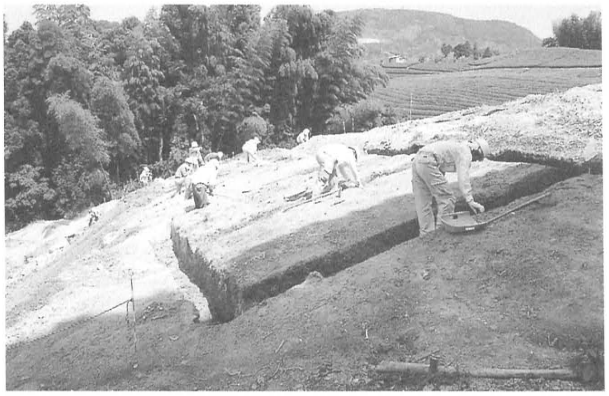


写真５　No.78地点確認調査の状況１（入野東９号墳周辺１）

写真６　No.78地点確認調査の状況２（入野高岸古窯周辺１）

写真７　No.78地点確認調査の状況３（入野東９号墳周辺２）

写真８　No.78地点確認調査の状況４（入野高岸古窯周辺２）

第４節　本調査

１．本調査の方法と経過

前節に記したとおり、№78地点では、平成12年度と平成13年度の確認調査で遺構・遺物を確認でき、遺跡の広がりが明らかとなった。この確認調査の結果から、№78地点の一部は本調査を実施する必要があることが、静岡県教育委員会文化課により示された。本調査の対象となった面積は975㎡である。ただし、日本道路公団からの要請に加え、調査環境の整備状況から、本調査はⅠ期とⅡ期にわけて調査を実施することとなった。

「№78地点本調査Ⅰ期」は、225㎡を対象として平成12年９月４日～11月13日に実施した。この範囲は、平成12年度の確認調査で検出した古墳とその周辺である。なお、この古墳は、入野東９号墳として登録された新規発見の古墳である。

「№78地点本調査Ⅱ期」は、750㎡を対象として平成13年８月１日～14年１月24日に実施した。調査対象範囲となったのは、平成13年度の確認調査において検出した窯跡とその周辺である。なお、この窯跡は新たに発見された遺跡であり、入野高岸古窯として遺跡登録された。

本調査の方法としては、表土除去は重機掘削で行い、遺構検出・遺構掘削は人力で実施した。測量基準点については、旧測地系を基に、検出遺構に合わせて設置した。遺構実測・遺物取り上げにあたっては、トータルステーションを用いた。写真撮影は、35㎜判カラーネガ・カラーポジフィルム、６×７判カラーポジ・モノクロフィルムを用いることを基本とした。なお、詳細な調査の方法と経過は各調査で異なるため、各遺跡の報告の中で述べることにする。

表６　本調査実施期間と面積

遺跡名	地点・期		面積(㎡)	平成12年度												平成13年度											
				4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
入野東古墳群	78	Ⅰ	225						―	―	―																
入野高岸古窯	78	Ⅱ	750																	―	―	―	―	―	―		

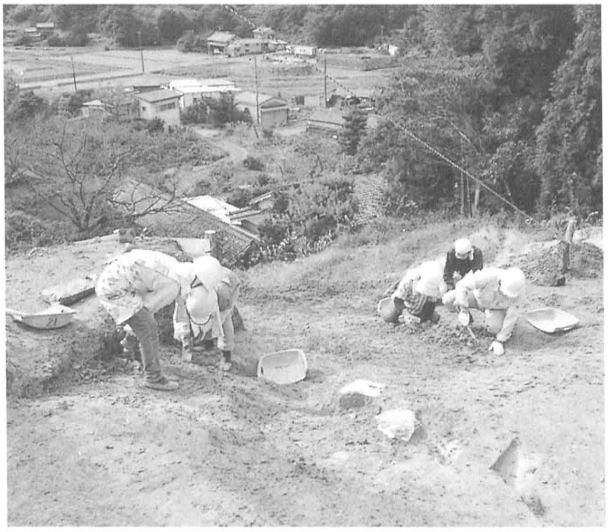


写真９　遺構検出作業（№78地点Ⅰ期　入野東９号墳）

写真10　石室検出作業（№78地点Ⅰ期　入野東９号墳）

２．本調査の概要

岡部地区において本調査を実施した遺跡は、入野東古墳群と入野高岸古窯の２遺跡である。入野東古墳群はNo.78地点Ⅰ期として平成12年度に、入野高岸古窯はNo.78地点Ⅱ期として平成13年度に本調査を実施した。調査の結果、両者とも古墳時代後期の遺跡であることが判明した。調査の詳細については、各遺跡の報告で述べるので、ここでは、その概略について記す。

入野東古墳群

入野東古墳群は８基の古墳の存在が確認されていたが、このたび、本調査を実施したのは、平成12年度に実施した確認調査で新たに発見された入野東９号墳である。入野東９号墳は、横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。この古墳は後世の削平等を受け、墳丘や石室の上半部は残存しなかった。また、石室の開口部付近も破壊が著しく、残存状況は良好とは言い難いものであった。外部施設は周溝の一部を検出したのみであるが、これにより墳形は円墳であることが推測できた。横穴式石室については、上記のような残存状況であるため、石室形態等を把握することは能わなかった。遺物は、石室内から須恵器の坏蓋や長頸瓶等が出土した。この出土遺物は７世紀末～８世紀に位置付けられ、入野東９号墳はこの時期に埋葬が行われた古墳であることが判明した。

入野高岸古窯

入野高岸古窯の本調査では、２基の窯跡を調査した。２基の窯跡は、並列して存在し、北側のものが１号窯、南側のものが２号窯である。ともに、地山を掘り込んだ地下式の須恵器焼成窯であり、南西方向に焚口をもつものであった。調査の結果、１号窯・２号窯ともに５面の焼成面が確認できた。２号窯は、排煙口部分が削平されていたが、１号窯は排煙口付近から続く溝状の遺構が検出された。この溝は、排煙時に熱を調整する機能をもつものと考えられる。遺物はそれぞれの床面、前庭部、灰原から出土した。出土した須恵器は坏蓋と坏身が中心であったが、高坏や甕、長頸瓶、陶臼等も出土している。これらの須恵器は、７世紀前半に位置付けられるため、入野高岸古窯の操業時期は７世紀前半と考えられる。なお、志太地域では、８世紀代の須恵器窯の存在は知られていたが、７世紀代に位置付けられる須恵器窯の発見・調査は、この入野高岸古窯が初例である。また、入野高岸古窯が所在する朝比奈川流域においては、初の窯業遺跡の発見・調査である。

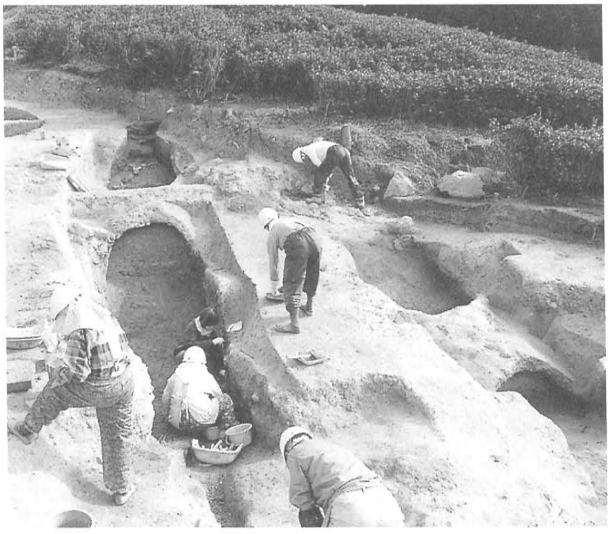


写真11　遺構掘削作業（No.78地点Ⅱ期　入野高岸古窯）

写真12　遺物検出状況（No.78地点Ⅱ期　入野高岸２号窯）

第５節　資料整理

資料整理と報告書作成は、現地調査の実施と同様に地区単位で、順次実施することとなった。ただし、第二東名に関わる埋蔵文化財調査は、現地調査を優先するという方針であり、岡部地区においても現地調査を優先した。そのため、岡部地区の本格的な資料整理・報告書作成は、岡部地区の調査が終了し、更に隣接する藤枝地区の現地調査に区切りがついた平成16年度から開始した。もっとも、基礎的な整理作業の一部については現地調査と併行して実施した。

資料整理の方法と経過については、ここでは概略のみ記し、詳細は各遺跡の報告の中で記す。先述したとおり、資料整理のうち基礎的な作業は、本調査と併行して現地事務所あるいは藤枝地区事務所にて実施した。本格的な資料整理作業と報告書作成は、平成16年度から藤枝地区事務所にて実施した。出土遺物に関しては、まず、洗浄・注記を行った。次に、仕分けと分類作業を実施した上で、接合作業と復原作業を行った。更に、必要なものについては実測をした。この実測図を基に版組を行い、トレースを実施した。遺構についても、版組を行ったうえで、トレース作業を実施した。また、遺構図・写真等の台帳作成も併せて実施した。報告書の執筆と編集作業は上記の諸作業と併行して実施している。なお、出土遺物については、必要に応じて写真撮影を実施した。遺物写真撮影は、４×５判カラーリバーサル・モノクロフィルム、６×７判カラーリバーサル・モノクロフィルムを用いて、当研究所写真室にて実施した。これら、一連の作業を終え、資料の収納を行い、平成19年３月に当報告書を刊行して作業を完了した。

なお、各現地調査の結果に基づいた周知の埋蔵文化財包蔵地の追加登録や登録内容の変更が、静岡県教育委員会および岡部町教育委員会によって行われている。本書では、変更された遺跡名・遺跡範囲・古墳番号に基づいて報告している。本書で扱う入野東９号墳は新たに追加された古墳番号（号墳名）であり、入野高岸古窯は新たに登録された遺跡である。なお、現地調査終了時から周知内容の変更が行われるまでに、多少の時間が経過した。そのため、周知内容の変更以前において調査成果の一部を公表したものについては、当然、変更前の内容に基づいている。これまでに公表している内容と本書に記した内容に相違がある場合は、本書をもって訂正することにする。

写真13　整理作業の状況１

写真14　整理作業の状況２

第２章　入野東古墳群

第二東名№78地点

第１節　位置と環境

１．位置と地理的環境

入野東古墳群（いりのひがし）は、静岡県志太郡岡部町入野（しずおかけん　し　だ　ぐんおかべちょういりの）に所在する古墳群である。岡部町は、静岡県のほぼ中央に位置する。町域の北部は急峻な山地であるが、南部には平野が広がっている。町の西部を南流するのは、朝比奈川である。朝比奈川は、現在では下流で瀬戸川と合流し駿河湾に注いでいる。朝比奈川や瀬戸川、大井川等とその支流が形成した平野は志太平野と呼ばれ、岡部町の南部に広がる平野もこの志太平野の一部である。

入野東古墳群が所在する岡部町入野は、岡部町の南西部、朝比奈川西岸の地区である。JR焼津駅からは北北西に7.1km、河口からは約7.5kmの距離である。現在、岡部町入野とその周辺は、蜜柑や茶の産地として知られている。調査開始前は、古墳が所在する丘陵部は茶畑や畑地、あるいは山林となっており、平野部は水田あるいは畑地で、一部は宅地となっていた。さて、この地は、志太平野の北西最奥部にあたり、平野と丘陵が接する場所である。岡部町入野は北側から西側を山塊が取り囲み、東には朝比奈川が流れている。志太平野に連なるのは、地区の南側である。西側の山塊から派生した支脈の一つが北側の山塊であるが、北側の山塊からは、更に小支脈が南に向けて幾筋か派生している。入野東古墳群は、この北側の山塊の南向き斜面に展開している。本書で報ずる入野東９号墳は標高約43mの位置にあり、平野部との比高差は約20mである。古墳からは朝比奈川とその沖積平野を見下ろすことはできるが、11km南方には標高約200mの独立丘陵である潮山があるため、志太平野を一望することは能わない。なお、西側の山塊の南東向き斜面に所在するのが入野西古墳群である。入野東古墳群と入野西古墳群は、入野古墳群とも総称される。

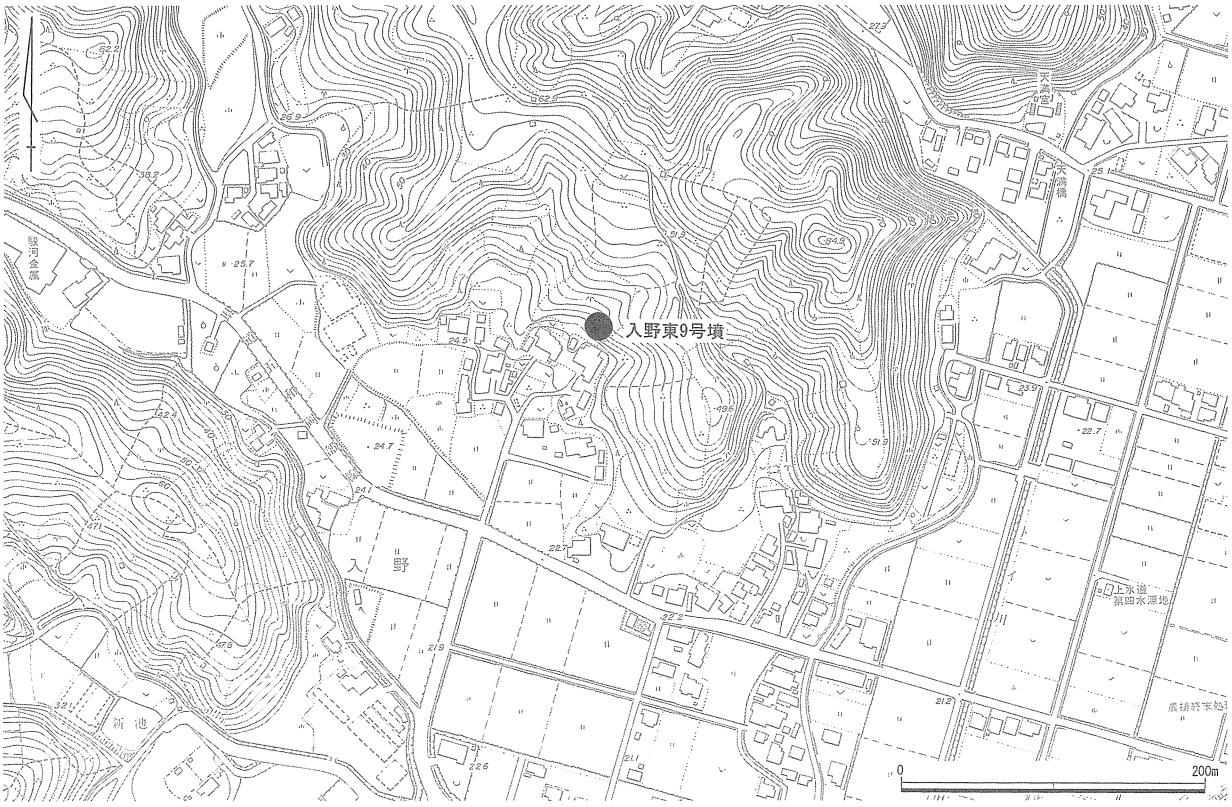


図７　入野東古墳群の位置と周辺の地形（1/5,000）

2．歴史的環境と調査歴

歴史的環境

岡部地区の歴史的環境は、第１章第２節に記したとおりであり、ここでは、入野古墳群周辺の古墳時代の状況について記す。

本書で報告する入野東古墳群（１）は、朝比奈川右岸に所在する古墳時代後期の群集墳である。入野東古墳群の西北西約0.4kmには入野西古墳群（２）が存在する。入野西古墳群も同時期の群集墳であり、東西の古墳群の総称が入野古墳群である。薬師堂古墳群（３）、栃沢古墳群（４）、向沢古墳群（５）、兎島古墳群（６）、子持坂古墳群（７）、仮宿山崎古墳群（８）、仮宿堤ノ坪古墳群（９）は朝比奈川中流域（註１）における同時期の古墳群である。これらの多くは未調査であるが、一部の古墳については埋葬施設の状況や出土遺物等が報告されている（岡部町1970他）。内容が明らかとなっている古墳は、いずれも横穴式石室を埋葬施設とする６世紀後半～７世紀代の古墳である。

志太地域全体としても、この時期が古墳築造の最盛期であり、調査例も多い。累積された調査事例から、円墳で在地的な横穴式石室を埋葬施設とすることが、志太地域における後期古墳の一般的傾向として把握できる。入野古墳群を含む朝比奈川流域の古墳群も志太地域の傾向に沿ったものである。ところで、志太地域には前期～後期初頭の古墳も存在する。このうちの幾つかは発掘調査も実施され、若王子古墳群（10）のような、いわゆる初期群集墳の存在も明らかとなっている。この時期の古墳は瀬戸川～葉梨川流域に分布し、朝比奈川流域については下流域の向山１号墳（11）が中期の古墳として知られる程度の状況が永らく続いていた。しかし、近年、朝比奈川中流域では前期～後期初頭の古墳の新たな発見・調査が相次いだ。それは、高田観音前古墳群（12）、仮宿沢渡古墳群（13）の調査である。

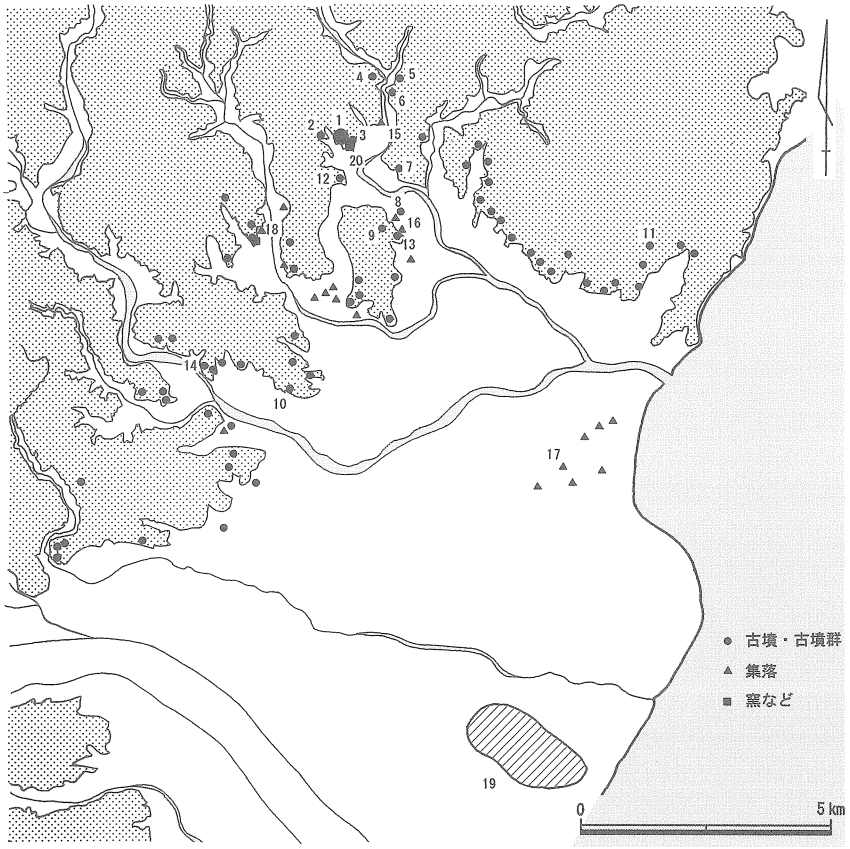


図８　志太地域の古墳時代の遺跡（1/150,000）

表７　志太地域の主な古墳時代の遺跡

番号	遺　跡　名
1	入野東古墳群
2	入野西古墳群
3	薬師堂古墳群
4	栃沢古墳群
5	向沢古墳群
6	兎島古墳群
7	子持坂古墳群
8	仮宿山崎古墳群
9	仮宿堤ノ坪古墳群
10	若王子古墳群
11	向山１号墳
12	高田観音前古墳群
13	仮宿沢渡古墳群
14	荘館山１・２号墳
15	村良遺跡
16	仮宿堤ノ坪遺跡
17	小深田西遺跡
18	寺家前遺跡
19	藤守遺跡
20	入野高岸古窯

高田観音前古墳群は２基の古墳から成る。このうち、高田観音前２号墳は、５世紀末～６世紀前半に位置付けられる墳長約30mの前方後円墳である。この古墳の発見以前、志太地域において確認されている前方後円墳は荘館山１・２号墳（14）の２基にすぎなかった。高田観音前２号墳の発見・調査は、群集墳が盛行する以前の古墳時代の様子が不明であった朝比奈川流域にとって貴重な資料となっただけではなく、志太地域全体の古墳時代像にも再考を迫るものであった。なお、高田観音前１号墳は、中期後半に位置付けられる直径13mの円墳である。

仮宿沢渡古墳群は、前期後半～中期初頭の木棺直葬墳である。仮宿沢渡古墳群の発見・調査により、朝比奈川中流域においても前期～中期の古墳群が存在することが明らかとなった。なお、仮宿沢渡古墳群は３基の古墳の存在が確認されており、いずれも低墳丘の木棺直葬墳である。これは志太地域における当該期の多くの古墳と共通する。

このように入野古墳群周辺では前期から後期に至るまで、古墳が築造されている。一方、集落については不明な点が多い。朝比奈川中流域では、村良遺跡（15）と前期の集落跡と水田が調査された仮宿堤ノ坪遺跡（16）の２遺跡が知られているにすぎず、古墳の築造がピークを迎える後期の集落の存在は確認されていない。この状況は、志太地域全体をみてもほぼ同様のことがいえる。古墳時代の集落跡は少なからず存在し、調査も実施されているが、小深田西遺跡（17）のようにその多くは古墳時代前期を中心とした時期に位置付けられ、中期以降、特に後期の集落跡は非常に少ない。ある程度まとまった遺構が検出されている後期の集落跡としてあげられるのは寺家前遺跡（18）や藤守遺跡（19）程度である。なお、このほか、古墳時代の遺跡として注目すべきものとして、須恵器窯の存在がある。詳細は、次章以下に記すが、入野高岸古窯（20）は朝比奈川流域のみならず、志太地域において須恵器生産が行われていたことを実証した発見・調査であった。

以上から、志太地域における古墳時代の遺跡の状況は以下のようにまとめることができよう。まず、古墳については、前期が少なく、中期に初期群集墳が形成され、後期に爆発的に増えるといえる。その一方、集落跡は前期の遺跡が多く、中期や後期の遺跡が非常に少ないという状況にあることが現状ではいえる。なお、朝比奈川中流域では、古墳時代後期の集落跡は確認されていないが、古墳群や窯跡群の存在等を勘案すると、調査が行われていない区域に集落跡が存在するものと考えられる。

入野古墳群の調査歴

本書で報告する入野東９号墳は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査によって、新たに発見された古墳である。入野古墳群は東西の２群に大別できるが、東西の古墳群を通じ今回実施した入野東９号墳が初の発掘調査事例である。ただし、この付近に古墳が存在することは古くから知られていた。最も古くから存在が知られていたのは、入野西１号墳である。明治年間に横穴式石室が開口していたことが伝えられている（岡部町1970）。入野東古墳群では、昭和40年代には横穴式石室の一部が露頭する入野東１号墳の存在が知られていたようである。また、昭和40年代の道路工事の際には、入野東８号墳から大刀が出土したことが伝えられる。なお、入野西１号墳と入野東１号墳は現存し、横穴式石室が開口している。このほかにも、地形の起伏等から、数基の古墳が存在すると推定されている。

このように、古墳群の存在は早くから確認されていたが、内容については不明な点が多い。わずかながらも得られた資料からは、入野古墳群は古墳時代後期後半以降に新たに形成される群集墳として位置付けることができ、前・中期の古墳は存在しないようである。

註

1　本章では、朝比奈川について現在の岡部川との合流点をもって下流と中流に区分する。なお、上流と中流の区分は野田川との合流点とする。

第２節　調査の方法と経過

１．調査の方法

本調査は平成12年９月４日～11月13日に「№78地点本調査Ⅰ期」として実施した。調査対象面積は225㎡である。この調査対象範囲は、入野東古墳群の古墳分布範囲のほぼ中央部にあたる。

現地調査では、重機を用いて表土および耕作土を除去した。遺構検出作業と遺構掘削作業は人力で行った。埋葬施設の覆土については、篩いにかけ微細な遺物の発見に努めた。

測量にあたっては、重機掘削終了後、日本測地系平面直角座標第Ⅷ系に基づき調査区内に基準点を設置した。また、古墳は埋葬施設の主軸に合わせた基準点も併せて設置している。遺構実測と遺物出土状況の実測は、測量基準点に基づき、トータルステーションを用いて行い、地形測量図と全体図は空中写真撮影により図化を行った。石室実測図は1/10、その他の遺構実測図は1/20、遺物出土状況図は1/10、地形測量図と全体図は1/100を基本として作成した。

現地における写真撮影は35㎜判モノクロフィルム・カラーネガフィルム・カラーポジフィルムと、６×７判モノクロフィルムを使用した。また、ラジコンヘリを使用して空中写真撮影を行った。空中写真は６×4.5判モノクロフィルム・カラーポジフィルムを使用した。なお、石室の基準点設置と石室実測図、地形測量図、全体図の作成、空中写真撮影については株式会社フジヤマに委託した。

資料整理作業と報告書作成作業は藤枝地区事務所にて実施した。ただし、基礎的な整理作業は現地調査と併行して、現地事務所にて実施した。資料整理作業は、遺物から着手し、接合と復原の作業を実施した後、実測を行った。実測図を基に版組を行い、トレース作業を実施した。遺構に関しては、現地で作成した図面に基づき版組を行い、トレース作業を実施した。これらの作業と併行して、報告書の編集と観察表の作成を実施した。遺物撮影は、当研究所写真室にて、６×７判のカラーリバーサルフィルムとモノクロフィルム、４×５判のカラーリバーサルフィルムを使用して実施した。遺物と記録類の収納作業は、上記の作業が全て終了した段階で実施した。

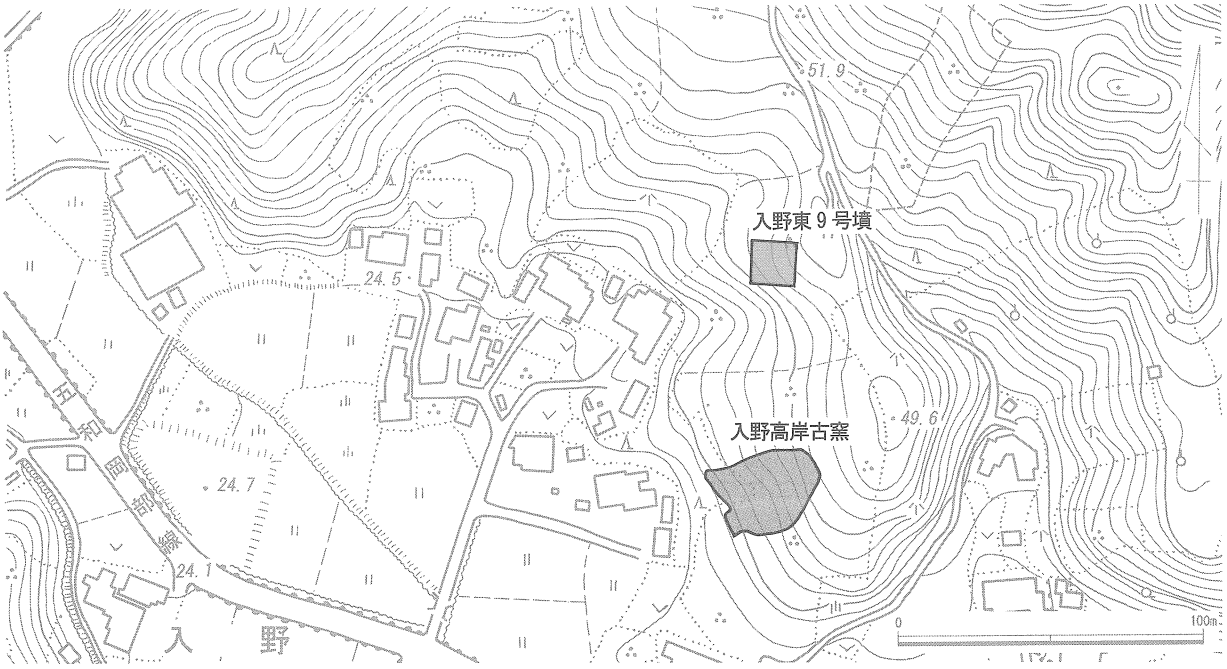


図９　№78地点本調査対象範囲（1/2,500）

２．調査の経過

現地調査は平成12年９月４日から11月13日まで実施した。調査はまず、重機掘削から開始した。重機掘削は、９月４日から６日まで行った。重機掘削作業と併行して、排土置き場に土嚢積みの作業を実施した。この土嚢は、排土の土砂流出防止を目的とした土止めである。

人力掘削は９月６日に開始した。まず、包含層を掘削し、次いで遺構検出作業を行った。遺構検出作業を実施したところ、古墳の埋葬施設である横穴式石室が現れ、９月18日からは横穴式石室内の埋土や崩落石の除去を開始した。横穴式石室内の崩落石や埋土は９月20日に取り除くことができた。この間、出土した遺物は、随時出土状況の記録をとった。なお、埋葬施設の調査と併行して、９月19日から外部施設の検出作業も開始した。周溝は検出が困難であったため、トレンチを適宜設定し調査を実施した。

９月27日には、古墳の全貌を明らかにすることができ、全体と個々の写真撮影を実施した。９月28日にはラジコンヘリを用いて空中写真撮影を行っている。なお、横穴式石室の埋土については微細な遺物を検出するために、９月27日から11月８日まで断続的に篩いがけの作業を行った。この作業により、土器片等を確認することができた。

10月３日からは、横穴式石室展開図の作成と遺物出土状況の実測を開始した。なお、遺物は実測が終了した時点で取り上げ作業を実施した。展開図の作成にあわせて、10月12日からは横穴式石室の解体作業を開始した。横穴式石室を構成する石材を撤去した10月16日からは、基底石の設置痕の検出に取りかかった。10月19日には検出が終了したため、その状況の写真撮影を行い、撮影終了後に実測作業を行った。10月24日には石室掘形の掘削を行い、25日には実測を含めた作業を終えた。

埋葬施設の調査を終えた10月26日からは、外部施設の調査に重点を置いた。10月26日は周溝等の土層断面を実測した。10月31日には土層断面の写真撮影を実施した上で、土層帯の解体を行った。外部施設に関わる掘削作業を完了した11月６日に、埋葬施設と外部施設の完掘状況の写真撮影を実施した。翌11月７日に外部施設の完掘状況の実測作業を実施し、撤収作業も開始した。撤収作業は11月13日に終了し、現地調査を完了した。なお、10月10日から上記の掘削・実測作業と併行して、出土遺物等の基礎整理作業を断続的に実施した。

資料整理作業は平成16年度に基礎整理作業を一部行い、17年度と18年度に資料整理作業と報告書作成作業を実施した。平成19年３月、本書の刊行をもって、第二東名建設に伴う入野東古墳群の調査を完了した。

表８　入野東古墳群本調査工程表

		９　月			10　月			11　月		
準備・撤収工		―						―		
重機掘削		―								
人力掘削	墳丘調査			―	―	―	―	―		
	石室調査	―	―	―	―	―	―			

第３節　調査の成果

１．概　要

(1)　遺構と遺物

入野東古墳群の調査（№78地点本調査Ⅰ期）では、古墳時代後期の古墳１基を発掘調査した。墳丘は後世の削平が著しく、外部施設も周溝の一部を検出した程度であるが、墳形は円墳と推定することができた。埋葬施設は横穴式石室であるが、石室も後世の開墾等の影響を受け上部は残存しなかった。残存したのは、床面の敷石と奥壁や側壁の基底石と２段目の一部である。

遺物は横穴式石室の内外から須恵器が出土した。石室から出土した須恵器は８世紀前半に位置付けられる。これらの出土遺物から、入野東９号墳は８世紀前半に埋葬が行われたものととらえられる。なお、追葬が行われた様子は確認できなかった。

(2)　基本層序と立地

入野東古墳群は丘陵斜面に所在する古墳群である。古墳群が立地する丘陵は、朝比奈川右岸の山塊から東南に向けて分岐した丘陵の一つである。この丘陵からは、更に幾筋かの小支脈が派生している。入野東９号墳は、南に派生した小支脈の南西向き斜面に所在し、立地地点の標高は約43mである。調査区の周辺は茶畑あるいは山林となっており、調査対象地点についても、調査開始前は茶畑であった。

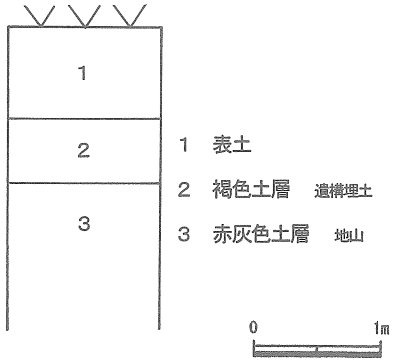


図10　基本層序（1/60）

調査対象範囲において、表土となるのは茶畑の耕作土である。耕作土は70cm前後の厚さがあり、これを取り除くと、地山である赤褐色土層となる。この赤褐色土層の上面が遺構検出面となり、古墳の埋葬施設はこの層を掘り込んで構築されていた。古墳の周溝埋土は褐色土である。褐色土は古墳時代以降の堆積層として広がっていた可能性も考えられるが、周溝以外の場所においては広がりを確認できなかった。古墳築造時の地表面や以後の堆積層は、後世の耕作等により、削平を受けたものと考えられる。

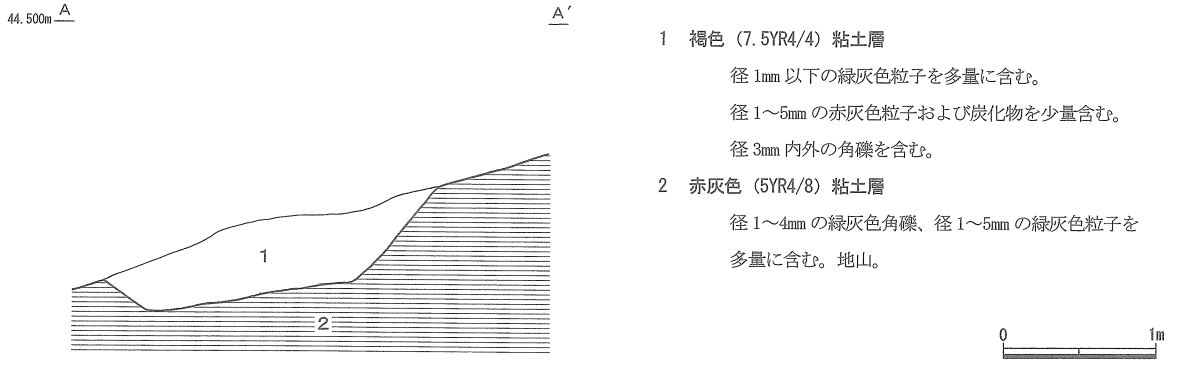


図11　周溝土層断面図（1/50）

2．遺　構

(1)　外部施設

調査前の状況

入野東９号墳は丘陵の南西緩斜面に所在し、その標高は約43m地点である。調査開始前は茶畑であったが、墳丘等の高まりや周溝・埋葬施設の窪み等は認められず、地形から古墳の存在を確認することはできなかった。確認調査において、表土を除去したところ埋葬施設である横穴式石室の一部を検出したことから、古墳の存在が明らかとなった。

墳丘・周溝（図11・12）

墳丘は後世の削平が著しいこともあり、盛土は確認できなかった。ただし、本来的には、埋葬施設を覆う程度の墳丘は有していたと考えられる。

埋葬施設の北東側約1.0mにおいて、周溝の一部と考えられる溝状の遺構を検出している。緩やかに弧を描く平面形をもつこの遺構の検出長は5.7m、最大幅は2.2m、遺構検出面からの深さは最深部で0.5mである。なお、埋葬施設の中心部から、周溝までの距離は約２mである。この遺構の状況や、後述する埋葬施設の規模等から、墳丘は直径４～５mの円墳であったと推測される。

図12　調査区全体図（1/150）

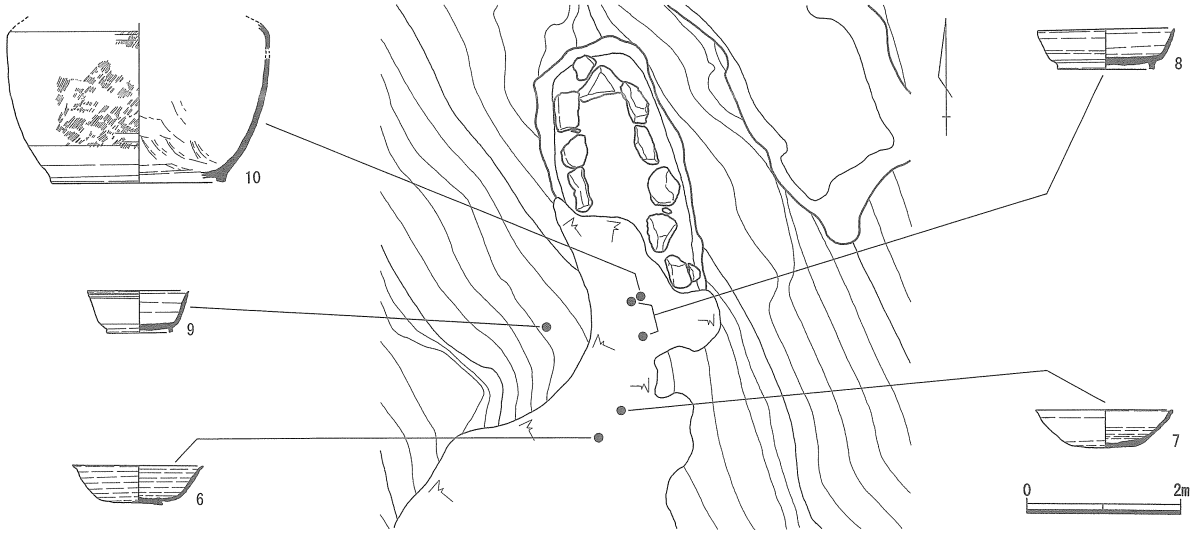


図13　石室外の遺物出土状況（1/100）

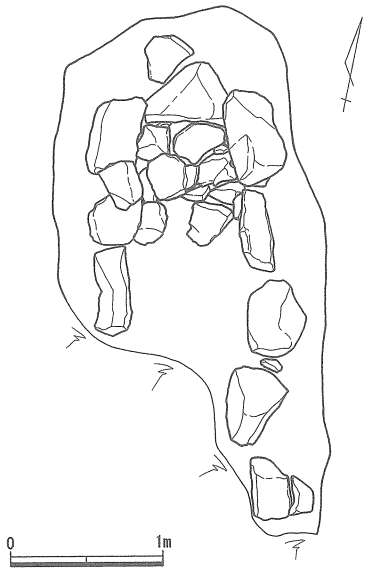


図14　横穴式石室検出状況（1/50）

なお、埋葬施設の南端部から斜面の下方に向けて、溝状の撹乱が検出できた。検出長は5.1m、検出面で計測した最大幅は3.8mである。これは、埋葬施設の石材抜き取りに伴う撹乱、並びに降水時の流路跡と考えられる。ただし、元々は古墳の墓道であった部分が崩落し、流路となった可能性は否定できない。

遺物出土状況（図13）

埋葬施設南半から斜面下方にかけて検出した撹乱から、須恵器の破片が出土した。器種が判明したのは合計５点である(図19-６～10)。このうち、坏身は４点、１点は短頸壷である。これらの出土遺物については、いずれも元位置を留めているとはとらえがたい。そのため、主体部からかき出されたものであるのか、墓前祭祀に伴うものであるのかは不明である。なお、上記の５点以外に、１個体分の須恵器破片が出土している。ただし、細片である上に、風化が著しいため、詳細を窺うことはできなかった。

(2)　埋葬施設

残存状況（図14）

入野東９号墳の埋葬施設は横穴式石室（以下、石室）である。墳丘と同様、開墾等により上部は削平され、右側壁の開口部付近も撹乱を受けていた。残存したのは、床面の敷石と奥壁や側壁の一部である。

奥壁は１石が残存したが、本来的には更に数段積み上げられていたものと考えられる。側壁は奥壁付近のみ２段目まで残存したが、その他は基底石の残存に留まる。敷石も奥壁付近のみで確認できたにすぎず、本来の敷石の範囲については明らかにすることはできなかった。

形状・規模（図15）

石室は、石室上部や開口部付近が破壊されていたため、立面構造や袖の有無については不明である。ただし、残存部位には玄門の造作やその痕跡は認められず、無袖式の可能性が指摘できる。

石室平面形は、奥壁に比べ石室中央部はわずかに幅が広がるものの、長方形としてとらえられる。なお、石室は南側に開口し、主軸方位（註１）はN-10°-Wである。残存する範囲の床面はほぼ平坦であり、石室中央部の奥壁手前における敷石上面の標高は42.6mである。

石室規模は、前述のとおりの残存状況であるため、築造当時の規模は不明である。残存長は2.7m、奥壁幅は0.6mであった。石室最大幅は0.9mであるが、これは奥壁から1.1m地点における値である。石室残存高は、奥壁が0.4m、側壁は最も残りの良い部分で0.5mである。これは、敷石の上面から計測した数値であり、掘形底面からは、それぞれ0.5m、0.6mである。なお、側壁は東壁のうち奥壁と接する部分の残存が最も良好であった。

石室の床面には、敷石が確認できた。敷石に使用されていたのは、５～35cm程度の扁平な角礫である。敷石は奥壁から0.8mの範囲に施されている。これより開口部側には敷石が見られなかった。ただし、残存した敷石の状況が、石室本来の姿であるのかは、不明である。

石室を構成する石材には、古墳群の付近で入手可能な石が使用されているようである。石室の残存部位では角礫が使用されていた。割石と考えられるが、明確な加工痕は見受けられなかった。

石材の規模を見ると、残存する中では奥壁基底石が最も大きく、幅1.3m、高さ1.7m、厚さ0.8mである。側壁には最大幅0.6～1.0m程度の石材が使用される。２段目よりも、基底石の方が一回り大きい傾向にある。なお、奥壁基底石は、広口面を石室内面に向け、縦位に据えられている。残存する側壁を見ると、基底石は広口面を石室内に向けて据えられ、２段目以上は横積みされている。

掘形（図16）

掘形は石室よりも一回り大きい程度で、遺構検出面で測定すると、残存長3.5m、最大幅1.8m、検出面から床面までの深さは最も深いところで、0.4mである。

平面形は、やや不正形であるが、隅丸長方形としてとらえられる。奥壁や側壁の基底石と、掘形壁面は最大で0.4m程度の隙間があるが、この間

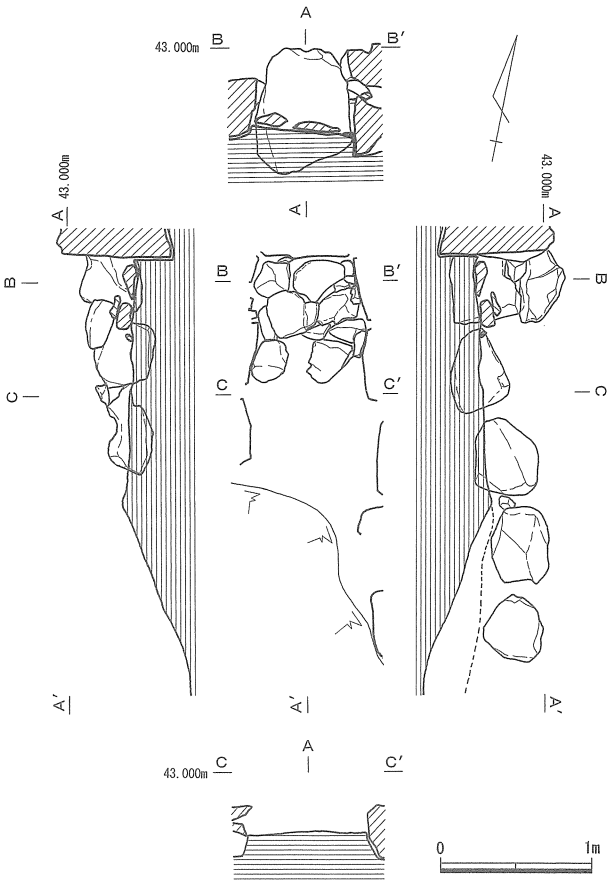


図15　横穴式石室展開図（1/50）

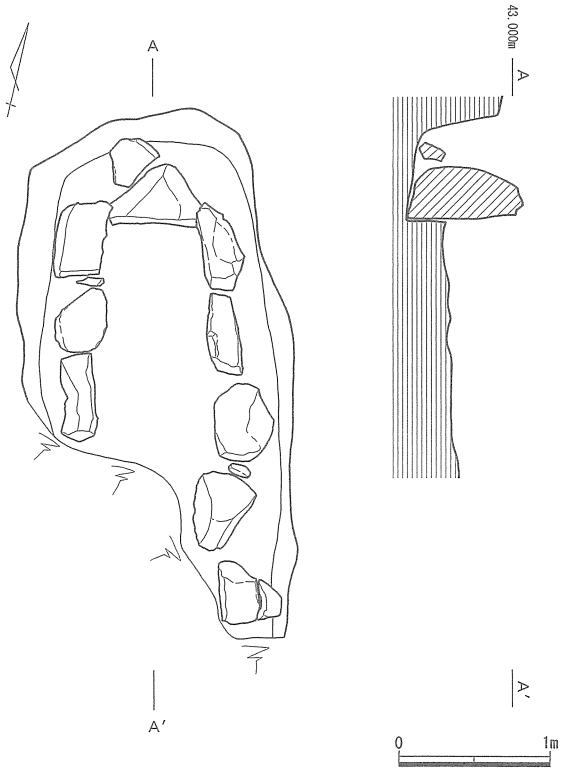


図16　石室基底石と掘形（1/50）

には、地山とよく似た赤褐色粘土が詰められていた。

奥壁や側壁の基底石は、その形状に即して掘形床面を更に掘り下げて据えられたと考えられる。基底石底面は掘形床面からは0.1～0.5m程度の深さである。

遺物出土状況（図17）

石室内からは、５点の須恵器が出土している。いずれも、床面直上から出土し、最終埋葬時における元位置をほぼ留めていると考えられる。

出土した須恵器は、坏身が１点、坏蓋が３点、長頸瓶が１点である。坏身と坏蓋３点は、石室のほぼ中央部から出土した。このうち、２と４は重なった状態で出土し、そのすぐ西側から３が出土した。１は３の約0.3m奥壁側に寄った位置からの出土であった。５の長頸瓶は、２・４から0.2m程開口部側で出土した。なお、坏蓋はいずれも頂部を下に向けた状態で、坏身は口縁部を下に向けた状態で出土したことは、特徴的である。

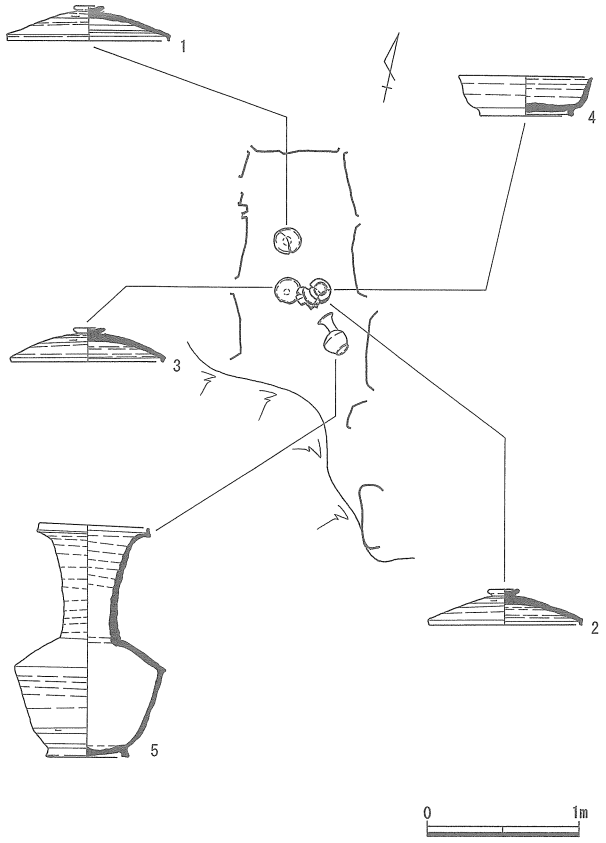


図17　石室内の遺物出土状況（1/50）

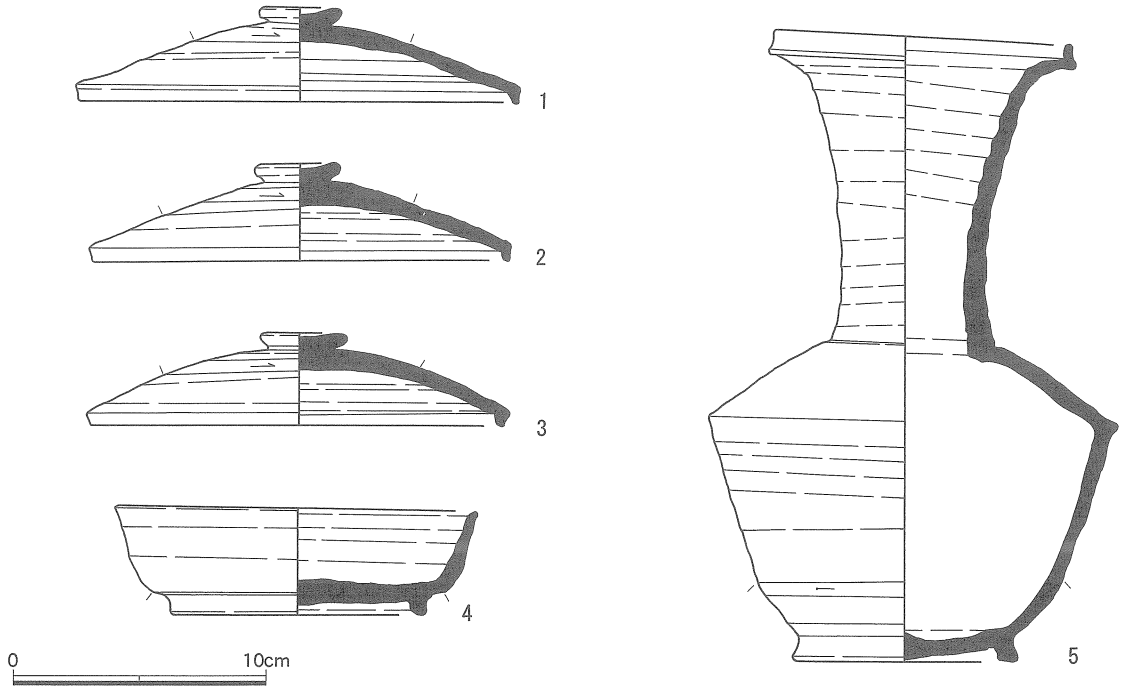


図18　石室内の出土遺物（1/3）

3．遺　物

石室内出土遺物（図18-１～５）

石室からは５点の須恵器が出土した。５点とも、湖西産と考えられ、MT21型式併行期（註２）に位置付けられる。

１～３は須恵器の坏蓋である。いずれも、返りをもたず、頂部には宝珠状の摘みを有する。口径は16.1～17.3cm、器高は3.7～3.9cmである。焼成は３点とも良好で、灰色あるいは灰黄色を呈する。なお、２は口縁部内面の一部に自然釉が付着する。

４は坏身である。受部はもたないが、高台を有する。口径は14.2cm、器高は4.2cm、焼成は良好でオリーブ灰色を呈する。

５は高台を持つ長頸瓶である。器高25.1cm、口径11.5cm、胴部最大径16.0cm、焼成は良好で青灰色を呈する。

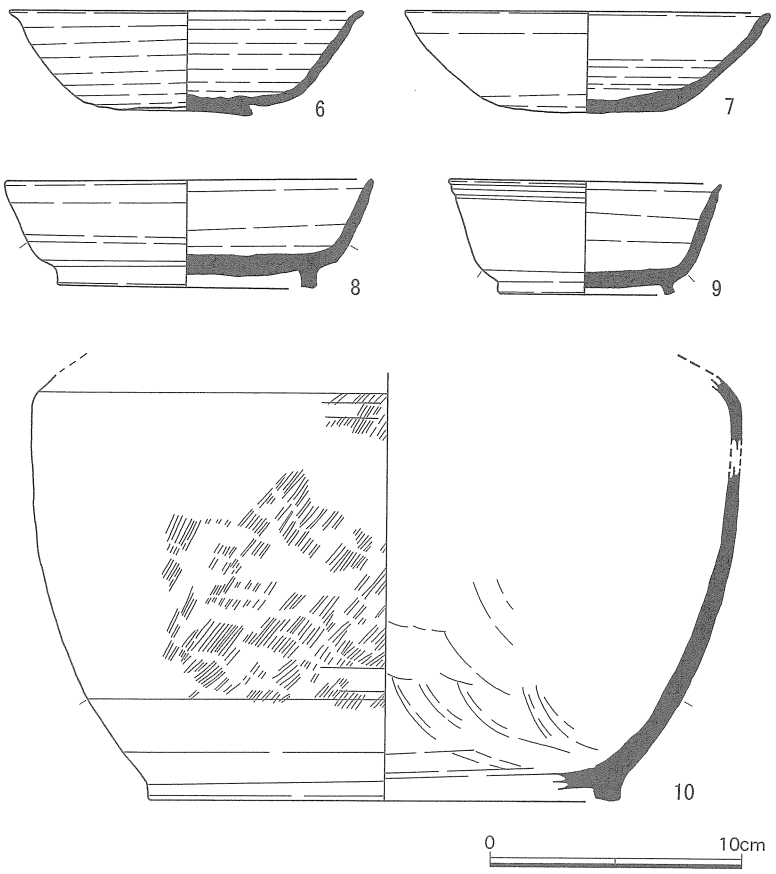


図19　石室外の出土遺物（1/3）

石室外出土遺物（図19-６～10）

撹乱土中から須恵器が出土している。このうち５点を図化したが、更に１～２個体分の須恵器が出土している。６～９は坏身である。いずれも受部をもたないが、６と７は無高台であり、８と９は高台をもつ。６と７は一部を欠損するのみであるが、８と９は全体の2/3程度の残存に留まった。口径は10.7～14.4cm、器高は4.0～4.4cmである。焼成は、４点とも良好で灰白色あるいは灰色を呈する。

10は短頸壷と考えられる。残存状況は悪く、口縁部を欠き、底部から体部上半の約1/10の残存であった。残存高は16.7cm、最大径は28cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。体部外面にはタタキ目が観察できる。なお、体部下半と内面は、タタキの後にナデによる調整が行われている。

上記の５点は、いずれも湖西産である（註３）。10については時期を特定し難いが、６～９はMT21型式併行期に位置付けられる。

表９　入野古墳群石室計測表

	墳　丘		主　体　部								
	墳形	直径	平面形	方位	全長	玄室長	奥壁幅	最大幅	玄室高	羨道長	羨道幅
入野西１号墳	円（半）		擬似両袖	N-18°-W	7.5	3.9	1.6	1.8	2.0	3.6	1.5
入野東１号墳	円	15.0	擬似両袖	N-36°-E	(5.9)	4.4	1.0	1.7	1.4		1.8
入野東９号墳	円？	4～5		N-10°-W	(2.7)	(2.7)	0.6	0.9			

4．小　結

入野東９号墳は、後世の削平により、墳丘の盛土等は痕跡すら残っていなかった。しかし、わずかに残存した周溝の一部から、入野東９号墳は直径４～５m程度の円墳であったと推測することができる。斜面地の立地であることを勘案すると、周溝は斜面上方部にのみ掘削され、下方部には元々存在しなかったことも想定できる。墳丘も斜面を削り出すことで形成され、盛土自体は元々、ごくわずかなものであった可能性もあり得る。

埋葬施設は横穴式石室であったが、上部と開口部側は残存しなかった。残存長2.7m、石室最大幅0.9mであるが、掘形から判断すると、本来的な規模もこれより著しく大きくはないものと考えられる。石室形態は特定することができなかったが、残存部や掘形からは袖をもっていた様子は看取できないため、無袖式と考えられる。なお、埋葬空間の平面形は、長方形としてとらえることができる。立面構造については、判断する手がかりを欠き、不明と言わざるを得ない。

遺物は、埋葬施設の内外から須恵器が出土している。石室内からは、坏身１点、坏蓋３点と長頸瓶１点が出土し、これらは埋葬時の元位置をほぼ留めていると考えられる。いずれも、MT21型式併行期に位置付けられ、湖西窯で生産されたものと考えられる。石室外から出土した５点の須恵器は、撹乱からの出土であり、元位置を留めるものではない。４点の坏身は、MT21型式併行期に位置付けることができ、これらも湖西産と考えられる。以上の出土遺物から入野東９号墳の被葬者は、８世紀前半に埋葬されたといえ、追葬はなかったものと考えられる。

註

1　ここでは、石室開口部中央と奥壁中央部をつなぎ、開口部側から奥壁側を見た方位を主軸方位とした。

2　須恵器編年は田辺1980を参照した。ただし、当古墳から出土した須恵器は、いずれも大阪府南部窯跡群で生産されたものではない。そのため、～型式併行期と表記する。また、本文中ではMT～、TK～等の略号を使用した。なお、当古墳出土の須恵器は静岡県内の須恵器編年（鈴木2004）ではＶ期前半に、湖西窯の編年（後藤1989・1991）では第Ⅳ期第１小期に相当する。

3　須恵器の制作地については、後藤建一氏に御教示いただいた。

表10　出土遺物観察表

挿図番号	図版番号	出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	備考	
1	5	石室内	坏蓋	16.1		3.7	完形	焼成良	外面：2.5Y7/2（灰黄色）
2	5	石室内	坏蓋	16.3		3.9	完形	焼成良	外面：10Y6/1（灰色）
3	5	石室内	坏蓋	17.3		3.9	完形	焼成良	外面：10Y6/1（灰色）
4	5	石室内	坏身	14.2		4.2	完形	焼成良	外面：5GY6/1（オリーブ灰色）
5	5	石室内	長頸瓶	11.5		25.1	完形	焼成良	外面：5B6.5/1（青灰色） 内面：5B6.5/1（青灰色） 最大径：16.0cm
6	5	石室外	坏身	14.0		4.0	完形	焼成良	N6/0（灰色）
7	5	石室外	坏身	14.4	6.9	4.1	完形	焼成良	2.5Y8/2（灰白色）
8	5	石室外	坏身	14.3	10.0	4.3	2/3	焼成良	7.5Y6/1（灰色）
9	5	石室外	坏身	10.7		4.4	2/3	焼成良	N5/0（灰色）
10		石室外	短頸壺		18.6		1/10	焼成良	10Y6/1（灰色） 最大径：(28.0cm)

第４節　まとめ

１．入野東９号墳と入野古墳群

入野東９号墳

入野東９号墳は残存状況が良好ではなかったものの、周溝の一部が検出できたことにより直径４～５m程度の円墳と推定することができた。また、主体部は無袖式と考えられる横穴式石室で、残存長2.7m、最大幅0.9mの規模であることが明らかとなった。石室内からはMT21型式併行期に位置付けられる須恵器が出土した。追葬が行われた形跡を看取することはできず、８世紀前半の築造といえよう。

入野古墳群

さて、入野東９号墳は、入野東古墳群中の一古墳である。入野東古墳群は北西約0.4kmに所在する入野西古墳群とあわせ、入野古墳群とも総称される（図20）。入野西１号墳と入野東１号墳は横穴式石室（以下、石室）が開口していたこともあり、存在自体は古くから知られていた。しかし、発掘調査を経たものは無く、後期以降に形成される古墳群として認識されている程度であった。今回の入野東９号墳の発掘調査により、入野古墳群は８世紀前半まで築造が続くという新たな知見を加えることができた。

ところで、先述した入野西１号墳と入野東１号墳は現存する古墳である。このうち、入野西１号墳については岡部町史（岡部町1970）に石室の実測図等が掲載されている。この２基の古墳は、遺物の出土こそ伝えられていないが、石室の残存状況は今回調査を実施した入野東９号墳よりも良好である。次に、この２基の古墳の概要を記す。

入野西１号墳（図21、写真15・16）

入野西１号墳は、側壁に立柱石を据えることで玄室を区画する石室形態を採用する。石室は南側に開口し、主軸方位はN-18°-Wである。規模は、全長7.5m、玄室長3.9m、奥壁幅1.6m、玄室最大幅1.8m、玄室高2.0m、羨道最大幅1.5mである。玄室幅と羨道幅に差があるが、袖部が著しく屈曲するとは言い難く、石室形態は擬似両袖式としてとらえることができる（註１）。なお、立柱石は石室内に突出し、玄室平面形はわずかに胴が張る。玄室には天井石が残存し、平天井であることが確認できる（註２）。奥壁

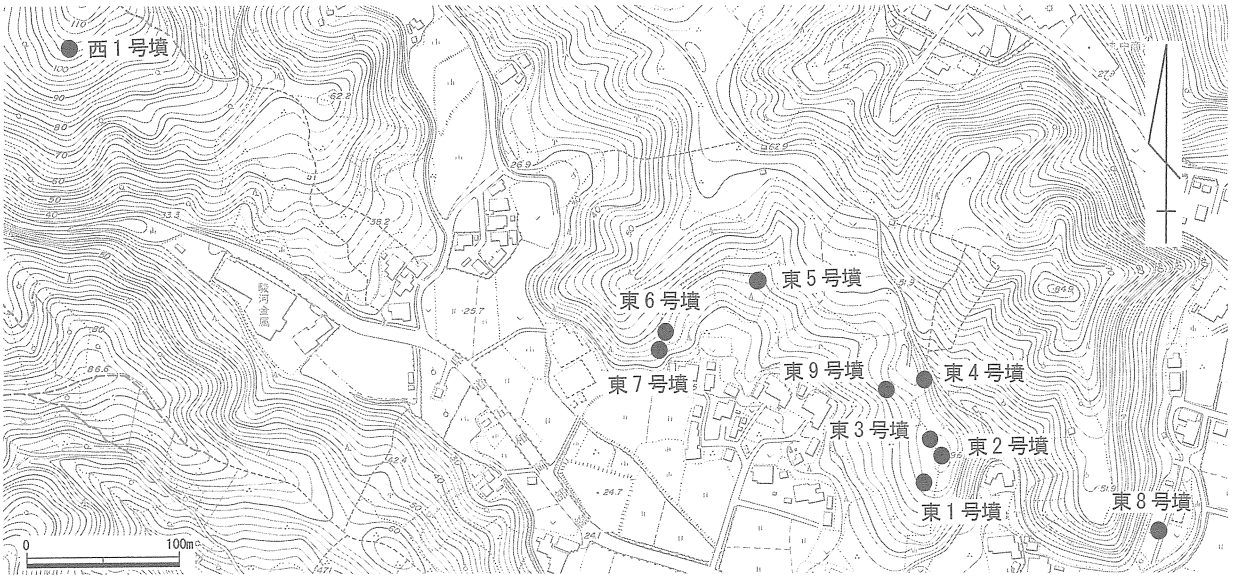


図20　入野古墳群古墳分布図（1/5,000）

と側壁の接点は天井まで角が保たれる。玄室の側壁基底石に使用される石材は、見かけ上では、２段目以上の石材に比べ大ぶりの石材を使用していることは特徴的である。出土遺物は知られていない。

入野東１号墳（写真17・18）

入野東１号墳は入野西１号墳に比べると残存状況は悪い。奥壁は基底石のみ残存し、側壁は奥壁付近を除き２段目まで残存する程度である。石室は南西に開口し、主軸方位はN-36°-Eである。石室形態は擬似両袖式で、玄室と羨道を区分する立柱石は石室内に突出する。ただし、右側壁（奥壁側から見て）には立柱石が現存しない。規模は、残存長5.9m、玄室長4.4m、奥壁幅1.0m、玄室最大幅1.7m、羨道最大幅1.8mである。側壁基底石は見かけ上ではあるが、長辺が縦位となるように設置されるものも見られる。この古墳も遺物等の出土は確認されていない。

以上が入野古墳群の概要である。ところで、志太地域一帯は古墳時代後期以降、多くの古墳が築造される。朝比奈川流域においても、入野古墳群のほかに数群の古墳群が存在する。入野古墳群を含め調査が行われている古墳は、このうちの10基程度であるが、志太地域全体では100基を超える古墳が調査され、資料が蓄積されている。

志太地域における後期古墳の主たる埋葬施設は、入野古墳群と同様に横穴式石室である。後世の削平等により天井石まで残存する石室は稀であるが、残存部位から石室形態を把握できる古墳は多く（註３）、築造時期や分布に特定の傾向をもつ形態も存在する。入野古墳群は、本書で報告した入野東９号墳以外の副葬品は不明であるが、先述のとおり入野西１号墳と入野東１号墳は石室形態を把握できる。そこで、次に石室形態から入野古墳群の位置付けを考えたい。

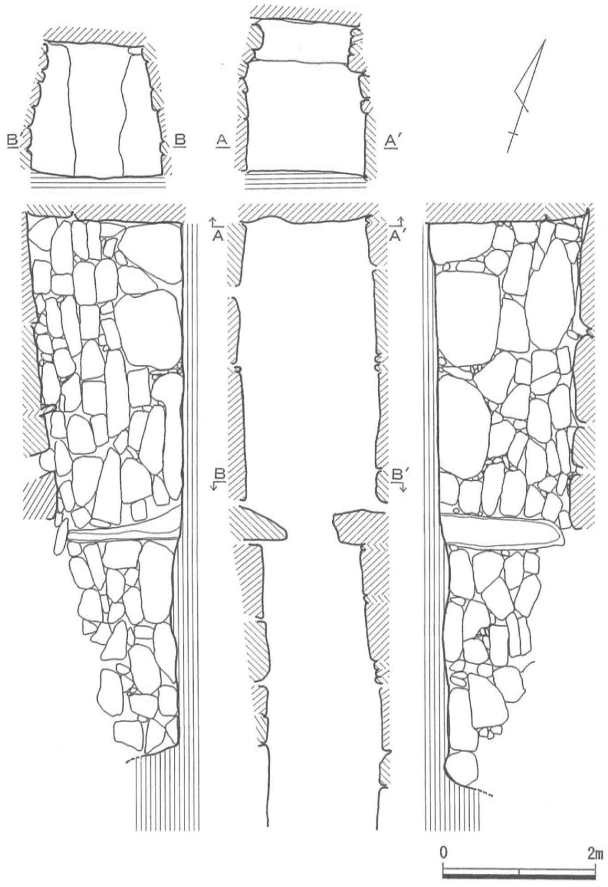


図21　入野西１号墳石室展開図（1/100）

写真15　入野西１号墳（開口部付近）

写真16　入野西１号墳（玄室内）

２．入野古墳群の位置付け

志太地域における横穴式石室

まず、志太地域における横穴式石室の状況から概観する。志太地域の横穴式石室には、両袖式、片袖式、擬似両袖式、無袖式が見られる。このうち、無袖式が最も早くに出現する。TK10型式併行期の須恵器を出土している鵜田２号墳が初現例の一つである（註３）。次いで、TK43型式併行期に片袖式と両袖式が導入され、これ以降、横穴式石室の築造が本格化する。なお、片袖式と両袖式は、在地的な形態が主体を占める。両者の中には、特徴的な一群があり、片袖式では秋合４号墳、両袖式では瀬戸１号墳が典型例としてあげられる。これらは時期的・地域的な偏在傾向が認められる形態であり、TK46型式併行期には築造を終える。擬似両袖式はTK209型式併行期以降に導入され（註４）、TK217型式併行期以降は無袖式と並び志太地域における横穴式石室の主流形態となる。無袖式と擬似両袖式は古墳の築造が終息するMT21型式併行期まで存続する。以上から、当地域における横穴式石室については、TK10～TK209型式併行期を導入期、TK217～TK48型式併行期を盛行期、MT21型式併行期を終末期と位置付けることができる。ここではそれぞれを第１期、第２期、第３期と以下呼称する。

志太地域の擬似両袖式石室

入野西１号墳・入野東１号墳の石室形態は、立柱石により玄室と玄室外を区画するいわゆる擬似両袖式である。そこで、次に志太地域における擬似両袖式石室について概観する。

志太地域では現在、擬似両袖式は約80基確認できる（図22・表11）。ただし、この中には、萩ヶ谷A-４号墳のように在地的な両袖式石室の系譜上ととらえられるものも、ごく少数含まれる（註５）。 擬似両袖式は第１期後葉から確認できる。初現例の一つである瀬戸B-17号墳は、羨門にも立柱石を使用する。しかし、第２期以後に築造されるほとんどの擬似両袖式石室は、羨門に立柱石を用いない。両者の関連性については、別個に導入された可能性と前者から後者が派生した可能性があるが、現時点では結論付け難い。ただし、羨門に立柱石をもつ瀬戸B-17号墳は、眉石を有するという特徴をもつ。一方、羨門に立柱石をもたないタイプは、眉石をもたないようである（註６）。入野西１号墳も平天井で眉石は見られない。断片的な資料同士の比較であるため、断定できないが、擬似両袖式石室において羨門構造が異なる場合は天井構造も異なっていた可能性がある。この点を重視するならば、羨門に立柱石をもつタイプともたないタイプは、別個に導入されたと考えられる（註７）。もっとも、導入経緯が異なるものであっても、両者の淵源自体は擬似両袖式の成立する三河地域に求められる（註８）。

ところで、志太地域の擬似両袖式石室は、玄室の平面形、羨門における立柱石の有無、側壁基底石の状況等の違いから細分が可能である。このうち、玄室平面形は長方形を指向するものと胴張形を指向す

写真17　入野東１号墳（石室全景）

写真18　入野東１号墳（東壁と玄門立柱石）

表11　志太地域の擬似両袖式石室

番号	古墳名	玄室平面形	石室長(m)	玄室最大幅(m)	番号	古墳名	玄室平面形	石室長(m)	玄室最大幅(m)	番号	古墳名	玄室平面形	石室長(m)	玄室最大幅(m)
1	旗指４	胴張形	7.2	1.6	27	向山12	不明	6.1	1.3	53	三ツ池４	長方形	4.0	1.1
2	田ノ谷１	胴張形	3.2	1.2	28	向山13	不明	8.0	1.4	54	女池ヶ谷２	長方形	7.3	1.2
3	二俣２	胴張形	4.5	0.7	29	向山15	不明	4.0	1.0	55	女池ヶ谷３	胴張形	6.6	1.4
4	内瀬戸５	胴張形	6.3	1.3	30	萩ヶ谷A-２	胴張形	6.1	1.6	56	女池ヶ谷４	長方形	8.2	1.8
5	内瀬戸７	長方形	7.0	1.4	31	萩ヶ谷A-４	胴張形	4.5	1.2	57	女池ヶ谷５	長方形	7.3	1.3
6	瀬戸B-17	長方形	13.1	3.1	32	萩ヶ谷A-７	胴張形	3.5	0.9	58	女池ヶ谷６	長方形	4.5	1.1
7	瀬戸A-１	不明	2.4	1.0	33	萩ヶ谷B-１	胴張形	2.0	0.7	59	女池ヶ谷12	胴張形	4.0	1.2
8	瀬戸A-２	不明	3.6	1.0	34	萩ヶ谷B-３	長方形	4.2	1.0	60	女池ヶ谷17	長方形	5.6	1.5
9	瀬戸A-３	不明	5.1	1.1	35	高草２	長方形	4.6	0.9	61	女池ヶ谷20	胴張形	5.9	1.5
10	瀬戸A-４	不明	5.9	1.1	36	高草３	長方形	5.2	1.5	62	女池ヶ谷21	胴張形	5.0	1.3
11	瀬戸A-６	不明	3.7	1.2	37	高草５	胴張形	7.3	1.4	63	女池ヶ谷27	長方形	5.8	1.3
12	瀬戸A-８	不明	3.9	1.3	38	高草６	胴張形	5.1	1.4	64	女池ヶ谷28	胴張形	4.6	1.3
13	瀬戸A-14	不明	4.5	1.2	39	高草７	胴張形	6.7	1.0	65	入野西１	胴張形	7.5	1.8
14	瀬戸H-１	不明	5.3	1.1	40	高草８	胴張形	5.4	1.0	66	入野東１	長方形	5.9	1.7
15	瀬戸H-２	不明	6.3	1.4	41	高草９	胴張形	4.0	0.6	67	板沢１	長方形	4.2	1.1
16	瀬戸H-３	不明	3.7	1.0	42	高草12	長方形	1.2	0.4	68	板沢３	長方形	3.7	0.8
17	瀬戸I-３	不明	2.7	0.8	43	高草15	胴張形	6.2	1.2	69	板沢４	長方形	4.4	0.8
18	瀬戸I-４	不明	6.0	1.2	44	高草24	胴張形	3.6	0.8	70	板沢５	胴張形	6.0	1.3
19	瀬戸J-１	不明	6.4	1.3	45	白砂ヶ谷C-１	胴張形	9.9	1.9	71	板沢６	胴張形	7.6	1.3
20	瀬戸J-３	不明	5.7	1.2	46	白砂ヶ谷C-２	胴張形	8.5	1.4	72	板沢７	長方形	3.5	0.8
21	瀬戸K-１	不明	3.6	1.1	47	白砂ヶ谷C-３	胴張形	6.5	1.3	73	板沢９	胴張形	6.4	1.4
22	瀬戸K-２	不明	3.6	1.2	48	白砂ヶ谷D-３	胴張形	4.7	0.8	74	筧沢２	胴張形	5.6	1.1
23	瀬戸K-３	不明	3.7	1.1	49	白砂ヶ谷D-４	長方形	5.8	1.1	75	風尾２	長方形	2.7	0.6
24	瀬戸K-４	不明	3.7	1.1	50	山ノ神１	長方形	3.9	1.0	76	笛吹段17	長方形	6.0	0.8
25	瀬戸K-５	不明	3.3	0.8	51	山ノ神２	胴張形	4.6	1.3	77	笛吹段18	胴張形	6.2	1.0
26	向山11	不明	5.1	1.3	52	三ツ池１	長方形	5.0	1.4					

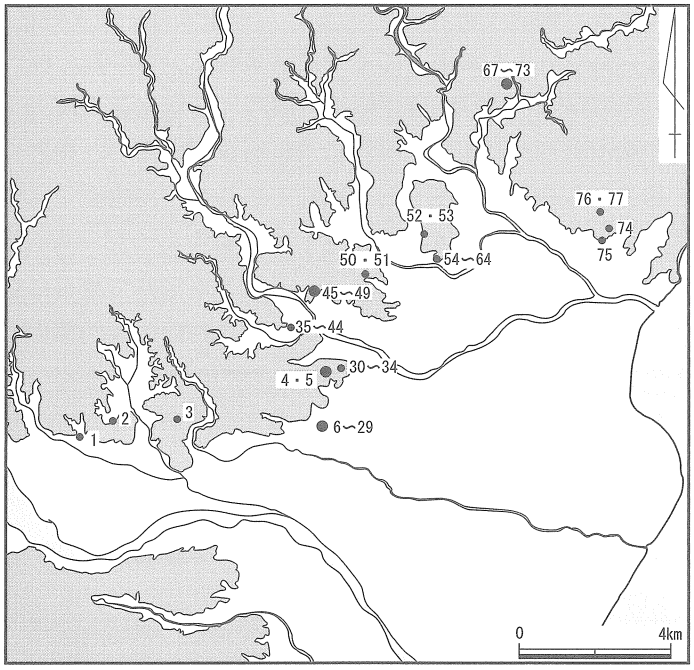


図22　志太地域の擬似両袖式石室分布図（1/200,000）

るものがあるが、後者が一般的であり、羨門立柱石の有無は先述のごとくもたないものが一般的といえる。一方、側壁基底石は、２段目以上の石材に比べ、倍程度の規模の石材を使用するものと同程度の石材を使用するものが見られる。前者は、長辺が縦位になるものと横位になるものに細分でき、設置方法により大きく見えるものもある。一石室内において複数の石材の用法を用いる場合も多く見られ、一般的な傾向をつかみ難いが、２段目以上の石材よりも倍程度の大きさの石材を使用する石室が多い。このほか、志太地域における擬似両袖式石室の一般的な傾向としては、狭長な平面形、石室内に突出する玄門立柱、一枚石を指向する奥壁等があげられる。なお、無袖式や両袖式においても、玄室平面形や基底石の状況は、擬似両袖式石室と同様の視点から細分できる。袖の有無とその状況、玄室平面形態、側壁基底石の設置状況はそれぞれ別個の背景により選択されたものと考えられる。

次に、擬似両袖式石室の被葬者像を考えてみたい。副葬品を見ると、多くの擬似両袖式石室では土器類に加え、鉄鏃や刀子、装身具類が出土している程度である。その一方、少数ではあるが馬具や大刀を出土した古墳も存在し、金銅装の馬具や装飾付大刀を出土した古墳もある。駿河・遠江の階層構造について論究した大谷2000を参照すると、馬具と装飾付大刀が出土した白砂ヶ谷C-２号墳と女池ヶ谷２号

墳は下位首長層、馬具あるいは装飾付大刀が出土した高草５号墳、白砂ヶ谷C－１号墳、板沢９号墳は有力家長層にそれぞれ位置付けることができる。残る多くの擬似両袖式石室はその下の階層といえる。

以上から、志太地域の擬似両袖式石室は下位首長層以下が採用した石室形態であり、多くの被葬者は有力家長層以下の階層であったととらえることができる。第２期～第３期の志太地域では、上位首長に位置付けられる古墳は現時点では確認されていない。また、この時期、擬似両袖式石室のほかに無袖式石室も築造されるが、その中には下位首長層以上に位置付けられるものは無い。そのため、擬似両袖式石室は地域における最上位階層が採用した石室形態とも評価できる。ただし、無袖式よりも擬似両袖式が上位であるとは一概にはいえない。なお、擬似両袖式石室を志太地域に導入した集団としては、畿内から直接的に石室の構築方法や情報を導入できた集団ではなく、東海西部との在地間交流により石室構築方法や情報を導入した集団であることが石室形態から想定される。擬似両袖式石室は、導入後、地域内における技術・情報の交流により拡散したものであろう。

入野西１号墳・入野東１号墳の位置付け

以上を踏まえ、入野西１号墳と入野東１号墳の位置付けを行う。入野西１号墳と入野東１号墳の石室はともに、羨門に立柱石をもたない擬似両袖式石室で、玄室側壁の基底石は２段目以上に比べ倍以上の石材を指向する。玄室平面形は異なり、入野西１号墳が胴張形、入野東１号墳が長方形である。これらの点から、両者は志太地域の擬似両袖式石室としては、一般的な形態的特徴をもつ石室といえる。特に奥壁が一枚石を指向し、狭長な石室の入野東１号墳は当地の典型例ともいえよう。築造時期は第２期～第３期と考えられるが、擬似両袖式石室の築造ピークを勘案すると７世紀中葉である可能性が高い。なお、入野東１号墳の玄室平面形は長方形である。玄室が長方形となる擬似両袖式石室は、葉梨川流域以北でその割合が高く、入野東１号墳はこの傾向に沿ったものと理解できる。

次に、入野西１号墳と入野東１号墳の被葬者の階層について考えたい。ただし、両古墳とも、出土遺物は無いため、石室規模を手がかりとする。石室規模は、入野西１号墳が全長7.5m、最大幅1.8m、入野東１号墳が全長5.9m、最大幅1.7mである。志太地域の擬似両袖式石室の平均的規模は、全長5.2m、最大幅1.2m、玄室長2.4mであり、入野西１号墳、入野東１号墳ともに平均値を上回る。馬具や装飾付大刀を出土し、有力家長層以上に位置付けられる擬似両袖式の石室規模は、全長6.4～9.9m、最大幅1.2～1.9mであり、入野西１号墳の石室規模はこれに比肩する。また、全長6.4m以上かつ最大幅1.2m以上の擬似両袖式石室は、入野西１号墳を除き15基存在するが、馬具あるいは大刀を出土している古墳はこのうち８基である(図24)。入野西１号墳に馬具あるいは大刀が副葬されていた可能性は少なくない。以上から、入野西１号墳の被葬者としては、大刀を副葬できる階層以上であり、有力家長層以上であった可能性もある。少なくとも、入野古墳群における盟主墳ではあろう。

入野東１号墳は、石室規模は平均値よりやや上回り、石室最大幅ならば馬具や装飾付大刀を出土した古墳に劣らない。一方、石室長を見ると同程度の古墳では、大刀の

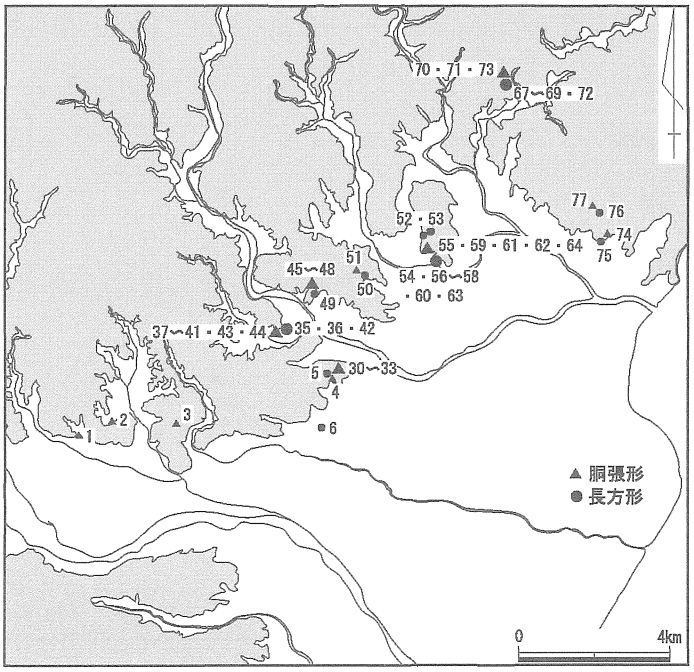


図23　玄室形態別石室分布図（1/200,000）

副葬に留まる。以上の２点からは被葬者の階層は明確にし難いが、擬似両袖式の石室に埋葬される被葬者としては、平均的な階層以上であることはいえよう。

入野古墳群と朝比奈川流域の古墳群

以上が志太地域における横穴式石室の状況から見た入野西１号墳と入野東１号墳の位置付けである。この検討結果と入野東９号墳の調査成果をあわせると、入野古墳群は擬似両袖式や無袖式といったいわゆる在地系の横穴式石室を二次的な波及により採用する在地色の強い古墳群であることと、埋葬施設の形態や副葬品から７世紀前半～８世紀前半に形成される古墳群であることがいえる。入野古墳群がもつこの２点の特徴は、志太地域において７世紀以降に形成される古墳群としては一般的なものである。なお、入野古墳群においては石室規模の点から入野西１号墳が中心的な古墳であったと考えられる。

ところで、朝比奈川中流域には、入野古墳群以外にもいくつかの古墳群が存在する。このうち、薬師堂古墳、向沢古墳、栃沢古墳、仮宿堤ノ坪古墳、仮宿山崎古墳群は内容の一部が明らかとなっている。この中で注目に値するのは、向沢古墳である。向沢古墳は石室の全長が6.6m、石室の最大幅は1.7mである。遺物は、須恵器や鉄釘の他に鉄製環状鏡板付轡が出土し、有力な被葬者が窺える古墳である。

入野西１号墳の石室規模は向沢古墳を上回り、朝比奈川上流域には入野西１号墳を超える規模をもつ古墳は無い。入野古墳群は当該期の志太地域における典型的な古墳群の一つともいえ、被葬者集団の社会的背景等は他の古墳群造営集団と大きな差異はなかったものと推測されるが、入野西１号墳が７世紀における志太地域の石室の中でも有数の規模である点を勘案すると、入野西１号墳の被葬者は７世紀前半代の朝比奈川上流域における最も有力な人物であった可能性もある。少なくとも、入野古墳群は、朝比奈川上流域における有力な古墳群の一つであり、一定の勢力を有した集団であることはいえよう。

なお、入野東古墳群には近接して、７世紀代の須恵器窯である入野高岸古窯（次章参照）が存在する。時期や立地の点から両者には強い関連性が想定される。確証を得られる資料を提示することはできないが、入野古墳群の被葬者集団が須恵器の生産や流通に関わっていた可能性は考えてもよいであろう。志太地域では、７世紀前葉～中葉に埋葬行為が確認できる古墳は100基を超えるが、入野高岸古窯で生産されたと断定できる須恵器を出土している古墳名を記すことは困難である。この時期の古墳から最も多く出土するのは、湖西産の須恵器である。入野高岸古窯で生産された須恵器の流通範囲は明確にし難いが、出土例が非常に少ないことから、かなり限定された範囲のみの流通であった可能性もあるだろう。

入野古墳群の被葬者集団が須恵器窯の生産と流通に関わっていたならば、須恵器を生産する技術をもつという志太地域においては特異な集団であるが、地域全域に製品を供給できるような集団ではないと考えられる（註９）。

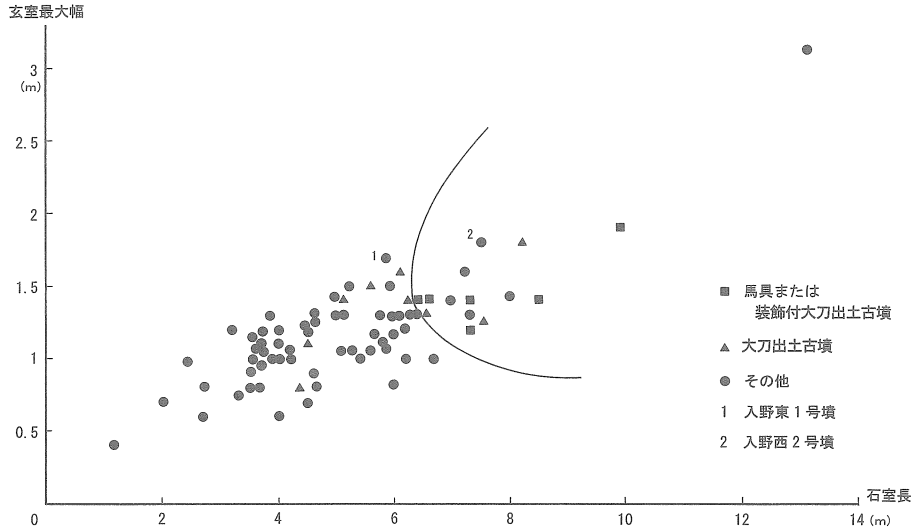


図24　擬似両袖式石室の石室規模

３．結　語

以上が、入野古墳群について今回の調査をとおして得られた知見である。冒頭にも述べたとおり、志太地域では多くの古墳が調査され研究が進展する中、入野古墳群と朝比奈川流域の古墳群については、資料的な制約もあり、これまで研究の俎上にあがることは稀であった。今回の調査では、１基の古墳を調査したのみであるが、入野古墳群を中心とした朝比奈川流域の古墳時代後期の様相を把握する手がかりとなる資料を得ることができた調査といえる。また、入野古墳群は、入野東９号墳のほかに、入野西１号墳や入野東１号墳が現存するが、この２基もこの地区の古墳時代を考える上では欠くことができない古墳である。

ところで、本章で報告した入野東９号墳の発掘調査の後、朝比奈川中流域では古墳時代の遺跡の調査が相次ぎ、大きな成果があげられている。中でも、次章以下に詳細を記す入野高岸古窯、古墳時代前～中期の古墳である仮宿沢渡古墳群、後期初頭の前方後円墳である高田観音前２号墳の発見・調査は、特筆すべきものである。これらの遺跡と同様の性格をもつものは、これまで朝比奈川流域では確認されていないものであった。特に入野高岸古窯と高田観音前２号墳は注目できる。両者とも当該期の須恵器窯、前方後円墳としては志太地域において初例となる発見・調査であった。上記以外にも朝比奈川流域では古墳時代前期の集落や古墳時代後期の群集墳も調査されている。これまで、志太地域では調査例が多い瀬戸川流域を中心として古墳時代像が描かれており、朝比奈川流域については等閑視されていた感がある。古墳時代前・中期や律令期の様相を踏まえると、瀬戸川流域が志太地域において中心的な役割を果たしていたことは否めない。しかし、古墳時代後期、朝比奈川流域においても一定の勢力を有した集団がいたことも窺えるようになった。

このように入野古墳群周辺では、ここで報じた入野東９号墳の調査を嚆矢として、新たな資料が蓄積された。今後、これらの成果を踏まえた上で、総合的な検討を行い、この地域の古墳時代像を復原する事が求められるであろう。今回の入野東９号墳の調査成果がこれに生かされることを期待したい。

註

1　本章では、石室平面形と側壁における立柱石の有無から、石室形態を両袖式、片袖式、擬似両袖式、無袖式に区分した。分類基準は三河古墳研究会2001に準拠する。なお、両袖式については、羨道幅/玄室幅×100＜90とし、羨道幅/玄室幅×100≧90を擬似両袖式として扱う。玄室平面形においては、奥壁幅/最大幅×100＜90であり、かつ側壁が弧を描くものを胴張形とし、いわゆる「奥搾り形」「船尾形」も胴張形の範疇に含めた。

なお、入野西１号墳は羨道幅と玄室幅にわずかではあるが差があるため、両袖式ととらえることも可能ではあるが、上記の分類基準から、擬似両袖式ととらえた。もっとも、入野西１号墳を両袖式としても、畿内系ではなく在地的な両袖式石室としてとらえられる形態である（本章でいう「在地」とは鈴木2000に準拠する）。また、瀬戸１号墳を典型例とする志太地域において盛行する在地的な両袖式石室の一群と、入野西１号墳では羨道長や天井構造が異なるため、系譜を異にするものと理解できる。

2　当地において、天井石が残存する石室の多くは玄室外には天井石が確認できない。本来的に存在しなかった可能性も高く、「羨道」は「前庭側壁」ととらえるべきものであるのかもしれない。しかし、現時点では確証を得るものではないため、本書では慣例に従い「羨道」として扱う。

3　石室の年代観等は、静岡県考古学会2003を参照した。現在、調査が実施され資料が公表されている中では、鵜田２号墳が初現例の一つとしてあげられるが、同時期に位置付けられる古墳がほかにも数基存在するようである。なお、鵜田２号墳とほぼ同時期に位置付けられる釣瓶落７号墳等数基は、竪穴式石室といわれているが、竪穴系横口式石室の可能性がある。また、片袖式の荘館山２号墳は羨道からTK43型式併行期の須恵器を出土し、築造年代がさかのぼる可能性も指摘されている（藤枝市教委・静岡大学2002）。そのため、志太地域における導入段階の横穴式石室には、無袖式以外の石室形態が存在した可能性もあり、これらの評価次第では、志太地域における横穴式石室の導入状況を見直す必要もあるだろう。

4　擬似両袖式石室の初現については、TK209型式併行期にさかのぼる例があることが指摘されている（八木・菅原2006）。

5　内瀬戸５号墳、萩ヶ谷Ａ−２号墳、萩ヶ谷Ａ−４号墳等があげられる。なお、本書における瀬戸古墳群の古墳名称については、八木・菅原2006に基づく。

6　玄門部の天井石が遺存する擬似両袖式石室としては、高草６号墳があげられる。入野西１号墳と合わせても２例のみであるが、瀬戸Ｂ−17号墳を除く擬似両袖式石室に眉石が存在したという積極的根拠も無いため、ここでは眉石が無いととらえた。少なくとも、高草７号墳や白砂ヶ谷Ｄ−４号墳等を見ると、立柱石が直接天井石に接することや、１石程度挟んで天井石を受けることはなかったようである。これは立柱石が直接天井石と接する瀬戸Ｂ−17号墳とは異なる点である。もっとも、限られた資料であるため、擬似両袖式石室における天井部の構造が多岐に渡っていた可能性も否定できない。地域内で派生した可能性もあるが、この是非を論証するには資料を欠く。

7　瀬戸古墳群においては、在地的な両袖式石室である内瀬戸３号墳に眉石が確認できることは注目できる。瀬戸Ｂ−17号墳は、これらとの関連性ももつ可能性も考えられる。また、擬似両袖式において、羨門構造が同一であっても、天井構造の異なるものが併存していた可能性もあるだろう。

8　鈴木2000・2003では、「有羨道の三河系石室」の要素として、胴張の指向が強い平面形の玄室、玄門や羨門に突出傾向がある立柱石を用いる点などをあげている。玄室平面形が長方形になるものもあるが、志太地域における擬似両袖式石室はその特徴から、この系譜上にあると考えられる。

9　入野古墳群の被葬者と入野高岸古窯の須恵器生産者との関連については、このほかに生産者ではあるが流通には関わっていなかった場合、直接的な生産を行わないが支配下に須恵器制作工人がいた場合等が考えられる。いずれの場合であっても、入野高岸古窯の須恵器生産を掌握し流通を担っていた人物や集団は志太平野における須恵器の主たる流通網に入野高岸古窯の須恵器を組み込ませることはなかった、あるいはできなかったと考えられる。

第３章　入野高岸古窯

第二東名№78地点

第１節　位置と環境

１．地理的環境

入野高岸古窯は岡部町の西南部、志太郡岡部町入野字高岸に所在する。岡部町入野は志太平野の最奥部に位置し、藤枝市との市町境にほぼ接している。町の中央を流れる朝比奈川は本窯跡群の付近で大きく蛇行し、平野部に至る。この周辺は小丘陵と谷が入り組んだ地形を成している。本遺跡が立地するのもそういった小丘陵の一つで、谷に面した西側の急斜面中腹付近に２基並んで検出された。標高は前庭部でおよそ34.5m、平野部からの比高差は約12mの位置にあり、等高線に対してほぼ直交する。斜面からは南に独立丘陵の潮山を望むため、やや視界が遮られるものの、その先に志太平野と駿河湾が広がる。「高岸」「潮」の名が示すように、中世までこの付近一帯は大井川や瀬戸川の氾濫原および湿地が占めていた。なお、同一斜面の東側では周知の横穴式石室１基と、同じく本調査が行われた入野東９号墳が存在する。

２．歴史的環境

入野高岸古窯の位置する丘陵上には入野東古墳群が、また谷を挟んで西側の丘陵には入野西古墳群が確認されている。周辺には古墳群がいくつか存在するが、古墳群の概観については第２章の入野東９号墳の項で詳しく記載されているため、ここでは割愛する。大井川下流域は過去の発掘調査によっても古墳時代から土器生産が展開されていたことが明らかになっている。したがって大井川右岸まで範囲を広げ、土器焼成窯跡の分布から当地域の窯業について概観したい。

岡部町では現在までに窯業遺跡の発見例はなく、本遺跡が初の調査例である。古墳時代後期の須恵器焼成窯としては、同じく第二東名関連調査で衣原古窯（２）が見つかっている。志太地域全体では衣原古窯より古い時期の窯業遺跡は確認されていない。大井川の右岸には、６世紀末から７世紀初頭の須恵器窯である向山３号窯（12）がある。向山３号窯は窯体構造および須恵器の特徴から猿投古窯群の系譜に連なると考えられている（島田市教育委員会1997）。

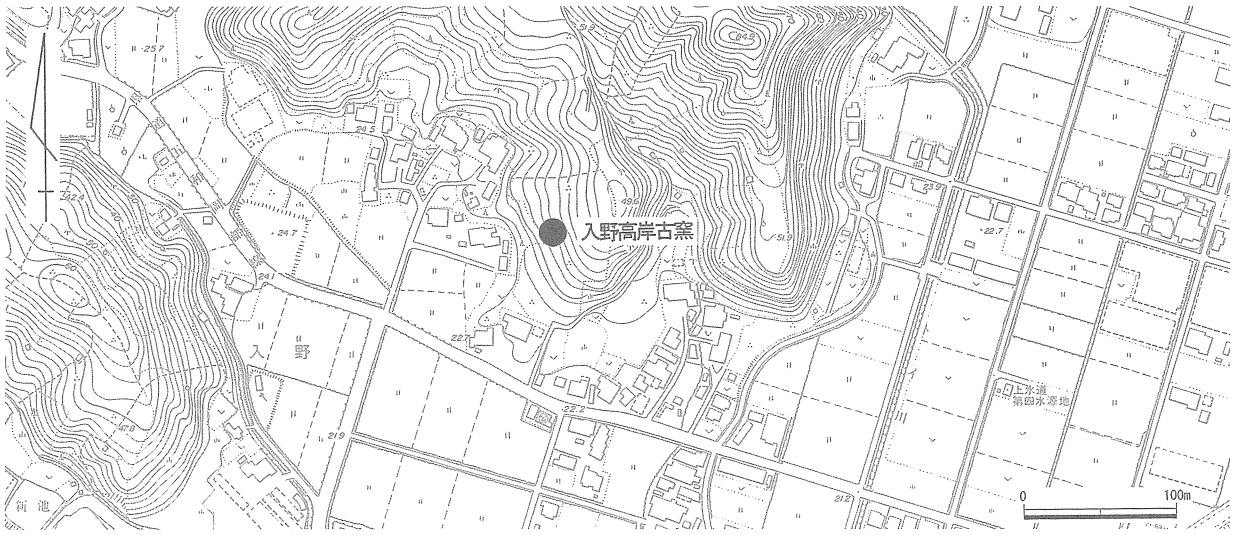


図25　入野高岸古窯位置図（1/5,000）

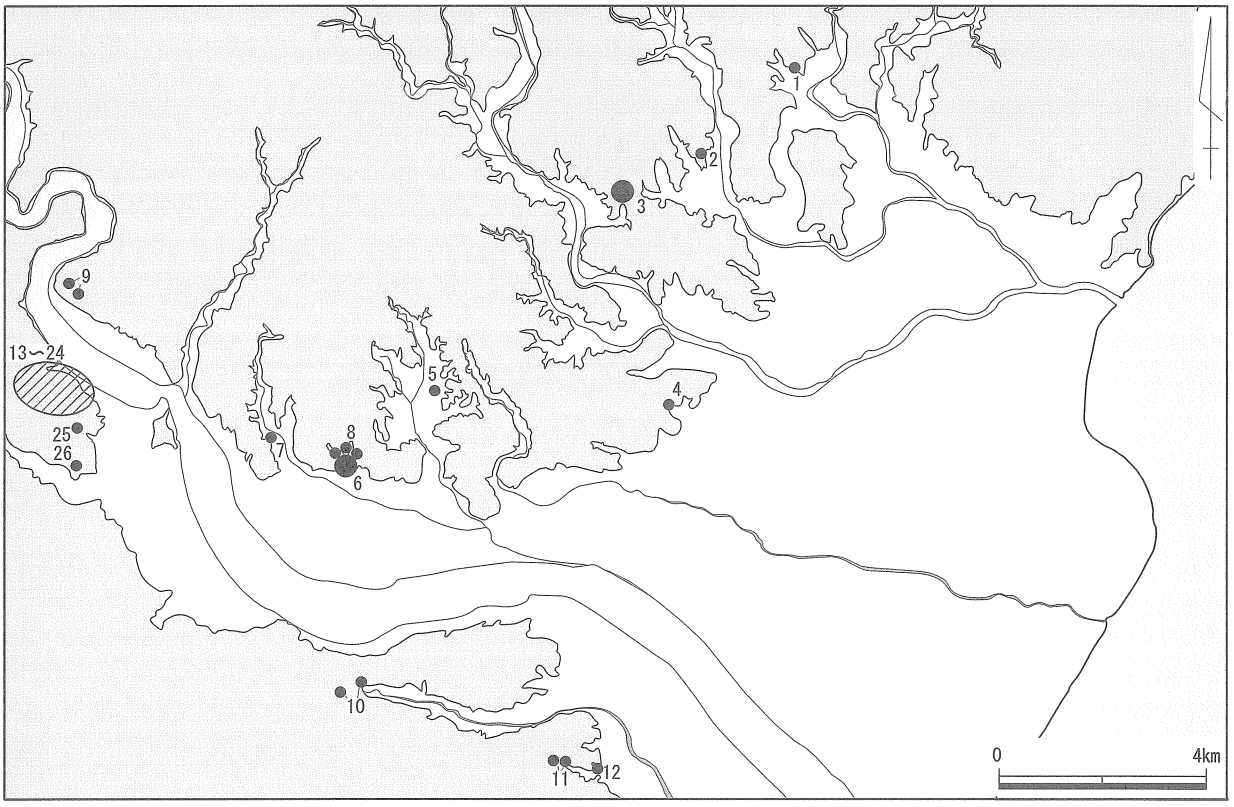


図26　志太地域とその周辺の窯跡分布図（1/150,000）

表12　志太地域とその周辺の窯跡

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	入野高岸古窯	古墳	10	丸山古窯群	奈良～鎌倉	19	中古窯	江戸～明治
2	衣原古窯	古墳	11	舟木古窯群	奈良・平安・鎌倉	20	内藤古窯	江戸
3	助宗古窯群	奈良～平安末	12	向山３号窯	古墳	21	南古窯	江戸
4	滝ヶ谷古窯	奈良	13	きつね沢古窯	平安末～鎌倉	22	釜谷西古窯	平安後期
5	菅ヶ谷古窯群	鎌倉	14	ほろん沢古窯	平安末～鎌倉	23	川根沢古窯	室町
6	旗指古窯群	平安～鎌倉	15	土山原古窯	江戸	24	三ツ沢古窯	室町
7	中村地蔵前古窯	平安・鎌倉	16	すやん沢古窯	平安末～鎌倉	25	城ノ段Ａ・Ｂ古窯	平安末～鎌倉
8	瀞居寺前A・C・D地点	鎌倉？	17	北古窯	江戸	26	上志戸呂古窯	安土桃山
9	神座古窯群	平安末～近世	18	新兵衛古窯	江戸			

律令期になると助宗古窯群（３）で須恵器の生産が開始される。志太郡衙に比定される御子ヶ谷遺跡では、助宗窯の開窯後、その出土須恵器がほぼ助宗産で占められることから、郡衙との関連が指摘されている。10世紀後半以降は灰釉陶器・山茶椀の生産も行われた。また、旗指古窯群（６）がこの時期に成立し、13世紀代まで営窯した大規模な窯跡群であったことが確認されている。11世紀後半には、向山３号窯以降の窯業遺跡が確認されていない大井川右岸においても操業が開始される。横岡地区では灰釉陶器焼成窯である釜谷西古窯（22）を初現として、山茶椀を生産したすやん沢古窯（16）・きつね沢古窯（13）などが分布する。志太地域でも旗指古窯群をはじめ、中村地蔵前古窯（７）・菅ヶ谷古窯群（５）などが所在するが、瀬戸川以東では確認されていない。山茶椀以後、窯業はいったん途絶えるが、15世紀後半に三ツ沢古窯（24）で瀬戸・美濃系陶器の系統を引く施釉陶器の生産が開始される。16世紀後半以降盛んに生産された「志戸呂焼」との継続性は確認されていないものの前史的存在と位置付けられている。１世紀ほど間隔をおいた後、上志戸呂古窯（26）で志戸呂焼の本格的な生産が始まる。また、未報告資料ではあるが、岡部町本郷付近の表面採集資料として、窯壁や熔着した須恵器片が発見されており、窯の存在した可能性が考えられる。

第２節　調査の方法と経過

１．調査の方法

入野高岸古窯の本調査は「№78地点本調査Ⅱ期」として平成13年８月１日～平成14年１月24日に実施した。本調査対象面積は750㎡、調査対象範囲は図９のとおりである。

現地調査は、現地に作業棟を設置した上で実施した。確認調査時では窯跡が１基存在することが判明したのみで、窯跡の基数や関連遺構の広がる範囲は全くつかめていなかった。そのため、地形を観察し、緩やかに窪んだ谷状の地形をめぐる傾斜部を本調査範囲として設定した。調査前は茶畑としての土地利用がなされていて、確認調査の段階から、かなり深い部分まで耕作が及んでいることが明らかであった。撹乱を受けている茶畑の耕作土を重機で除去、耕作の及んでいない部分より下位については人力で遺構・灰原の広がりを検出した。後述するが窯体は地下式であったため（調査着手時にはその認識はない)、プラン検出は困難であった。窯体の陥没痕を手がかりに数十cm地山を削り込み、赤化した被熱痕跡を追いながらプラン検出に努めた。灰原については、耕作が深くまで及んでいたことと、地形が急傾斜であったことから、灰原の遺存状況は極めて悪かった。重機で耕作土除去後、１号窯主軸を基準とした方向でグリッドを設定、当初は土層帯を残し堆積状況を把握しながらの灰原調査に努めたが、遺存状態が予想以上に悪いことがわかり、垂直方向の遺物分布および層序の把握は困難であると判断し、グリッド単位の遺物の平面分布の記録に留めた。

測量にあたっては、重機掘削終了後、日本測地系平面直角座標第Ⅷ系に基づき調査区内に基準点を設置した。この基準点を基に、１号窯の主軸にあわせた２ｍ四方のグリッドを調査区の南西半部に設定した。窯跡出土遺物の記録と取り上げは、このグリッドに基づいて実施した。遺構実測の作成は基準点を基にトータルステーションを用いて行い、完掘状況の地形は空中写真撮影により図化を行った。また、２基の窯跡と周辺の地形については、レーザー計測により３次元データとして記録した。なお、遺構と遺物出土状況は1/10を基本として図化し、地形測量図と全体図は1/100を基本として作成した。

現地における写真撮影は35㎜判モノクロフィルム・カラーネガフィルム・カラーポジフィルム、並びに６×７判と４×５判のモノクロフィルム・カラーポジフィルムを使用した。また、ラジコンヘリを使用して空中写真撮影も実施した。空中写真は６×4.5判モノクロフィルム・カラーポジフィルムを使用した。なお、実測と空中写真撮影は中日本航空株式会社、レーザー計測は国際航業株式会社に委託し、現地における４×５判を使用した写真撮影の一部は、奈良国立文化財研究所の中村一郎氏に依頼した。

資料整理作業と報告書作成作業は藤枝地区事務所にて実施した。ただし、基礎的な整理作業は現地調査と併行して、現地事務所にて実施した。資料整理作業は、遺物から着手し、接合と復原の作業を実施した後、実測を行った。実測図を基に版組を行い、トレース作業を実施した。遺構に関しては、現地で作成した図面に基づき版組を行い、トレースを実施した。これらの作業と併行して、報告書の編集と観察表の作成を実施した。遺物撮影は、当研究所写真室にて、６×７判のカラーリバーサルフィルム・モノクロフィルム、４×５判のカラーリバーサルフィルムを使用して実施した。遺物と記録類の収納作業は、上記の作業が全て終了した段階で実施した。

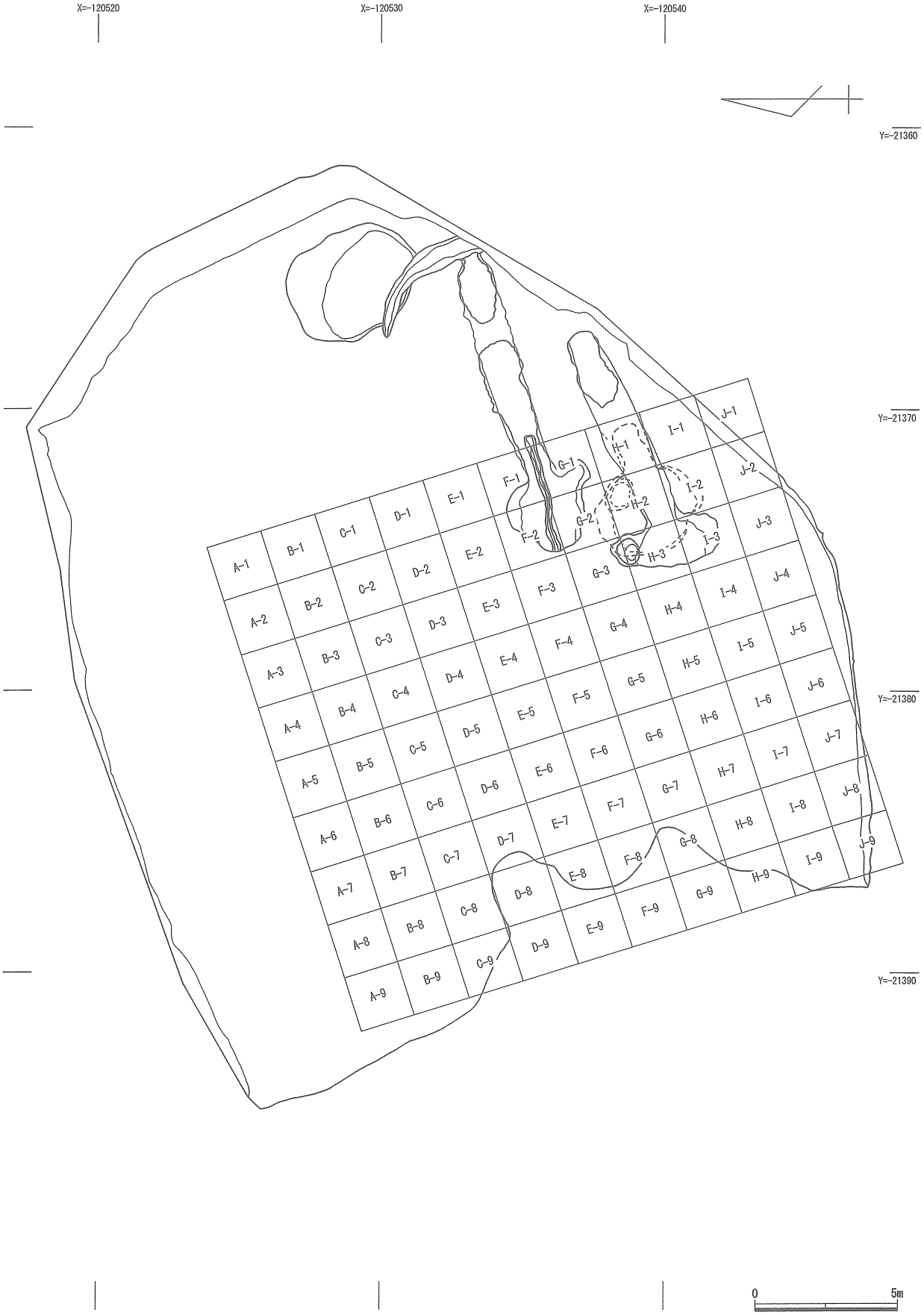


図27　入野高岸古窯グリッド配置図（1/200）

２．調査の経過

入野高岸古窯は平成13年４月16日～７月31日に実施した確認調査の結果に基づき、平成13年８月１日から平成14年１月24日まで本調査を実施した。

調査は、調査範囲の確認を行った上で、重機による表土除去作業に着手した。また、重機掘削作業と併せ、現地における作業員棟の設置と調査資機材の搬入作業も実施した。なお、表土除去作業は、確認調査により遺存が明らかとなっていた１号窯とその周辺については、遺構保護のため人力で表土除去を行った。人力による表土除去作業は８月２日から開始した。

表土除去が終了した範囲は、８月６日から包含層の掘削と、遺構検出作業に着手した。また、１号窯の遺構調査も同日から開始した。１号窯は窯体の調査から着手し、９月３日からは灰原の調査も開始した。９月26日には、新たに２号窯を検出し、調査に取りかかった。なお、実測と写真撮影は、掘削作業と併行して随時、作業を行った。

２号窯の調査は、１号窯との関係を把握する目的で、灰原から着手し、次いで窯体の調査も開始した。１号窯と２号窯の調査と併行して、９月17日からは窯跡以外の遺構に関わる調査も行っている。窯跡以外の遺構、並びに１号窯と２号窯の灰原の調査は10月12日には終了した。そのため、10月15日からは、１号窯と２号窯の窯体内の調査に重点を置いた。なお、10月14日と11月17日には現地説明会を開催した。

１号窯・２号窯の全貌が明らかとなった時点で、各窯跡の写真撮影と全体の写真撮影を実施し、ラジコンヘリを用いた景観撮影、地形測量等を実施した。写真撮影終了後、12月５日からは、１号窯・２号窯の構造調査を開始した。１月19日には、遺物の取り上げや実測作業を全て終了し、撤収作業に取りかかった。撤収作業は１月24日に完了し、現地調査を終了した。なお、現地調査と併行して基礎的な整理作業の一部を実施している。

資料整理は平成16年度から基礎整理作業を開始し、平成17年度からは報告書作成作業にも取りかかった。資料整理作業と報告書作成作業は平成18年度も継続して実施し、平成19年３月、本書の刊行をもって、入野高岸古窯の調査を完了した。

表13　入野高岸古窯本調査工程表

	８　月			９　月			10　月			11　月			12　月			１　月		
準備・撤収工	—																	—
表土除去	—																	
遺構検出	—	—																
１号窯	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
２号窯						—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
その他の遺構						—	—	—										

第３節　調査の成果

１．概　要

(1)　立地と基本層序

入野高岸古窯は、丘陵西側の急峻な斜面中腹に所在する遺跡である。調査対象地の標高は、約30～40ｍであり、眼下には朝比奈川とその支流が形成した狭隘な平野が広がる。遺跡と平地部の比高差は約12ｍである。調査以前は茶畑が広がっていた。

次に、基本層序について記す（図28）。調査範囲における表土は、茶畑の耕作土であった。この層は30～50㎝程度の厚さである。表土の直下は黄褐色粘土層となっていた。黄褐色粘土層は10～50㎝程度であるが、斜面上方に比べ下方が厚い。この層は遺物包含層であり、古墳時代後期以降に堆積した層と考えられる。黄褐色粘土層を取り除くと地山があらわれる。地山も黄褐色の粘土層であるが、遺物包含層と異なり、数㎝～数十㎝の礫が地山には多く混ざる。なお、表土の直下が地山となっている箇所も調査範囲内には一部見られた。遺構検出面となるのは、地山である礫混じりの黄褐色粘土層である。

(2)　遺構と遺物

入野高岸古窯の本調査では、並列する２基の須恵器窯、１基の竪穴状遺構、２基の土坑、１条の溝を検出した。遺物は、窯跡とその周辺から須恵器が出土し、土坑からは山茶椀やかわらけが出土している。

２基の須恵器窯のうち、北側のものが１号窯、南側のものが２号窯である。焚口付近の標高は約35ｍである。両者とも地山を掘り込み、粘土で壁面と天井を構築した半地下式の須恵器窯である。天井が遺存した部分もある。床面は焚口から煙道に至るまで傾斜し、途中に平坦面や段等はもたない。１号窯、２号窯ともに床面や壁面に４回におよぶ修復の痕跡が見られ、５面の床面を検出することができた。２号窯は２回目の修復時に焚口の位置を大きく移動し、前庭部を作り変えていた状況を明らかとすることができた。なお、１号窯の排煙口からは50㎝程度の深さをもつ溝がのびていた。その他の遺構については、２基の土坑が中世、溝状遺構は窯構築以前に位置付けられるが、竪穴状遺構については時期を特定することはできなかった。

２基の窯跡の窯体と灰原からは、須恵器が出土している。出土した須恵器の器種は坏身・坏蓋のほか、高坏、瑤、長頸壷、甕、陶臼である。須恵器は７世紀前半代に位置付けることができ、１号窯・２号窯ともこの時期の操業ととらえられる。ただし、須恵器の形態からは、１号窯よりも、２号窯が後出するものと考えられる。

このほかの遺物としては、土坑から山茶椀とかわらけが出土している。山茶椀は東遠江で生産されたものと考えられるが、細片であるうえに表面の風化が著しく、詳細は不明である。

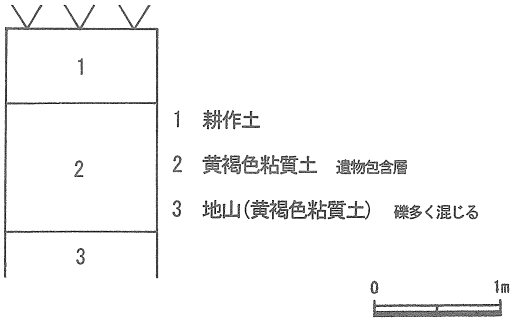


図28　基本層序（1/60）

2．遺　構

(1)　入野高岸１号窯（図30～35）

１号窯は、地下掘り抜き式の窖窯である。30°前後の傾斜をもつ丘陵斜面部の粘性の強い非常に締まった黄褐色土を掘り抜いて構築されていた。窯体の主軸方向はN-65°-Eである。遺存状態は非常に良く、検出時には天井の一部が崩落を免れ原形を保っていた。窯の平面形は、焼成部の幅がほとんど張らないずん胴型である。焚口と窯尻付近でそれぞれ幅を減じ、絞り込まれた形態となっている。排煙口は煙道施設がなく奥壁を有する上部開口型であり、そこに斜面下方から弧状に伸びる溝が横位に連結するように掘削されている。その他付随施設として、燃焼部から前庭部にかけて、窯体の主軸に沿う方向

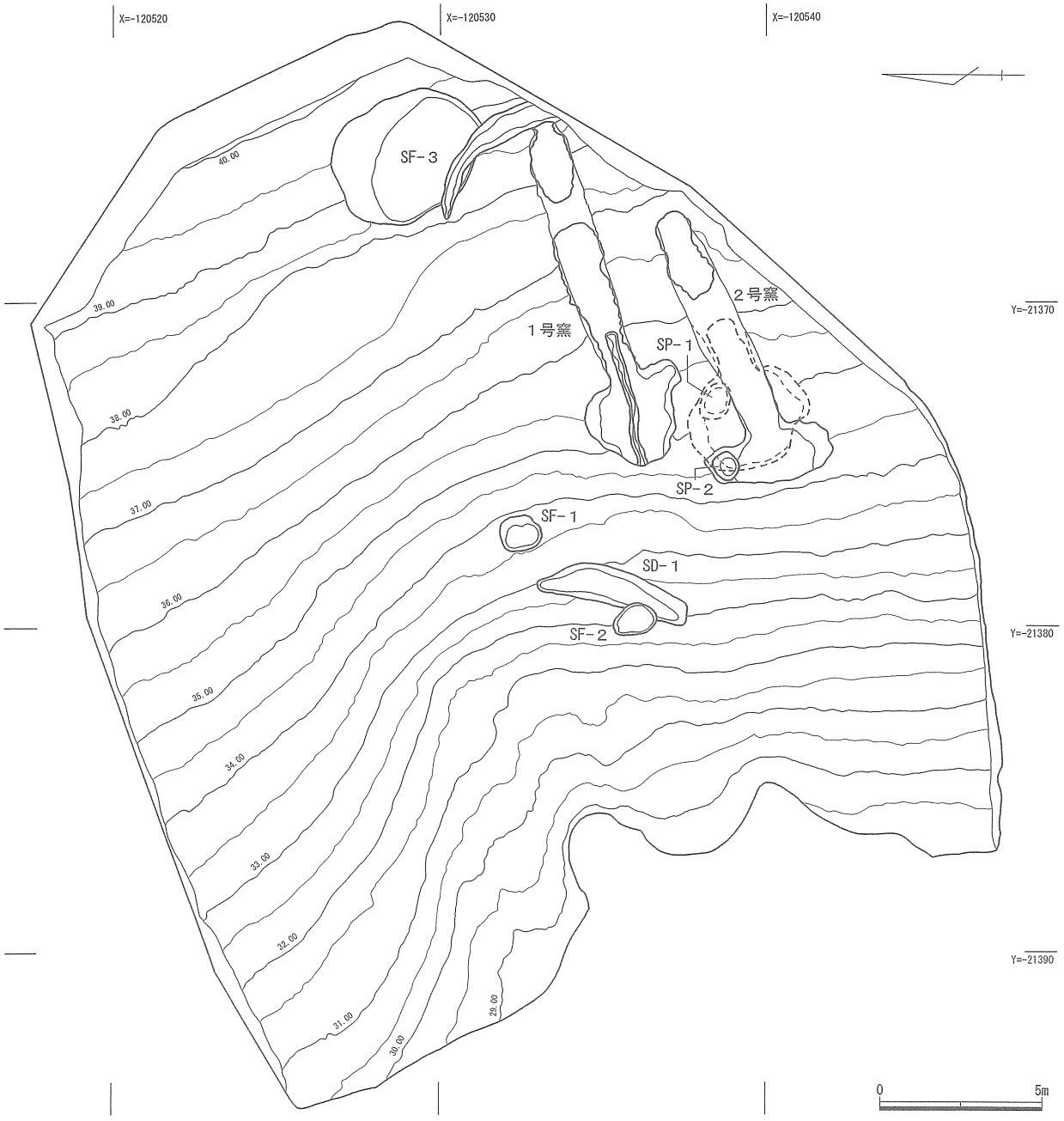


図29　入野高岸古窯全体図（1/200）

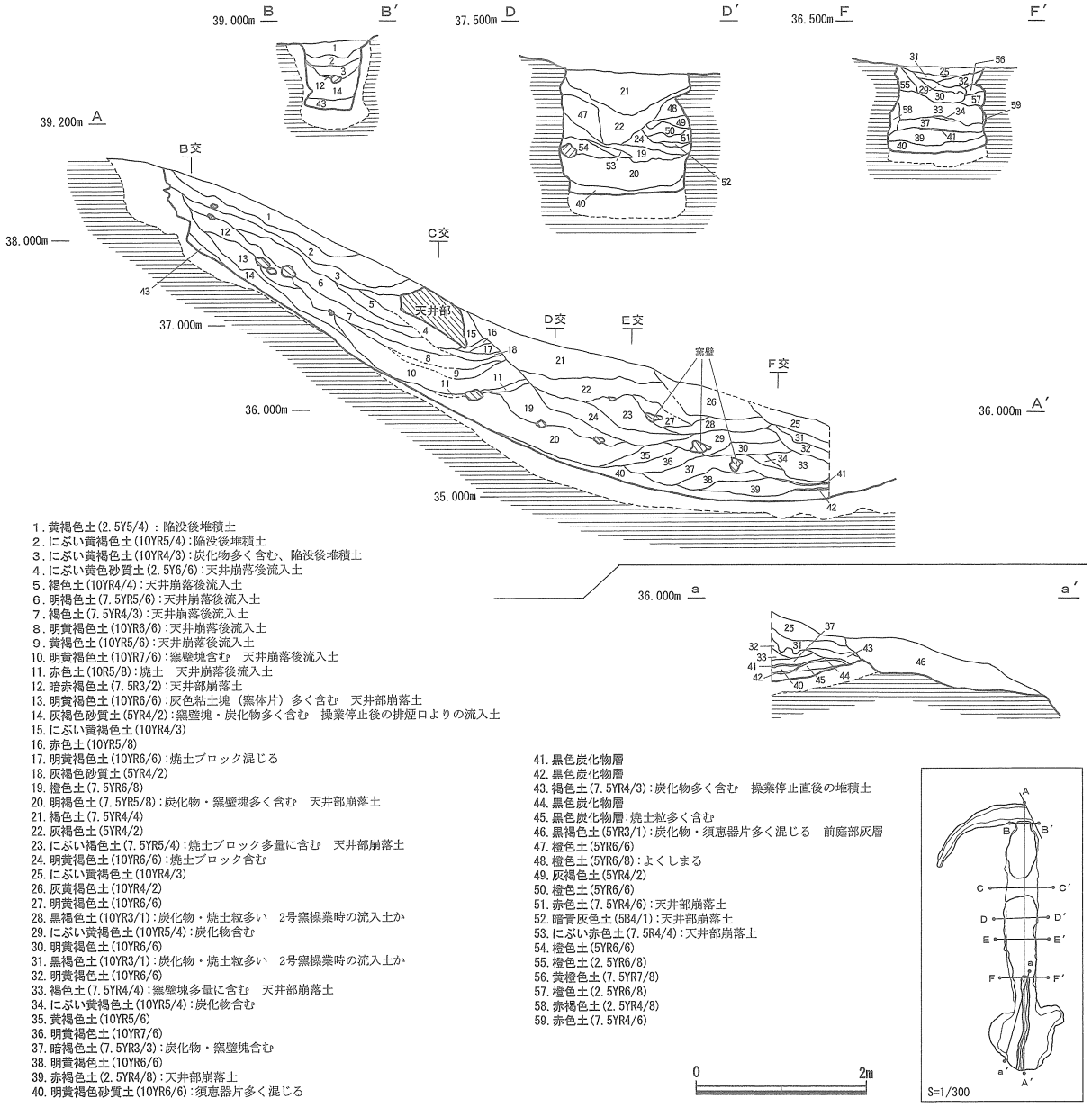


図30　1号窯埋土の状況（1/80）

に排水溝としての機能を持つ幅の狭い溝が掘られている。1号窯の最終床時の規模は、窯跡全長が水平長8.8m、窯体全長が水平長8.5m、実長9.0mを測る。それぞれの部位ごとの形態や構造、規模について詳細を以下に記す。

窯尻・窯背部施設（排煙口・奥壁・付属溝）

窯尻部分に奥壁をもち、上方の排煙口となる開口部に向けて立ち上がる構造となっている。奥壁は、開窯時（Ⅰ次床）には、わずか0.3mほどの段差状のものである。その背後には横方向に連結する溝が掘り込まれている。この溝は窯体の左側に回り込むように弧状を呈しながら斜面下方に向かって伸びている。溝の総延長は約5m、溝の深さは最も深いところで検出面より0.5m、幅は排煙口付近で最も広く0.8mを測る。断面の形状はU字状である。窯の主軸方向の断面を観察すると、溝は奥壁部分の修復に伴って床面が嵩上げされ、しだいに浅いものとなり、当初の溝の形態と機能を失ったことがわかる。同時に奥壁は、その立ち上がりが床面から排煙口までの比高差を増し、初期のわずかな段差状のものから、

最終段階では明確な壁面へと変化して、その時点では完全に溝は埋め戻されている。奥壁部分は還元色となり焼け締まっているが、上位ほど少し赤みのあるくすんだ酸化色となっている。溝の掘形底面には赤化した被熱痕跡と炭化物が見られ、窯内部から排出された高温のガスもしくは炎がこの溝部分に当たっていたことを物語る。溝の付属する窯の類例や機能については後述するが、被熱の状況からいわゆる「排煙調整溝」(望月1999)と考えられる遺構である。

焼成部

焼成部は、水平長4.4m、実長5.6m、最大幅1.5m、奥壁幅0.7mである。床面には段などの特別な構造は見られず、部位ごとにその傾斜を変化させながら掘削されている。焚口から燃焼部に向かってやや下り、そこから窯奥に向かってしだいに傾斜を増していく。焼成部床面の最大傾斜角は32°、最小傾斜角は17°である。窯の構築は地山をトンネル状に掘り抜き、その壁をそのまま窯壁としたものであるが、焼成部中央付近から手前の焚口付近に至る壁面部分と床面には、修復の痕跡が見られる。床は５枚の床面が観察され、少なくとも４回の修復が行われたことを示す。修復には砂質土を敷き込んで床を徐々に嵩上げし、製品の熔着を防いでいたものと思われる。壁面の修復は、スサを混

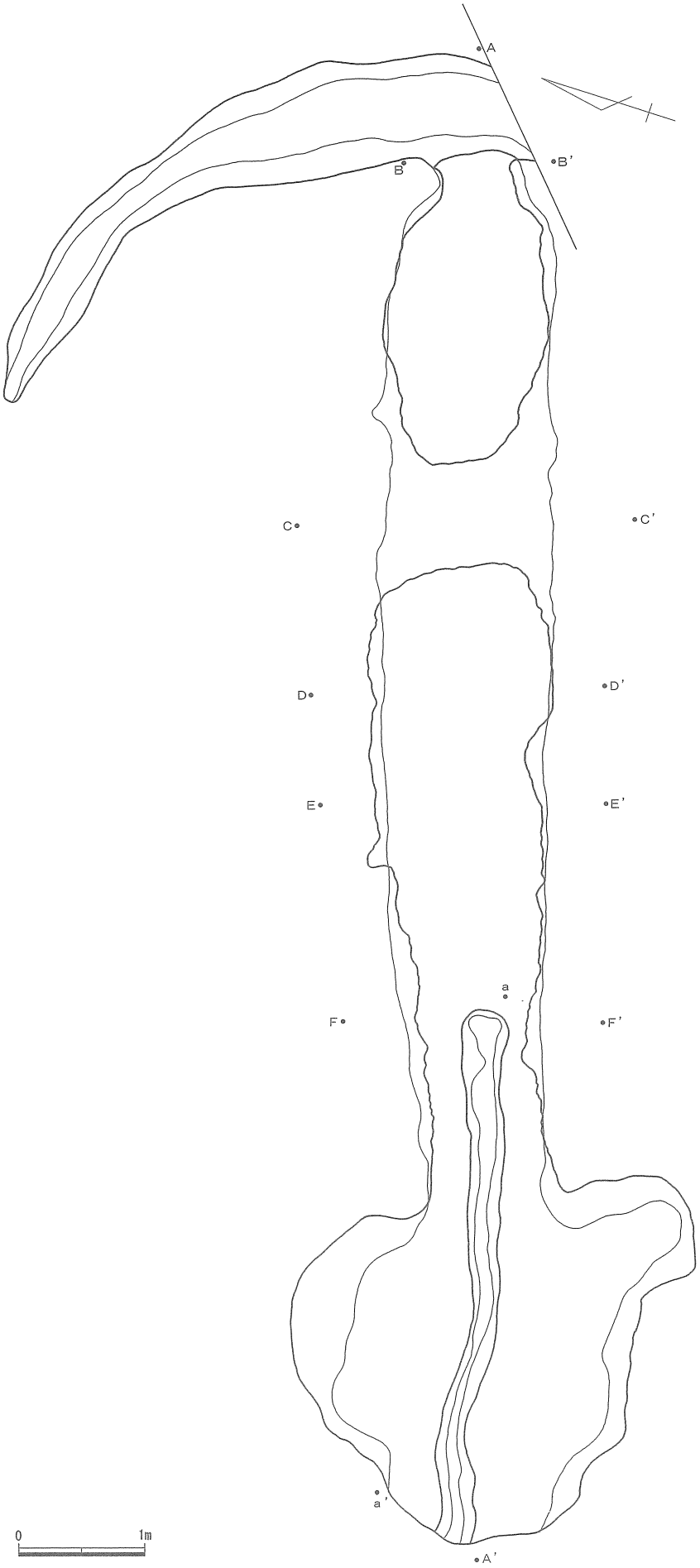


図31　１号窯窯体平面図（1/50）

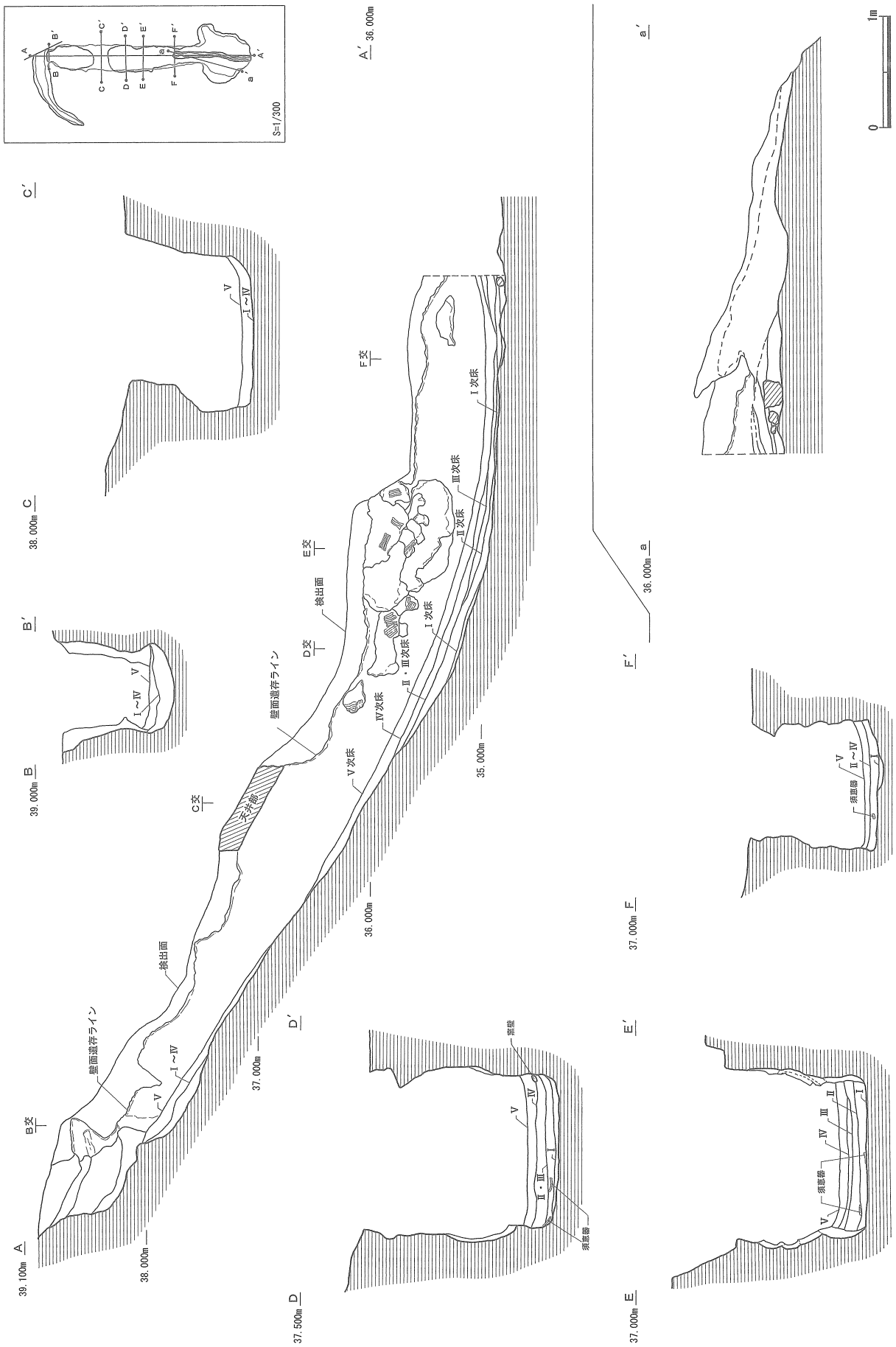


図32　1号窯窯体断面図（1/50）

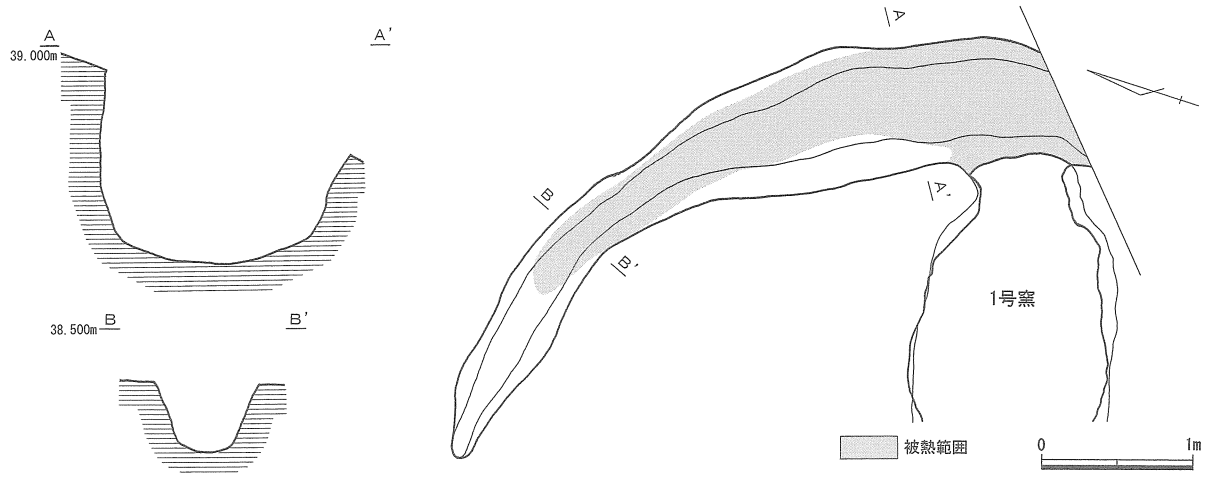


図33　１号窯排煙調整溝実測図（1/50）

ぜ込んだ粘土を掌で撫でつける方法で行っており、撫でつけた際の指の痕跡が明瞭に残る。天井部のほとんどが崩落しているため、天井修復の範囲や状況は不明である。床面は操業停止直後間もなく天井部の崩壊があったものと見られ、被熱した窯体が床面直上に接するように埋積していた。

最終床面からは、製品の破片とともに、平坦な面をもつ自然礫（川原石）が出土している。これらは元位置を移動しているものがほとんどであるが、窯詰め時に製品を据えるために用いられた置台であったと考えられる。またこの自然礫は、前庭部や灰原からいくつか出土しているだけでなく、焼成部上位の窯尻に近い斜面部からも多く出土していることから、床面の傾斜の強い箇所での製品の水平を保つ目的で埋置されていたものと予想される。

窯体内部の被熱の状況は、床面は砂質土であるため硬化せず、くすんだ黒灰褐色の還元色を示す。床面には多くの炭化物の分布も見られる。また壁面および遺存する天井部内側は強く還元され、暗青灰色を呈している。あとから粘土による修復を行っている箇所については、特に粘土が堅緻に硬化しており、表面が熱により発泡し、ガラス状となっている部分も見られた。

窯体の断面形は天井部が遺存する部分や、床面から壁面への立ち上がりの形状が示すように蒲鉾型を呈する。天井部高の各部位での変化は崩落のため記述することはできないが、断面Ｄ－Ｄ′の壁面の立ち上がりの形状から判断して、焼成部から燃焼部・焚口に近づくにつれ、幅だけでなく、天井部高を減じ、窯体の空間を絞り込む形状となっていたことが推定できる。

燃焼部・焚口

平面形から焼成部と燃焼部とを明確に区画することは不可能であるが、焼成部から下る床面傾斜がフラットとなり、やや凹んだ形状となっている部分が、燃焼部であると判断される。また床面には、窯体の主軸に沿う方向に、幅0.2m、深さ0.1m前後の細長い排水溝が掘削され、前庭部端部にまで至る。溝のうち焚口から燃焼部の部分は、溝が埋まっても排水機能が失われないように、溝内に礫と須恵器破片が意図的に充填され、暗渠状となっていた。窯体を維持するため、窯体内部に外部から入り込む雨水、地下水を窯の外に排するため付属された施設である。焚口は床底面で幅が1.3mを有し、断面形が蒲鉾状を呈するものである。

前庭部

焚口の前面に取り付く施設で、平坦な底面を有する土坑状を呈する。焚口の左右に壁を造り出すように掘削されており、平面形も焚口の左右のスペース（幅約３ｍ）を広く確保している。斜面下位側に向かい窄まる形状である。埋土には多量の須恵器片が伴い、0.4m前後の厚みの灰層が形成されていた。

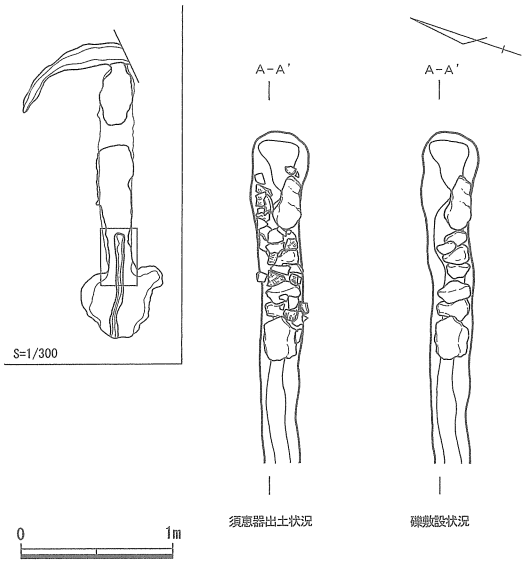


図34　１号窯排水溝平面図（1/50）

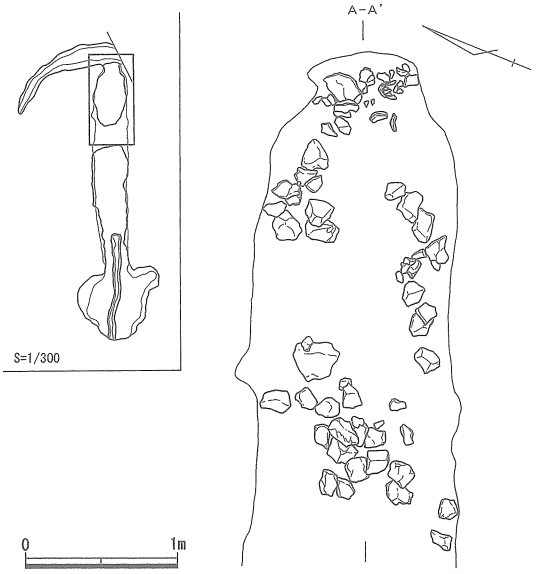


図35　１号窯焼成部平面図（1/50）

埋土

燃焼部から前庭部にかけては、操業時の床面ごとに灰層が形成されている。最終床面の一枚上層に被熱していない明黄褐色の流入土の堆積が薄く確認されているが、その上に天井および壁面の崩壊に伴う窯壁塊、窯体片がブロック状に見られる。埋土断面の観察から、焚口に近い燃焼部から天井の崩落が始まり、徐々に斜面上位の方向に天井部の崩壊が起きていることがわかる。いずれも操業停止後間もない崩落であったと思われる。

なお、１号窯の窯体が完全に埋没する前の堆積に薄い炭化物を多く含む層が１層見られるが（図30土層中３)、これは２号窯操業時に生じた炭化物が流入したものとも推定される。１号窯と２号窯の遺構の切り合いは無く、遺構からの操業の先後関係は明確にはできないが、この炭化物層の存在から、１号窯が２号窯に先行し、なおかつ、１号窯の操業が完全に停止し、完全に埋没する直前に２号窯が開窯された可能性も示している。

灰原

灰原は前庭部から斜面下方に向かい15m程度の範囲で確認されている。灰原は斜面下方に向け幅を広げ、広がりの最大幅は約15mである。灰原の堆積自体は後世の土地利用が茶畑であったために深くまで耕作が及び、遺存する層の厚みは0.3m前後であった。なお、１号窯の灰原は２号窯の灰原と重複しており、また斜面が急傾斜であるために斜面上位からの再堆積もあって、層位を区別し、図示することも困難であった。１号窯と２号窯の灰原に明確な間層が見られないことは、１号窯と２号窯の操業時期が近かったとも考えられる。

遺物出土状況

遺物は焼成部、燃焼部、前庭部、灰原から、この窯で焼成されたと考えられる須恵器片が出土している。ただし床面に伴う遺物は非常に少ない。燃焼部の床面の各層に伴う遺物を区別して取り上げてはみたが、床面の傾斜の緩い部分に集積している遺物は斜面上位から移動したものが多いと考えられ、窯詰めの方法を推定させるような出土状況の遺物は無かった。また、遺物のなかには、二次的に熱を受けたのか、表面が細かく剥離したり白色に発色したりしているような甕の破片が多く、これらは置台として使用されていたとも考えられる。なお、１号窯から出土した須恵器の器種には、坏身・坏蓋のほか、無蓋・有蓋高坏、短頸壷、壷蓋、陶臼、甑、甕がある。甕片を除き、最も多くの個体数が確認できたのは坏身・坏蓋である。出土遺物の詳細については後述する。

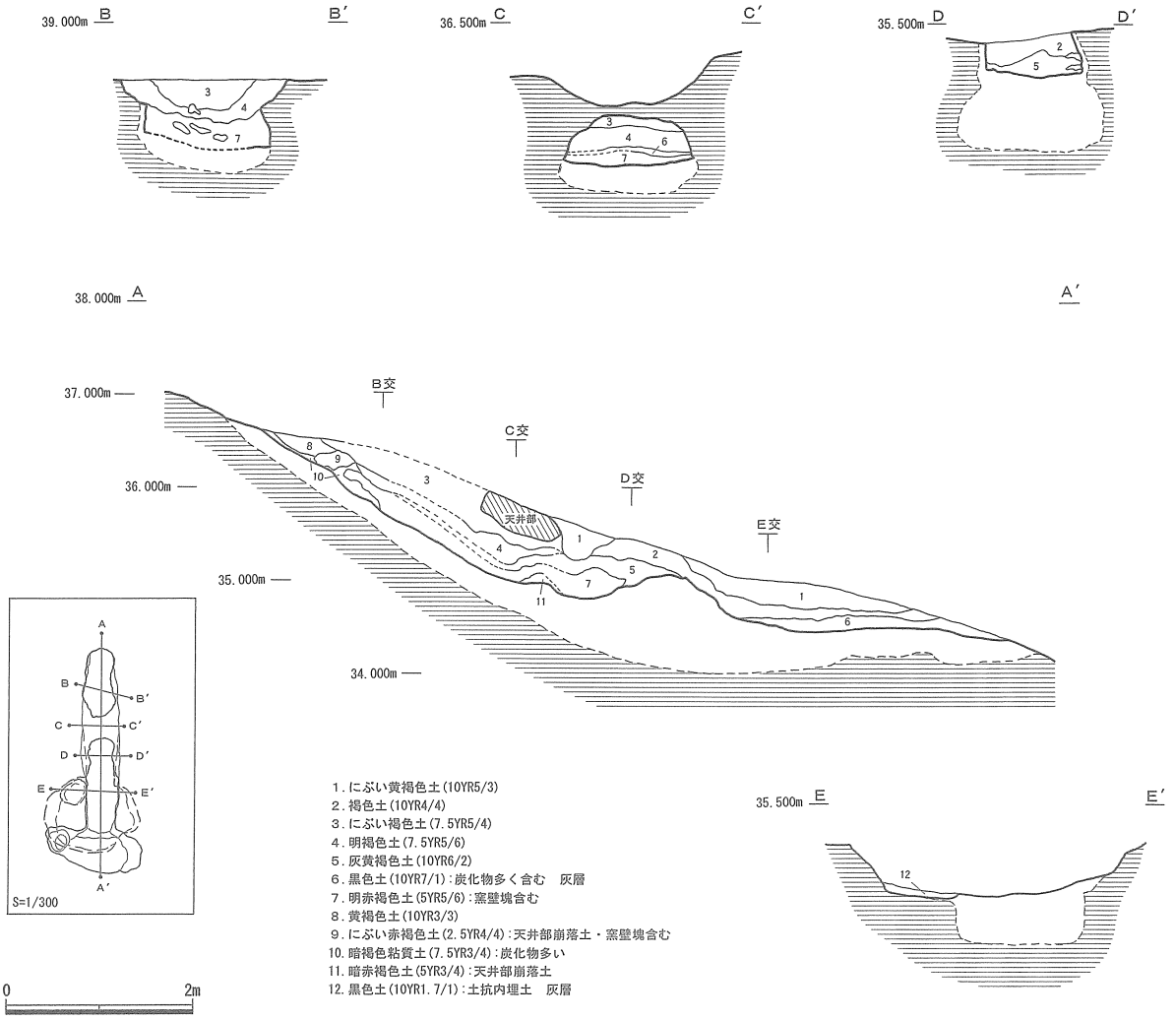


図36　２号窯埋土の状況（1/80）

(2)　入野高岸２号窯（図36～39）

２号窯は１号窯の南側に隣接して検出された。排煙口付近は削平されていたが、その他の遺存状況は良好で、窯体中央部ではこちらも天井が遺存していた。主軸方位はN-56°-Eである。

２号窯も１号窯同様、地山を掘り抜いて構築された地下掘り抜き式の窖窯である。平面形が、胴部がわずかに張るずん胴型であることや窯の各部位の形態や規模は、１号窯と類似している。削平のため排煙口の形状、奥壁の状態、また１号窯のような窯尻に取り付く溝が存在していたかどうかについては全くわからない。また、２号窯も床面と壁面に修復の痕跡があり、５面の焼成床面が確認できた。このうち、２回目の焼成後に行われた修復では、燃焼部付近の床面を嵩上げし、焚口の位置を大きく奥側に移動するという大きな改変を行っていた。以下、この修復以前のものを「改修前」、以後のものを「改修後」と呼ぶ。規模を見ると、改修前が残存長7.3m、窯体長は水平長7.1m、実長7.4mであった。一方改修後の残存長は5.5m、窯体長は水平長が5.2m、実長が5.4mである。

焼成部

焼成部については改修前と改修後にわけて述べる。まず、改修前の焼成部の状況について記す。改修前の焼成部は水平長3.8m、実長4.4m、最大幅1.5mである。焼成部との境界付近の幅は1.5mであり、

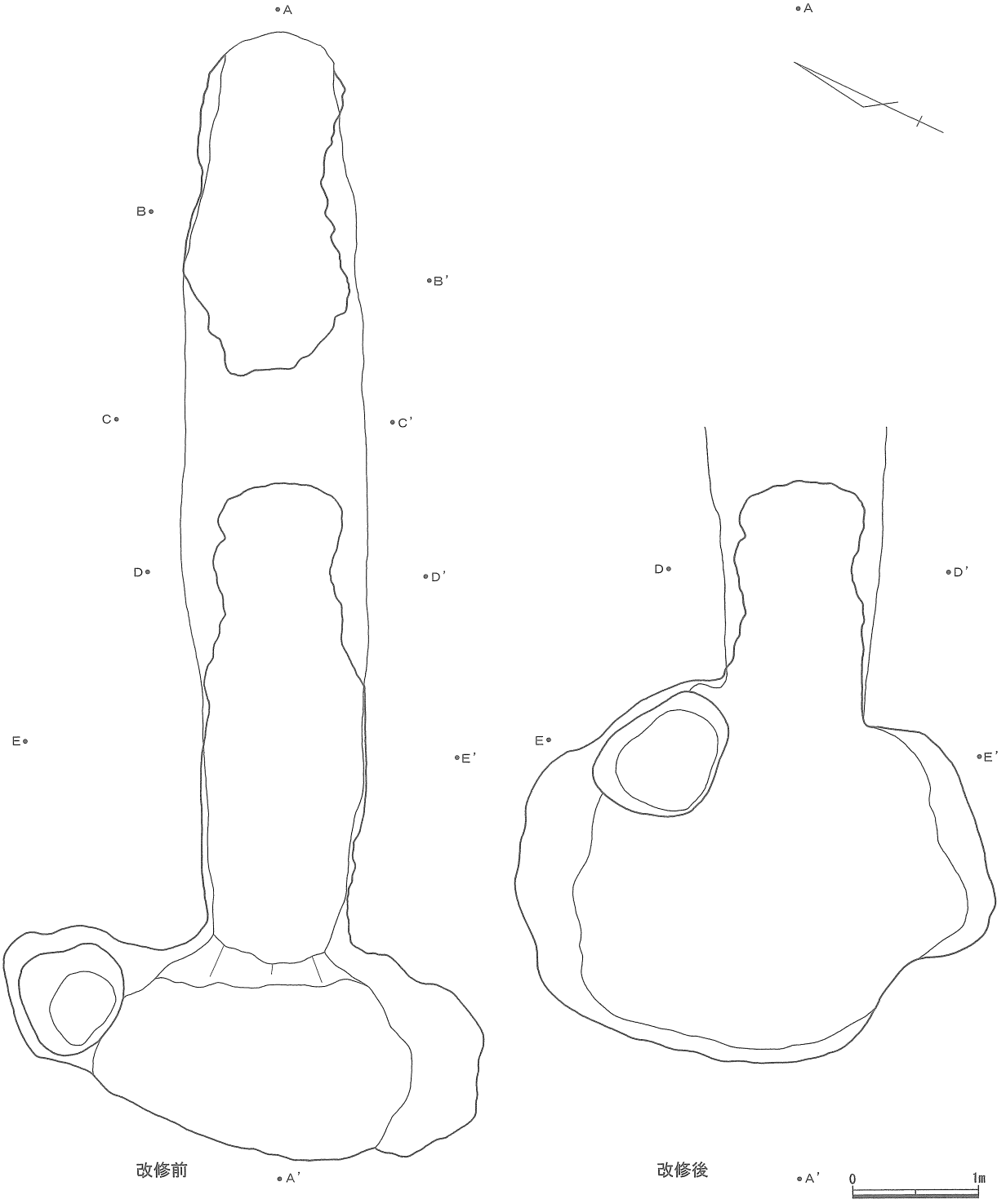


図37　２号窯平面図（1/50）

床面の傾斜角は平均すると34°である。傾斜は斜面上位から焚口に向かって下るにしたがい緩くなる。最大傾斜角は35°、最も緩い箇所で25°であった。また改修前の床面は２面確認された。

改修後の焼成部長は、水平長2.9m、実長3.3m、最大幅1.5m、焼成部との境界付近の幅は1.4mである。床面の傾斜角は平均29°である。最大傾斜角30°、最小傾斜角28°で、傾斜の差は大きくない。改修後の床面は改修時を含め３面が確認された。

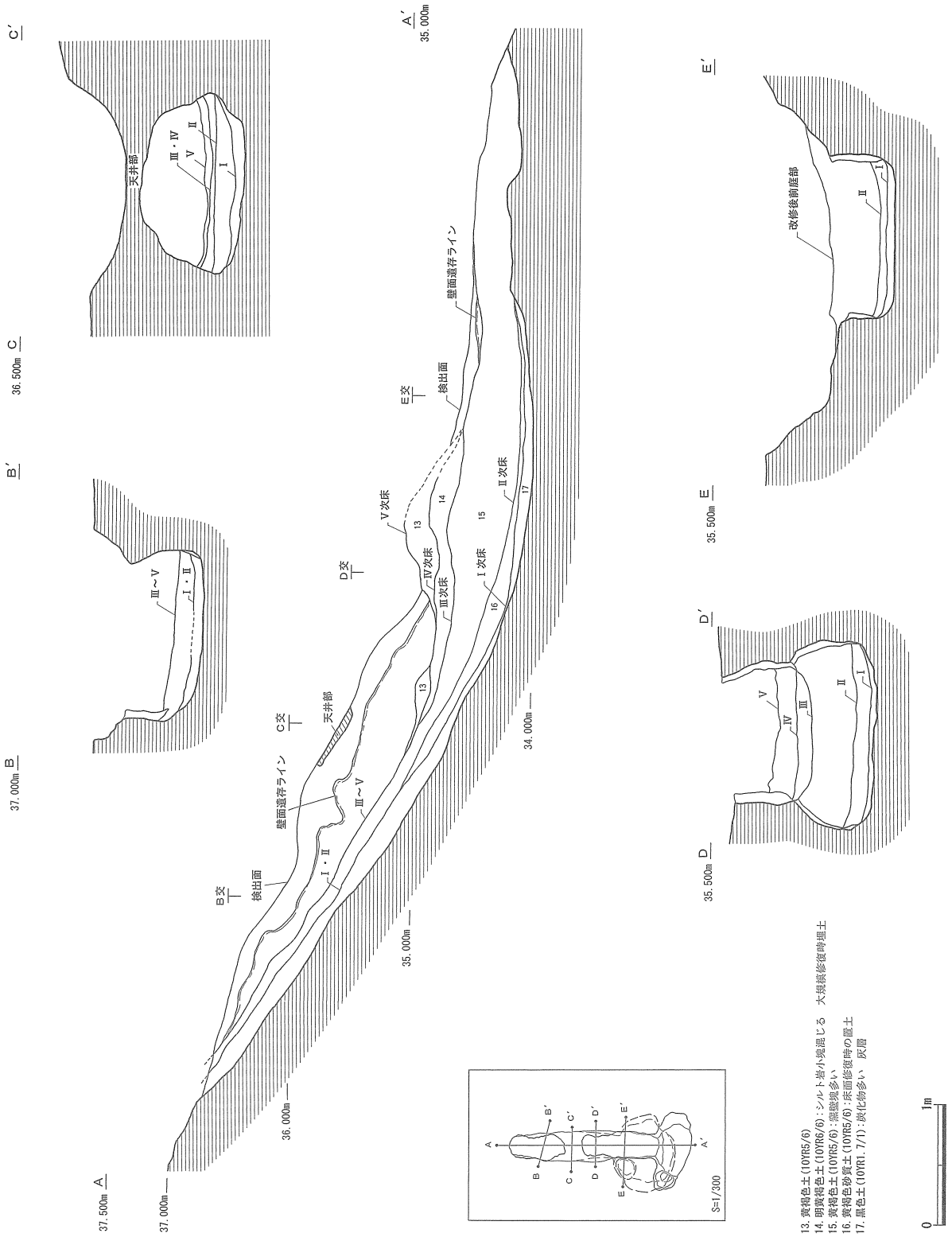


図38　２号窯窯体断面図（1/50）

床面の改修には、１号窯と同様に砂混じりの土が敷き込まれている。傾斜の強い床面上位では、床面が共通しており、緩斜面となる焼成部下位から焚口にかけてこの修復土が厚みを増す。壁面の修復は１号窯ほど明瞭ではなかったが、スサ入り粘土を塗り込む手法は共通する。ただし、床面の複数の修復のどの段階と対応するものであるのかは把握できなかった。

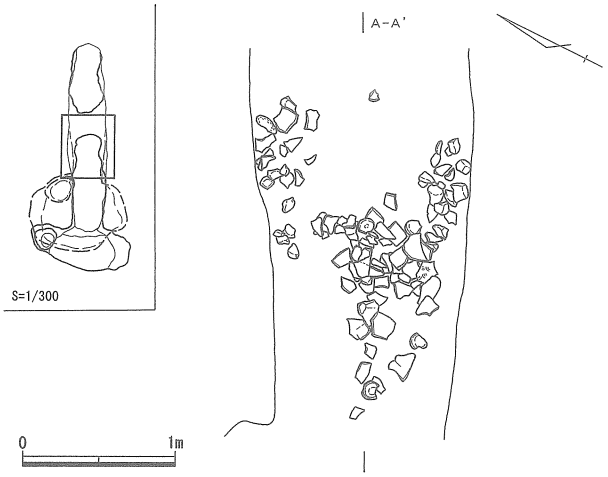


図39　２号窯焼成部平面図（1/50）

焼成部中央付近で床面の傾斜が増すあたりから上に向かうとともに、平面形は幅を狭めて徐々に絞り込まれている。

燃焼部・焚口

燃焼部と焚口は、改修前と改修後とでは、その位置を大きく変えているが、規模や構造に大きな変化は見られない。改修前の状況は燃焼部の規模が水平長3.3m、実長3.3m、焚口幅が0.9m、床面の傾斜角が７°である。改修後の燃焼部は水平長2.3m、実長2.2m、焚口幅1.1m、床面は－２°の傾斜角である。大きな改修時の盛土は、旧前庭部～燃焼部を完全に覆う形で確認できる。その厚さは最も厚いところで0.5mを測る。

前庭部

前庭部は、改修によって完全に全く新しい位置、形状で再構築されている。ただし、構造や規模は大きく変化していない。

改修前の旧前庭部は斜面下方側が後世の削平を受けているため開窯時の旧形状は把握できない。残存状況を見ると、平面形は不整形の長楕円形を呈し、幅4.0m、残存長1.6mを測る。旧前庭部の２面の床面上には操業に伴う灰層は確認されていない。

改修は旧前庭部の床面上に0.2～0.3m前後盛土し、嵩上げを行っている。改修後の前庭部は長さ3.0m、幅3.9mである。平面形はやや歪んだ楕円形を呈する。ここには灰を多く伴う堆積層が0.2m程確認できた。

改修前、改修後いずれの前庭部にも、焚口左側の床面に掘り込まれた土坑が確認されている。これら土坑の平面形は歪な円形で、規模は改修前のものが直径約0.8m、深さ0.1～0.4m前後、改修後のものは最大幅1.0m、深さ0.2～0.5m前後である。いずれにも前庭部同様、炭化物を伴う灰層が埋土として伴っており、焚口との位置関係から、機能としては熾（お）き溜めを考えておく。

埋土

窯体内に流入した黄色土中に天井崩壊土がブロック状に混じっており、操業停止後、しばらく経ってから窯体の崩壊が始まったことを示している。

灰原

２号窯は、改修前の旧前庭部の前面も後世の削平を受けていたが、灰原相当部分も地形的に丘陵背部に相当するため、茶畑の耕作が地山まで及んでおり、１号窯と共通する灰原部分を除いては、完全に失われていた。灰原の範囲を示す図において、２号窯前庭部付近にその分布が及んでいないのはそのためである。１号窯との灰原の重複のため、２号窯に伴う層位、遺物の峻別はできない状況であった。

遺物出土状況

２号窯では、焼成部のほか、燃焼部や前庭部から須恵器が出土している（図39）。出土した須恵器の器種は１号窯とほぼ同様で、坏身、坏蓋に加え、有蓋・無蓋の高坏、瓶類、短頸壷、甕、甕がある。

(3)　その他の遺構

SF-１（図43）

SF-１は、調査区のほぼ中央で検出した遺構である（図43）。約3.0m南東には１号窯が所在する。平面形は不正形な楕円形で、長径1.3m、短径1.1m、南北方向にやや長い。深さは0.2mである。覆土には、炭化物が含まれており、山茶椀片とかわらけが出土した。土坑の底面と壁面は被熱していた。

山茶椀片については小片であり、詳細は把握できなかったが、東遠江で生産されたものと考えられる。この土坑は１号窯・２号窯の灰層を掘り込む形で形成されていることと、出土遺物から中世の遺構と考えられる。

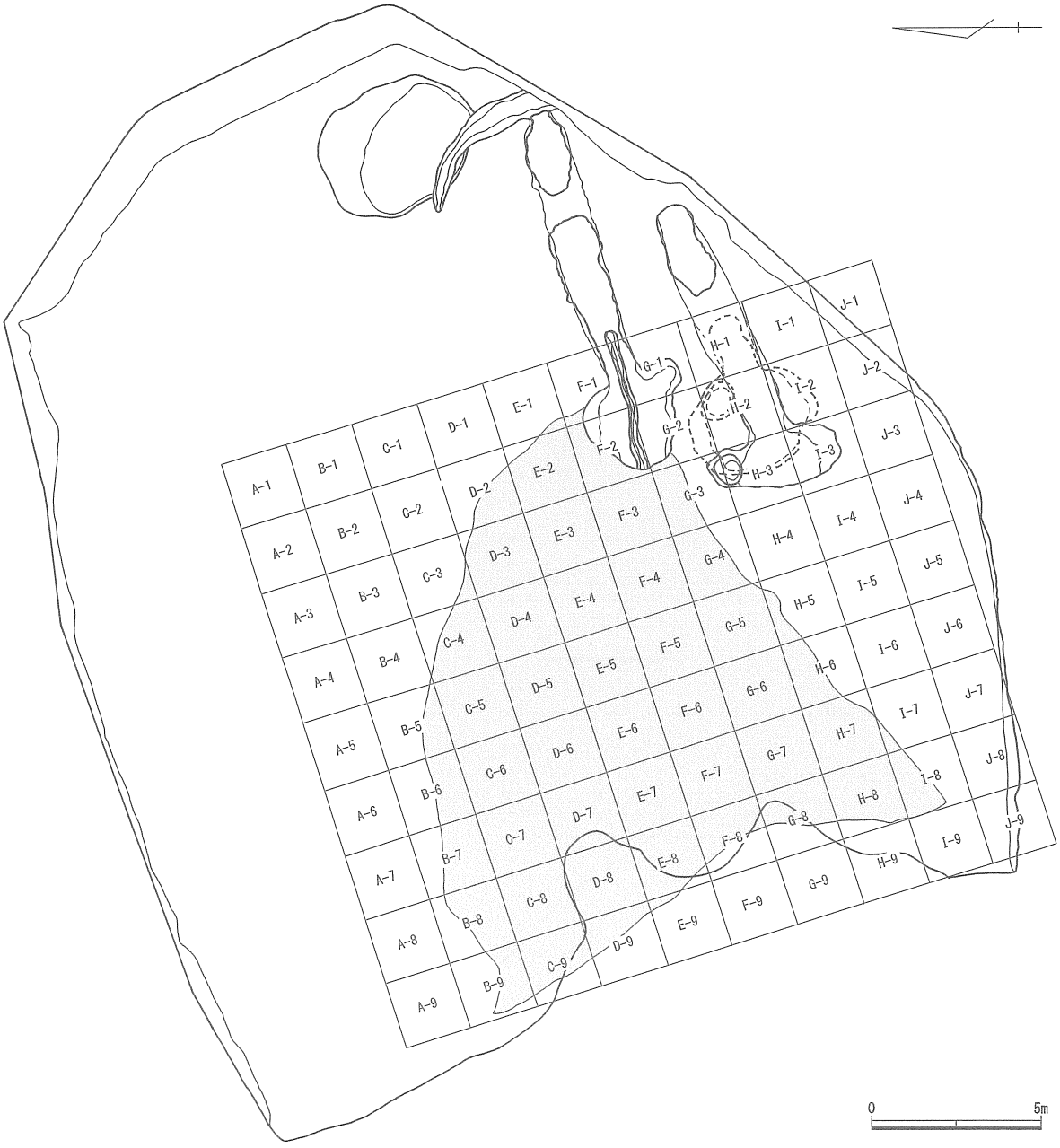


図40　灰原の範囲（1/200）

SF-２（図42）

SF-２は調査区のほぼ中央部で検出した土坑である。約3.5m北東にはSF-１が所在する。SF-２はやや不正形な楕円形の平面形を持つ。南北にやや長く、長径約1.3m、短径約0.8mである。覆土には炭化物が混ざっていた。この遺構もSF-１と同様に灰原を掘り込んでいた。壁面や底面には焼成を受けた痕跡が確認でき、山茶椀や土師器が出土した。ただし、細片であるため詳細は不明である。SF-１と同様に中世の遺構と考えられる。

SF-３（図41）

SF-３は調査区の東端部で検出した遺構である。不正形な楕円形の平面形をとる土坑で、南北方向が東西方向に比べやや長い。長径は4.8m、短径は3.8mである。遺構検出面からの深さは最大で0.4mである。床面は平坦ではあるが、地形に則して傾斜している。１号窯の排煙口に取り付く溝が、この土坑の覆土を掘り込んでいる。そのため、１号窯よりも古く位置付けられる遺構である。覆土中からは須恵器片が出土したが、SF-３に直接関わるものとはいえない。そのため、この遺構の時期を確定することはできなかった。また、遺構の性格についても、竪穴住居跡状の平面形をもつものの、柱穴や壁溝等を検出することはできなかったため、その可能性は低く、不明である。

SD-１（図42）

SD-１はSF-２と一部が重複する遺構である。南北方向の溝状遺構であり、検出長は4.8m、検出面での最大幅は1.2mである。深さは中央部付近が最も深く0.5mである。この溝は、１・２号窯の灰層に覆われる。そのため、SD-１は１・２号窯操業以前の遺構と位置付けられる。ただし、この遺構に直接伴う出土遺物は無いため、帰属時期を特定することはできない。また、性格についても不明である。

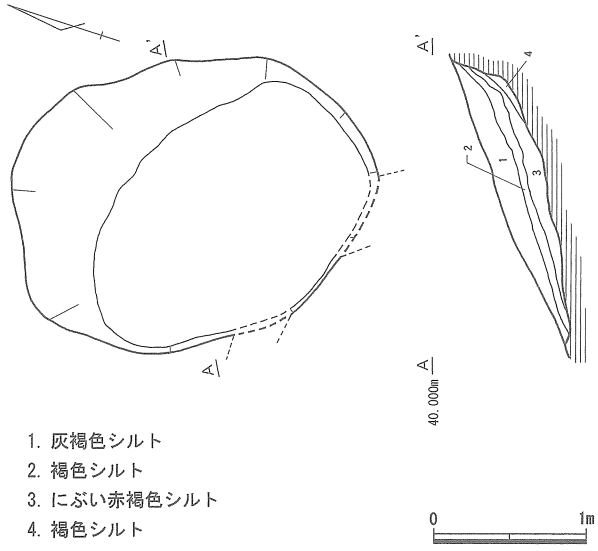


図41　SF-３実測図（1/50）

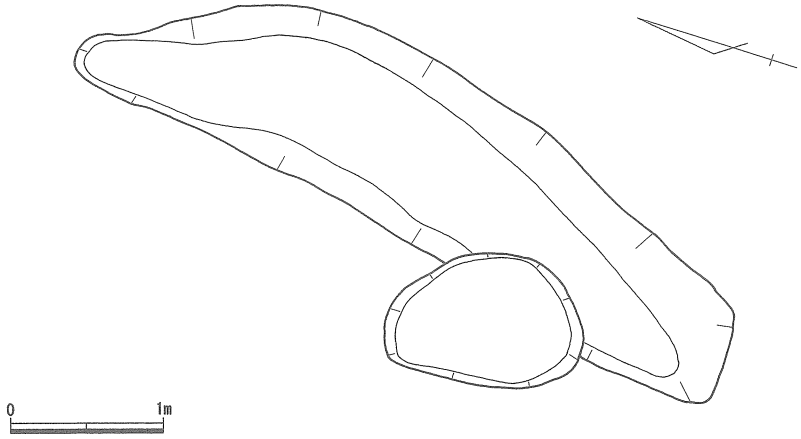


図42　SF-２・SD-１実測図（1/50）

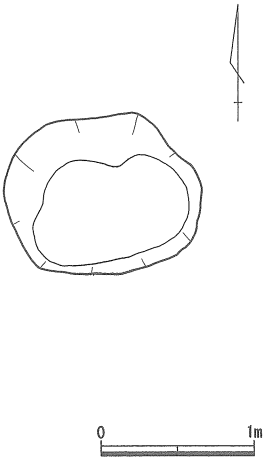


図43　SF-１実測図（1/50）

３．遺　物

１号窯、２号窯、灰原からテンバコ数にしておよそ30箱程の須恵器片が出土した。大半が小破片や焼き歪みの著しい破片のため、各焼成床面に特徴的な個体を抽出するに足るだけの資料を得ることができなかった。したがって、器種の特定と復原の可能な個体を対象に図化を行った。点数の多い器種に関してはできる限り分類を行い、形態および技法の特徴を記述したが、分類不可能な器種に関しては各個体についての記述に留まった。扱った点数は全体の３割程度であるが、上記の理由から必ずしも実際の出土比率を反映したものではない。出土位置別にそれぞれ土器の概要を記す。なお、蓋坏はつまみ・かえりをもたない蓋と、立ち上がりと受部をもつ身（註１）がセットとなる、坏Ｈ（註２）が主体である。

(1)　１号窯

１号窯出土の土器は出土位置から窯体内の各焼成床面、前庭部にわけられる。床面出土に関しては、特に煙道部に近いほど床面を貼り直さずに数度にわたって使用しているため、どの段階の床に伴う製品であるのか、判断が困難な個体もある。また、床面直上出土の破片には、焼成時の置台として転用された可能性のあるものも含まれる（註３）。確認できた器種は蓋坏、無蓋高坏、有蓋高坏、甕、甑、壷蓋、短頸壷、陶臼である。

Ⅰ次床（図44　11～21）

坏蓋（11･12）は、体部からなだらかに口縁部へ至るもの（11）、口縁部との境で弱く折れるもの（12）がある。いずれも内面は口縁部に稜をもち、端部は先細りする。

坏身（13～15）の外面は受部真下で強くくぼむ。最大径14.0cm前後で、13のみ、やや小ぶりである。15は器壁が薄く、丁寧な作りである。底部外面はヘラ切り後に不定方向のナデを施す。底部は深く、狭い平坦面をもつ。14でも回転ナデの範囲は底部近くまで及んでおり、同様の調整法が想定できる。

高坏蓋（16）は、つまみ部のみの残存であるため蓋自体の大きさは不明であるが、17の無蓋高坏に伴う蓋と考えられる。つまみは扁平なボタン状を呈する。

有蓋高坏（17）は、法量および形状が坏身（15）と非常に似る。外面は回転ナデ調整のみで、15では手持ちナデを施している部分に脚部を接合している。

壷蓋（18）は、口径と比して器高は高く、体部は明瞭に屈曲する。口縁部から体部にかけて２条の沈線をめぐらせる。口縁部はほぼ垂直に下がり、端部はやや外反気味に先細りする。短頸壷の蓋と考えられる。短頸壷（19・20）は、頸部からほぼ垂直に口縁が立ち上がる。19では肩部の張りは弱く、丸みをもって体部につながる。体部との境付近に１条の沈線がめぐる。18の蓋が伴うと考えられる。

甕（21）の口縁部には、肥厚させた部分に下側から工具を当てることによって頸部との境を作り出している。端部は外傾する。

Ⅱ次床（図44　22～28）

坏蓋（22～24）は、体部と口縁部の境が、角度がわずかに変化するもの（23）、弱い稜をもつもの（22･24）にわけられる。前者の口縁部は高く、内面は口縁部で肥厚して稜を成す。24では外反する口縁部と体部との境にナデによる２段の稜をもつ。小破片のため、器種の判断は困難であるが、推定される口径や傾きから坏蓋とした。ただし、無蓋高坏の坏部の可能性もある。

坏身（25・26）は、緩やかにくぼんだ受部から垂直気味に口縁部が立ち上がる。底部外面はヘラ切り後に手持ちのナデ調整を施す。26は受部が下方に引き出された形状となるが、焼き歪みによるもので、

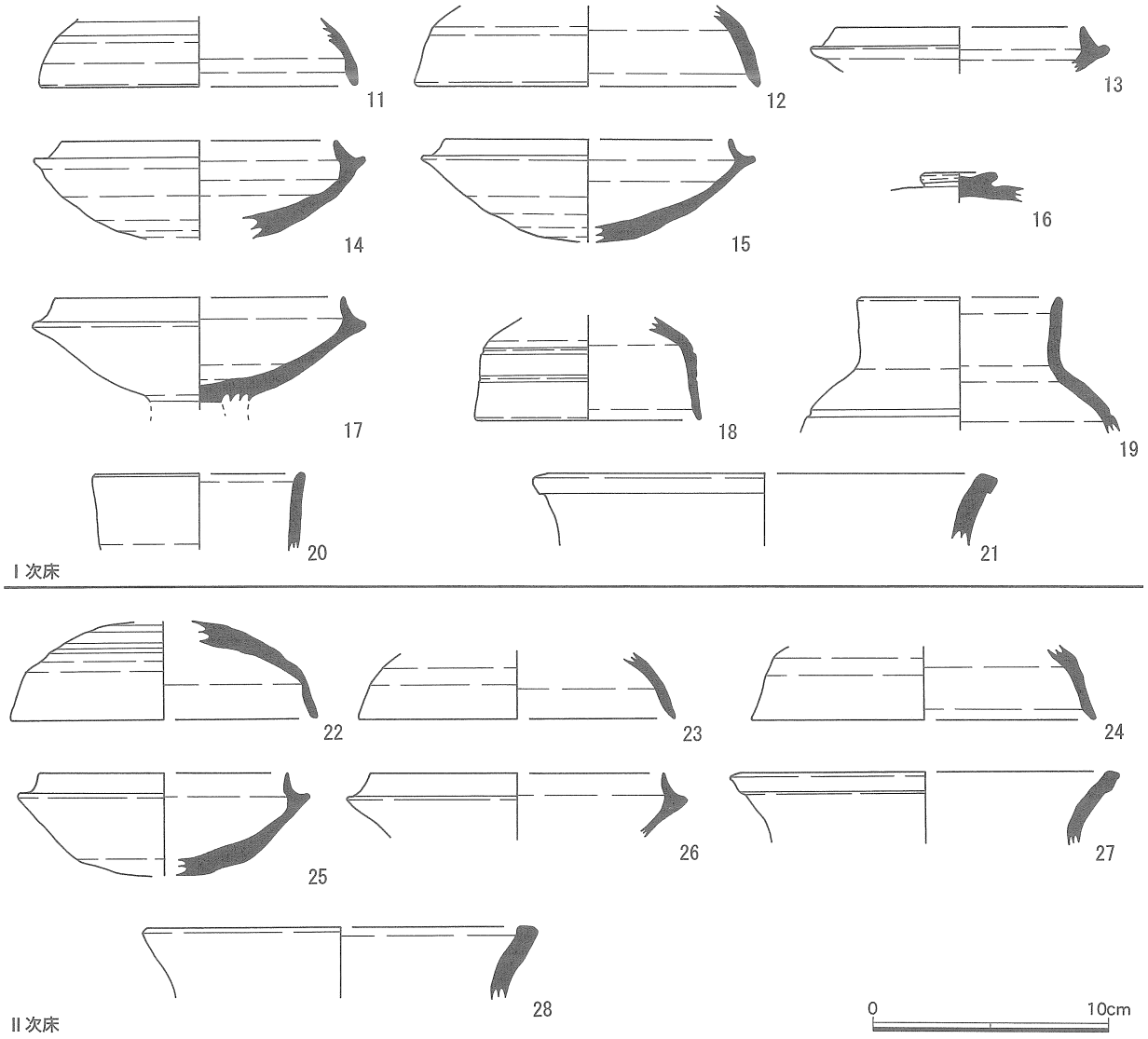


図44　1号窯Ⅰ次床・Ⅱ次床出土遺物（1/3）

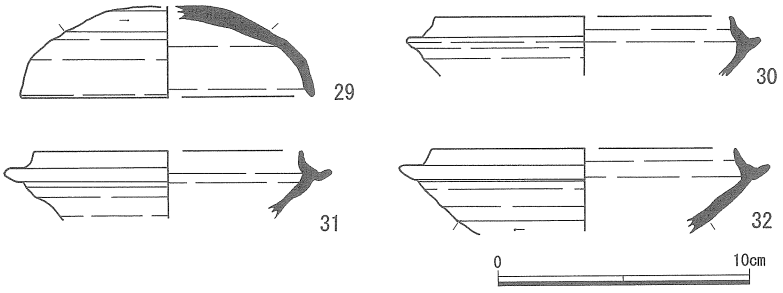


図45　1号窯Ⅲ次床出土遺物（1/3）

立ち上がりや器壁の厚みを見る限りでは25とほぼ同様の器形と考えられる。

甕（27・28）は、口縁部を肥厚させるもの（27）と、肥厚させずに内面をわずかに内湾させることでふくらみをもたせるもの（28）とがある。前者は外面に、後者は端部上面に面を形成する。

Ⅲ次床（図45　29～32）

坏蓋（29）は丸みを帯びた、なだらかな天井部をもつ。口縁部は外側に開き、体部との境は屈曲する。内面は口縁部に稜をもち、端部は先細りする。

坏身（30～32）の外面は受部真下で強くくぼませ、内面も強く屈曲する。受部を上方に薄くつまみ上げ、強いナデあるいは工具を用いたナデを施す。立ち上がりは中位で角度を変え、垂直につまみ上げる。31では外面をくぼませる際にも工具を使用している。

Ⅳ次床（図46　33～46）

坏蓋（33）は、全体的に扁平な形状を呈する。天井部は平坦に近く、体部から弱く屈曲しながら低い口縁部へと移行する。内面は体部と口縁部の境でいったん屈曲し、さらに口縁部で稜を形成しながら端部は先細り気味となる。

坏身（34・35）は、やや薄手で、外面は受部の真下で強くくぼむ。受部を上方に引き出し、口縁端部を先細りさせるもの（34）、受部を水平気味に横に薄く引き上げ、工具によって深くくぼませるもの（35）がある。いずれも残存部から推定して、浅い底部をもつと考えられる。

高坏の蓋（36～38）の外面には、口縁部と体部との境に、沈線によって明瞭な稜線を設ける。36・37は沈線の施し方や天井部の調整手法など、Ⅰ次床出土の短頸壷の蓋との類似点が多く、壷蓋の可能性も考えられる。

高坏の脚部（39・40）には沈線や透しなどの加飾は認められない。端部は強く引き出し、内面は端部手前でくぼむ。端部は丸く収められ、端面は垂直に立ち上がる。39は焼き歪みのために径が太く、開きが弱くなっているものの、本来は40のような裾の広がる形状であったと推定される。

壷蓋（41・42）は内面にかえりをもつタイプで、長頸壷の蓋と考えられる。全体的に丁寧な作りをしており、かえりは短く薄く引き出される。

陶臼（43・44）の底部は平底で、円盤状に突出する。側面は外傾しながら体部へとつながる。43では体部との境を強くくぼませる。いずれも内面の残存状態が悪く、調整は不明である。

甕（45・46）は、口縁部を肥厚させて外面に面を設ける。45は薄手で、外傾する面の両端や口縁端部はシャープな作りである。46は面の下端を突出させるが、さらに下方からの強めのナデによって１段の稜を形成する。

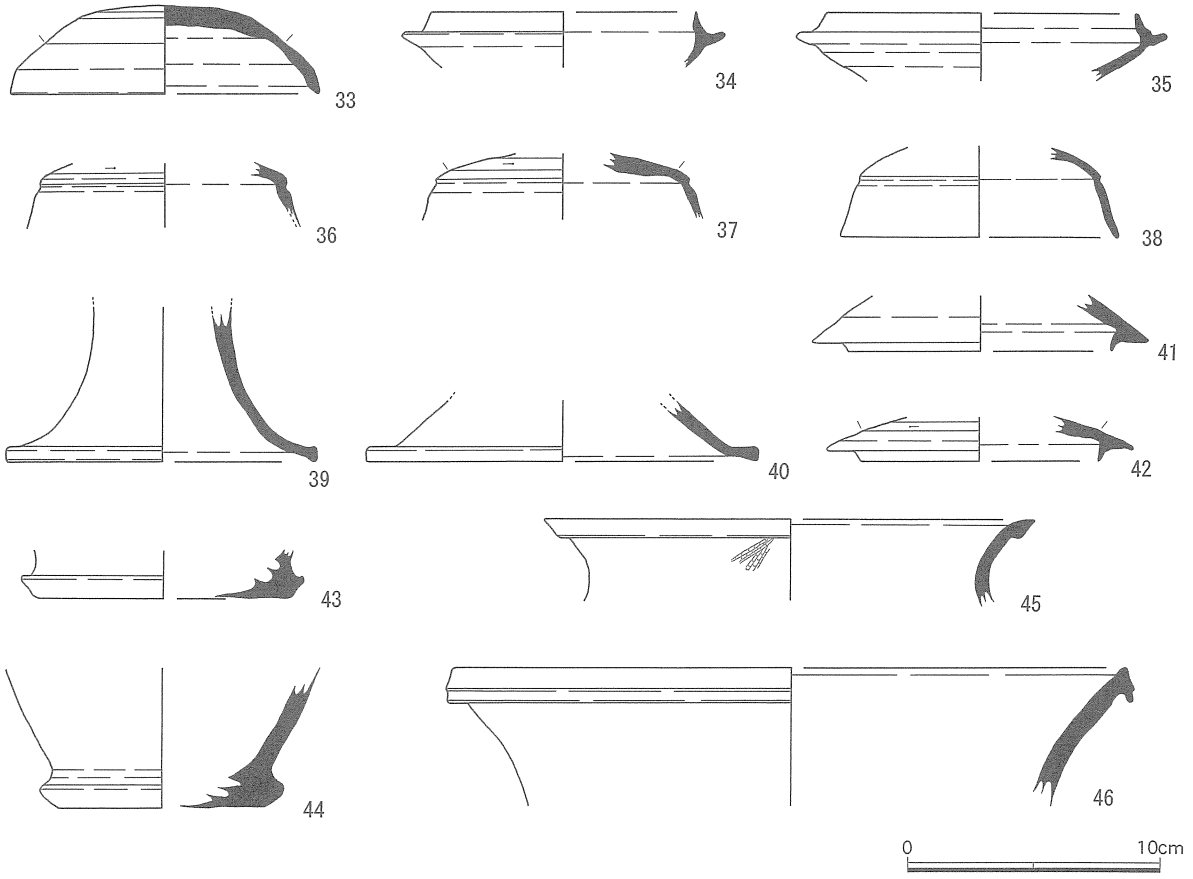


図46　１号窯Ⅳ次床出土遺物（1/3）

Ⅴ次床（図47・48　47～74）

坏蓋（47・48）の天井部は平坦面を成さず、丸みを帯びるが、全体として扁平気味である。天井部から体部へは滑らかに移行する。体部と口縁部の境は弱く屈曲し、口縁部は外傾して下がる。内面は緩やかで、体部と口縁部の境でわずかに屈曲する。口縁部に明瞭な稜を成し、端部は先細りする。

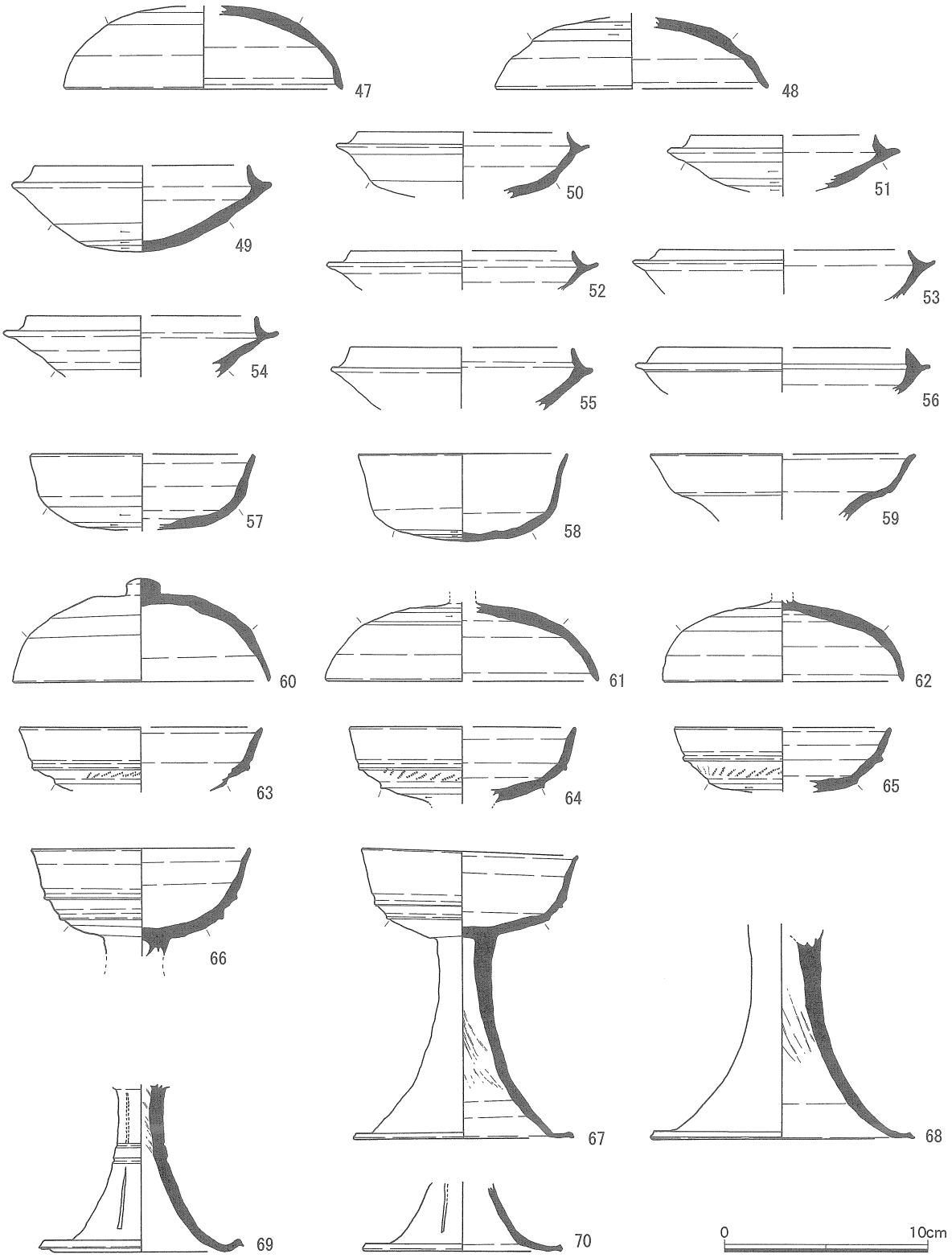


図47　1号窯Ⅴ次床出土遺物1（1/3）

坏身（49～58）は、ａ：受部と立ち上がりをもつもの（49～55）、ｂ：受部をもたないもの（57・58）がある。ａ類の体部は深めで、丸みをもつ。外面は受部の真下でくぼみ、受部を上方に長く薄く引き出す。立ち上がりは中位でわずかに角度を変え、端部を薄くつまみ上げる。56の内面は立ち上がりから体部の途中までほぼ垂直で、立ち上がりの基部に工具を用いて１条のくぼみを施すことで、境を設けている。ｂ類は、いわゆる坏Ｇである。底部はわずかに丸みを帯びるものの、平坦に近い形状である。口縁部は外反気味に立ち上がる（註４）。

甕（59）は口頸部で緩やかに折れ、口縁端部には内傾する面をもつ。

高坏の蓋（60～62）は、口縁部と体部の境に沈線などによる明瞭な稜はもたず、天井部の1/2程度に回転ヘラケズリを施す。60はボタン状のつまみをもち、61・62にも天井部につまみの痕跡が残る。

高坏（63～70）は坏部、脚部ともに分類が可能である。坏部はいずれも無蓋高坏で、体部と底部の境に突帯状の２条の稜をめぐらす。加飾の度合いで２類に分類することができる。63～65は体部のやや下方に稜を設け、その間を櫛状工具による刺突文で充填する。刺突文の施文は比較的粗雑で、右上がりに一周めぐる。65の稜は工具を使用して、上下から沈線状にくぼませることによって作り出している。63・64では、上段の稜は同様の手法によるが、下段の稜は上方からの沈線のみによって設けている。底部はいずれも回転ヘラケズリを施し、やや平坦で浅めの形状を呈する。66・67は65と同様に上下からの沈線によって稜を作っており、区画の間は無文である。66は深めで丸みを帯びているのに対し、67の底部は比較的平坦である。脚部は透し孔の有無で２類にわけられる。67・68には透し孔および沈線などの加飾は一切ないものの、ナデ調整などに丁寧さが窺える。端面は沈線を１条めぐらせたかのように強くくぼむ。69・70では２段３方向の透し孔をもつ。69の脚部は上下段の境に２条の沈線がめぐる。透しのあけ方は粗雑で、幅１㎜程のスリット状に切り込みが入る程度である。前者と比べると、脚部高は幾分低く、やや細めである。ただし、裾部の作りには相違点は見られない。

甕（71～74）はいずれも口縁部を肥厚させる。口縁端部上面に面を成すもの（71・73）、外傾する面をもつもの（72・74）がある。73は頸部から口縁部にかけて、大きく外反しながら開く。また、外面の肥厚部には面を成し、下方から工具を当てることによって下端を突出させている。

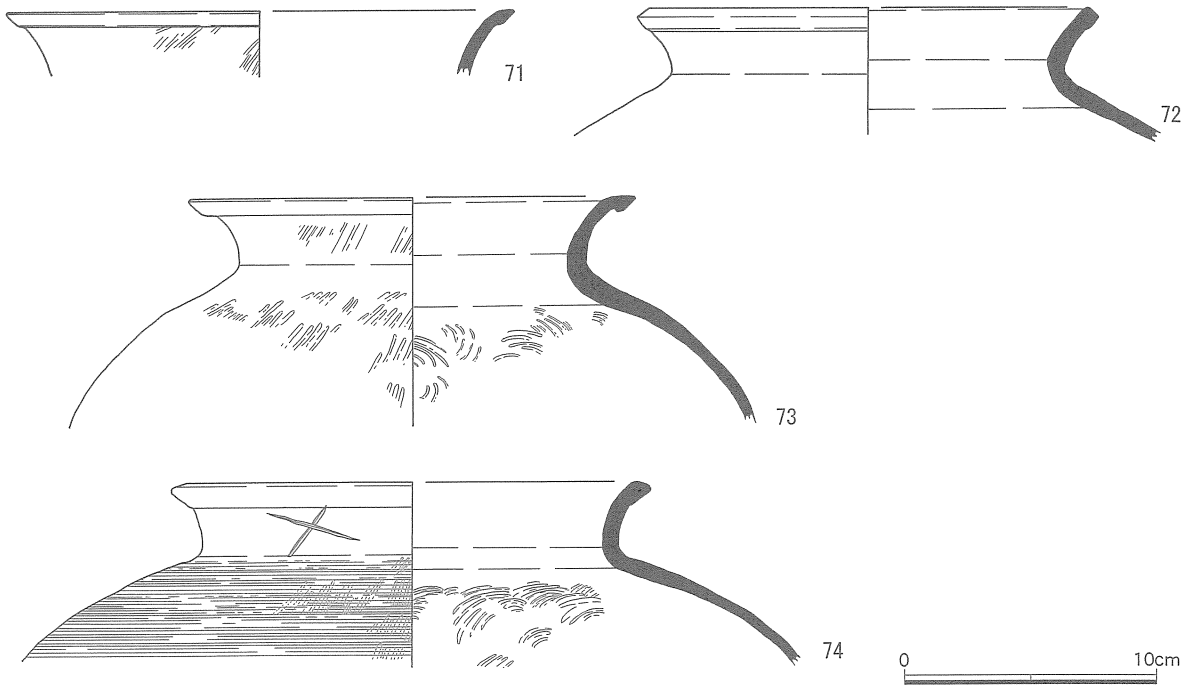


図48　１号窯Ｖ次床出土遺物２（1/3）

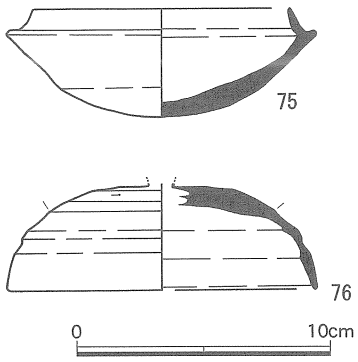


図49　1号窯窯体内一括出土遺物（1/3）

窯体内一括（図49　75・76）

坏身（75）の底部外面は、ヘラ切り離し後に丁寧なナデ調整を施している。全体的に深く、底部は丸みを帯びる。

高坏の蓋（76）は、口縁部と体部の境をくぼませることによって弱い稜を作り出している。

前庭部（図50～52　77～139）

坏蓋は、a：口縁部が直立気味に下がるもの（77～89）、b：やや内湾するもの（90）、c：開き気味に下がるもの（91～98）に分類できる。a類は天井部にかけて丸みを帯びる。口縁部が低く、体部との境はナデによって緩やかな稜をもつ。内面は口縁部でわずかに肥厚し、稜を形成しながら端部を丸く仕上げる。77・79の天井部には不調整部分との境に、わずかではあるが弱い回転ヘラケズリが認め

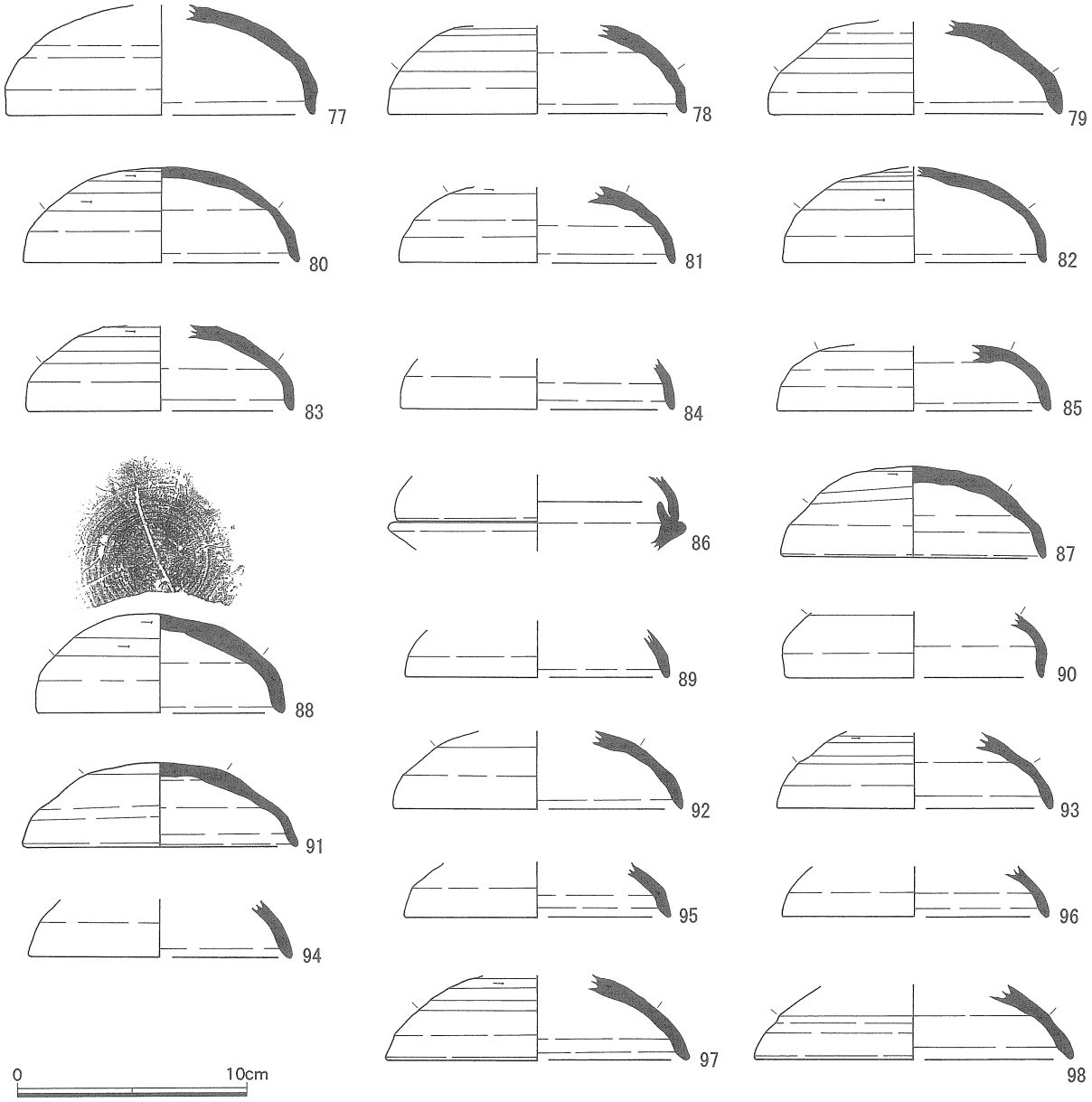


図50　1号窯前庭部出土遺物1（1/3）

られる。ｂ類の最大径は口縁部と体部の境にある。内面の特徴はａ類とほぼ同じである。ｃ類は扁平な天井部をもつ。体部と口縁部の境は弱く折れる程度である。98のみ、幅広の沈線状にナデのくぼみがめぐる。

坏身（99～116）は、受部を短く水平気味に引き出す。体部外面の形状から、ａ:体部がなだらかに移行するもの（99～104）、ｂ：受部の真下に強いくぼみをもつもの（105～116）に分類できる。ａ類は受部端部を丸く収めるが、ｂ類では外面のくぼみによって、受部全体が厚手で丸みを帯びた印象となる。115・116は他の個体と比べ、薄手で、径も小さい。ａ・ｂ類とも内面の立ち上がり基部で屈曲するものと、屈曲部にさらに回転ナデを加えるものとがある。

高坏の蓋（117～119）は、口縁部と体部の境に１条の沈線をもつ。119は118と同程度の径をもつと推定される。120は無蓋高坏の坏部である。口縁部と体部の境付近に１条の沈線をもち、口縁部はわずかに外反しながら大きく開く。121・122は脚部である。122では端部をやや下方に短く引き出し、内外面ともに端部手前でわずかにくぼむ。端面は丸みを帯びるものの、ほぼ垂直で、端部は丸く仕上げる。

甕（123）は、内外面とも口頸部の屈曲が顕著ではない。口縁部は内面に外傾する面をもつ。

瓶類（124）は、口頸部で屈曲し、垂直に立ち上がる。内面の折れは弱く緩やかに湾曲する程度で、端部を丸く仕上げる。125は瓶類のボタン状把手である。内面には閉塞面の接合部分が残る。径は１㎝程と小さく、平坦面は指で押さえる程度で作り出すなど、やや粗雑な作りである。

壺蓋（126～128）は、高さ0.5㎝弱の低いかえりをもつ。ａ:天井部外面がヘラ切り不調整のもの（126）、ｂ：回転ヘラケズリを施すもの（127・128）がある。ａ類の天井部は丸みを帯びる。受部を短く下方に引き出し、かえりは外傾させる。全体的に粗雑な作りである。ｂ類は扁平な天井部をもつ。受部は薄く、水平に引き出し、かえりも薄く先細りさせる。

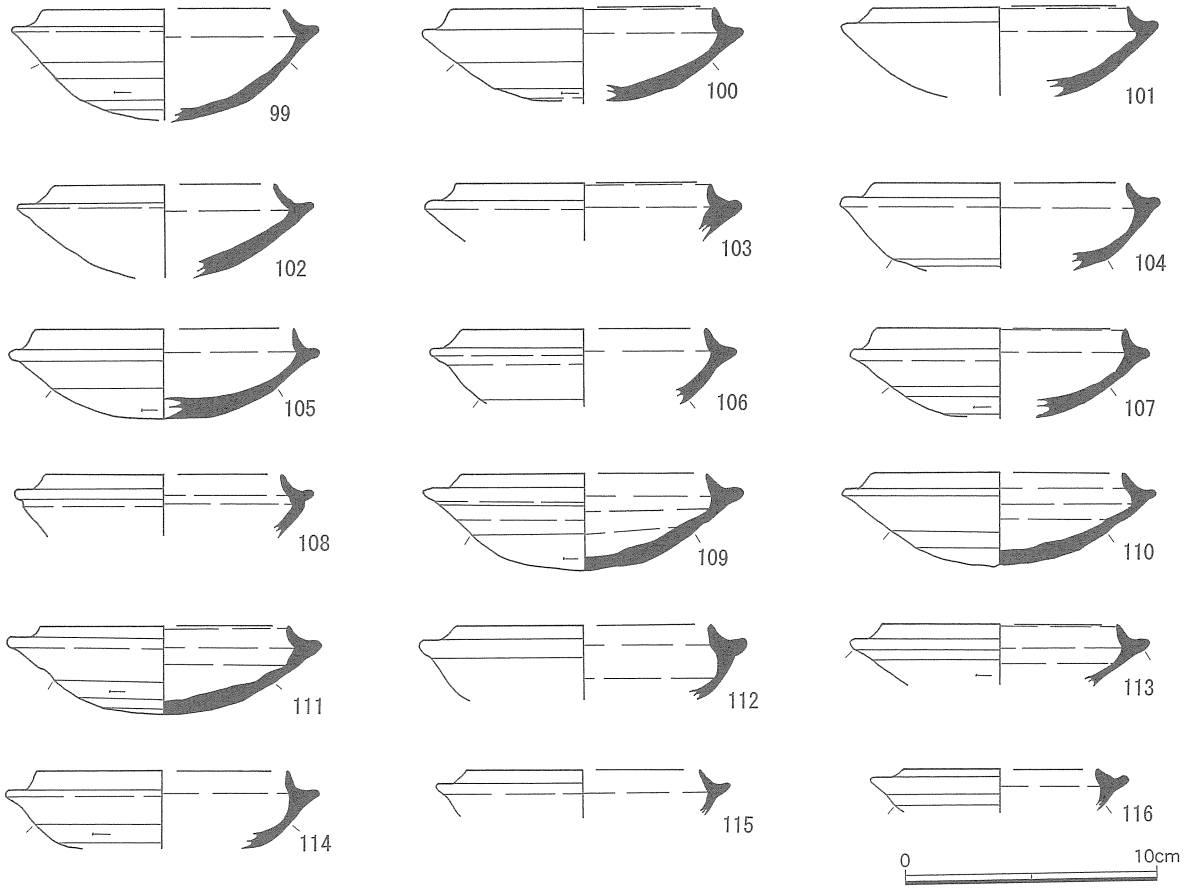


図51　１号窯前庭部出土遺物２（1/3）

壷類の脚部（130～135）は、ａ：中位に沈線をもつもの（130）、ｂ：裾部の開きが大きく、稜をもつもの（131～133）、ｃ：脚部径が12cm前後で、稜をもたないもの（134・135）に分類できる。ｂ類の基部径は推定で3cm程度と細く、脚付盌の脚部の可能性も考えられる。132と133では内外面に自然釉が付着する。特に内面に顕著で、粗砂も熔着しているため、逆位での焼成が推定される。129は壷類の体部である。肩の屈曲は強く、沈線が１条めぐる。

甕（136～139）は、いずれも口縁部を肥厚させるが、ａ：外面に設けた面の下端を突出させるもの（136・137）、ｂ：下端を突出させないもの（138）、ｃ：肥厚部の外面に沈線をめぐらすもの（139）に分類できる。137では下端の突出が著しく、工具の使用が認められる。

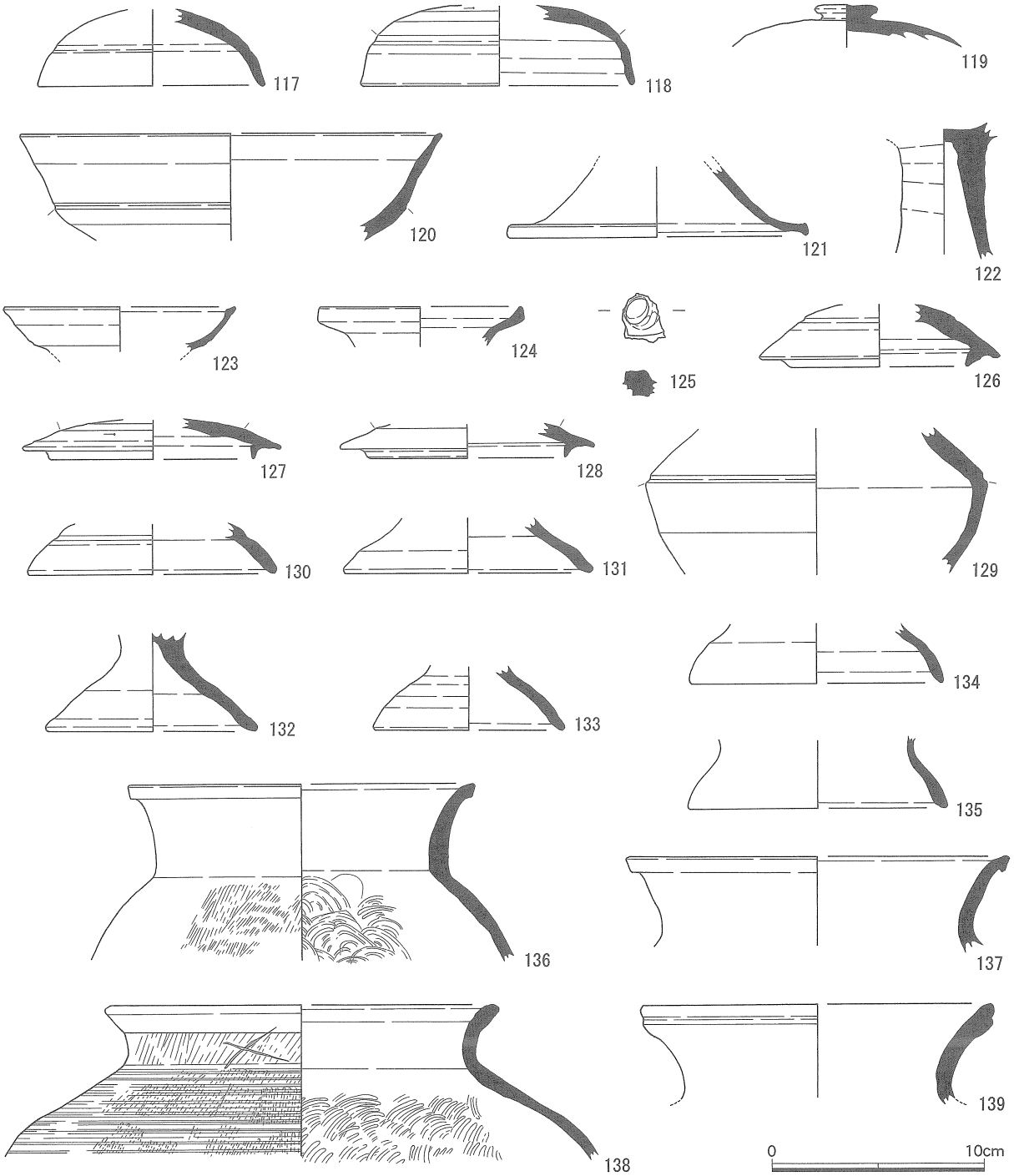


図52　１号窯前庭部出土遺物３（1/3）

(2)　２号窯

２号窯出土の土器は、窯体内の各焼成床面、改修前の前庭部、改修後の前庭部、前庭部改修の際に盛られた土中（修復時中間層）の、４つにわけられる。確認できた器種は蓋坏、無蓋・有蓋高坏、甕、瓶類、短頸壷、甕である。また、改修後の前庭部からはフラスコ瓶の頸部が１点出土している。埋土中ではなく床面から出土していることを考えると、２号窯で生産された可能性も捨てきれない。しかし肉眼での胎土観察や、出土位置が最終焼成時に機能していた前庭部であることを考慮すると、混入品の可能性が高いと考えられる。その場合、２号窯の廃絶後それほど時間をおかずに流入したものであろう。

Ⅰ次床（図53　140・141）

坏蓋（140・141）は、体部と口縁部の境で屈曲し、口縁部は垂直に下がる。140は外面ではかなり強く折れるが、内面は角度の変換部分に厚みをもたせることによって、天井部からなだらかに移行する。

Ⅱ次床（図53　142～150）

坏蓋（142～145）は、ａ：口径が10cm代のもの（142～144）、ｂ：それよりも小型のもの（145）がある。ａ類は高い天井部をもつ。体部は外反気味となり、口縁部との境で屈曲し、明瞭な稜を成す。口縁部は垂直に下がる。外面はいずれもヘラ切り不調整（註５）で、わずかに突出する。ｂ類は、口径が8.2cmと、ａ類と比較して極端に小さく、口縁端部を外反させている。他器種の可能性も考えられる。

坏身（146～150）は、最大径が10.5cm前後（146）、11cm代（147～148・150）、12cm代のやや大きめのもの（149）とにわけられるが、器形および製作技法に相違点は認められない。受部は内湾させながら上方に引き出す。立ち上がりは短く、口縁端部は先細りする。外面底部はヘラ切り不調整であるが、著しい突出にはならない。底部は平坦気味となり、体部との境が明瞭となる。

Ⅲ次床（図54　151～155）

坏蓋（151～153）の天井部外面はヘラ切り不調整である。天井部が突出するもの（151・152）、突出しないもの（153）がある（註６）。いずれも天井部から体部にかけては、やや扁平な形状を呈する。口縁部との境で屈曲し、口縁部は垂直気味である。

坏身（154）も坏蓋と同様に、底部外面はヘラ切り不調整で、突出気味となる。中心付近にはヘラを差し込んだ際のくぼみが残る。受部は上方に強く引き上げられ、立ち上がりは内傾する。内面の立ち上がり基部、体部と底部との境で、それぞれ明瞭に屈曲する。

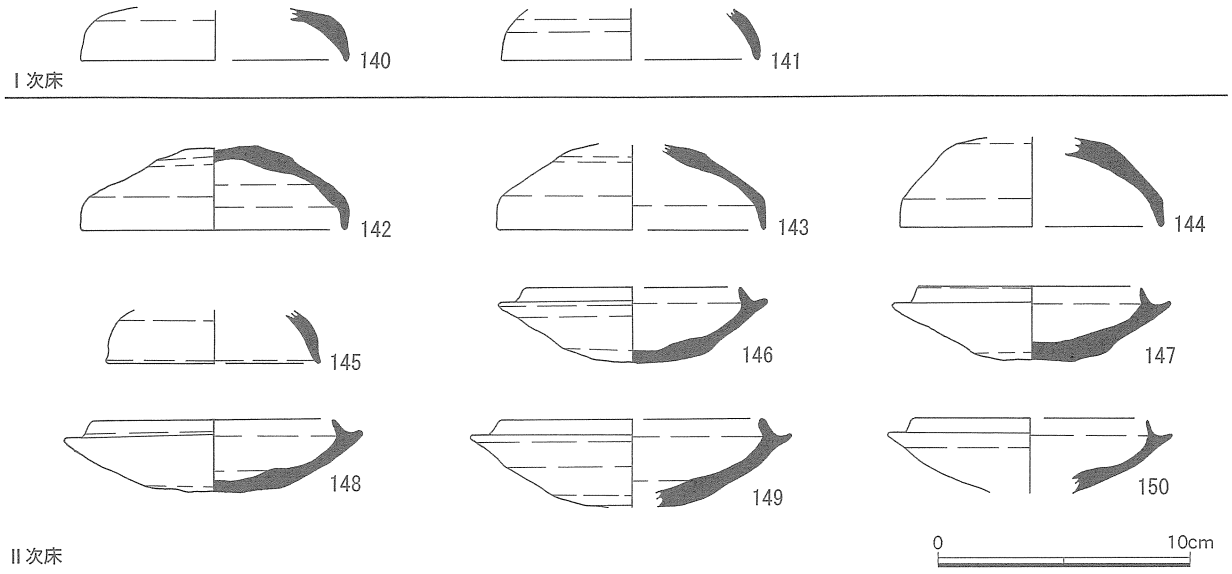


図53　２号窯Ⅰ次床・Ⅱ次床出土遺物（1/3）

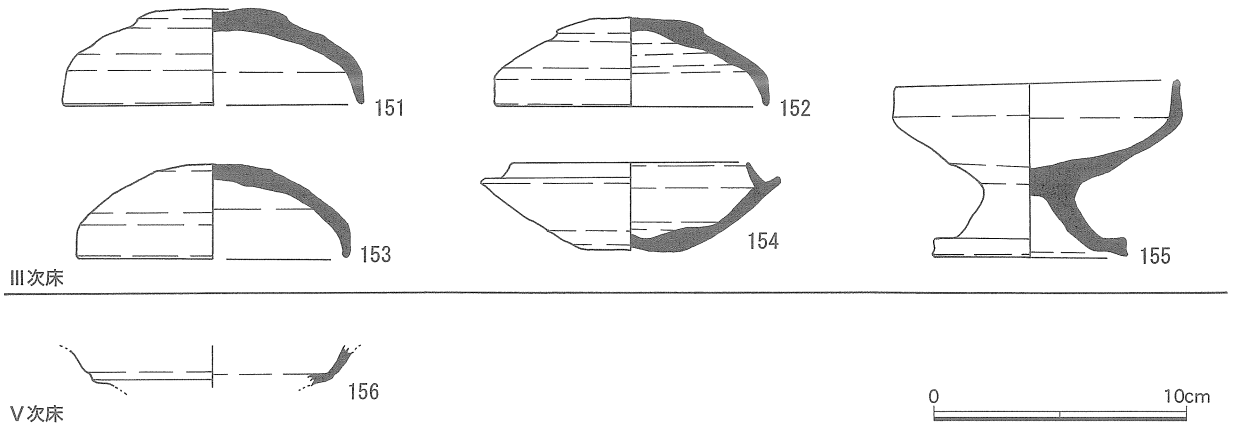


図54　２号窯Ⅲ次床・Ⅴ次床出土遺物（1/3）

無蓋高坏（155）は短脚で、脚部には沈線および透し孔は認められない。坏部の法量・形状は坏蓋に酷似しており、坏蓋の天地を逆にし、天井部に脚部を接合したかのような形状である。焼成不良のため器面が摩滅しているが、おそらく外面の調整も蓋坏と同じく、回転ヘラケズリを施してはいないようである。脚部高は、器高の1/2にも満たないほど極端に低い。脚端部は垂直気味に立ち上がり、裾手前で内外面ともいったんくぼむ。

Ⅴ次床（図54　156）

156は甕である。小破片のため径および形状は定かではない。口頸部の屈曲は強く、外面に１条の沈線をめぐらす。

前庭部（改修前）（図55　157～159）

坏蓋（157・158）のうち、157の外面は突出した天井部に回転ヘラケズリが認められるものの、中心付近は狭い範囲ではあるが不調整のままである。口縁部は内傾し、体部との境で強く折れる。内面は天井部から体部にかけてはなだらかで、屈曲して口縁部へとつながる。端部は薄く引き出す。158の体部も同様の形状であるが、口縁部は開き気味となる。158と比べると全体的に厚手で、内面は口縁部に稜をもち、端部はやや先細りする。

高坏の蓋（159）は、扁平なつまみを有する。つまみ部径と残存部分から推定して、口径は13cm前後と考えられる。

前庭部（修復時中間層）（図55　160～167）

坏蓋（160）の口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がり、体部との境で屈曲する。天井部は狭く、平坦気味で、外面はヘラ切り不調整である。内面は口縁部に稜を形成する。端部は丸みをもたせ、やや外反気味となる。

坏身（161・162）は、ａ:受部を薄く上方に引き出し、内面は立ち上がりの基部で屈曲するもの（161）、ｂ：受部は水平気味に引き出し、内面の立ち上がり基部は屈曲させた下にナデをめぐらせるもの（162）がある。いずれも外面の受部真下でくぼむ。ａ類は、立ち上がり・受部ともに薄く引き出しており、体部から底部にかけては丸みを帯び、半球形に近い。ｂ類は全体的に器壁が厚い。ただし、162は焼き歪みのために全体的に本来よりも扁平な形状となっていると考えられる。

短頸壷（163・164）の口縁部は、わずかに外反しながら、ほぼ垂直に立ち上がる。頸部にナデが一周まわるものの、強い括れにはならない。器壁は薄く、口縁端部は上方に引き出し、丸く仕上げる（163）。体部の上半には１条の弱い沈線がめぐる。全体的に丸みを帯びた形状で、体部で最大径をとるものの、張りは弱い（164）。

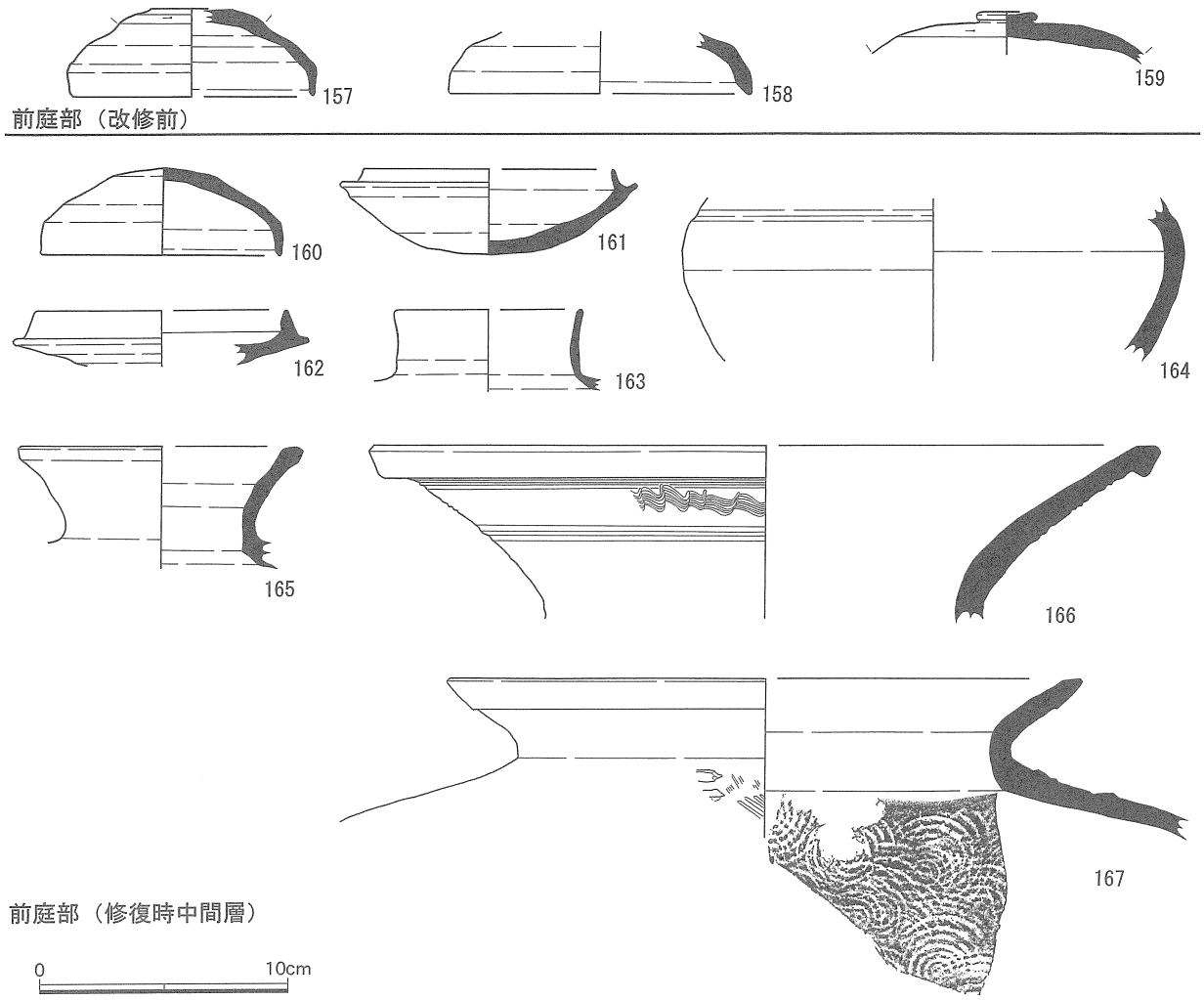


図55　２号窯前庭部（改修前・改修時中間層）出土遺物（1/3）

165は瓶類の口頸部と考えられるが、具体的な器種は不明である。口径と比して口頸部は短く、外反気味である。口縁部をわずかに肥厚させ、外面に面を形成させる。端部はやや丸みを帯びるものの、内傾面をもつ。

甕（166・167）は、口縁部の形状から、ａ：肥厚させた口縁部外面に面を設け、さらにその下端に工具を当てて突出させるもの（166）、ｂ:口縁部を内湾させ、外面に弱い段を設けるもの（167）にわけられる。いずれも頸部と比して口径が大きく、外反しながら広く口を開く。口縁部内面には内傾する面を形成する。ａ類では、頸部を上下２条ずつの弱い沈線で区画し、その中に波状文を施す。ｂ類の肩部には環状把手の痕跡が認められるが、小破片のため何箇所に有していたかは不明である。

前庭部（改修後）（図56　168～188）

坏蓋（168～176）は口縁部が、ａ：内傾しながら立ち上がるもの（168～172）と、ｂ：内湾しつつ立ち上がるもの（174～176）とにわけられる。173は最大径が口縁部にあるものの、形状としてはｂ類に近い。ａ類は口径が10cm前後で、口縁部と体部の境は屈曲する。天井部外面に回転ヘラケズリを施すものは少なく、確認できたのは天井部欠損を含めても１点のみである。ｂ類の最大径は口縁部と体部の境にあり、屈曲部は丸みをもつ。口縁端部は薄く引き出している。

坏身（177～183）は、ａ：受部が深く、内面は立ち上がりの基部で強く屈曲するもの（177～180）、ｂ：受部に厚みをもち、内面は立ち上がりの基部にナデを加えるもの（181～183）がある。ａ類の受部は上

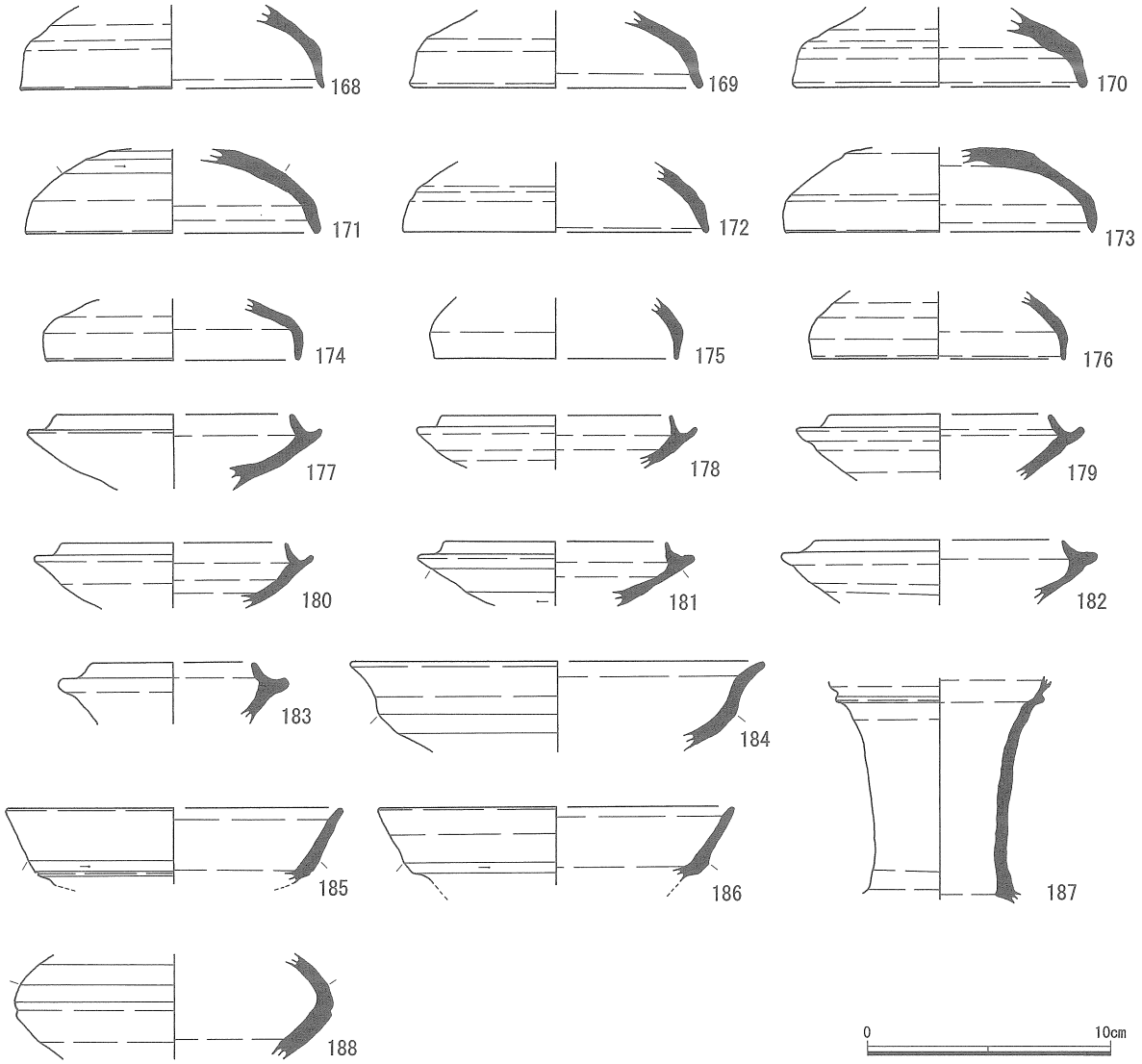


図56　２号窯前庭部（改修後）出土遺物（1/3）

方に長く引き出される。丁寧な作りのものが多く、特に立ち上がりや受部は強いナデによって薄く、シャープに作り出している。ｂ類では、受部をやや上方に短く引き出す。183は最大径が推定で9.4cmと極端に小さく、器壁の厚みや形態も他の個体と比べて異質である。全体的に丸みを帯びた形状をしており、特に受部の端部で顕著である。1/6程度の残存のため定かではないが、焼き歪みによるものとも考えられる。

無蓋高坏（184）の口縁部は強く外反し、口を広く開ける。口縁部と体部の境は明確である。焼成不良のため器面は摩滅気味だが、境界から底部にかけての調整は回転ヘラケズリと推測される。内面は口縁部に稜をもつ。

瓵（185・186）の口頸部の屈曲は強くなく、185で１条の沈線がめぐる程度である。188は体部のみの残存で、なおかつ焼き歪みがあるため器種の特定は難しいが、径と形状から瓵の体部と考えられる。中位に１条の沈線をめぐらせ、上半部はやや弱い回転ヘラケズリを施す。

フラスコ瓶（187）は、頸部のみの破片のため口縁部の形状は不明であるが、残存部から推定して、口頸部の高さはおよそ10cm前後であろう。外反する頸部に沈線などはなく、口縁部との境に上下からの強いナデによって突帯状の稜を設ける。

(3) 灰　原

斜面に広がる灰原を２m間隔のグリッドで区割りしたところ、最も出土量が多かったのは１号窯と２号窯の主軸延長線に挟まれたG-７グリッドであった。また、遺物の出土状況をみると、炭化物が広がる灰原範囲のなかでも、特に１号窯の下方に集中している。かなりの急斜面に立地しているため、中腹に留まらずに斜面裾まで落下したためと思われる。確認できた器種は蓋坏、有蓋高坏、盌、瓿、壷類、広口瓶、平瓶、提瓶、陶臼、甕、有台坏である。以下、各器種ごとに概略を記す。

坏蓋（図57　189～201）

ａ：口縁部が内湾するもの（189・190）、ｂ：口縁部が外傾し、低く扁平な天井部をもつもの（191～201）がある。ａ類の天井部は高く、内外面とも体部と口縁部の境で強く折れる。口縁部の中位に最大径をもつ。内面を肥厚させて稜を形成するものの、面はもたず、端部を丸く仕上げる。ｂ類は、体部にナデによるくぼみを残して回転ヘラケズリを施すもの（191～197）と、天井から体部へとなだらかに移行するもの（198～201）とにわけられる。192では口縁部と体部の境に１条の沈線をもつ。内面は口縁部に弱い稜をもち、端部は先細り気味となる。196の天井部にヘラ記号らしき痕跡が認められるが、ヘラ記号をもつ他の個体と比べると刻みは弱く、断定できない。

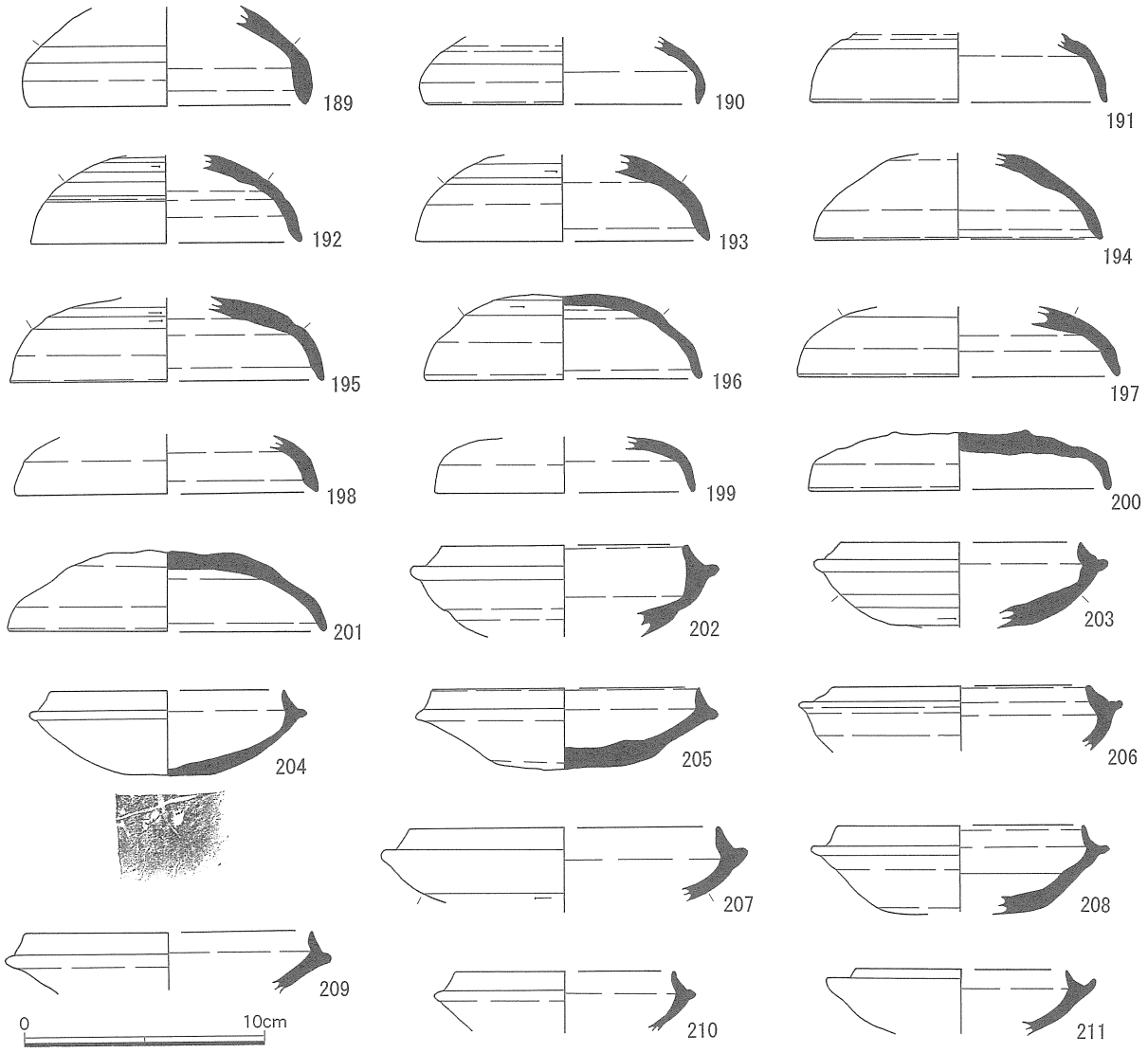


図57　灰原の出土遺物１（1/3）

坏身（図57　202～211）

坏身は、ａ：外面の受部の下でくぼむもの（202～210）、ｂ：くぼみを有さないもの（211）にわけられる。ａ類の受部は短く、端部を厚く丸く仕上げる。内面は立ち上がりの基部に幅広の回転ナデを行い、垂直に近い体部をもつもの（202～204）と、屈曲させるのみ、あるいはナデの幅が狭く、体部が傾斜するもの（205～210）がある。外面の底部から体部にかけては回転ヘラケズリを施すが、204・205では底部ヘラ切り後に、やや粗雑ではあるが不定方向にナデ調整を施して平坦面を作り出している。ｂ類は口径が8.7cm、立ち上がりも0.6cm程と、ａ類と比べて新出の要素が窺える。受部は長く上方に引き出す。内面は立ち上がりの基部で屈曲し、屈曲部真下でわずかに肥厚するものの、なだらかに底部へと移行する。

高坏（図58　212～217）

蓋（212～215）は、口縁部と体部の境に沈線による稜を設け、口縁部はほぼ垂直に下がる。212では沈線の上を弱くつまみ出して段を作り出している。212～214は口径およそ14cmで、やや扁平な形状を呈する。212・213の天井部は平坦な面を広くもち、内面の口縁端部に段をめぐらせる。214は扁平なつまみをもつ。天井部から体部の広い範囲にかけて回転ヘラケズリを施すものの、非常に弱く、やや粗雑な作りである。一方、215は口径11.4cmと、やや小ぶりではあるが、器高は高く、全体的に丸みを帯びる。天井部は平坦面を成し、体部との境は明瞭に折れる。つまみは中心の突出した宝珠状に近い形で、体部の回転ヘラケズリの範囲は広い。

216は有蓋高坏の坏部である。外面は受部の真下で弱く折れる。受部を水平に短く引き出し、工具によって沈線を施す。立ち上がりは1.6cmと高く、わずかに外反しながら急角度で立ち上がる。内面は底部から体部にかけては緩やかで、立ち上がりとの基部で屈曲する。内外面ともに丁寧な作りである。

脚部（217）の裾は外反しながら緩やかに広がり、裾端部はほぼ垂直な面をもつ。端部は短く引き出されるため、内面はくぼむ。

盌（図58　218）

口径6.6cmの小型の製品で、上半部のみの残存のため全体の器形は不明である。底部を欠くものの体部は丸みを帯び、口縁手前でわずかに内湾するが、ほぼ直立気味に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。小破片のため器種の特定が困難であるが、口径や器形から判断して盌に分類した。

壷蓋（図58　219）

口縁部の立ち上がりは高く、中位に弱い沈線が１条めぐる。体部は明瞭に折れ、屈曲部の真下にも１条の沈線をめぐらす。体部から天井部にかけては丁寧な回転ヘラケズリを施す。１号窯Ⅰ次床出土の壷蓋と同様、短頸壷の蓋と考えられる。

甕（図58　220～221）

220は短い口縁部をもち、端部は内傾する面をもつ。口頸部の屈曲は強く、上方からの強いナデによって段を設ける。221は口頸部の屈曲部に沈線および段をもたず、折れるのみである。口縁部はわずかに内湾し、端部は丸く仕上げる。

広口瓶（図58　222）

頸部には強いナデによって弱い凹線を２条めぐらせ、外反しながら口縁部に向かって逆ハの字状に大きく広がる。口縁部をわずかに肥厚させて稜を形成し、口縁端部は面をもつ。内外面にシボリ痕が認められる。

平瓶（図58　223）

口頸部は急角度で立ち上がる。口縁部はわずかだが内湾気味となり、端部は薄く引き上げる。

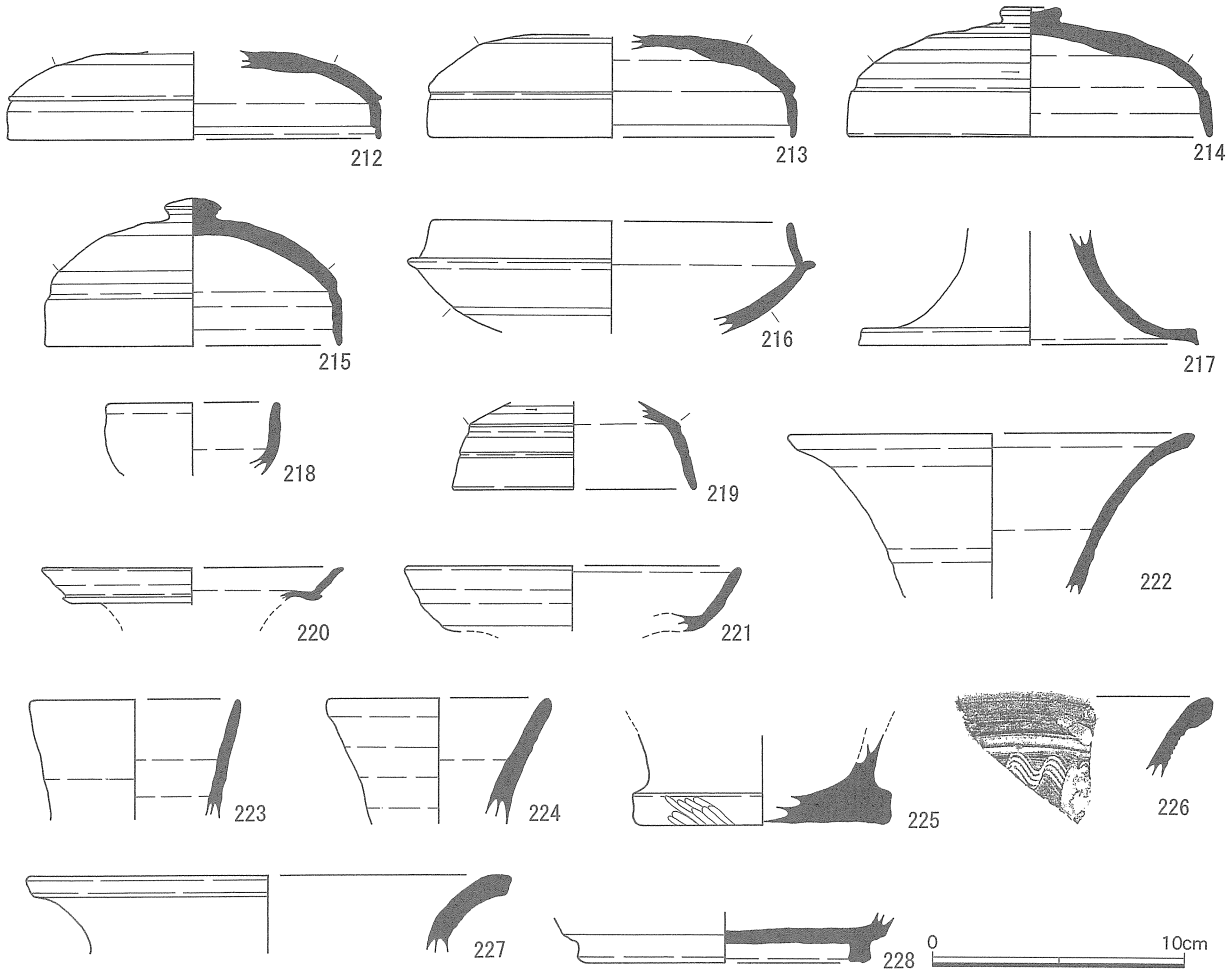


図58　灰原の出土遺物２（1/3）

提瓶（図58　224）

全体的に器壁が厚く、外反気味の短い口頸部である。口縁部は厚みをもたせつつ内湾させ、端部を丸く収める。

陶臼（図58　225）

内面は剥離しているため調整不明である。底部は平底で、外面には工具を用いたナデ調整を施す。円盤状に突出した垂直な側縁面には、部分的ではあるが、ヘラ状の工具で複数回撫でつけたような弱い刻み目が残る。

甕（図58　226・227）

いずれも口縁部を肥厚させる。226の口頸部には２条の沈線がめぐり、その下に波状文が施される。おそらく波状文の下位にも同様に沈線をめぐらせ、上下の沈線による区画を波状文が充填していると推定される。227の頸部は大きく外反し、口縁部外面と端部に面をもつ。面の境は丸みをもち、全体的にややシャープさに欠ける。

有台坏（図58　228）

高台をもつ坏身である。底部外面は回転ヘラケズリを施した後に高台を貼り付け、さらに底部中心付近をナデによって整形する。体部と底部の境は明瞭に屈曲し、体部は開き気味に立ち上がる。胎土の肉眼観察や器形などから、当古窯の製品とは考えにくい。入野高岸古窯が所在する丘陵上には入野東古墳群が分布しており、古墳に伴う須恵器が流入したものと考えられる。

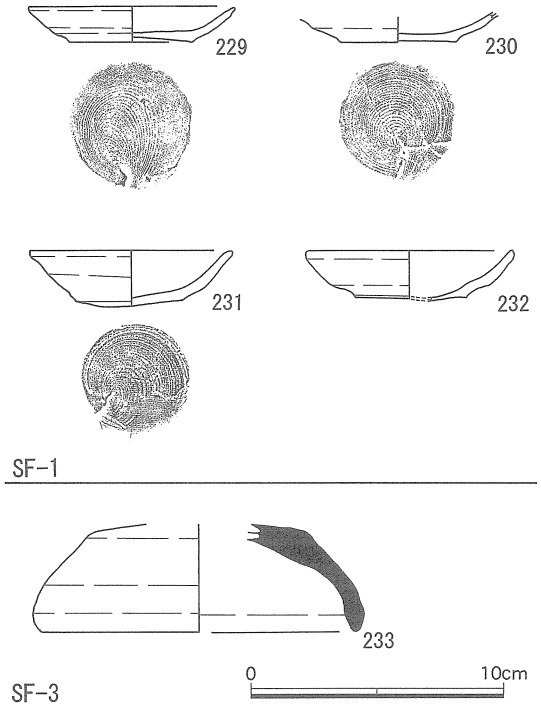


図59　その他の遺構の出土遺物（1/3）

(4)　その他の遺構

SF-１から山茶椀とかわらけが、SF-３からは須恵器と山茶椀が出土した。なお、SF-１出土の山茶椀は小片であるため図化は行わなかった。

SF-１（図59　229～232）

かわらけが４点出土した。いずれも口径は８cm前後で、薄手である。ロクロ成形されており、底部には糸切り痕が残る。底部手前で強いナデによってくぼみ、体部下半に稜をもつ。口縁部は大きく開き、端部は外面で内湾する。内面はいずれも丁寧で平滑な回転ナデである。

SF-３（図59　233）

須恵器の坏蓋が出土した。全体的に厚手で、天井部外面はヘラ切り不調整である。口縁部は肥厚し、端部は先細りする。内面は天井部と体部の境付近が最も器壁が厚く、回転ナデ後に広い範囲で不定方向のナデ調整を施している。

註

1　各部位の名称は基本的に『陶邑古窯址群Ⅰ』（田辺1966）に準拠した。ただし、坏類の口縁部・体部・底部の境界は判断が難しく、『小松市林遺跡』（石川県埋蔵文化財保存協会1993）を参考とした。また、須恵器の器種分類については、三河考古刊行会1999の分類に従った。

2　「坏H」「坏G」の器種名は奈良国立文化財研究所の分類による。（奈良国立文化財研究所　1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』）

3　置台と考えられる須恵器片には二次的な加工は認められず、置台であった確証を示すことは不可能に近い。よって、同一床面から出土した製品と一括して扱った。なお、前項でも述べたように、出土状況や口縁部と体部破片の比率からも、甕の多くが置台として利用されたと考えられる。

4　坏Gに伴うかえり付の蓋は確認できなかった。無蓋として作られたのか、あるいは坏身に分類したなかに蓋として兼用することを意識して作られたものがあるとも考えられる。

5　底部あるいは天井部を回転台から切り離したのち、何の調整も加えないものを呼称する場合、「未調整」「無調整」「不調整」の語句が使用されている。山田邦和氏によると、「未調整」という語句は、本来ならば調整をして完成という意味であり、この場合には調整していない状態が完成形であるため、「不調整」と呼ぶのがふさわしい。当古窯の須恵器も、調整を行っていない状態で完成品として焼成していると考えられる。したがって、「ヘラ切り不調整」の語句を使用した。

6　八賀晋氏は、三重県出土の、天井部あるいは底部が突出する蓋坏について考察を行い、回転台と粘土塊を固定する際に使用した置台の痕跡によるものと指摘した。それによると、６世紀段階から置台は使用されており、６世紀後半以降技法の簡略化に伴って、突出部を削り取らずに完成品とした。（八賀1998）

第４節　理化学的分析

１．入野高岸古窯および衣原古窯出土須恵器の蛍光Ｘ線分析

はじめに

須恵器の産地問題の研究では生産地である窯跡出土須恵器の化学特性を前もって求めておかなければならない。研究の初期の段階で各地の窯跡または窯跡群出土須恵器の化学特性はK-Ca、Rb-Srの両分布図で表せることが見つけられた。また、二つの窯または窯群間の相互識別にはK、Ca、Rb、Srの４因子を使った２群間判別分析が有効であることもわかった。さらに、５％の危険率をかけたホテリングのT^2検定の結果を活用すると、この判別図上で両母集団に帰属するための必要条件も設定することができる。この判別図を使って、消費地遺跡出土須恵器の産地を推定することもできる。筆者の手元には全国各地の窯跡（窯跡群）出土須恵器の分析データが集積されており、須恵器の産地問題の研究は各地で進展している状況である。本報告では、６世紀代後半から７世紀代と推定される入野高岸古窯および衣原古窯出土須恵器（註１）の化学特性を蛍光Ｘ線分析で求めた結果を報告する。

分析法及びデータ解析

須恵器片試料は全て、表面を手動式研磨機で研磨し、表面付着物を除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢で100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして10ｔの圧力を加えてプレスし、内径20㎜、厚さ５㎜の錠剤試料を作成した。

蛍光Ｘ線分析には理学電機製の分析装置、RIX2100（波長分散型）を使用した。この装置には50試料が同時に搭載できる自動試料交換器が連結されており、分析作業は完全に自動化されている。50試料のうちの１個は定量分析のための標準試料である岩石標準試料JG-１である。したがって、測定作業に入るときには必ず、JG-１の各元素の蛍光Ｘ線強度が測定されるわけである。これらの蛍光Ｘ線強度の恒常性をもって装置の定常性がチェックされている。さらに、実試料の分析値は測定された蛍光Ｘ線強度をJG-１の対応する元素の蛍光Ｘ線強度を使って標準化した値で表示された。百分率で表示することの意味はない。岩石学では鉱物組成を求めるため、元素分析のデータから化学組成を百分率で表示する。この場合には化学組成は必要である。しかし、化学組成からは各地の窯跡（窯群）出土須恵器の化学特性を求めることは困難であろう。当然、地域差を把握することはできない。岩石学と同じ方法で土器を分析している研究者が産地推定の作業になかなか入れないのはそのためである。「何をおいても地域差を示す元素を見つけ出す」、これがこの研究のスタート時における筆者の考えであった。筆者の方法を使えば、微量元素RbとSrの測定データも生きてくる。地域差を示すものであれば、主成分元素のみならず、微量元素も活用するという考え方である。

得られた分析データから、直ちに、K-Ca、Rb-Srの両分布図が作成され、定性的に相互識別の可能性が検討された。そののち、２群間判別分析が行われた。

分析結果

表14には分析データをまとめてある。はじめに、衣原古窯出土須恵器の分析結果から説明する。表14のデータに基づいて作成した両分布図を図60に示す。衣原領域を比較のための対照領域として描いてあるが、これは衣原古窯、入野高岸古窯、岡部古窯（註２）の３基の窯跡から出土した試料の分析値をできるだけ多く包含するようにして描いたものであり、定性的な領域を示しているにすぎない。しかし、上記３基の窯の試料の化学特性を比較する上には有効である。図60を見ると、K-Ca分布図では衣原古窯の須恵器は衣原領域の左上部分に偏って分布することがわかる。しかし、Rb-Sr分布図では衣原領域の

表14　須恵器分析表

No.	遺跡名	器種	出土位置・層位	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	入野高岸古窯	高坏	１号窯・Ｖ次床	0. 616	0. 071	2. 44	0. 721	0. 245	0. 183
2		甕	１号窯・Ｖ次床	0. 643	0. 073	2. 27	0. 738	0. 292	0. 232
3		坏蓋	１号窯・Ⅲ次床	0. 573	0. 071	2. 45	0. 626	0. 261	0. 176
4		甕	１号窯・Ⅱ次床	0. 560	0. 059	1. 95	0. 612	0. 330	0. 273
5		甕	２号窯・前庭部	0. 540	0. 101	2. 26	0. 566	0. 480	0. 357
6		蓋坏	２号窯・前庭部	0. 659	0. 052	2. 18	0. 709	0. 318	0. 218
7		瓶類	２号窯・前庭部	0. 560	0. 192	2. 06	0. 683	0. 278	0. 046
8		甕	灰原	0. 585	0. 073	2. 05	0. 621	0. 411	0. 363
9		壷類	灰原	0. 619	0. 075	2. 39	0. 749	0. 265	0. 184
10		坏蓋	灰原	0. 648	0. 064	1. 77	0. 645	0. 337	0. 251
11		高坏	１号窯・前庭部	0. 624	0. 073	2. 37	0. 735	0. 239	0. 181
12		高坏	１号窯・焚口	0. 703	0. 087	1. 98	0. 718	0. 278	0. 157
13		甕	１号窯・Ⅳ次床	0. 618	0. 064	1. 60	0. 699	0. 410	0. 362
14		坏蓋	１号窯・Ⅲ次床	0. 485	0. 107	1. 94	0. 535	0. 262	0. 074
15		フラスコ瓶	２号窯・前庭部	0. 413	0. 153	1. 46	0. 505	0. 429	0. 155
16		甕	２号窯・Ｖ次床	0. 635	0. 106	2. 29	0. 522	0. 513	0. 332
17		甕	２号窯・Ⅱ次床	0. 471	0. 142	1. 91	0. 596	0. 255	0. 064
18		瓶類	２号窯・Ⅰ次床	0. 675	0. 053	2. 16	0. 748	0. 300	0. 202
19		甕	灰原・Ｚ−７グリッド	0. 624	0. 076	2. 26	0. 740	0. 283	0. 235
20		坏蓋	灰原・Ｏ−６グリッド	0. 640	0. 113	2. 47	0. 687	0. 347	0. 315
21		高坏	灰原・Ｈ−７グリッド	0. 534	0. 201	2. 30	0. 687	0. 280	0. 050
22	衣原古窯	坏蓋	１号窯・Ⅱ次床	0. 624	0. 072	2. 15	0. 620	0. 448	0. 414
23		甕	１号窯・埋土	0. 685	0. 044	1. 78	0. 721	0. 283	0. 216
24		壷類	１号窯・埋土	0. 681	0. 078	1. 57	0. 648	0. 490	0. 435
25		坏蓋	灰原	0. 634	0. 064	1. 95	0. 698	0. 264	0. 156
26		提瓶	灰原	0. 623	0. 038	1. 88	0. 705	0. 264	0. 183
27		高坏	灰原	0. 645	0. 038	1. 82	0. 712	0. 251	0. 167
28		坏蓋	土器溜まり	0. 648	0. 066	2. 20	0. 621	0. 440	0. 385
29		甕	土器溜まり	0. 648	0. 112	2. 48	0. 592	0. 415	0. 286
30		壷類	土器溜まり	0. 676	0. 042	1. 86	0. 714	0. 315	0. 260
31		坏身	表土	0. 565	0. 100	2. 60	0. 483	0. 443	0. 438
32		坏蓋	１号窯・Ｖ次床	0. 633	0. 074	2. 16	0. 617	0. 477	0. 451
33		坏蓋	１号窯・Ⅳ次床	0. 526	0. 061	2. 38	0. 410	0. 465	0. 209
34		甕	１号窯・Ⅲ次床	0. 650	0. 128	2. 35	0. 601	0. 427	0. 341
35		甕	灰原・Ｅ−５グリッド	0. 508	0. 099	2. 60	0. 486	0. 431	0. 442
36		坏身	灰原・Ｄ−４グリッド	0. 696	0. 063	2. 28	0. 695	0. 361	0. 325
37		壷類	灰原・Ｚ−８グリッド	0. 627	0. 049	1. 76	0. 752	0. 313	0. 227
38		蓋	土器溜まり	0. 525	0. 056	2. 49	0. 544	0. 411	0. 299
39		坏蓋	土器溜まり	0. 681	0. 060	2. 20	0. 681	0. 366	0. 352
40		坏蓋	土器溜まり	0. 671	0. 055	2. 03	0. 698	0. 336	0. 289
41	衣原11号墳	坏蓋	石室内	0. 309	0. 023	1. 65	0. 438	0. 298	0. 045
42		高坏	石室内	0. 286	0. 105	2. 84	0. 264	0. 397	0. 200
43	秋葉山古窯	1		0. 433	0. 309	2. 09	0. 393	0. 556	0. 377
44		2		0. 478	0. 344	2. 74	0. 430	0. 578	0. 403
45		3		0. 444	0. 322	2. 34	0. 406	0. 550	0. 383
46		4		0. 418	0. 239	2. 14	0. 386	0. 513	0. 346
47		5		0. 432	0. 314	2. 03	0. 398	0. 534	0. 395
48		6		0. 354	0. 195	2. 13	0. 322	0. 445	0. 261
49		7		0. 448	0. 273	2. 12	0. 423	0. 533	0. 380
50		8		0. 454	0. 284	2. 24	0. 408	0. 534	0. 380
51		9		0. 397	0. 200	2. 12	0. 378	0. 454	0. 301
52		10		0. 427	0. 246	2. 08	0. 410	0. 513	0. 331
53	岡部古窯	坏蓋		0. 625	0. 073	2. 20	0. 621	0. 413	0. 453
54		坏蓋		0. 681	0. 102	1. 90	0. 686	0. 460	0. 469
55		坏蓋		0. 425	0. 132	2. 91	0. 498	0. 375	0. 290
56		坏蓋		0. 680	0. 085	1. 81	0. 712	0. 452	0. 483
57		坏身		0. 599	0. 107	2. 89	0. 599	0. 426	0. 445
58		坏身		0. 563	0. 156	3. 96	0. 480	0. 409	0. 359
59		器種不明		0. 418	0. 115	2. 91	0. 443	0. 433	0. 338
60		器種不明		0. 544	0. 138	3. 10	0. 560	0. 444	0. 409

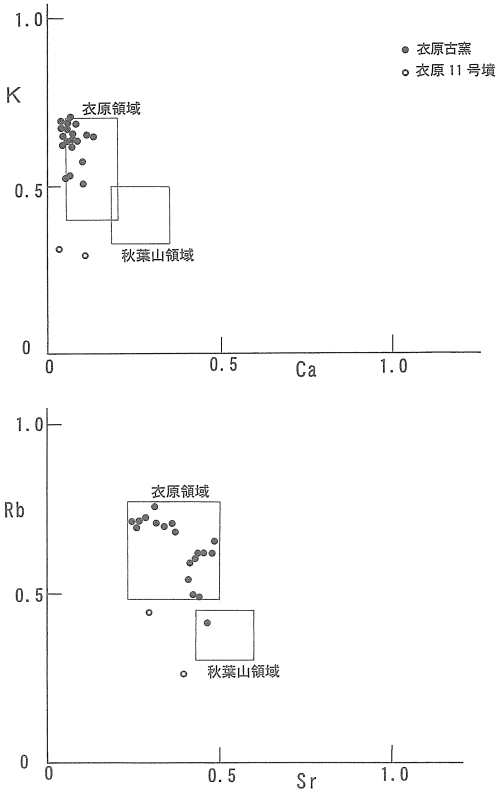


図60　衣原古窯および衣原11号墳出土須恵器の両分布図

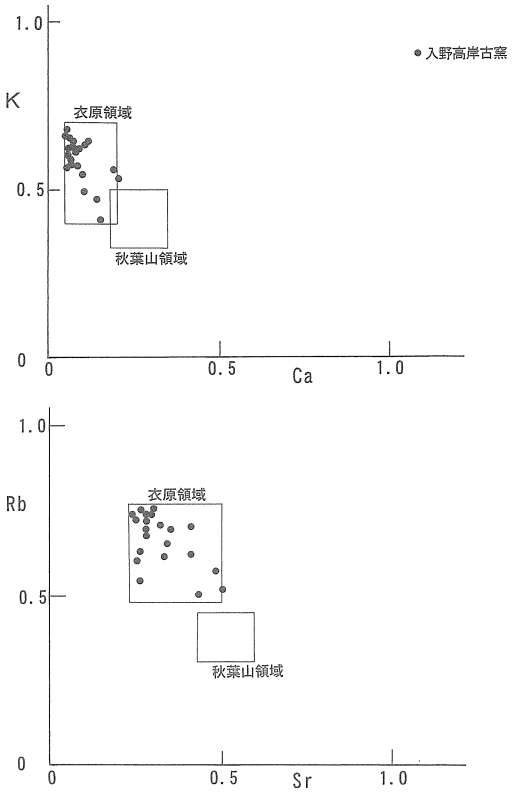


図61　入野高岸古窯出土須恵器の両分布図

ほぼ全体に広がって分布することがわかる。

一方、図61には入野高岸古窯の須恵器の両分布図を示す。K-Ca分布図では衣原古窯の須恵器同様、衣原領域の左上部分に偏って分布しているが、Rb-Sr分布図では領域の全体に広がって分布しており、両分布図からは衣原古窯の須恵器と入野高岸古窯の須恵器は類似した化学特性をもつことがわかる。そこで、両窯の須恵器の２群間判別分析を試みた。その結果は図62に示されている。この図では５％危険率をかけたホテリングのＴ^{2}検定で合格する条件はＤ^2（Ｘ）＜10である。Ｘは母集団名である。図62では衣原古窯の試料のほとんどはＤ^2（衣原）＜10の領域に分布しており、入野高岸古窯の試料のほとんどもＤ^2（入野高岸）＜10の領域に分布していることがわかる。しかし、両群の試料の化学特性が類似すると、両群の試料は互いに接近して分布するようになり、理想境界線に沿って、重複領域（Ｄ^2（衣原）＜10、Ｄ^2（入野高岸）＜10）に分布することになる。図62を見ると、入野高岸古窯の数点の試料は入野高岸領域に分布するものの、両群のほとんどの試料は理想境界線沿いに重複領域に分布しており、両窯の須恵器は類似した胎土をもつことを示している。このことは両群の試料の両分布図からも予想されたことである。

図63には岡部古窯出土須恵器の両分布図を示す。K-Ca分布図では衣原領域の全域にわたって分布しており、衣原古窯および入野高岸古窯出土須恵器試料群の分布とは少し異なることがわかる。同様に、Rb-Sr分布図でも衣原領域の右下方に偏在して分布しており、衣原古窯および入野高岸古窯の須恵器胎土とは少し化学特性が異なることが分かる。判別分析の結果は図64に示されている。半数近い試料は重複領域に分布するものの、両群の試料は分散し、理想境界線沿いに集団をつくって分布することはない。素材粘土が同じではないことを示している。このことは岡部古窯の素材粘土の採集場所が少し離れた所であることを示唆している。

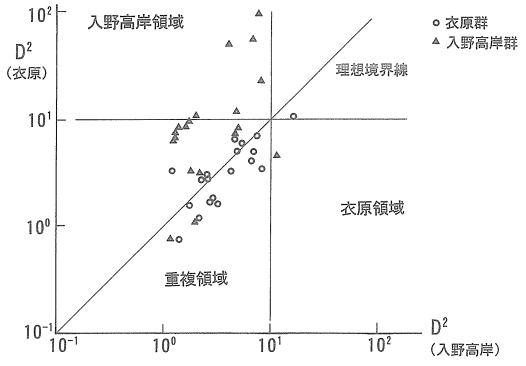


図62　入野高岸群と衣原群の相互識別

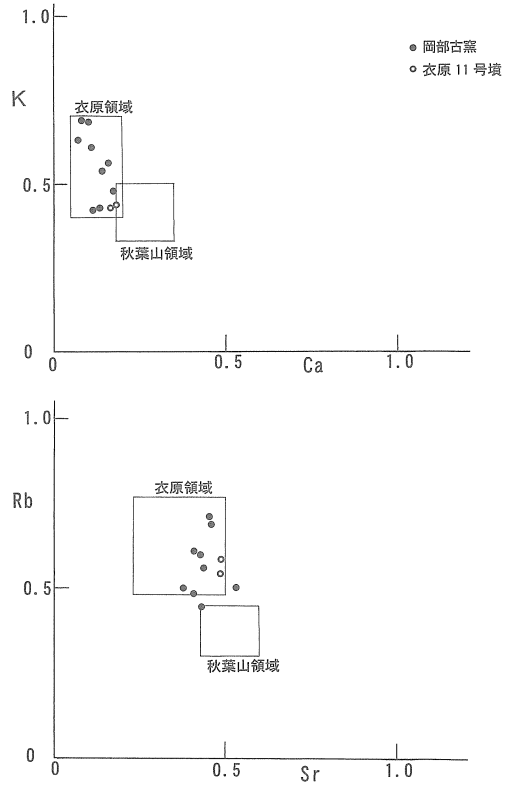


図63　岡部古窯出土須恵器の両分布図

次に、秋葉山古窯（註３）の須恵器の両分布図を図65に示す。全ての試料を包含するようにして、秋葉山領域を描いた。衣原領域とは異なることは明白である。秋葉山群と衣原群間の２群間判別分析の結果は図66に示されている。両群の試料集団は互いに遠く離れて分布しており、相互識別は完全である。秋葉山古窯の須恵器の素材粘土は衣原古窯や入野高岸古窯はもちろん、岡部古窯の須恵器の素材粘土とも異なることは明らかである。

最後に、衣原11号墳出土須恵器の分析結果は図60に衣原古窯の須恵器とともにプロットしてある。図には陶邑領域は入れてないが、陶邑領域には対応しない。したがって、陶邑産の須恵器ではない。同時に、衣原領域にも対応しておらず、衣原古窯の製品でもない。目下の所、産地不明である。

考察

衣原古窯と入野高岸古窯の須恵器の素材粘土が同じであるということは、両窯が同じ地域内にあることからも理解できる。岡部古窯の須恵器粘土も基本的には衣原古窯や入野高岸古窯の須恵器粘土と同じである。同じ地質から生成した粘土が素材となっていると考えられる。微妙なずれは粘土の採集場所の違いである。このようなことは全国各地の窯跡群で見られることである。このことは岩石が風化し、塩類が水に溶けた溶液から粘土鉱物が再結晶して粘土が生成するという粘土生成のプロセスを考慮に入れれば、粘土化は非常に狭い範囲で進行することを示唆している。その結果、微妙な地域差が生じる。自然界に見られる不均質性が原因と考えられる。

しかし、基本的に化学特性が類似するということは母岩が共通していることを示唆しており、化学特性に見られる微妙な地域差は「場所」の違いを示すと考えられる。大規模窯群である和泉陶邑でもこのようなことは観測されており、１基の窯跡から採集した試料集団はまとまって狭い範囲に分布し、一つの領域をつくるが、時代の異なる別の窯跡から出土した試料集団は微妙にずれて分布した。時代が異なるから、当然、粘土の採集場所は異なるはずである。自然界に不均質性が見られるのが当然であれば、同一窯群内の窯跡出土須恵器の化学特性にも微妙な地域差が見られるのも理解できる。この結果、窯跡群としては領域が１基の窯跡の広がりに比べて大きくなる。

他方、秋葉山古窯の須恵器は衣原、入野高岸古窯や岡部古窯の須恵器に比べて、K、Rb量が少なく、逆に、Ca、Sr量は多い。明らかに化学特性は異なる。このことは秋葉山古窯の須恵器の粘土は異なる地質の岩石に由来する粘土であることを示している。この違いを活用すれば、秋葉山古窯の製品が周辺の

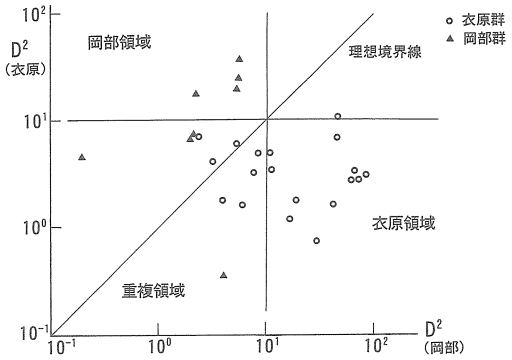


図64　衣原群と岡部群の相互識別

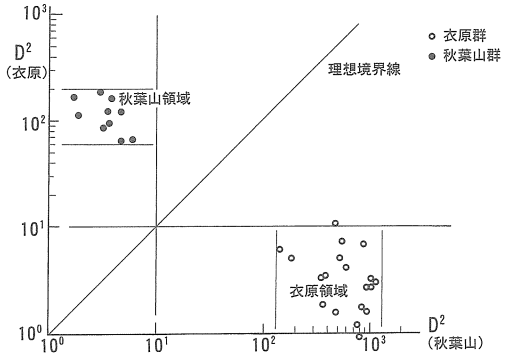


図66　衣原群と秋葉山群の相互識別

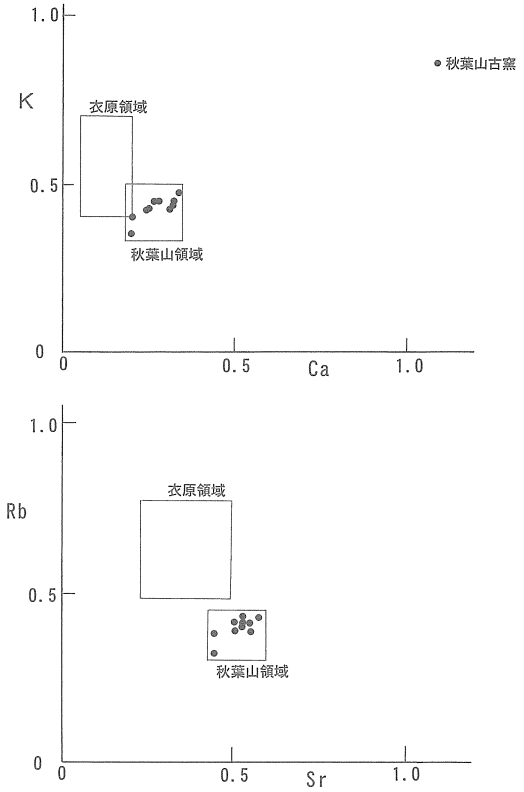


図65　秋葉山古窯出土須恵器の両分布図

どこの消費地遺跡に供給されていたかは元素分析によって容易にわかるはずである。今後の研究の課題である。

衣原11号墳の須恵器の産地は不明であるが、両分布図での分布位置から静岡県内の須恵器と推定される。猿投窯の製品でもない。今後、衣原古墳群として多数の須恵器片を分析し、そのデータを年代観を入れて解読し、さらに、周辺の古墳群の須恵器の分析データと比較すれば興味深い情報が得られるものと思われる。

※　註は編集側で、必要に応じ附した。

註

1　衣原古窯は平成15年度の第二東名建設事業に伴う発掘調査として調査を実施した遺跡である。現在、資料整理と報告書作成を実施中である。

2　「岡部古窯」は、所在を含め未確認の窯であるが、岡部町教育委員会が所有する岡部町内表面採取資料の中に融着した資料の一群があり、町内に須恵器窯が存在した可能性が考えられる。そのため、ここではその資料の一群を、「岡部古窯」と仮称し、一括して取り扱う。なお、「岡部古窯」は製品の特徴から８世紀代に位置付けることができる。

3　秋葉山古窯は静岡市清水区に所在する６～７世紀の須恵器窯である。ここで、分析した資料は当研究所職員　及川司から借用したものである。

2．入野高岸古窯から出土した炭化材の年代と樹種

はじめに

入野高岸古窯は、朝比奈川右岸の低地に張り出した丘陵端部の南斜面に位置する。発掘調査により、古墳時代後期の須恵器窯が検出されている。

本報告では、１号窯および２号窯の操業年代に関する資料を得るため、灰層や床面から出土した炭化材を対象として放射性炭素年代測定を実施する。また、燃料材の木材利用に関する資料を得るため、炭化材の樹種同定を併せて実施する。

試　料

試料は、１号窯と２号窯から出土した炭化材４点（遺物番号W-４～７）である。各試料の詳細は、分析結果とともに表15に記す。

分析方法

放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行う。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

結　果

放射性炭素年代測定

結果を表15・16に示す。得られた補正年代は、２号窯焚口出土炭化材（遺物番号W-７）が1720±40BPとやや古く、１号窯排煙調整溝・１号窯前庭部・２号窯改修後前庭部出土炭化材（遺物番号W-４～W-６）がそれぞれ1510±40BP、1450±40、1530±40BPと比較的近似する値である。較正年代では、W-７がcal. AD258-383、W-４がcal. AD474-612、W-５がcal. AD579-642、W-６がcal. AD436-578である。W-７で所見よりもやや古い年代値が得られている。今後は、同一遺構・同一層準から出土した炭化物等の測定点数を増やすことにより、更に詳細な年代資料が得られると思われる。

表15　採取試料年代測定結果一覧

遺物番号	遺構	位　置	層　位	質	樹　　種	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
W-4	１号窯	排煙調整溝	床面	炭化材	コナラ属クヌギ節	1510±40	−29.59±0.84	1580±40	IAAA−42236
W-5	１号窯	前庭部	灰層	炭化材	コナラ属クヌギ節	1450±40	−26.21±0.99	1470±40	IAAA−42237
W-6	２号窯	改修後前庭部	灰層（上層）	炭化材	アサダ	1530±40	−29.00±0.74	1600±40	IAAA−42238
W-7	２号窯	焚口	最終床直上	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	1720±40	−28.94±0.91	1780±40	IAAA−42239

１）年代値の算出には、LIBBYの半減期5,568年を使用。
２）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

樹種同定

結果を表15に示す。炭化材は、広葉樹３種類（アサダ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属アカガシ亜属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・アサダ（Ostrya japonica Sarg.）　　カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または放射方向に２-４個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１-３細胞幅、１-30細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris）　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１-２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）　　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

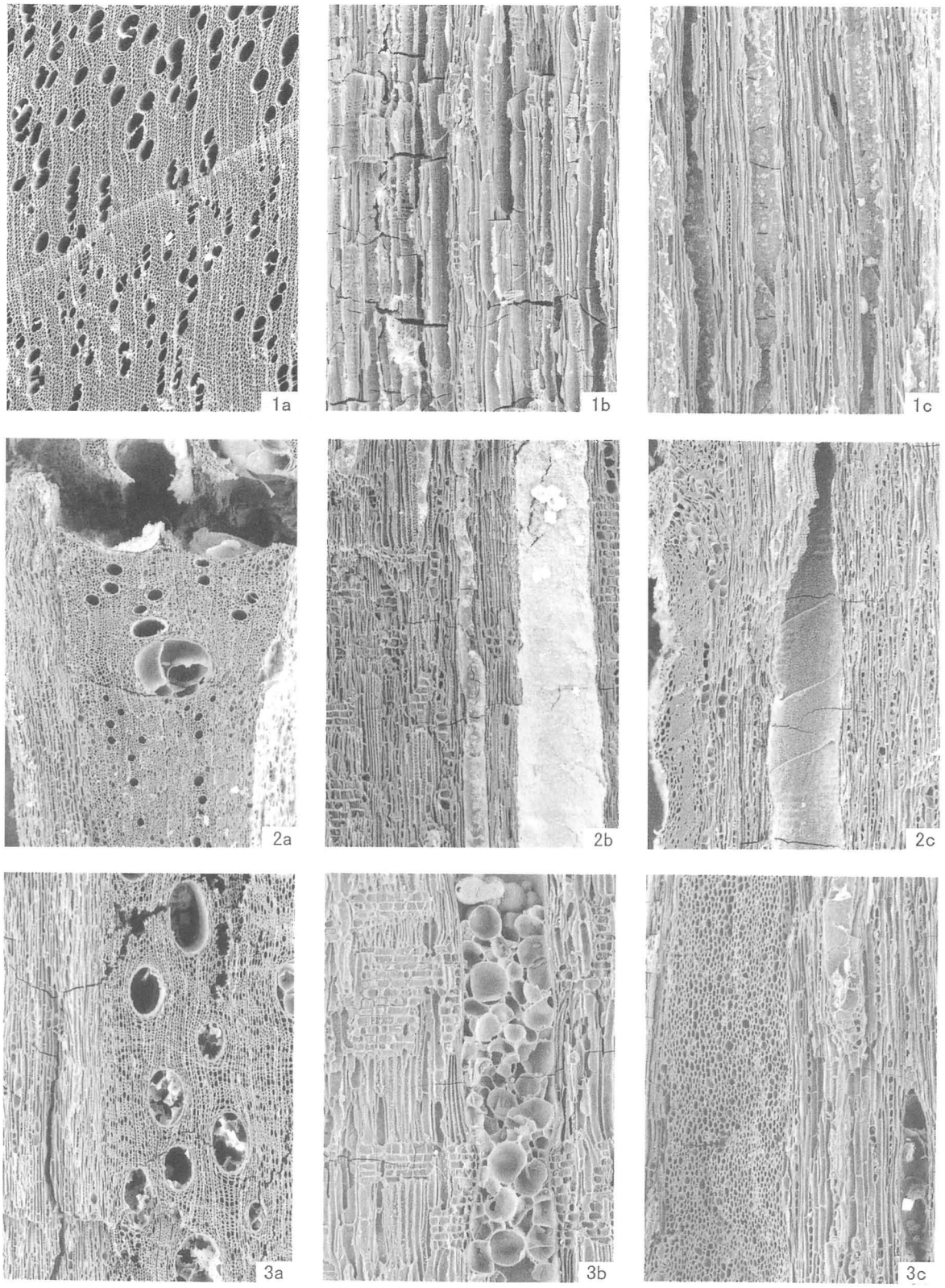
木材利用について

１号窯および２号窯から出土した炭化材は、窯で使用された燃料材が残存した可能性がある。１号窯ではクヌギ節、２号窯ではアサダとアカガシ亜属が認められた。いずれも重硬で強度が高い材質を有する種類である。この結果から、窯では硬い材質の木材を燃料材として利用していたことが推定される。また、須恵器は還元炎で焼成されることから、生木よりも還元効果の高い木炭を燃料として利用した可能性がある。いずれも現在の遺跡周辺や後背の山地に生育している樹種であり、当時周辺に生育していた樹木を燃料材として利用したことが推定される。本地域では、同時期の燃料材について樹種を明らかにした例が少ないため、今後周辺遺跡における分析例を蓄積することが望まれる。

表16　測定年代一覧表

遺物番号	補正年代(BP)	暦年較正年代（cal）		相対比	Code No.
W-4	1506±37	cal AD 474 － cal AD 475	cal BP 1,476 － 1,475	0.011	IAAA－42236
		cal AD 535 － cal AD 612	cal BP 1,415 － 1,338	0.989	
W-5	1454±42	cal AD 579 － cal AD 642	cal BP 1,371 － 1,308	1.000	IAAA－42237
W-6	1534±38	cal AD 436 － cal AD 489	cal BP 1,514 － 1,461	0.458	IAAA－42238
		cal AD 512 － cal AD 516	cal BP 1,438 － 1,434	0.028	
		cal AD 530 － cal AD 578	cal BP 1,420 － 1,372	0.513	
W-7	1716±39	cal AD 258 － cal AD 297	cal BP 1,692 － 1,653	0.385	IAAA－42239
		cal AD 320 － cal AD 383	cal BP 1,630 － 1,567	0.615	

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用。
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。



1．アサダ（W-6）
2．コナラ属コナラ亜属クヌギ節（W-5）
3．コナラ属アカガシ亜属（W-7）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b,c

写真19　炭化材

３．入野高岸古窯の考古地磁気学的研究

はじめに

地球は一つの大きな磁石となっている。それがつくる磁場は、地球の中心に、小さいが非常に強力な棒磁石（これを地磁気双極子という）を置いたときに生ずる磁場として近似することができる。この磁場を‘地磁気’または‘地球磁場’という。実際には、地球の中心部は数千度という非常に高温のために、いかなる磁石も存在し得ない状態であると考えられる。地下2,900㎞以深の地球の中心部は中心核と呼ばれ、電気伝導度の高い金属から成っていて、特に2,900～5,100㎞の外核と呼ばれている部分では、その金属が融けて液体になっており、それが地球中心部に存在する強磁場中を流動することによって発電し、核内に電流が流れる。その電流によって磁場が発生するというメカニズムで、地磁気が維持されているのである。これを地磁気ダイナモ説という。地球の自転による自転軸のまわりの回転運動と外核内の温度差に起因する熱対流が金属流体の流動運動を引き起こしていると考えられている。地球の自転の運動エネルギーと高温の中心部の熱エネルギーを消費しながら、ダイナモ（発電機）が働いて地球磁場が維持されていることになる。

土に１～３％程度含まれる磁性鉱物（磁石になることができる鉱物）は、基本的には鉄酸化物の磁鉄鉱（Fe_3O_4）や赤鉄鉱（Fe_2O_3）であるが、通常は、少量のチタンが鉄の代わりに置き換わった、チタン磁鉄鉱（$(Fe,Ti)_3O_4$）やチタン赤鉄鉱（$(Fe,Ti)_2O_3$）である場合が多い。土が焼かれて、土中に含まれるこれらの磁性鉱物粒子も高温（600～700℃以上）にまで熱せられると、磁石になる性質（磁性）を失ってしまう。しかし、この特性の変化（これを転移という）は可逆的で、温度が下がれば、再び磁性がよみがえって、もとのように磁石になることができるのである。ただし、そのときの磁石の向き（磁化方向）は、その場所に磁場が存在すればその磁場の向きと同じ方向になる。地球上ではどこでも地球磁場が存在しているので、その時、その場所の地磁気と同じ磁化方向を持つ磁石となるのである。このようにして焼土が獲得した磁化を熱残留磁化（thermoremanent magnetization、略して、TRM）といい、昔に焼かれた焼土であれば、焼かれた当時の昔の地磁気を記憶する目には見えない‘地磁気の化石’となる。

考古遺跡に残されている焼土がもっている‘地磁気の化石（残留磁化）’を測定して、考古学が扱う過去の時代にまでさかのぼって、地磁気の変動の様子を明らかにし、地磁気を復元する研究を考古地磁気学（archeomagnetism）という。

考古地磁気永年変化

地磁気は数十年～百年程度の長期間かかってやっとはっきりわかるような、長周期のゆっくりとした変化をする。このような地磁気の変動を地磁気永年変化（geomagnetic secular variation）という。地磁気の直接観測によって得られた偏角・伏角の最古の観測記録は、16世紀中頃以降、英国ロンドンのグリニッヂで得られている。それ以来の400年余りの継続観測記録を見ると、地磁気方位は明らかに変わっており、永年変化が認められる。しかし、その変動周期は、もっと長いものらしく、この観測期間内では周期性は得られていない。ひょっとしたら、ランダムな変動をしていて周期性などは無いのかも知れない。

観測の記録が無い、より古い時代にまでさかのぼって地磁気の変動の様子を調べるためには、残留磁化を測定する考古地磁気学的手法によらねばならない。考古地磁気測定によって得られた永年変化を観測記録から得られた永年変化と区別するために、考古地磁気永年変化（archeomagnetic secular variation、または、archaeo-secular variation）という。

東海・北陸地方から北部九州に至る西南日本各地の遺跡に残された焼土の考古地磁気学的測定によって、過去2,000年間の考古地磁気変動が相当詳しく調べられており、西南日本における考古地磁気永年変化曲線（Hirooka1971・1983・1991、広岡1977）として、考古地磁気年代推定に利用されてきた。窯跡や炉跡の焼土の残留磁化を測定し、得られた磁化方向を上記の考古地磁気永年変化曲線と照合することによって、考古地磁気学的に年代を推定することができるのである。

また、北陸地方（福井・石川・富山３県に新潟県西部を加えた地域）や、東海地方（岐阜・愛知・三重３県と静岡西部を加えた地域）で得られたデータのみを用いて決められた北陸版（広岡1989）および東海版（広岡・藤澤2003）考古地磁気永年変化曲線も得られており、北陸や東海地方の遺跡の考古地磁気年代推定に供されている。

考古地磁気試料の採取と測定

入野高岸古窯では、１号窯からは12個（試料番号:SSZ１～12)、２号窯からは13個（SSZ21～33）の総計25個の考古地磁気測定試料を採取した（表17)。これらは全て、方位が詳しく測られた定方位試料である。定方位試料の採取は、我々のグループが試行錯誤の末に確立した採取法で、石膏で固めて石膏表面に平面をつくり、その面の方位を測定してから採る方法である。この方法によって比較的短時間に精度のよい定方位試料が得られる。

定方位サンプルの採取方法の手順は次のとおりである。

１）まず、古窯跡床面のよく焼けている部分を選んで、試料として採取する焼土（こぶし大）の周りに深さ数cmの溝を掘る。この時、焼土が動かないように、焼土の根元部分が遺構につながったままの状態が保たれるように気を付ける。溝が掘り上がったら、こぶし部分の土片や土埃をきれいに取り除いておく。

２）次いで、多めの水で溶いた石膏をその部分にかけ、全体がくずれないようにする。その後、濃いめに溶いた石膏を焼土の表面にのせ、数cm角のアルミ板を押し付けて石膏の上面に平面をつくる。先に薄い石膏をかけるのは焼土表面の細かい凹凸の中にも石膏がしみ込んで補強するのと、後でかける濃い石膏とよく馴染んで試料が壊れにくくなるからである。

３）石膏が固まった後に、アルミ板をはがして、石膏平面の最大傾斜線（これをpitchという）の方位とその傾斜角（dip）を考古地磁気試料採取用に特に改造された特製クリノメーター（Hirooka、1971）で測り、野帳に記録する。石膏平面には、その面の走向（strike）と傾斜方向を示す３点と試料の番号を油性マーカーで記す。

４）１本刃の手鍬を用いて石膏で固めた試料を遺構から掘り起こす。

５）試料の裏面にも石膏をかけて補強した後、１個ずつ壊れないように紙で包む。

通常、遺構の大きさにかかわらず、１遺構当りこのような試料を10～15個採取して、研究室に持ち帰る。

表17　入野高岸古窯から採取した考古地磁気試料個数と試料番号

古窯名	試料個数	試料番号
入野高岸１号窯	12	SSZ1～12
入野高岸２号窯	13	SSZ21～33

Lat.：34°54′46.8″N、　Long.：138°15′57.6″E、　D_{2001}＝－6.04°

方位の測定にはクリノメーター（特製クリノコンパス）の磁針を用いているので、磁北を基準にした方位となる。したがって、磁北が真北からずれている角度（現在の偏角）分だけ偏ったものになっている。

遺跡現場の現在の偏角を求めるために、遺跡現場でトランシットによる太陽の方位観測を行った。その地点の緯度・経度がわかれば、観測時刻の太陽の方位角は、理科年表に掲載

されている当日の太陽の赤経・赤緯の値から計算することができる。ここで求められる方位角は、地理学的な北、すなわち、真北を基準にした方位である。一方、遺跡現場で観測された太陽の方位角は、トランシットの磁針が指す北・磁北を基準にした方位角であるので、計算値と観測値の差が、磁北が真北からずれている角度、すなわち、遺跡現場における現在（観測時）の偏角を与えることになるのである。

得られた2001年現在の偏角（D_{2001}）の値は、西偏6.04°（D_{2001}＝－6.04°）となった。遺跡現場の緯度（Lat.）・経度（Long.）とともに、D_{2001}の値も表17に載せてある。残留磁化測定結果の偏角はこの値を用いて真北を基準にしたものに補正されている。

残留磁化の測定には夏原技研製のリングコア型スピナー磁力計（SMM-85型）を使用し、試料１個につき６回置き直しをして測定した。縦型のこの磁力計では、回転軸は鉛直方向であるので、１回で回転軸に垂直な平面（水平面）内の直交２成分の磁化を測定することができる。したがって、６回置き直すと12成分が得られ、３次元ベクトルである磁化ベクトルの直交３成分（Ｘ・Ｙ・Ｚ）のそれぞれを４回ずつ測ることになる。これら４個の値の平均値をＸ・Ｙ・Ｚのそれぞれの磁化成分とする。

試料が保持している自然残留磁化（natural remanent magnetization、略して、NRM）には、最終焼成後に付加された不安定な磁化成分も含まれており、それを効果的に除去するためには、段階交流消磁実験を行うとよい。今回は消磁磁場の段階として、2.5mT、5.0mT、7.5mT、10.0mTの４段階を設定した。NRMの測定の後、この４段階で消磁を行った。段階ごとに、磁化強度の減少度を参考にしながら磁化方向のまとまり具合を見て、最もまとまりがよくなる段階を選定して、それを最適消磁段階とし、その時の平均磁化方向を考古地磁気データとして採用する。考古地磁気年代推定は、こうして得られた考古地磁気データを用いて行われる。

表18　１号窯のNRMの磁化測定結果

試料番号		偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
＊SSZ	1	−84.4	81.8	2.24
	2	−21.3	62.0	5.50
	3	−18.8	71.8	7.24
	4	−15.0	61.1	3.91
＊	5	−14.6	48.7	3.54
	6	−23.0	65.5	2.77
	8	1.9	64.5	2.56
	9	−5.2	61.6	3.81
＊	10	48.1	44.7	2.31
＊	11	74.4	60.0	1.68
	12	0.8	63.4	2.98

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの。

表19　１号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
＊SSZ	1	−89.7	82.5	2.17
	2	−20.8	62.1	5.44
	3	−18.3	71.7	7.20
	4	−14.4	60.6	3.77
＊	5	−17.1	48.7	3.50
	6	−22.5	65.3	2.75
	8	−2.7	65.4	2.52
	9	−6.4	61.7	3.73
＊	10	47.9	44.0	2.25
＊	11	71.9	59.4	1.61
	12	1.1	63.8	2.94

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの。

表20　１号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
＊SSZ	1	−132.8	81.6	1.87
	2	−22.6	63.0	5.27
	3	−19.0	72.2	7.16
	4	−13.8	60.2	3.15
＊	5	−19.1	48.2	3.28
	6	−23.5	66.0	2.48
	8	−6.2	66.4	2.19
	9	−9.0	62.4	3.33
＊	10	50.3	42.5	2.02
＊	11	76.8	57.0	1.32
	12	5.4	63.5	2.61

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの。

入野高岸１・２号窯のNRMおよび上記４段階の消磁後の残留磁化測定結果は表18～27に示されている。これらの表中に＊印を付けた試料は、磁化方向が大きくずれて、とても地磁気の化石とはいえない向きに磁化しているものである。試料中に大きな礫（十分に温度が上がっていない）が含まれているか、天井や窯壁片が紛れ込んでいた部分を試料として採取したのか、あるいは、磁化獲得後に動かされた部分であったのかなど、何らかの理由で磁化が当時の地

表21　１号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
＊SSZ	1	−161.2	74.7	1.52
	2	−23.7	62.8	4.73
	3	−18.5	72.7	6.90
	4	−13.5	61.5	2.39
＊	5	−20.9	47.2	2.82
	6	−25	66.8	2.10
	8	−6.6	66.5	1.76
	9	−9.4	62.7	2.82
＊	10	55.9	38.9	1.81
＊	11	87.3	53.2	1.07
	12	7.4	64.3	2.27

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの。

表22　１号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
＊SSZ	1	−170.5	66.3	1.29
	2	−24.4	63.7	4.29
	3	−18.1	73.5	6.77
	4	−13.6	63.4	1.73
＊	5	−23.9	43.2	2.27
	6	−27.7	68.7	1.68
	8	−6.5	68.8	1.40
	9	−11.7	63.8	2.30
＊	10	59.9	36.0	1.61
＊	11	95.1	49.8	0.918
	12	11.3	64.0	1.92

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの。

表23　２号窯のNRMの磁化測定結果

試料番号		偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
SSZ	21	7.5	54.3	0.138
	22	4.5	54.7	0.141
	23	0.4	61.5	0.132
	24	13.3	60.1	0.347
＊	25	−23.9	75.9	0.586
＊	26	−7.0	55.7	0.485
＊	27	2.2	29.2	0.293
	28	3.6	47.2	1.120
	29	8.7	62.5	0.594
＊	30	58.4	39.4	0.347
＊	31	63.2	−37.4	20.200
	32	2.2	63.2	0.282
	33	11.1	59.7	0.593

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの。

表24　２号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
SSZ	21	9.1	51.7	0.135
	22	1.5	51.8	0.133
	23	−2.1	58.5	0.129
	24	12.0	59.2	0.340
＊	25	−28.8	74.5	0.550
＊	26	−16.9	60.1	0.455
＊	27	0.1	28.5	0.275
	28	3.1	48.9	1.010
	29	5.1	61.6	0.541
＊	30	54.9	36.0	0.302
＊	31	62.8	−37.5	19.600
	32	0.7	61.2	0.271
	33	9.0	57.1	0.556

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの。

表25　２号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
SSZ	21	1.6	50.0	0.119
	22	1.3	51.6	0.115
	23	−2.6	54.5	0.112
	24	10.2	58.0	0.251
＊	25	−45.4	73.1	0.428
＊	26	−50.1	60.1	0.310
＊	27	−2.2	28.1	0.228
	28	3.9	49.3	0.688
	29	−2.6	60.0	0.381
＊	30	66.3	19.6	0.208
＊	31	63.1	−37.7	20.000
	32	−0.1	60.3	0.213
	33	0.7	55.7	0.349

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの。

表26　２号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
SSZ	21	4.8	48.6	0.1060
	22	−2.1	49.2	0.0982
	23	−1.2	52.2	0.0972
	24	7.0	56.4	0.1700
＊	25	−59.3	71.9	0.3590
＊	26	−71.3	51.4	0.2250
＊	27	−3.0	26.1	0.1760
	28	5.5	47.3	0.4820
	29	−4.7	59.7	0.2690
＊	30	75.6	−7.0	0.1810
＊	31	63.9	−38.1	19.8000
	32	−2.1	60.7	0.1560
	33	−0.7	51.7	0.2070

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの。

磁気方位とは大きくかけ離れてしまったものと考えられる。このような試料は、１号窯では４個（SSZ１，５，10，11）、２号窯では５個（SSZ25，26，27，30，31）にのぼる。試料総数の中の３分の１から半数近い試料がこのような外れた磁化方向を示すのは異例である。特に、２号窯では、SSZ31を除く全ての試料の磁化強度が、通常の場合の10分の１の強さの10^{-5}（Am^2／kg）のオーダーを示しており、十分に高温にまで焼かれたとは言い難い状況である。

上記のような外れた磁化方向を示す試料を除外して、両古窯のNRMから10.0mTまでの各消磁段階で、段

階ごとに平均磁化方向および統計的なばらつきの程度を表すパラメータ（フィッシャーの信頼角：α_{95}と、フィッシャーの精度係数：K）を計算によって求めた。統計計算にはフィッシャーの統計法(Fisher1953)を用いた。統計処理の結果は表28にまとめられている。最適消磁段階は【　】で括って示されている。１号窯の最適消磁段階は2.5mT、２号窯のそれは5.0mTとなった。

同表の平均磁化強度を見ると、先にも述べたように、１号窯は10^{-4}（Am^2／kg）のオーダーの磁化強度を保有しており通常のよく焼成された窯跡の強度を示しているが、２号窯は10^{-5}のオーダーとなっており、加熱が若干不十分であったことを窺わせる。

また、両窯ともに磁化方向のばらつきの度合いを示すフィッシャーの信頼角（α_{95}）が３°を超えているので、磁化方向のまとまりはあまりよくない。通常のまとまりのよい窯の場合は３°未満である。

考古地磁気年代推定

表28の最適消磁段階の考古地磁気データ（【　】で括ったもの）を東海版考古地磁気永年変化曲線に載せたのが図67である。図中のドットが各窯の平均磁化方向を示しており、それを囲む円がフィッシャーの信頼円（α_{95}）で、誤差の範囲を表す。推定年代幅（年代誤差）は信頼円が覆う永年変化曲線の線分の長さとなる。東海版永年変化曲線では、A.D.700年以前の曲線は求められていないので、西南日本版の曲線変化を考慮して推定するしか方法がない。また、A.D.1150年～A.D.1350年の期間は永年変化量が小さく地磁気の動きがあまりないため、信頼円が小さくても相当な年代幅となり、年代推定の分解能が落ちる時期に当たっている。

この図を見ると、１号窯は西偏偏角で深い伏角を示し、永年変化曲線の未完部分に当たっているが、西南日本版永年変化曲線のA.D.600～700年部分とも比較して年代を推定すると、７世紀中頃となろう。

一方、２号窯の平均磁化方向は、わずかに東偏偏角で、伏角は１号窯より10°近く浅く、誤差の大きさ（信

表27　２号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
SSZ	21	4.3	48.1	0.0936
	22	0.0	47.4	0.0839
	23	−2.8	49.7	0.0853
	24	2.9	56.2	0.1210
＊	25	−70.7	71.1	0.2860
＊	26	−86.1	37.9	0.1720
＊	27	−1.6	24.0	0.1440
	28	6.0	46.7	0.3770
	29	−5.9	58.8	0.2070
＊	30	87.1	−26.8	0.1770
＊	31	63.8	−38.8	19.4000
	32	−1.5	59.2	0.1170
	33	−4.2	50.2	0.1360

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの。

表28　１・２号窯の考古地磁気測定結果

遺構名	消磁段階	n/N	D（°E）	I（°）	α_{95}（°）	K	平均磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
１号窯	NRM	7/11	−11.2	64.6	4.36	192.8	4.11
	【 2.5mT	7/11	−11.8	64.6	4.07	220.5	4.05 】
	5.0mT	7/11	−12.4	65.1	4.37	191.5	3.74
	7.5mT	7/11	−12.5	65.7	4.51	180.2	3.28
	10.0mT	7/11	−12.6	67.0	4.85	155.7	2.84
２号窯	NRM	9/13	4.7	57.8	3.88	177.0	0.426
	2.5mT	8/13	4.8	56.3	3.77	217.3	0.389
	【 5.0mT	8/13	1.6	55.0	3.36	273.2	0.279 】
	7.5mT	8/13	1.0	53.3	3.92	200.9	0.198
	10.0mT	8/13	0.0	52.1	3.98	194.8	0.153

n/N：採択試料個数／採取試料個数　D：平均偏角　I：平均伏角　α_{95}：フィッシャーの信頼角　K：フィッシャーの精度係数。
【　】：考古地磁気データとして採用したもの。

頼円に囲まれる範囲）を考慮しても、信頼円が重ならず離れていることからも、明らかに１号窯とは異なる方向である。２号窯は考古地磁気学的には11～13世紀の年代となるが、永年変化曲線上に載らずに中間の磁化方位を示しているので、複数の考古地磁気年代値が得られる。

図67から推定される考古地磁気年代は、

入野高岸１号窯　：A.D.650±70年

入野高岸２号窯　：A.D.1060±30年　又は　A.D.1300±150年

となろう。

今回の考古地磁気測定では、推定された考古地磁気年代値の年代幅（年代誤差）が非常に大きいが、これはα_{95}が4.07°（１号窯）と3.36°（２号窯）のように大きな値となったためと、２号窯の磁化方位が地磁気の変動速度が遅かった時代のものに当たっているためである。

出土遺物からは１号窯と２号窯ではほとんど時代差がないとのことであるが、今回の測定結果では磁化方向が明らかに異なるので、考古地磁気学的には大きな年代差が存在することとなった。この原因はよくわからない。２号窯が後の時代（中世）に再使用されたか、あるいは、最終焼成後に２号窯全体が地滑りやその他の原因で西に傾動したというようなことを考えなければ説明がつかない。

引用文献

Fisher, R.A. 1953 Dispersion on a sphere, *Proceedings of Royal Society of London*, Series A, vol.217, 295-305.

Hirooka, K. 1971 Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan, *Me moirs of Faculty of Science*, Kyoto University, series of Geology & Mineralogy, 38, 167-207.

広岡公夫　1977 「考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向」『第四紀研究』vol.15, 200-203.

Hirooka, K. 1983 Archaeomagnetism of baked clays:Results from Japan. in 'Geomagnetism of Baked Clays and Recent Sediments', ed. by K.M.Creer, P.Tocholka and C.E.Barton, Elsevier, Amsterdam, 150-157.

広岡公夫　1989 「古代手工業生産遺跡の自然科学的考察－考古地磁気学、古地磁気学の立場から－」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会編・真陽社 225-284.

Hirooka,K. 1991 Quaternary paleomagnetic studies in Japan, *The Quaternaqry Research*（第四紀研究）vol.30, 151-160.

広岡公夫・藤澤良祐　2003 「東海地方の地磁気永年変化曲線」『考古学と自然科学』日本文化財科学会誌第45号　29-54.

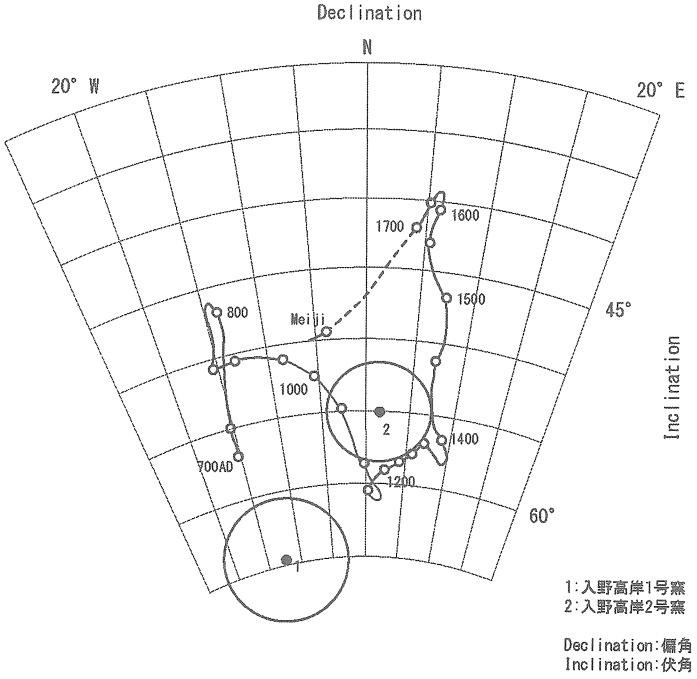


図67　東海版考古地磁気永年変化（広岡・藤澤2003による）と入野高岸１・２号窯の考古地磁気測定結果

第５節　まとめ

１．窯構造について

今回調査を行った２基の須恵器窯のうち、窯体およびその付属施設が良好に残り、窯構造の概要が把握できた１号窯を中心に、遺構の特徴について述べる。

１号窯の窯構造について、その主な特徴をまとめると、

①全長９ｍ程の規模を有する地下掘り抜き式構造の窖窯。

②窯体窯尻部にわずかな段状の奥壁をもち、上部に開口する排煙口を有する。

③窯尻部分に、窯主軸に直交する方向の溝の存在。

以上３点があげられる。

①について

１号窯は窯体から窯尻までの長さが９ｍ程もあり、長軸方向の長さに対して幅が短い、細長い紡錘形ともいうべき狭長な印象を与える形状を有している。平面形は最も幅広な窯体中央付近から焚口に向かって、少しずつ幅を狭めている。また窯尻部分は排煙口付近で急激に絞り込まれた形状を示す。構築は粘土質の良く締まった地山をトンネル状に掘り抜くことによって行っている。修復時には壁面に粘土を塗り込んでいるが、開窯時には、工具により掘削された面がそのまま火入れにより焼け締まり、壁面・天井面をなしていたようである。床面には段やピットなど特別な施設は設けず、窯詰めは床面に石置台を設置し、その上に製品を配置していたものと推定される。

②について

排煙口そのものは遺存していなかったが、排煙口付近の構造はいわゆる上部開口型であり、わずかな段差の奥壁を有して、斜め上方に開口していたと推定される形態である。しかし、次項で記すようにこの部分に溝が連結しており、開窯時はこの形態と溝との組み合わせにより、焼成に影響を与える重要な構造となっていたと考えられる。ただし、奥壁部分の修復を繰り返すうち、この排煙口付近の構造も変容している。

③について

この１号窯で最も注目すべき点は、窯体に付属する、この溝の存在である。溝は窯の主軸に対して直交する方向で連結し、窯体左側に横方向に伸びてから丘陵斜面下方に向かってカーブしながら伸びている。酸化被熱し赤化した壁面と床面に見られる炭化物から、窯体と一連の付属施設であると判断できるものである。溝の機能については、後述するように様々な機能が考えられるが、焼成の際に製品の仕上がりに何らかの影響を与える重要な施設であると考えたい。

この溝付き窯に注目し、全国の類例の分布や消長、溝の機能について詳細に分析した望月精司氏の研究（望月1993・1999）がある。その研究によれば、この溝付き窯は全国各地に分布し、その類例も多いことが指摘されている。いくつかに形態分類する中で、北陸地方や九州地方に比較的多く分布するが、東海地方では類例は少なく、静岡県内ではこの入野高岸１号窯を含め２例が確認されているのみである（註１）。東海地方ではほかに三重県多気町・明気窯跡群の例があり、この明気１・２号窯は伴う遺物の形態から、ほぼ入野高岸古窯に近い時期の操業と考えられるものである。全国の事例の編年・消長に関しては、６世紀中葉に九州にその初現のものが見られ、７世紀代にかけて存在する形態であり、類例は調査により徐々に蓄積されている。この溝の機能については諸説あり、実際には操業時の状況を忠実に再現し、検証を行うことで明確になってくるものと思われるが、窯の操業時の状況の再現は難しく、現

時点ではこれら諸説の検討によるほかない状況である。望月氏によれば、窯に連結する溝について「排煙調整溝」と呼び、窯体内からの排煙量を制御する機能をもつものと想定されており、特に窯主軸に対し直交する溝は、窯体内からの煙が熱とともに窯外部へと単純に抜けてしまうことを防ぐ機能、つまり排煙を抑制する機能をもつとしている。またこのような溝の事例のうち、階段状のステップや、溝末端にテラス状の面を伴うようなものが見られることから、溝の機能は専ら排煙調整のみということでもなく、作業通路としての機能も併せもつと指摘している。この考えによれば、入野高岸古窯の溝は窯主軸に対し横方向に連結するものであるので、丘陵斜面下方から吹き上がる風の通り道として掘削され、その風により排煙を抑制する機能が想定される。入野高岸古窯の溝のケースでは、幅が狭く深い断面形であることを考慮すると、作業通路というもう一つの機能に関しては当てはまらないと考えられる。

入野高岸古窯でこの溝を伴うタイプの窯が検出されたことについて、これまで分布は日本海側を中心とした地域に多く見られるとされており、太平洋側での事例がどのような系譜で築窯や焼成技術が伝播したのか、その系譜について検討することが重要であると思われる。特に今後報告が待たれる先に紹介した静岡県藤枝市・衣原１号窯は、入野高岸古窯や三重・明気窯をさかのぼる６世紀後半に位置付けられる窯跡であり、排煙調整溝付窯の多くの事例の中でも古相を示すものである。６世紀後半に太平洋側の当地にこのタイプの窯が出現し、それが比較的近接した志太地域内の７世紀前半の入野高岸古窯にも見られることは、決して単なる偶然ではないと思われる。志太地域北東部の古墳時代の窯業生産に関わった工人が、他地域から当地に訪れ、溝付窯の効能や築窯技術をよく知る工人が、築窯技術を含む製陶技術の総体を、ある期間継続させ、実際の作陶に当たっていたと想定することは困難ではないであろう。

のちの８世紀後半を中心に数百基単位の分布を示す藤枝市・助宗窯跡群に連なる須恵器製作の系譜の起源を衣原、入野の２窯に求めることも、遺物や窯構造の今後の研究の進展によって、無理なことではないように思われる。今回の報告では、他の事例の検討が十分でないため詳細な報告は行わないが、今後他の排煙調整溝付窯の事例との比較検討や、それぞれの窯に伴う須恵器の作陶技術の検討、またこれらの窯で焼かれた製品の消費地などの検討から、このタイプの窯の系譜について多角的に検討されることが必要であると考える。今後の衣原古窯の調査報告の刊行を機に、これらの点を少しずつ検討していくこととしたい。

註

1　藤枝市衣原１号窯の例がある。衣原古窯については現在当研究所にて資料整理中である。

2．遺　物

(1)　製品の特徴

入野高岸古窯では窯体内、灰原合わせて、蓋坏・無蓋高坏・有蓋高坏・盌・碗・壷類・瓶類・陶臼・甕の各器種が出土した。出土須恵器の大半が小破片であったため、器種を特定することができなかったものも多く、１ないし２個体程度しか確認できなかった器種もある。総体としては器種ごとの数量的な比率をみると（註１）蓋坏が圧倒的割合を占め、ついで高坏・甕の順となる（註２）。各焼成床面での状況も同様である。また、甕は口頸部の残存数と比べて形態差が著しく、類型化するには困難である。そこで蓋坏と高坏の２器種について若干の検討を加えたい。

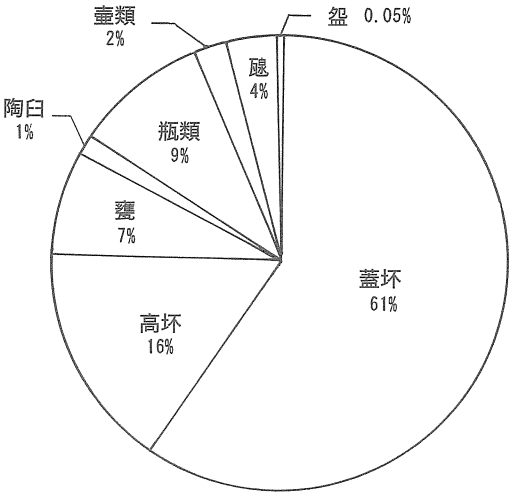


図68　器種別組成グラフ

１号窯

坏蓋の口径は10.5～14.4cmに分布する。例外はあるものの、原則として天井部外面は回転ヘラケズリを行う。ロクロ回転の方向は右回転が主体である。内面は口縁部に稜を設け、内傾面をもつ。したがって、口縁端部は先細り気味となる。内面中心は幅広の不定方向のナデ調整を施す（註３）。

坏身の最大径は11.4cm～14.6cmに分布する。坏蓋と同様、底部外面は回転ヘラケズリを基本とする。受部は短く、わずかに上方に引き出される程度で、端部を丸く仕上げる。ロクロ回転方向が判別可能な点数が少ないが、右回転が主体となるようである。大きく２種類の形態が見られる。

ａ：外面は底部から体部まで緩やかに移行する。器高は4.5cm前後、立ち上がり高は１cm弱である。最大径は12.4～14.1cmで12.5cm前後と14cm前半代に分かれる。底部外面に手持ちナデ調整を施すものが認められる。

ｂ：外面の受部真下で強くくぼむ。立ち上がり高は0.5cm強と、ａ類と比べて低い。最大径は11.4～14.6cmだが、12cm前後に集中する。

ａ類は主にⅠ・Ⅱ次床で、ｂ類はⅢ次床以降で見られる。

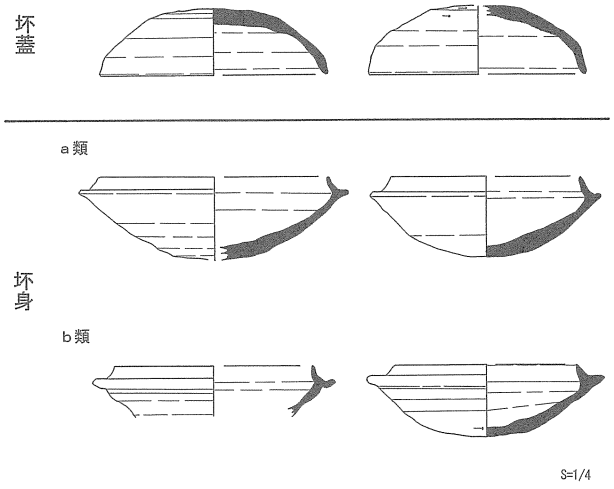


図69　１号窯蓋坏の分類

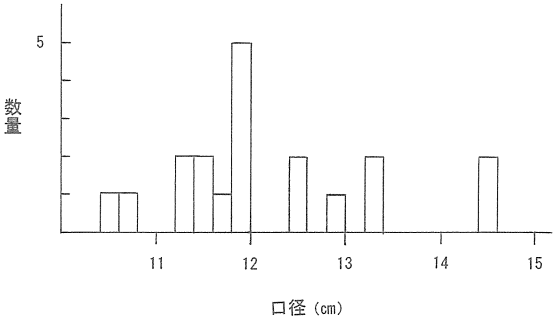


図70　１号窯坏蓋口径別個体数

有蓋高坏は、形態・法量ともに坏身と類似した

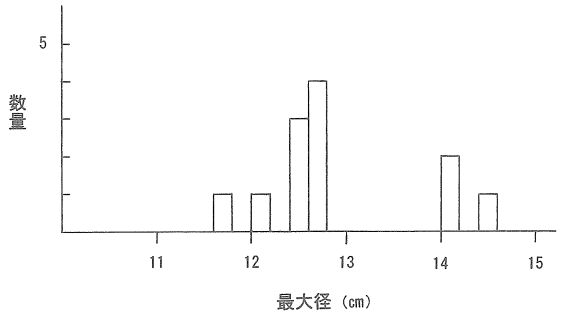


図71　１号窯坏身ａ類最大径別個体数

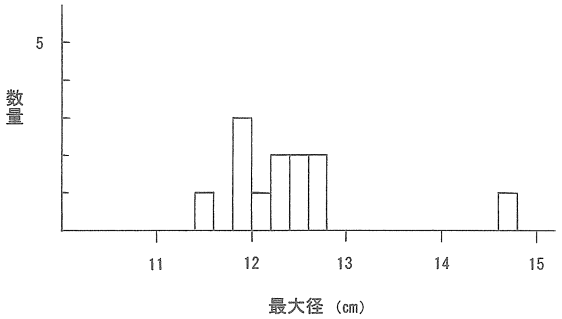


図72　１号窯坏身ｂ類最大径別個体数

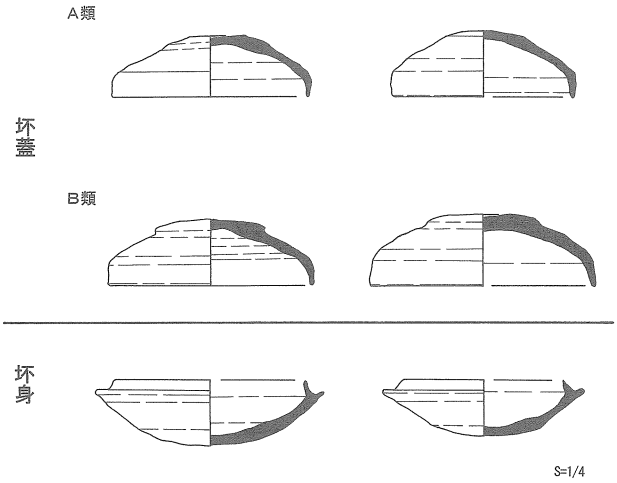


図73　２号窯蓋坏の分類

坏部をもつ（註４）。無蓋高坏は、扁平気味の坏部に２段の突帯状の稜を有する。脚部は長脚が主体となるようである。長脚２段高坏の脚部に施された透しは簡略化した、ごく細いもので、透しを省略し、さらに上下段を区分する沈線すら施さないものも見られる。脚部の裾端部はほぼ直立し、内外面を端部手前でくぼませて、下方あるいは横に強く引き出す。最終焼成時に近いものほど、裾部の作りが粗雑化するようである。

Ⅳ次床とⅢ次床との間に認められた法量差・形態差が型式差に直結するかは疑問であるが、一つの型式の時間幅の中に収まる可能性も捨てきれない（註５）。顕著な例とは言い切れないものの、Ⅰ・Ⅱ次床とⅢ次床～最終焼成面はそれぞれ、前段階の要素が色濃く残る時期と、坏Ｇ（註６）に見られるような新要素を取り入れ始めた時期、ととらえることができよう。

２号窯

坏蓋の口径は9.4～11.6cmに分布する。天井部外面は、若干の例外はあるものの、ヘラ切り不調整が基本となる。体部と口縁部の境は明瞭に折れ、口縁部は垂直あるいは内傾して下がる。ロクロ回転方向は右・左両方が存在する。

Ａ：突出はするものの、天井部はなだらかとなる。口径と比べて器高は高く、丸みを帯びる。

Ｂ：天井部の突出が著しい。口径と比して器高が低く、扁平気味となる。

Ａ類はⅠ・Ⅱ次床で、Ｂ類はⅢ～Ⅴ次床で、それぞれ多く見られる。

坏身の最大径は10.65～12.6cmに分布し、11cm代に集中する。外面はヘラ切り不調整だが、蓋ほど突出は著しくない。

高坏は、無蓋高坏が確認できたのみであるが、図化以外の破片を見ると、形状の異なる脚裾部が含まれている。長脚・短脚を判別できるものは無かったが、いくつかの形態が存在した可能性がある。

２号窯はⅡ次床とⅢ次床の間で大規模な窯の作り替えを行っているが、遺物には形態差は認められず、よって時期的な隔たりを見て取ることはできない。いずれにしても１型式内に収まる範囲内での時間差と考えられる。

以上、１号窯出土須恵器と２号窯出土須恵器の特徴をそれぞれ記した。各焼成床ごとに取り上げはしたものの、明瞭な変遷を追うことはできなかった。また、１号窯と２号窯を比較すると、蓋坏においては法量差・技法差が確実に存在する。１号窯の埋土から２号窯操業時に伴うと考えられる炭化物層が確

認されており、両者に時間差があることは確実である。遺物の形態および技法的特徴からも、１号窯が２号窯に先行することは明らかであろう。しかしながら、その差違は時間差によるものであって、系譜的には連続性が認められる（註７）。

(2)　編年的位置付け

前項で述べたように窯体内から得られた資料は限られているため、蓋坏を中心に、田辺昭三氏による陶邑編年（田辺1966）、および、遠江の古墳・古窯出土資料に基づいた鈴木敏則氏の遠江編年（鈴木2004）と対比させ、編年的な位置付けを行う。まず、１号窯の時期決定を行う上で、指標となり得るのが坏Ｇの存在である。Ｖ次床から坏Ｇの身が出土した。坏ＧはⅣ次床以前の床では確認できなかったため、少なくともＶ次床の時期を坏Ｇの出現期以降と見ることができよう。Ｖ次床が最終焼成面であることから、１号窯の廃絶時期は少なくとも坏Ｇの出現期をさかのぼることはない（註８）。坏Ｇの出現は、陶邑編年ではTK217型式（註９）、遠江編年ではⅣ期前半にあたる。ただし、出土数の割合を見ると、あくまでも坏Ｈが主体であり、坏Ｇは新出の要素として少量が存在する程度であったようである。一方、坏Ｈでは身最大径でａ類がｂ類よりも幾分大きいが、両者ともTK217型式に収まると考えられる。遠江編年で見ると、Ⅲ期末の法量部分布は、蓋・身ともに径11.0～12.5㎝に集中域があり、入野高岸古窯の集中域と重なる。Ｖ次床出土の長脚２段３方透し高坏では、透しがスリット状になっており、長脚２段透し高坏消滅前の段階と考えられよう。遠江編年ではⅢ期末に位置付けられている。

以上から、１号窯は陶邑編年のTK217型式、遠江編年ではⅢ期末～Ⅳ期前半にかけて操業したと位置付けられる。Ｖ次床では、Ⅲ期末の要素をもつ器種と坏Ｇが供伴することから、操業停止の時期はⅣ期前半でもⅢ期末に近い段階が考えられる。１号窯では、いわゆる「古墳時代的」な古相と、坏Ｇに見られる新相が混在した状況が窺える。

一方で、１号窯よりも確実に新しいと考えられ

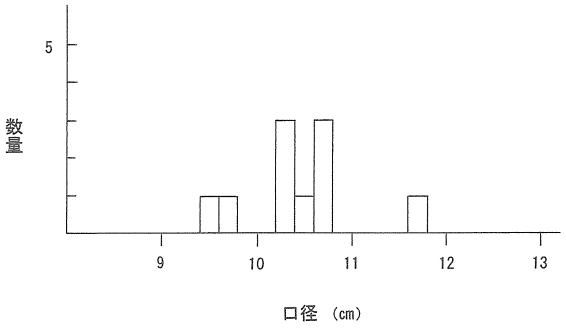


図74　２号窯坏蓋口径別個体数

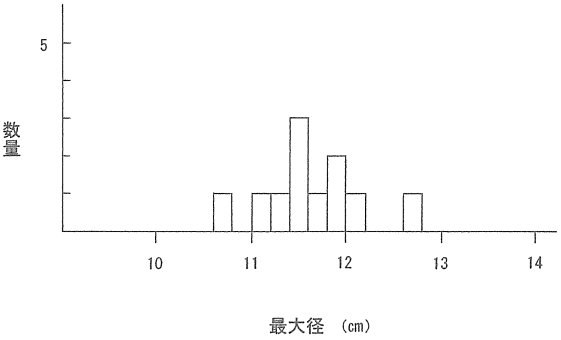


図75　２号窯坏身最大径別個体数

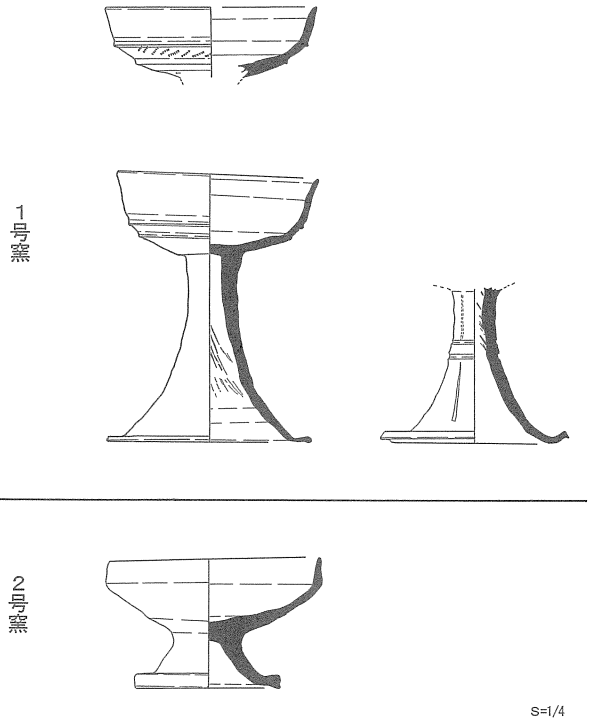


図76　１・２号窯高坏の分類

表29　編年対比表

	期・段階		陶邑・都城	窯　跡　名
	I	(初)	TG232	
		前	TK73 TK216	
		中	ON46 TK208	
500		後 (末)	TK23 TK47	明通り 水神
	II		MT15	峠場 I -1・2古 有玉1期・衛門坂2
	III	前	TK10	有玉2期・衛門坂3 有玉3期・星川
		中	TK43	西笠子64・衛門坂5
600		後	TK209	峠場 I -1・2新
		末	I	加賀山2-1
				入野高岸1号窯
650	IV	前	飛鳥 II	入野高岸2号窯 殿田4- I
			III	峠場2- I
		後	IV	
		末	V	
700	V	(初) 前	平城 I	

※鈴木2004より一部改変して転載

る２号窯では坏Ｇの存在は確認できなかった。器種構成から考えれば２号窯→１号窯という変遷になり、形態および技法から求められる年代と矛盾が生じてしまう。この時期に依然として坏Ｈが主体となる器種として見なされていたのならば、あえて坏Ｇを生産していなかった、あるいは生産していたとしても非常に少量であったと見ることもできよう。その背景としては、焼成器種の選択に需要元である古墳造営集団の意図が強く働いたためと考えられる（註10）。

２号窯では、蓋坏の法量が10.0～11.0cm代を中心とすること、外面はヘラ切り不調整であること、短脚高坏の存在から、田辺編年のTK217型式、遠江編年ではⅣ期前半に該当すると考えられる。Ⅳ期後半では坏身の立ち上がりが矮小化し、受部の深さと変わらなくなる。２号窯ではこの器形のものは認められず、したがって操業停止の時期もⅣ期前半に収まるであろう。

(3)　周辺古墳出土須恵器の様相

入野高岸古窯周辺の消費地ではどのような様相であったのだろうか。営窯時期に前後する、TK43～TK217型式併行期と考えられる消費地出土資料を概観したい（註11）。まず蓋坏であるが、TK43～TK209型式では扁平気味の体部に内傾した立ち上がりをもつ。口径はTK43型式では15cm以上であったものが、TK209型式には13cm前後に縮小し、立ち上がりが低くなる。ただし、小型や大型のものも存在する。TK217型式になると、依然として坏Ｈが主体ではあるが、坏Ｇが含まれるようになる。坏Ｈは径および立ち上がりでさらに小型化が進み、蓋・身ともに球形に近い形状を呈する。また、湖西産のものは外面の天井部・底部に同心円の回転ヘラケズリを施すが、なかにはヘラ切り不調整のものも認められ、それらは湖西以外の産地の製品と考えられる（註12）。

有蓋高坏は、TK43型式では器高が20cmを超える大型品であったが、TK209型式は幾分小型化し、次の段階には見られなくなる。坏部および脚部の作りに大きな差異は認められない。脚部の透しは１段透しが一部認められるものの、２段が大半を占める。また、TK43型式には短脚の高坏が出土しているが、以降の出土例は無い。無蓋高坏も同様にTK43型式では長大化した脚部に扁平な坏部が付き、TK209型式でやや小型化する。無透しの脚部をもつものも現れる。TK217型式になると半球状の坏部をもつ高坏が主体となる。前段階までの高坏も見られるが、出土例は圧倒的に少なく、例外的な存在であったようである。短脚と長脚があり、大半は無透しで沈線の有無で２形態にわけられる。

当該期の出土例で蓋坏・高坏に次いで多いのが、瓻・提瓶である。瓻は、TK43～TK209型式の時期では口頸部高が体部高を卓越する。この時期には、頸部が極端に細く、体部と比して口径と口縁部高を大きくする瓻も併存する（註13）。TK217型式の好例は確認できなかったが、次の段階では口頸部高と体部高の比率が逆転し、注口部は突出している。提瓶はTK43およびTK209型式の出土例しか確認できなかった。

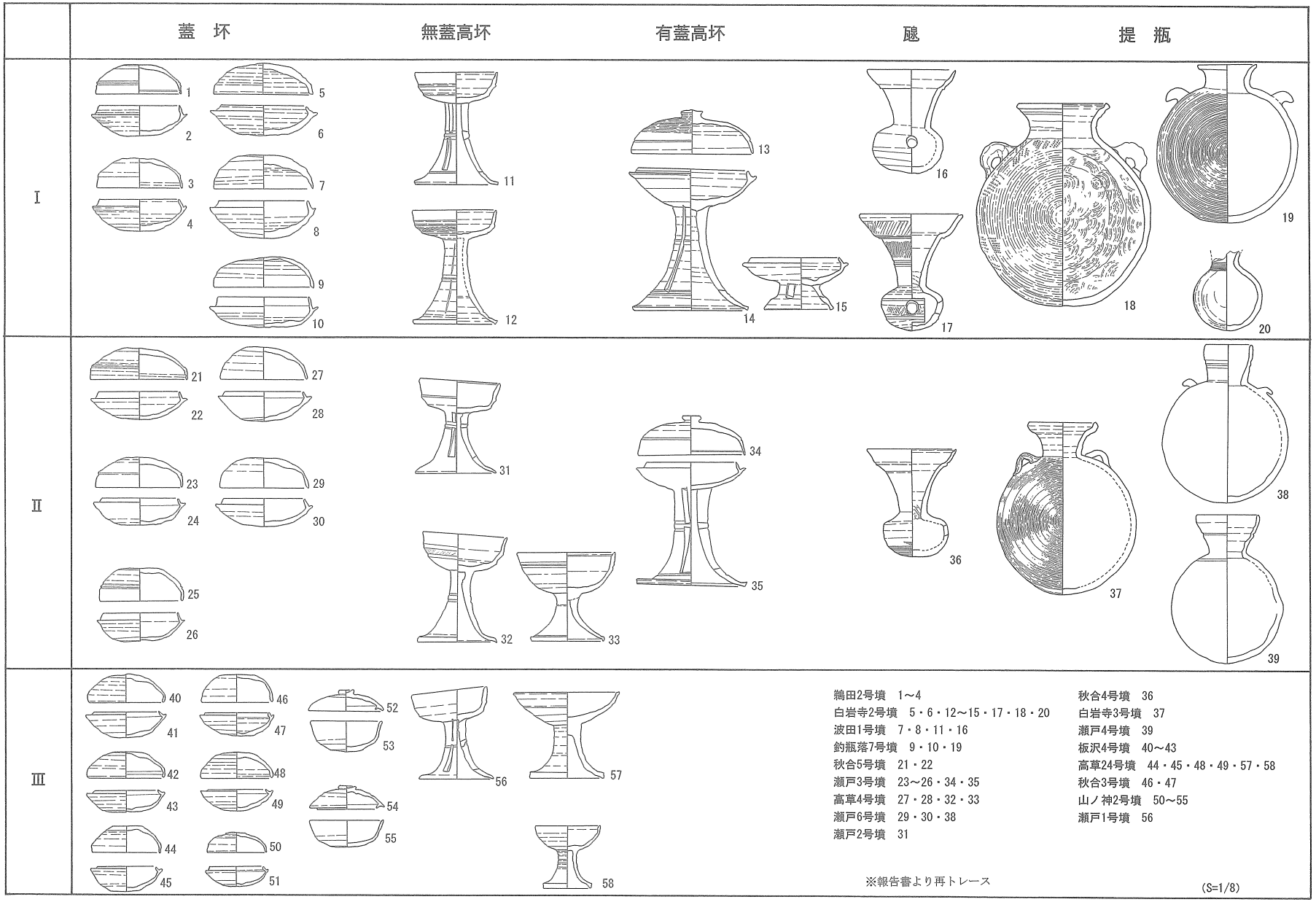


図77　周辺古墳出土須恵器

TK209型式ではフラスコ瓶が出現し、提瓶に代わって波及していくようである（註14）。

以上のような様相において、入野高岸古窯で生産された須恵器はどの範囲に流通していたのであろうか。当古窯が立地する同一丘陵上には入野東古墳群が、また谷を挟んだ丘陵には入野西古墳群が存在する。立地状況からすれば、これらの古墳群が供給先であったと考えるのが最も自然である。このうち、入野東９号墳は今回の調査で須恵器が出土しているが、その時期は当古窯の廃絶後と推定される。入野東古墳群・入野西古墳群ともに、過去の調査では須恵器は確認されておらず、したがって当古窯の製品が供給されていたか否かは不明である。朝比奈川流域に目を転じると、子持坂古墳群・薬師堂古墳群・向沢古墳群などが、岡部川流域には横添古墳群・永源山古墳・新地ヶ段古墳などが点在する。入野高岸古窯と併行する時期と考えられるのは、本郷31号墳と板沢１・４～６・８・９号墳である。本郷31号墳では坏Ｈ・短頸壷・平瓶・瑤、板沢古墳群では坏Ｈ・坏Ｇ・無蓋高坏・平瓶・広口壷が出土している。観察する限りでは、当古窯の製品は確認できなかった。歴史的環境の項でも述べたように、岡部町は発掘調査例が少なく、実態は明らかでない。調査事例が増えることによって入野高岸古窯の流通圏が明らかになっていくことも可能であろう。

⑷　小　結

１号窯の蓋坏は、外面に回転ヘラケズリを施した坏Ｈを主体とする。形態および法量から２分類が可能であり、両者間にはある程度の時間幅が推定できる。ただし、長期にわたるものではなく、古い要素を残す時期と新しい要素を取り入れ始めた時期という位置付けとなるであろう。また、少量ながらも最終焼成床から坏Ｇが出土しており、よって操業時期の終わりを坏Ｇの出現期以降に求めることができる。高坏は長脚で占められるが、透し孔の省略など、形骸化が認められる。以上の点から田辺編年ではTK217型式に、遠江編年では古相から新相へと変換する、Ⅲ期末～Ⅳ期前半に位置付けられよう。

一方、２号窯では蓋坏の外面調整にヘラ切り不調整が現れる。回転ヘラケズリを施したものは見られなくなり、切り離した部分の突出が著しい点が特徴的である。１号窯に後出するものの、坏Ｇは認められない。高坏では、短脚に主体が移るようである。２号窯では、窯体の大規模な改修が行われているが、遺物で改修の時間差を如実に表すものは認められなかった。坏蓋の形態および技法、法量から陶邑編年のTK217型式、遠江編年ではⅣ期前半に位置付けられる。

また、１号窯と２号窯は操業期間が重複しないことは先に述べたが、２基ともTK217の１型式の時間幅に収まる。さらに、１基の窯の操業期間が五～十数年程度と考えるならば（註15）、１号窯が停止し、２号窯が開窯するまでの期間は比較的短い年数を想定しても差し支えないであろう。

前項で示したように、周辺の同時期の古墳からは数多くの須恵器が出土しているにもかかわらず、入野高岸古窯の製品と確定できるものは認められなかった（註16）。ただし、あくまでも形態・技法的な特徴と、胎土の肉眼観察による判断である。今回、胎土の理化学的分析によって使用された粘土の特性が明らかとなった。消費地出土須恵器の分析試料がそろえば、入野高岸古窯の分析結果と対比させることで、肉眼では判別不可能であったものが入野高岸古窯産と特定される可能性もあるであろう。

入野高岸古窯の特徴としては、生産する器種の選択に消費側の意図がかなり強く影響していたこと、狭い流通圏が想定されることがあげられる。操業の背景として、特定の集団に供給することを目的とした地方窯の成立が考えられる。駿河西部域では７世紀以後、単発的な小規模窯業が営まれたとの指摘があり（後藤2000）、当古窯もその一例ととらえることもできよう。また、周辺では藤枝市で先行する時期の衣原古窯が確認されており、系譜の連続性が想定される。志太地域における窯業の契機および流通構造など、今後の検討課題としたい。

註

1　破片資料では個体数の判定は困難である。したがって図化可能な個体のみを対象として割合を算出したが、器種ごとの破片数を考慮しても、実際の比率と大きくかけ離れるものではない。

2　口径および最大径の数量グラフ作成にあたっては、資料数が少ないため残存率が1/4以上の個体を対象とした。ただし、口縁部の焼き歪みが著しいものは扱っていない。

3　坏身でも同様である。２号窯では、一方向の幅広ナデを施すものが多い。

4　有蓋高坏の坏部は１点しか確認できなかったが、高坏蓋の口径は同一床面の坏蓋と同じ範囲内に収まるため、坏部に関しても同様と考えられる。

5　尾野1997

6　奈良国立文化財研究所1978

7　鈴木敏則氏の御教示による。

8　坏Ｇの出現期については、７世紀前葉とする見方（佐藤2006）や、７世紀中葉とする見方（尾野1997）などがあり、結論を得ていない。静岡県内の資料に関しては７世紀第２四半世紀～中葉の実年代が与えられている（鈴木2004）。いずれにしても、７世紀以前に求められることはない。

9　TK209型式にはすでに宝珠形つまみをもつ坏蓋が現れるが、蓋坏のセット関係で出現するのはTK217型式からである（田辺1966・1981）。

10　山田1998

11　陶邑編年を基準に、Ⅰ：TK43型式併行期、Ⅱ：TK209型式併行期、Ⅲ：TK217型式併行期の３時期に分類した。型式変化の少ない甕・提瓶に関しては、単独時期あるいは型式区分が明らかと考えられる資料のみを扱うこととし、供伴する蓋坏の型式をもって分類を行った。なお、志太地域では当該期の集落の発見例は乏しく、したがって対象は古墳に限定する。

12　後藤2000によると、志太地域に須恵器窯が存在した可能性が指摘されており、これらの製品は在地産と考えられる。

13　後藤建一氏は、この特徴をもつ甕を瀬戸川流域に存在が想定されている在地窯に特徴的な器種としてとらえ、「瀬戸川系甕」と呼称している。(後藤2000)

14　単独時期の資料として扱える古墳が限られており、また報告書では技法や詳細な形態まで記載がないものもあるため、各時期に典型的と思われる資料を示すに留まった。

15　註５に同じ。

16　岡部町教育委員会および藤枝市郷土博物館の御厚意により、実見させていただいた。

3．結　語

入野高岸古窯は調査の結果、７世紀前半の須恵器窯であることが判明した。志太地域では古墳出土資料から古墳時代後期の須恵器窯が存在する可能性は考えられていたが、この入野高岸古窯の発見に至るまで確認されていなかった。入野高岸古窯の調査における最大の成果は、志太地域において７世紀代の須恵器窯が存在することを明らかにした点にある。なお、同じく第二東名建設に伴う発掘調査において、藤枝市下之郷で６世紀代に位置付けられる須恵器窯である衣原古窯を発見・調査している。これらの調査事例から、志太地域では６世紀後半～７世紀前半に須恵器が生産されていたことが確実視できるようになった。

ところで、志太地域では６世紀後半から群集墳が形成され始め、７世紀代に盛行期を迎える。６世紀代の古墳から出土する須恵器は、志太地域あるいはその周辺で生産されたものが主体を占めるが、７世紀代になると湖西産の須恵器が席巻する。このような状況の中、入野高岸古窯において小規模ながらも須恵器生産が行われていたことは注目できる。ただし、入野高岸古窯で生産された須恵器は、同時期の古墳からはほとんど出土しておらず、広く流通していた様子は窺えない。また、焼成された器種構成等からは、湖西窯の製品の補完を目的として生産されたものではなさそうである。これらのことから、入野高岸古窯は特定の範囲の需要を満たすために営まれた可能性を指摘できる。もっとも、その集団、あるいは消費地等を特定することは、現状の資料からは判断できない。胎土分析の結果、入野高岸古窯を始めとする志太地域の須恵器は湖西窯の製品とは異なった状況を示すことがいえるため、今後、消費地出土資料の検討を行うことで、消費地と流通の実態は解明されることであろう。

入野高岸古窯で生産された須恵器は幾つかの特徴をもつことも判明した。一部には尾張からの影響を窺えるものの、強い関連性は認め難く、窯構造の点でも、尾張や湖西等の特定の地域との強い関連性を見い出すことができない（註１）。ただし、注目できるのは「排煙調整溝」とよばれる施設が１号窯に付随したことである。これまで、東海地域では三重県に１例が見られる程度であり、主たる分布域ではなかった。更なる検討が必要であるが、この施設が入野高岸古窯の系譜をとらえる手がかりになる可能性がある。なお、先述のとおり、志太地域では入野高岸古窯に先行する須恵器窯として衣原古窯がある。両者に技術的関連を想定することはでき、排煙調整溝をもつ点は注目できる。しかし、製品の特徴には共通点は少なく、直接的な関連性は低いと言える。これらのことを勘案すると、志太地域では、須恵器生産の技術が数度にわたって導入されたものと想定され、入野高岸古窯は東海各地の要素が融合されたものと位置付けたい（註２）。

なお、理化学的分析の結果、入野高岸古窯で生産された須恵器の胎土は陶邑窯や猿投窯・湖西窯で生産された製品とは、異なる特徴をもつことが明らかになった。また、考古地磁気測定の結果、１号窯についてはA.D.650±750という数値が得られた。これは従来考えられていた須恵器の年代よりやや新しいが、比較的近い年代であり、この点からも入野高岸古窯は７世紀代のものととらえられる。

このように入野高岸古窯の発見・調査により、志太地域の古墳時代像をとらえる上で貴重な手がかりを得ることができた一方で、新たな問題を提起することとなった。志太地域では古墳時代後期の古墳については豊富な資料の蓄積があるため、以上の点をふまえた上で再検討することで、入野高岸古窯成立の背景や、当地における歴史像がより明確に解明されるであろう。

註

１　鈴木敏則氏の御教示による。

２　渥美2006では、「排煙調整溝」を採用した７世紀前半の関東諸窯には多系統・多系譜の技術が存在することを指摘している。

文末であるが、現地調査並びに資料整理・報告書の作成に当たっては、下記の方々、機関に多大な御協力と御助言を賜った。記して感謝の意を示す。（五十音順、敬称略）

浅野　毅、渥美賢吾、伊藤通玄、岩原　剛、岩木智絵、後藤建一、柴田　稔、菅原雄一、鈴木一有、鈴木敏則、田辺昭三、椿原靖弘、向坂鋼二、望月精司、桃崎祐輔、八木勝行、山田成洋

参考文献

渥美賢吾　2006　「古墳時代須恵器窯の構造とその築窯技術の系譜-いわゆる「溝付窯」をめぐって-」
『筑波大学　先史学・考古学研究』第17号　筑波大学考古学フォーラム

大塚淑夫　1989　「五百原國－静岡県中部地方の古墳文化－」『東海紀要』35号　東海大学出版会

大谷宏治　2000　「遠江・駿河における古墳時代後期の階層構造」
『研究紀要』第７号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

岡部町　1970　『岡部町史』

岡部町教育委員会　1982　『静岡県志太郡岡部町横添古墳群板沢支群発掘調査報告書』

岡部町教育委員会　1981　『内谷古墳群本郷支群31・32号墳発掘調査概報』

尾野善裕　1997　「東海」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東５　７世紀の土器－』古代の土器研究会

小幡早苗・近藤美紀　2001　「横穴式石室用語の定義」『東海の後期古墳を考える』
東海考古学フォーラム三河大会実行委員会・三河古墳研究会

菊池吉修　2002　「志太地域の両袖式・片袖式石室」『研究紀要』第９号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

後藤建一　1989　「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会

後藤建一　1991　「須恵器の編年～東海（静岡県）」『古墳時代の研究』第６巻　雄山閣出版

後藤建一　2000　「古墳出土須恵器にみる地域流通の解体と一元化－駿河西部域における６世紀から
７世紀の古墳出土須恵器を事例として-」『日本考古学』第９号

佐藤　隆　2006　「７・８世紀陶邑編年の再構築と都城出土資料の様相」『須恵器生産の成立と展開』
（財）大阪府文化財センター

静岡県　1990　『静岡県史』資料編２　考古二

静岡県　1992　『静岡県史』資料編２　考古三

静岡県　1994　『静岡県史』通史編１　原始・古代

静岡県　1997　『静岡県史』通史編２　中世

静岡県教育委員会　1975　『静岡県埋蔵文化財調査報告』第13集

静岡県教育委員会　1981　『静岡県文化財調査報告書　第23集　静岡県の中世城館跡』

静岡県教育委員会　1989　『静岡県遺跡地名表－焼津以西－』

静岡県考古学会　2003　『静岡県の横穴式石室』

静岡県出版文化会　1978　『フィールドワーク　静岡県の地学』

島田市教育委員会　1978　『鵜田１号墳・２号墳　法信寺１号墳』

島田市教育委員会　1980　『波田１号墳・馬平遺跡』

島田市教育委員会　1991　『白岩寺古墳群発掘調査報告書』

島田市教育委員会　1997　『向山遺跡』

鈴木一有　2000　「遠江における横穴式石室の系譜」『浜松市博物館報』第13号　浜松市博物館

鈴木一有　2003　「東海東部の横穴式石室にみる地域圏の形成」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会

鈴木敏則　2001　「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』東海土器研究会

鈴木敏則　2004　「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』　浜松市教育委員会

西駿考古学研究会　1968　『瀬戸古墳群』

田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ

田辺昭三　1981 『須恵器大成』 角川書店
土　隆一編　1974 『静岡県の地質』 静岡県
八賀　晋　1998 「須恵器製作の一視点－ロクロ成形と置き台－」『楢崎彰一先生古希記念論文集』
楢崎彰一先生古希記念論文集刊行会
藤枝市教育委員会　1978 『国道一号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査概報』昭和52年度
藤枝市教育委員会　1980 『市部古墳群山ノ神支群・藪田古墳群三ツ池支群』
藤枝市教育委員会　1980 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
藤枝市教育委員会　1980 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
藤枝市教育委員会　1981 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』
藤枝市教育委員会　1981 『原古墳群谷稲葉支群高草地区』
藤枝市教育委員会・静岡大学考古学研究室　2002 『荘館山古墳』
藤枝市教育委員会　2003 『高田観音前１・２号墳発掘調査報告書』
藤枝市教育委員会　2005 『仮宿沢渡古墳群・仮宿沢渡遺跡・仮宿堤ノ坪遺跡・仮宿堤ノ坪古墳』
三河考古刊行会　1999 『古墳時代の猿投窯と湖西窯』
三河古墳研究会　2001 『東海の後期古墳を考える』
望月精司　1993 「須恵器窯構造から見た７世紀の画期－特に南加賀古窯跡群の様相を中心として－」
『北陸古代土器研究』第３号
望月精司　1999 「須恵器窯構造雑感」
『須恵器窯の技術と系譜－豊科、信濃、そして日本列島－』窯跡研究会第２回シンポジウム
焼津市　2004 『焼津市史』資料編一　考古
八木勝行・菅原雄一　2006 「瀬戸古墳群Ｂ-17号墳　－志太地域最大の横穴式石室－」
『藤枝市文化財年報』－平成16年度－　藤枝市教育委員会
山田邦和　1998 『須恵器生産の研究』 学生社

表30　入野高岸古窯出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	出土位置・層位	法量（cm）	残存率%	焼成	胎土	色調	調整等の特徴	轆轤	備考
11	20	坏蓋	１号窯 Ⅰ次床	口径（13.20） 器高　－ 最大径　－	30	堅緻	密　白色粒子含む	外：5B5.5/1青灰色 内：10BG6.5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	口縁部歪みあり
12	20	坏蓋	１号窯 Ⅰ次床	口径（14.40） 器高　－ 最大径　－	20	軟	密　径１～２㎜白色小礫、径４㎜灰色小礫わずかに含む	外：7.5YR5/6明褐色 内：7.5YR6/8橙色	内外：回転ナデ	右	外面が摩滅
13	20	坏身	１号窯 Ⅰ次床 （直上）	口径（10.40） 器高　－ 最大径(12.60)	10	軟	密　径１㎜白色小礫、径２～４㎜黒色小礫わずかに含む	内外：N5/0灰色	内外：回転ナデ	不明	器面が摩滅
14	19	坏身	１号窯 Ⅰ次床	口径（11.60） 器高　－ 最大径(14.00)	20	良	やや密　白色粒子含む径１～２㎜白色小礫わずかに含む	外：5B6.5/1青灰色 内：N7.5/0灰白色	外：回転ナデ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
15	19	坏身	１号窯 Ⅰ次床	口径（12.00） 器高　－ 最大径(14.10)	50	軟	密　白色粒子、径１～３㎜白色小礫、径0.5～２㎜黒色粒子多く含む	外：7.5Y8/1灰白色 内：5Y8/2灰白色	外：回転ナデ、一部ナデ 内：回転ナデ	右	器面は摩滅（剥離？）のため粗い
16	20	高坏蓋	１号窯 Ⅰ次床	口径　－ 器高　－ 最大径　－	つまみ部100	軟	密　白色粒子含む	内外：5Y8/1灰白色 外：一部5Y5.5/1灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ？ 内：回転ナデ	不明	摩滅のため調整不明瞭
17	19	高坏	１号窯 Ⅰ次床	口径（12.20） 器高　－ 最大径(14.10)	坏部20	軟	密　径２～４㎜黒色小礫、径１～２㎜白色小礫わずかに含む	外：N4/0灰色・N6/0灰色 内：10Y6/1灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	器面が摩滅気味
18	20	壺蓋	１号窯 Ⅰ次床	口径（9.40） 器高　－ 最大径　－	20	良	密　白色粒子含む	内外：10Y6.5/1灰色	内外：回転ナデ	不明	短頸壺の蓋か
19	19	短頸壺	１号窯 Ⅰ次床	口径（8.30） 器高　－ 最大径　－	30	軟	密　白色粒子、径１～４㎜灰色小礫含む	外：2.5Y7.5/1浅黄色 内：2.5Y6/4にぶい黄色	内外：回転ナデ	不明	口縁部に若干歪みあり
20	20	短頸壺	１号窯 Ⅰ次床	口径（8.80） 器高　－ 最大径　－	20	軟	密　白色粒子、径２～３㎜灰色小礫含む	内外：5Y7.5/1灰白色	内外：回転ナデ	不明	口縁部に若干歪みあり
21	20	甕	１号窯 Ⅰ次床 （直上）	口径（18.20） 器高　－ 最大径　－	10	軟	密　白色粒子含む　径２～３㎜白色小礫わずかに含む	外：10YR7/6明黄褐色 内：N3/0暗灰色	内外：回転ナデ	不明	摩滅のため調整不明瞭
22	22	坏蓋	１号窯 Ⅱ次床	口径（12.80） 器高　－ 最大径　－	40	軟	密　白色粒子わずかに含む	外：10YR6/4にぶい黄橙色 内：2.5Y6/1黄灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ後ナデ	不明	器面が摩滅（特に内面は著しく、調整不明瞭）
23	20	坏蓋	１号窯 Ⅱ次床	口径（13.30） 器高　－ 最大径　－	10	軟	密　白色粒子わずかに含む	外：10YR6.5/6明黄褐色 内：10YR7/4にぶい黄橙色	内外：回転ナデ	不明	摩滅のため調整不明瞭
24	20	坏蓋	１号窯 Ⅱ次床 （直上）	口径（14.40） 器高　－ 最大径　－	5	軟	密　径１～３㎜灰色小礫わずかに含む	内外：N6/0灰色	内外：回転ナデ	不明	摩滅のため調整不明瞭
25	22	坏身	１号窯 Ⅱ次床 （直上）	口径（10.40） 器高　－ 最大径(12.40)	40	軟	密　径２㎜灰色小礫わずかに含む	外：5Y8/1.5灰白色・5Y7/1灰白色 内：5Y7/1灰白色	外：回転ナデ、一部回転ナデ後粗いナデ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	不明	外面特に底部付近が摩滅 断面内部が半還元 内面に煤付着
26	20	坏身	１号窯 Ⅱ次床	口径（12.40） 器高　－ 最大径(14.40)	20	軟	密　白色粒子、径２㎜白色小礫わずかに含む	外：5Y7.5/1灰白色・7.5Y4/1灰色 内：5Y8/2灰白色	内外：回転ナデ？	不明	器面が摩滅（過度の被熱か）調整不明瞭
27	20	甕	１号窯 Ⅱ次床	口径（15.50） 器高　－ 最大径　－	口縁部20	軟	密　径１～４㎜灰色小礫、径３㎜茶褐色小礫若干含む	外：7.5YR5/6明褐色・2.5Y6/2灰黄色 内：10YR5/4にぶい黄褐色・10YR5/1灰褐色	内外：回転ナデ	不明	器面が摩滅
28	20	甕	１号窯 Ⅱ次床 （直上）	口径（16.20） 器高　－ 最大径　－	口縁部15	軟	密　径１～２㎜灰色小礫わずかに含む	外：2.5Y7/2灰黄色 内：5Y6/1灰色	内外：回転ナデ	不明	器面が摩滅気味
29	21	坏蓋	１号窯 Ⅲ次床	口径（10.50） 器高　－ 最大径　－	20	軟	密　白色粒子、径１㎜灰色小礫わずかに含む	外：5Y7.5/1灰白色 内：2.5Y8/1灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	

表30　入野高岸古窯出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	出土位置・層位	法量（cm）	残存率%	焼成	胎土	色調	調整等の特徴	轆轤	備考
30	21	坏身	1号窯 Ⅲ次床	口径（11.60） 器高　－ 最大径(14.00)	10	良	密　白色粒子含む　径3㎜白色小礫、径1㎜灰色小礫わずかに含む	内外：7.5Y6/1灰色	内外：回転ナデ	不明	
31	21	坏身	1号窯 Ⅲ次床	口径（10.50） 器高　－ 最大径(12.90)	10	堅緻	密　白色粒子、径1～2㎜白色小礫含む	外：N5.5/0灰色 内：N6/0灰色	内外：回転ナデ	右	外面に粘土片付着
32	21	坏身	1号窯 Ⅲ次床	口径（11.80） 器高　－ 最大径(14.60)	20	良	密　白色粒子、径1～3㎜灰色小礫わずかに含む	内外：7.5Y2/1黒色 内：一部10YR7/6明黄褐色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	
33	22	坏蓋	1号窯 Ⅳ次床	口径（12.00） 器高　3.50 最大径　－	40	良	やや密　白色粒子、径1～4㎜白色小礫、径1㎜以下の黒色小礫含む	外：10Y4.5/1灰色 内：7.5Y5.5/1灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
34	21	坏身	1号窯 Ⅳ次床	口径（10.40） 器高　－ 最大径(12.80)	5	軟	密	外：10YR6/8明黄褐色・10YR5/1褐灰色 内：5Y6/2灰オリーブ色	内外：回転ナデ？	不明	歪みあり 摩滅のため調整不明瞭
35	21	坏身	1号窯 Ⅳ次床 （直上）	口径（12.20） 器高　－ 最大径(14.70)	10	軟	密　白色粒子を若干含む	外：5Y6.5/1灰色 内：5Y6/1灰色	内外：回転ナデ	不明	
36	21	高坏蓋	1号窯 Ⅳ次床	口径　－ 器高　－ 最大径　－	10	堅緻	密　白色粒子、径1㎜白色小礫わずかに含む	内外：5Y6/1灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	
37	21	高坏蓋	1号窯 Ⅳ次床	口径　－ 器高　－ 最大径　－	10	良	密　白色粒子含む　径1～3㎜白色小礫、径1～2㎜灰色小礫わずかに含む	外：10Y5.5/1灰色 内：N6/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
38	21	高坏蓋	1号窯 Ⅳ次床	口径（10.90） 器高　－ 最大径　－	15	堅緻	密　白色粒子多く含む	外：2.5Y5/1黄灰色・N6/0灰色 内：2.5GY6/1オリーブ灰色・N5/0灰色	外：回転ナデ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
39	21	高坏	1号窯 Ⅳ次床	口径　－ 器高　－ 脚部径(12.00)	脚部20	良	密　白色粒子多く含む　径1～4㎜白色小礫わずかに含む	外：7.5YR4/1褐灰色・5B4/1暗青灰色 内：N4/0灰色	内外：回転ナデ	右	歪み著しい
40	21	高坏	1号窯 Ⅳ次床 （直上）	口径　－ 器高　－ 脚部径(15.20)	10	軟	密　白色粒子わずかに含む	外：N5/0灰色 内：5Y5/1灰色	内外：回転ナデ？	不明	歪みあり 摩滅のため調整不明瞭（過度の被熱か）
41	21	壷蓋	1号窯 Ⅳ次床	口径（10.40） 器高　－ 最大径(13.20)	10	良	密　白色粒子含む　径3㎜灰色小礫わずかに含む	外：5Y8/1灰白色一部N6/0灰色 内：5Y7/1灰白色	内外：回転ナデ	不明	
42	21	壷蓋	1号窯 Ⅳ次床	口径（9.30） 器高　－ 最大径(12.20)	10	堅緻	密　白色粒子含む	外：N7/0灰白色 内：N6.5/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	左	
43		陶臼	1号窯 Ⅳ次床	口径　－ 器高　－ 底径（9.80）	20	軟	密　白色粒子、径1～2㎜灰色小礫含む　径3～6㎜白色小礫わずかに含む	外：5Y8/1灰白色 内：5Y8/2灰白色	内外：回転ナデ	不明	摩滅のため調整不明瞭
44	22	陶臼	1号窯 Ⅳ次床 （直上）	口径　－ 器高　－ 底径（8.00）	30	良	やや粗　白色粒子、径2～3㎜白色小礫非常に多く含む	外：N6/0灰色一部灰白色 内：N6/0灰色	外：回転ナデ後ナデ 内：回転ナデ？	不明	内面は剥離のため調整不明瞭
45	21	甕	1号窯 Ⅰ～Ⅳ次床	口径（19.30） 器高　－ 最大径　－	口縁部20	軟	密　径1～2㎜の白色小礫、灰色小礫を若干含む	内外：2.5Y7/1灰白色	外：回転ナデ、一部タタキ（不明瞭） 内：不明	不明	摩滅のため調整不明瞭
46	21	甕	1号窯 Ⅳ次床	口径（26.40） 器高　－ 最大径　－	口縁部10	良	密　白色粒子、径1～3㎜白色小礫わずかに含む	外：N4.5/0灰色 内：7.5Y7/1灰白色（N5/0灰色が混じる）	内外：回転ナデ	不明	
47	23	坏蓋	1号窯 Ⅴ次床	口径（13.40） 器高　4.10 最大径　－	10	軟	密　白色粒子、径2㎜白色小礫含む	外：5Y7/1灰白色 内：7.5Y8/2灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	不明	摩滅のため調整不明瞭

表30　入野高岸古窯出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	出土位置・層位	法量（cm）	残存率%	焼成	胎土	色調	調整等の特徴	轆轤	備考
48	25	坏蓋	１号窯 Ⅴ次床	口径（13.20） 器高　－ 最大径　－	20	良	密　白色粒子、黒色粒子多く含む　径１㎜白色小礫わずかに含む	外：5B6/1青灰色 内：5B6.5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
49	23	坏身	１号窯 Ⅴ次床	口径（10.40） 器高　4.20 最大径(12.60)	30	堅緻	密　白色粒子、径１～３㎜白色小礫多く含む	外：N6.5/0灰色 内：5B5.5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	歪み著しい 受部～立ち上がりに土器片付着
50	25	坏身	１号窯 Ⅴ次床 (煙道部)	口径（10.20） 器高　－ 最大径(12.40)	30	軟	密　径１～２㎜黒色小礫（？）多く含む	内外：5Y8/1灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ？ 内：回転ナデ	不明	摩滅のため調整不明瞭
51	23	坏身	１号窯 Ⅴ次床	口径（9.00） 器高　－ 最大径(11.40)	20	堅緻	やや密　白色粒子、径1～10㎜白色小礫多く含む	外：10BG4/1暗青灰色 内：10BG4.5/1暗青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	器面剥離する 受部～立ち上がりに粘土片多量に付着
52	23	坏身	１号窯 Ⅴ次床	口径（10.80） 器高　－ 最大径(13.30)	20	軟	密　径１㎜白色小礫わずかに含む	外：2.5Y7.5/2灰黄色 内：5Y8/2灰白色	内外：回転ナデ	不明	器面が摩滅
53	25	坏身	１号窯 Ⅴ次床	口径（12.20） 器高　－ 最大径(14.80)	10	軟	密　径１～２㎜砂礫、径１㎜白色小礫わずかに含む	外：5Y8/3淡黄色 内：5Y8/1灰白色	内外：回転ナデ	不明	器面が摩滅
54	25	坏身	１号窯 Ⅴ次床	口径（11.20） 器高　－ 最大径(13.40)	10	軟	密　白色粒子、径１～２㎜白色小礫、径１㎜黒色小礫含む	外：5Y6/1灰色 内：5Y8/1灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	不明	器面やや粗い
55	25	坏身	１号窯 Ⅴ次床	口径（10.90） 器高　－ 最大径(12.80)	10	良	密　白色粒子多く含む　径２～３㎜白色小礫含む	外：5Y8/2灰白色 内：5Y7.5/1灰白色	内外：回転ナデ	不明	摩滅のため調整不明瞭
56	25	坏身	１号窯 Ⅴ次床	口径（12.10） 器高　－ 最大径(14.40)	20	軟	密　白色粒子、径１～２㎜黒色小礫わずかに含む	外：5B5/1青灰色一部5Y8/1灰白色 内：5Y8/1灰白色	内外：回転ナデ	不明	粘土塊付着
57	24	坏身	１号窯 Ⅴ次床	口径（10.80） 器高　3.75 最大径　－	20	良	密　白色粒子、径１～５㎜白色小礫多く含む	外：10BG4/1暗青灰色 内：5BG4.5/1暗青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
58	24	坏身	１号窯 Ⅴ次床	口径　10.20 器高　4.35 最大径　－	70	良	密　径１～３㎜白色小礫、径５～８㎜灰色小礫わずかに含む	外：10Y5.5/1灰色 内：7.5Y5/1灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ後ナデ	左	底部内面中央に粘土紐痕か（凸凹あり） 底部外面に粘土片付着
59	25	甕	１号窯 Ⅴ次床	口径（12.90） 器高　－ 最大径　－	口縁部10	良	密　白色粒子含む　径１～３㎜灰色小礫わずかに含む	外：7.5Y6/1灰色 内：5Y6.5/1灰色	内外：回転ナデ	右	口縁部内面に粘土塊付着 シボリ痕あり
60	24	高坏蓋	１号窯 Ⅴ次床	口径（12.50） 器高　5.10 最大径　－	90	軟	密　白色粒子、径１～３㎜白色小礫、径１～３㎜黒色小礫含む	外：2.5GY8/1灰白色 内：5Y8/2灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ後ナデ	右	器面が摩滅
61	24	高坏蓋？	１号窯 Ⅴ次床 (煙道部)	口径（13.20） 器高　－ 最大径　－	40	軟	密　径１～２㎜白色小礫わずかに含む	外：5Y8/1灰白色・5Y6.5/1灰色 内：5Y8/1灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ？	不明	口縁部歪みあり 摩滅のため内面の調整不明瞭
62	24	高坏蓋	１号窯 Ⅴ次床	口径（10.60） 器高　－ 最大径　－	50	堅緻	密　白色粒子多く含む　径２～６㎜白色小礫含む	外：5PB6/1青灰色・天井付近5PB5.5/1青灰色 内：5PB6/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ・ナデ 内：回転ナデ、一部ナデ	右	
63	25	高坏	１号窯 Ⅴ次床	口径（10.60） 器高　－ 最大径　－	坏部10	良	密　白色粒子含む	外：5RP2/1紫黒色 内：2.5Y5.5/1黄灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右？	
64	24	高坏	１号窯 Ⅴ次床	口径（10.50） 器高　－ 最大径　－	坏部70	良	密　白色粒子多く含む　径２～４㎜小礫含む	内外：N6.5/1灰色部分的に2.5GY8/1灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	歪みあり
65	25	高坏	１号窯 Ⅴ次床	口径（11.00） 器高　－ 最大径　－	坏部25	良	密　白色粒子、径１～５㎜白色小礫含む	外：5RP2/1紫黒色 内：2.5Y5.5/1黄灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	不明	

表30　入野高岸古窯出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	出土位置・層位	法量（cm）	残存率%	焼成	胎土	色調	調整等の特徴	轆轤	備考
66	23	高坏	1号窯 V次床	口径　10.60 器高　－ 最大径　－	坏部90	良	密　白色粒子多く含む 径2～4㎜白色小礫含む	外：5P2/1紫黒色 内：5RP4.5/1暗紫灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ後ナデ	右	
67	23	高坏	1号窯 V次床	口径　10.50 器高　14.30 脚部径　10.60 脚部高　10.00	90	堅緻	密　白色粒子、径2～4㎜白色小礫多く含む	内外：5RP4/1暗紫灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	シボリ痕あり
68		高坏	1号窯 V次床	口径　－ 器高　－ 脚部径(12.70)	脚部70	良	密　白色粒子、径1～3㎜白色小礫多く含む	外：5PB3/1暗青灰色 内：5RP4/1暗紫灰色	内外：回転ナデ	右	シボリ痕あり
69	23	高坏	1号窯 V次床	口径　－ 器高　－ 脚部径　9.80 脚部高　8.20	脚部80	堅緻	密　白色粒子多く含む 径2～5㎜白色小礫、黒色粒子わずかに含む	外：5B5/1青灰色 内：5B4.5/1暗青灰色	内外：回転ナデ	右	2段3方透し 裾部の歪み著しい シボリ痕あり
70	23	高坏	1号窯 V次床	口径　－ 器高　－ 脚部径　9.60	脚部60	良	密　白色粒子、径1～2㎜白色小礫含む	外：N6/1灰色・一部灰白色 内：5P6.5/1紫灰色	内外：回転ナデ	右	2段3方透し
71	25	甕	1号窯 V次床 (煙道部)	口径（19.80） 器高　－ 最大径　－	口縁部20	良	密　白色粒子、径1～3㎜白色小礫、径1㎜灰色小礫含む	外：5Y7/1灰白色 内：2.5Y8/2灰白色	外：回転ナデ、一部タタキ（後ナデ） 内：回転ナデ	不明	摩滅のため調整不明瞭
72	25	甕	1号窯 V次床	口径（17.20） 器高　－ 最大径　－	20	良	密　白色粒子、径1㎜白色小礫、径1㎜灰色小礫を含む	内外：5Y8/2灰白色、一部剥離のため5R3/1暗赤灰色	内外：回転ナデ	右	
73	25	甕	1号窯 V次床 (煙道部)	口径（17.40） 器高　－ 最大径　－	20	軟	密　白色粒子、径1㎜白色小礫、灰色小礫含む	外：2.5Y8/1.5灰白色 内：5Y7.5/1灰白色	外：回転ナデ後口頸部および体部にタタキ（ナデ消し？） 内：回転ナデ　体部に当て痕	不明	摩滅気味のため調整不明瞭
74	24	甕	1号窯 V次床	口径（17.80） 器高　－ 最大径　－	口縁部90～肩部30	堅緻	密　白色粒子、径1～2㎜白色小礫わずかに含む	外：5Y6/1灰色　口縁～頸部はN6/0灰色 内：N6/0灰色	外：回転ナデ、一部タタキのちカキ目 内：回転ナデ、一部タタキ後ナデ消し	左？	口縁部に著しい歪みあり 頸部にヘラ記号「×」 内面に火ぶくれあり
75	26	坏身	1号窯 床面Tr	口径　10.00 器高　4.30 最大径　12.20	60	良	密　白色粒子含む　径1～2㎜白色小礫わずかに含む	内外：5Y7/1灰白色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り、一部（工具？）ナデ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
76		高坏蓋	1号窯 床面Tr	口径（12.00） 器高　－ 最大径　－	30	良	密　白色粒子、径1～2㎜白色小礫含む　径1㎜灰色小礫わずかに含む	外：7.5Y6.5/1灰色 内：7.5Y7/1灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
77	26	坏蓋	1号窯 前庭部	口径（14.40） 器高　－ 最大径(14.80)	35	堅緻	密　白色粒子わずかに含む	外：10GY5/1緑灰色 内：10GY6/1緑灰色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り後不調整 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
78	29	坏蓋	1号窯 前庭部	口径（12.90） 器高　－ 最大径　－	15	堅緻	密　白色粒子、径2㎜白色小礫含む	外：10YR6/4にぶい黄橙色 内：5Y7/1灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	外面に融着痕、自然釉あり 歪み著しい
79	26	坏蓋	1号窯 前庭部	口径（12.50） 器高　－ 最大径(12.80)	25	堅緻	密　白色粒子わずかに含む	外：7.5Y4/1灰色 内：7.5Y6/1灰色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り後不調整 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	天井部外面に焼成時の剥離痕 内面に直線状の傷あり
80	26	坏蓋	1号窯 前庭部	口径（11.80） 器高　－ 最大径　－	20	堅緻	密　白色粒子、径1～4㎜白色小礫多く含む	外：10YR6/4にぶい黄橙色 内：5Y7/1灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	口縁部外面に薄く降灰 外面に自然釉が少量付着
81	27	坏蓋	1号窯 前庭部	口径（11.80） 器高　－ 最大径　－	40	堅緻	密　白色粒子、径1～5㎜白色小礫少量含む	外：7.5Y/1オリーブ黒色 内：7.5Y4/1灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	口縁部歪みあり 外面に薄く降灰
82	27	坏蓋	1号窯 前庭部	口径（11.20） 器高　4.20 最大径　－	30	堅緻	密　白色粒子、径1～6㎜白色小礫含む	外：N5/0灰色 内：10BG6/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
83		坏蓋	1号窯 前庭部	口径（11.40） 器高　－ 最大径　－	25	堅緻	密　白色粒子、径1～3㎜白色小礫含む	外：10BG3/1暗青色 内：5PB4/1暗青色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	断面端部に融着痕 歪みあり 外面に粗砂粒融着

表30　入野高岸古窯出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	出土位置・層位	法量（cm）	残存率%	焼成	胎土	色調	調整等の特徴	轆轤	備考
84		坏蓋	１号窯 前庭部	口径　11.30 器高　4.00 最大径　－	90	堅緻	密　白色粒子多く含む 径２～８㎜白色小礫含む	外：10BG5.5/1青灰色 内：5PB5.5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	火ぶくれあり 口縁部歪みあり
85	29	坏蓋	１号窯 前庭部	口径（11.70） 器高　－ 最大径　－	20	堅緻	密　白色粒子含む	外：10Y4/1灰色 内：7.5Y5/1灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	左	口縁端部に融着後剥離痕 外面に自然釉・粗砂熔着
86	29	坏蓋	１号窯	口径（12.00） 最大径　－	10	堅緻	やや密　白色粒子、径１～２㎜白色小礫多く含む	外：5BG4.5/1暗青灰色 内：N6.5/1灰色	内外：回転ナデ	不明	内・外面に自然釉付着　熔着
		坏身	前庭部	口径（10.60） 最大径(13.50)	10	堅緻	やや密　白色粒子、径１～２㎜白色小礫多く含む	外：7.5GY4/1暗緑灰色 内：7.5Y6.5/1灰色	内外：回転ナデ		内・外面に自然釉付着　熔着
87	27	坏蓋	１号窯 前庭部	口径（11.90） 器高　－ 最大径　－	20	堅緻	密　白色粒子、径１～６㎜白色小礫含む	外：N4/0灰色 内：N6/0灰色	内外：回転ナデ	右	
88	27	坏蓋	１号窯 前庭部	口径（10.60） 器高　－ 最大径　－	50	良	密　径１～３㎜白色小礫多く含む	外：10Y4.5/1灰色 内：7.5Y5/1灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	内・外面に自然釉付着 歪みあり 天井部外面にヘラ記号
89		坏蓋	１号窯 前庭部	口径（11.40） 器高　－ 最大径　－	10	堅緻	密　白色粒子多く含む 径１～５㎜白色小礫含む	外：N6/0灰色 内：N5.5/0灰色	内外：回転ナデ	不明	摩滅のため調整不明瞭
90		坏蓋	１号窯 前庭部	口径（12.50） 器高　－ 最大径　－	10	良	密　白色粒子、径１～６㎜白色小礫わずかに含む	外：2.5Y6/2灰黄色、N6/0灰色 内：N6/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	不明	
91	27	坏蓋	１号窯 前庭部	口径　11.70 器高　3.75 最大径　－	60	良	密　白色粒子、径１～２㎜白色小礫多く含む 径３～５㎜白色小礫含む	外：5PB5/1青灰色 内：5PB6/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
92		坏蓋	１号窯 前庭部	口径（12.50） 器高　－ 最大径　－	30	良	密　白色粒子、径１～３㎜白色小礫、径３㎜灰色小礫、径６㎜灰褐色小礫多く含む	外：2.5Y6/2灰黄色 内：N7/0灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右？	歪みあり 口縁端部に融着後剥離痕あり
93		坏蓋	１号窯 前庭部	口径（11.90） 器高　－ 最大径　－	20	堅緻	密　径１～９㎜白色小礫わずかに含む	内外：5PB5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	歪みあり
94	29	坏蓋	１号窯 前庭部	口径（11.20） 器高　－ 最大径　－	10	堅緻	密　白色粒子、径１～２㎜白色小礫少量含む	外：7.5Y.5/1オリーブ黒褐色 内：N6/0灰色	内外：回転ナデ	不明	内外面に薄く降灰
95		坏蓋	１号窯 前庭部	口径（11.50） 器高　－ 最大径　－	25	堅緻	密　白色粒子、径１～４㎜白色小礫多く含む	外：2.5Y5/1黄灰色 内：N7.5/0灰白色	内外：回転ナデ	不明	口縁部に自然釉が少量付着
96	29	坏蓋	１号窯 前庭部	口径（11.50） 器高　－ 最大径　－	10	堅緻	密　白色粒子、径１～２㎜白色小礫わずかに含む	内外：N5.5/0灰色	内外：回転ナデ	不明	
97	27	坏蓋	１号窯 前庭部	口径（13.00） 器高　－ 最大径　－	10	良	やや密　白色粒子多く含む　径１～３㎜白色小礫含む	外：5RP/1暗紫灰色 内：5B4/1暗青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	口縁部歪みあり
98	29	坏蓋	１号窯 前庭部	口径（13.60） 器高　－ 最大径　－	10	良	密　白色粒子、径１～２㎜白色小礫多く含む 径５㎜灰色小礫わずかに含む	外：5PB5/1青灰色 内：5B5.5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	自然釉付着
99	27	坏身	１号窯 前庭部	口径（9.30） 器高　4.45 最大径(12.00)	25	堅緻	密　径１～３㎜白色小礫多く含む	外：5PB5/1青灰色 内：5PB6/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	歪みあり
100	27	坏身	１号窯 前庭部	口径（10.30） 器高　－ 最大径(12.60)	25	堅緻	密　白色粒子多く含む 径１～５㎜白色小礫、径３㎜灰色小礫わずかに含む	内外：N5.5/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	吹き出し多い 歪みあり
101	28	坏身	１号窯 前庭部	口径（10.10） 器高　－ 最大径(12.50)	40	良	密　白色粒子多く含む 径１～５㎜白色小礫わずかに含む	外：5YR6/2灰黄色・5Y6/1灰色 内：10G5.5/1緑灰色	外：回転ナデ 内：回転ナデ後ナデ	右	歪みあり
102	28	坏身	１号窯 前庭部	口径（8.60） 器高　3.70 最大径(11.60)	30	堅緻	密　径１～５㎜白色小礫わずかに含む	外：7.5Y7/3灰色 内：N6/0灰色	外：回転ナデ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	外面に薄く降灰

表30　入野高岸古窯出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	出土位置・層位	法量（cm）	残存率%	焼成	胎土	色調	調整等の特徴	轆轤	備考
103	29	坏身	1号窯前庭部	口径（10.00） 器高　－ 最大径(12.40)	10	良	密　白色粒子、径1～3㎜白色小礫わずかに含む	外：5Y5/1灰色・10YR8/3浅黄橙色 内：2.5Y7/1灰白色	内外：回転ナデ	右	外面に自然釉少量付着 受部に重ね焼き痕 歪みあり
104	28	坏身	1号窯前庭部	口径（10.00） 器高　－ 最大径(12.60)	30	堅緻	密　白色粒子、径1～4㎜白色小礫含む	外：2.5Y7/1灰白色 内：N5/0灰色	内外：回転ナデ	左	受部に重ね焼き痕 外面に礫熔着
105	28	坏身	1号窯前庭部	口径（10.10） 器高　3.50 最大径(12.10)	25	良	密　白色粒子多く含む 径1～6㎜白色小礫わずかに含む	外：N6/0灰色 内：N5.5/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	歪みあり
106	29	坏身	1号窯前庭部	口径（9.70） 器高　－ 最大径(12.00)	15	堅緻	密　白色粒子、径1～3㎜白色小礫わずかに含む	外：N6/0灰色・5Y6/1灰色 内：N6/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	不明	受部の歪み大きい
107		坏身	1号窯前庭部	口径（9.80） 器高　－ 最大径(11.80)	20	良	密　白色粒子多く含む 径1～5㎜白色小礫わずかに含む	外：N5/0灰色 内：N5.5/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
108		坏身	1号窯前庭部	口径（9.30） 器高　－ 最大径(11.80)	30	堅緻	密　白色粒子、径1～6㎜白色小礫多く含む	外：10BG4/1暗青灰色 内：7.5Y7/1灰白色	内外：回転ナデ	左	歪み著しい 受部に重ね焼き痕あり
109	27	坏身	1号窯前庭部	口径　9.65 器高　3.80 最大径　12.6	70	堅緻	密　白色粒子、径1～8㎜白色小礫多く含む。径1㎝以下の砂礫わずかに含む	外：7.5Y5.5/1灰色 内：N5.5/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	外面に自然釉付着 歪みあり
110	28	坏身	1号窯前庭部	口径　9.90 器高　3.75 最大径　12.40	100	堅緻	密　白色粒子、径1～4㎜白色小礫多く含む	外：5B5.5/1青灰色 内：5PB5.5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	歪みあり
111	28	坏身	1号窯前庭部	口径　9.60 器高　3.50 最大径　12.30	80	良	密　白色粒子、径1～3㎜白色小礫多く含む 径5～10㎜白色小礫わずかに含む	内外：5B5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
112		坏身	1号窯前庭部	口径（9.90） 器高　－ 最大径(11.80)	25	不良	密　白色粒子、径1～3㎜白色小礫少量含む	外：2.5Y6/2灰黄色・N6/0灰色 内：N6/0灰色	内外：回転ナデ	左	外面に小礫熔着 歪み著しい
113		坏身	1号窯前庭部	口径（9.20） 器高　－ 最大径(11.80)	15	良	密　白色粒子、径1～3㎜白色小礫多く含む	内外：N5.6/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	左	歪みあり
114		坏身	1号窯前庭部	口径（9.70） 器高　－ 最大径(12.20)	20	堅緻	密　白色粒子、径1～3㎜白色小礫含む	外：N3/0暗灰色 内：N6/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	受部に重ね焼き痕 歪み著しい
115	29	坏身	1号窯前庭部	口径（9.20） 器高　－ 最大径(11.60)	10	良	密　白色粒子、径1㎜白色小礫、赤色粒子わずかに含む	内外：N6.5/0灰色・7.5Y7/1灰白色	内外：回転ナデ	右？	
116	29	坏身	1号窯前庭部	口径（7.30） 器高　－ 最大径(10.20)	20	堅緻	密　白色粒子多く含む 径1～2㎜白色小礫、径3㎜灰色砂礫わずかに含む	外：N5.5/0灰色・7.5Y6/1灰色 内：N5.5/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	
117	30	高坏蓋	1号窯前庭部	口径（10.50） 器高　－ 最大径　－	25	良	密　白色粒子多く含む 径1～3㎜白色小礫少量含む	外：5Y5.5/1灰色 内：5B4.5/1暗青灰色	外：回転ナデ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	左	
118	30	高坏蓋	1号窯前庭部	口径（12.70） 器高　－ 最大径　－	30	良	密　白色粒子、径1～3㎜白色小礫含む	外：5Y6.5/2灰オリーブ色 内：5BG5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	歪み著しい
119	30	高坏蓋	1号窯前庭部	口径　－ 器高　－ 最大径　－	つまみ部100	堅緻	密　白色粒子、径1～2㎜白色小礫多く含む	外：5B5.5/1青灰色 内：5PB5/1青灰色	外：回転ヘラケズリ、つまみ部回転ナデ 内：ナデ	不明	
120	30	高坏	1号窯前庭部	口径（19.80） 器高　－ 最大径　－	脚部10	良	密　白色粒子多く含む 径1～2㎜白色小礫含む	外：2.5Y6/2灰黄色 内：5PB6/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	不明	内外面に自然釉付着 焼成時の剥離痕あり 歪みあり
121		高坏	1号窯前庭部	口径　－ 器高　－ 脚部高(14.00)	30	堅緻	密　径2～4㎜砂礫、白色粒子含む	外：5B/1暗青灰色 内：5B/1青黒色	内外：回転ナデ	不明	歪みあり

表30　入野高岸古窯出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	出土位置・層位	法量（cm）	残存率%	焼成	胎土	色調	調整等の特徴	轆轤	備考
122	30	高坏	１号窯前庭部	口径　－ 器高　－ 最大径　－	50	堅緻	密　白色粒子多く含む	外：5B5/1青灰色 内：5B5/1青灰色（一部2.5GY5/1オリーブ灰色）	外：回転ナデ 内：坏部ナデ、脚部回転ナデ、一部ナデ	左	
123	30	瑟	１号窯前庭部	口径（10.90） 器高　－ 最大径　－	口頸部20	堅緻	密　白色粒子多く含む	外：N6.5/1灰色 内：5Y6.5/1灰色	内外：回転ナデ	右？	歪み著しい
124	30	瓶類	１号窯前庭部	口径（9.40） 器高　－ 最大径　－	10	良	密　白色粒子含む　径１～２㎜白色小礫わずかに含む	外：N3.5/0暗灰色 内：2.5Y7/3浅黄色	内外：回転ナデ	不明	内面に自然釉付着
125	30	瓶類	１号窯前庭部	口径　－ 器高　－ 最大径　－	把手部100	良	密　白色粒子、径１～３㎜白色小礫を多く含む	内外：5B5/1青灰色	内外：ナデ	不明	
126	30	壷蓋	１号窯前庭部	口径（8.20） 器高　－ 最大径(11.30)	25	堅緻	密　白色粒子、径２㎜以下白色小礫多く含む	外：5BG6.5/1青灰色 内：5PB6/1青灰色	外：回転ナデ、一部不調整 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	左	かえり部分に自然釉付着
127	30	壷蓋	１号窯前庭部	口径（9.60） 器高　－ 最大径(12.20)	20	良	密　白色粒子、径２㎜白色小礫含む	外：N6/1灰色 内：N6.5/1灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
128	30	壷蓋	１号窯前庭部	口径（9.20） 器高　－ 最大径(12.00)	15	軟	密　径４㎜灰色小礫少量含む	内外：N6.5/0灰色	外：回転ナデ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
129	29	壷類	１号窯前庭部	口径　－ 器高　－ 体部径(16.00)	30	良	やや密　白色粒子、径１～３㎜白色小礫多く含む　径１㎜灰色小礫含む	外：2.5Y7/3浅黄色（一部5B5/1青灰色） 内：10BG4/1暗青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	不明	外面に小礫と自然釉付着 短頸壷か 融着後の剥離痕あり
130	30	壷類	１号窯前庭部	口径　－ 器高　－ 脚部径(11.60)	脚部30	堅緻	やや密　白色粒子多く含む　径２～３㎜白色小礫含む	外：2.5GY5.5/1オリーブ灰色 内：5BG5.5/1青灰色	内外：回転ナデ	右	
131	30	壷類	１号窯前庭部	口径　－ 器高　－ 脚部径(11.60)	脚部10	良	密　白色粒子、径１～３㎜白色小礫やや多く含む	内外：5Y6/1灰色	内外：回転ナデ	不明	内・外面に自然釉付着 外面に小礫融着
132	29	壷類	１号窯前庭部	口径　－ 器高　－ 脚部径（9.80）	脚部70	良	密　白色粒子、径２～３㎜白色小礫多く含む	外：2.5GY3/1暗オリーブ灰色 内：7.5Y2/2オリーブ黒色	外：回転ナデ 内：回転ナデ、一部ナデ	不明	歪み著しい 内外面に自然釉・小礫付着
133	29	壷類	１号窯前庭部	口径　－ 器高　－ 脚部高（8.80）	40	良	やや密　白色粒子、径２～５㎜白色小礫多く含む	外：7.5Y2/2オリーブ黒色 内：5R5.5/1赤灰色	内外：回転ナデ	不明	内面の一部と外面に自然釉が厚く付着 内面に小礫融着
134	30	壷類	１号窯前庭部	口径　－ 器高　－ 脚部径(11.70)	脚部10	堅緻	密　白色粒子、径１～６㎜白色小礫わずかに含む	外：10YR4/1褐灰色 内：5B5/1青灰色	内外：回転ナデ	右	
135	30	壷類	１号窯前庭部	口径　－ 器高　－ 体部径(12.00)	10	堅緻	密　白色粒子、径１㎜白色小礫、径５㎜灰色小礫少量含む	外：2.5Y6/2灰黄色(一部10YR6/3にぶい黄橙色) 内：2.5Y6/2灰黄色	内外：回転ナデ	不明	外面に自然釉付着
136		甕	１号窯前庭部	口径（16.40） 器高　－ 頸部径(14.00)	10	堅緻	密　白色粒子含む　径１～２㎜の白色小礫少量含む	外：7.5Y7/1灰白色（一部N5.5/1灰色） 内：N6.5/1灰色	外：口頸部回転ナデ、体部タタキ後カキ目 内：口頸部回転ナデ、体部当て具痕	不明	歪み著しい
137	30	甕	１号窯前庭部	口径（17.60） 器高　－ 最大径　－	口頸部20	堅緻	密　白色粒子、径１㎜白色小礫少量含む	外：N5.5/0灰色 内：N5/0灰色	内外：回転ナデ	右	歪み著しい
138	28	甕	１号窯前庭部	口径（18.00） 器高　－ 最大径　－	30	良	密　白色粒子、径２～３㎜白色小礫含む	外：5BG6/1青灰色 内：5BG5/1青灰色(一部2.5GY7/1明オリーブ灰色)	外：口縁部回転ナデ、頸部タタキ後回転ナデ、体部タタキ後カキ目 内：口縁部回転ナデ、体部当て具痕後ナデ消し	不明	歪みあり 頸部にヘラ記号「×」
139	30	甕	１号窯前庭部	口径（16.30） 器高　－ 最大径　－	口頸部30	左	密　黒色粒子、径１～４㎜黒色小礫多く含む白色粒子少量含む	外：N4/0灰色（一部N4.5/0灰色） 内：N5.5/0灰色	内外：回転ナデ	左	歪み著しい

表30　入野高岸古窯出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	出土位置・層位	法量（cm）	残存率%	焼成	胎土	色調	調整等の特徴	轆轤	備考
140		坏蓋	2号窯 Ⅰ次床	口径（10.30） 器高　－ 最大径　－	5	軟	密　白色粒子わずかに含む	外：5Y3.5/1オリーブ黒灰色 内：2.5Y8/3淡黄色	内外：不明	不明	器面が摩滅（過度の被熱か）
141		坏蓋	2号窯 Ⅰ次床	口径（10.20） 器高　－ 最大径　－	5	軟	密　白色粒子わずかに含む	外：10YR4/6褐色 内：10YR8/2灰白色	外：回転ナデ 内：回転ナデ？	不明	内面が摩滅（過度の被熱か）
142		坏蓋	2号窯 Ⅱ次床	口径（10.30） 器高　3.30 最大径　－	30	軟	密　白色粒子、径1～2㎜白色小礫わずかに含む	外：7.5YR5/2灰褐色 内：2.5Y7.5/1灰白色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り不調整 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	過度の被熱か
143	33	坏蓋	2号窯 Ⅱ次床	口径（10.40） 器高（3.50） 最大径　－	60	軟	密　径2㎜灰色小礫、径3㎜白色小礫わずかに含む	内外：5Y8/1灰白色	外：回転ナデ、一部不明 内：不明	不明	器面が摩滅（過度の被熱か） ひび割れあり
144	33	坏蓋	2号窯 Ⅱ次床	口径（10.20） 器高　－ 最大径　－	25	軟	密　径1㎜灰色小礫、白色小礫わずかに含む	内外：5Y8/1灰白色	内外：不明	不明	器面が摩滅（過度の被熱か）
145		坏蓋	2号窯 Ⅱ次床	口径（8.20） 器高　－ 最大径　－	15	軟	密　径2～3㎜灰色小礫わずかに含む	外：7.5YR4/6褐色 内：2.5YR8/2灰白色	外：回転ナデ 内：不明	不明	器面が摩滅（過度の被熱か） 歪み、ひび割れあり
146	33	坏身	2号窯 Ⅱ次床	口径（8.40） 器高　2.95 最大径（10.65）	80	軟	密　径1～2㎜白色小礫わずかに含む	外：10R5/1赤灰色・7.5Y6.5/1灰色 内：5Y6.5/1灰色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り不調整 内：回転ナデ	左	内面および外面の一部が摩滅　歪み・ひび割れあり
147	33	坏身	2号窯 Ⅱ次床	口径　8.90 脚部径　3.00 最大径　11.00	95	軟	密　白色粒子、径1～8㎜白色小礫、径2～5㎜灰色小礫わずかに含む	外：10YR5/1褐灰色 内：2.5Y7/1灰白色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り不調整 内：回転ナデ	左	歪み・割れあり 器面が摩滅
148	33	坏身	2号窯 Ⅱ次床	口径　9.40 器高　2.90 最大径　11.65	50	軟	密　白色粒子、径1～3㎜白色小礫わずかに含む	外：N5/0灰色 内：10YR6/1褐灰色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り不調整 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	受部が摩滅
149		坏身	2号窯 Ⅱ次床	口径（10.20） 器高　3.50 最大径（12.60）	30	軟	密　灰色粒子わずかに含む	外：10YR7/3にぶい黄橙色 内：10YR7/4にぶい黄橙色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り不調整 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	不明	摩滅気味のため調整不明瞭
150	33	坏身	2号窯 Ⅱ次床	口径（9.30） 器高（3.20） 最大径（11.30）	50	軟	密　径2㎜白色小礫わずかに含む	外：5Y8/1灰白色 内：2.5Y8/2灰白色	内外：不明	不明	器面が摩滅（過度の被熱か） 脆弱
151	33	坏蓋	2号窯 Ⅲ次床	口径（11.60） 器高　3.80 最大径　－	40	良	密　白色粒子含む　径2～3㎜白色小礫わずかに含む	外：5PB4.5/1暗青灰色 内：5PB3/1暗青灰色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り不調整 内：回転ナデ後ナデ	左	歪みあり
152	33	坏蓋	2号窯 Ⅲ次床	口径　10.60 器高　3.50 最大径　－	90	軟	密　白色粒子含む　径1～3㎜黒色小礫わずかに含む	外：5Y6/1灰色 内：5Y8/2灰白色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り不調整 内：回転ナデ後ナデ	右	
153	33	坏蓋	2号窯 Ⅲ次床	口径（10.60） 器高　3.70 最大径　－	60	堅緻	密　白色粒子多く含む	外：5BG5.5/1青灰色 内：10BG4.5/1暗青灰色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り不調整 内：回転ナデ後ナデ	右	表面に粘土片付着 歪みあり
154	33	坏身	2号窯 Ⅲ次床	口径（9.20） 器高　3.60 最大径（11.80）	80	軟	密　白色粒子、黒色粒子含む　径7㎜白色小礫わずかに含む	外：5Y8/2灰白色 内：5Y6/1灰色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り不調整 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	左	歪みあり
155	34	高坏	2号窯 Ⅲ次床	口径（11.00） 器高　7.00 脚部径（7.50）	90	軟	密　灰色粒子多く含む白色粒子含む	内外：5Y8/2灰白色	内外：不明	不明	歪みあり
156		甕	2号窯 Ⅴ次床	口径　－ 器高　－ 最大径　－	5	堅緻	密　白色粒子含む　径1㎜白色小礫わずかに含む	内外：N6/0灰色	内外：回転ナデ	不明	
157	34	坏蓋	2号窯 前庭部 （改修前）	口径（9.60） 器高　3.50 最大径（10.00）	30	良	密　白色粒子、径1～2㎜白色小礫含む　径3～4㎜灰色小礫わずかに含む	外：5YR5/2灰褐色 内：5Y8/1灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ・ヘラ切り 内：回転ナデ	右	
158		坏蓋	2号窯 前庭部 （改修前）	口径（12.00） 器高　－ 最大径　－	10	良	密　白色粒子、径1㎜灰色小礫、径1㎜白色小礫わずかに含む	外：5B5.5/1青灰色 内：7.5Y7/1灰白色	内外：回転ナデ	不明	歪み著しい
159	34	高坏蓋	2号窯 前庭部 （改修前）	口径　－ 器高　－ 最大径　－	30	良	密　白色粒子、径1㎜灰色小礫、径1～3㎜白色小礫含む	外：7.5Y6/1灰色 内：5Y7/1灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	

表30　入野高岸古窯出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	出土位置・層位	法量（cm）	残存率%	焼成	胎土	色調	調整等の特徴	轆轤	備考
160	34	坏蓋	２号窯 前庭部 （中間層）	口径（9.40） 器高　3.55 最大径（9.70）	40	良	密　白色粒子、径１～６㎜白色小礫含む　径１㎜以下の黒色粒子わずかに含む	外：5YR6/2灰褐色 内：N7.5/0灰白色	外：回転ナデ、一部不調整 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
161	34	坏身	２号窯 前庭部 （中間層）	口径（10.00） 器高　3.50 最大径（12.00）	10	軟	密　白色粒子、径１㎜白色小礫、径１㎜灰色小礫わずかに含む	外：5B6/1青灰色 内：2.5Y8/3淡黄色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ？ 内：回転ナデ	不明	摩滅のため調整不明瞭
162	34	坏身	２号窯 前庭部 （中間層）	口径（10.00） 器高　－ 最大径（11.80）	10	堅緻	やや密　白色粒子多く含む　径１㎜白色小礫、黒色小礫わずかに含む	外：5B6.5/1青灰色 内：5PB5/1青灰色	内外：回転ナデ	不明	受部に重ね焼き痕
163	34	短頸壺	２号窯 前庭部 （中間層）	口径（7.40） 器高　－ 最大径　－	10	良	密　白色粒子、径１～２㎜白色小礫、径１㎜灰色小礫わずかに含む	内外：10BG5/1青灰色	内外：回転ナデ	不明	口縁部歪みあり
164	34	壺類	２号窯 前庭部 （中間層）	口径　－ 器高　－ 最大径　－	10	堅緻	密　白色粒子、径２㎜以下の白色小礫含む	外：7.5Y6.5/1灰色 内：5PB5.5/1青灰色	外：回転ナデ、一部カキ目 内：回転ナデ	左	火ぶくれ・ひび割れ多い 歪みあり
165	34	瓶類	２号窯 前庭部 （中間層）	口径（10.90） 器高　－ 最大径　－	10	堅緻	密　白色粒子、径１～４㎜白色小礫、黒色粒子含む	外：7.5Y6/1灰色 内：7.5Y6.5/1灰色	内外：回転ナデ	左	
166	34	甕	２号窯 前庭部 （中間層）	口径（31.60） 器高　－ 最大径　－	5	堅緻	密　白色粒子、径１～２㎜白色小礫、径１㎜灰色小礫含む	外：5Y6/2灰オリーブ色 内：5Y5.5/1灰色	外：回転ナデ、一部波状文・沈線 内：回転ナデ	左	歪みあり
167	34	甕	２号窯 前庭部 （中間層）	口径（25.60） 器高　－ 最大径　－	10	堅緻	やや密　白色粒子多く含む　径１㎜白色小礫、黒色小礫含む	外：5Y6.5/1灰色 内：5B5/1青灰色	外：回転ナデ、一部カキ目のちタタキ 内：回転ナデ、一部タタキ	不明	歪み著しい 肩部に把手の痕跡 火ぶくれあり
168	35	坏蓋	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（12.20） 器高　－ 最大径　－	20	良	密　白色粒子、径１㎜白色小礫含む　径３㎜灰色小礫、径１㎝白色礫わずかに含む	外：5Y6/2灰オリーブ色 内：5P2/1紫黒色	内外：回転ナデ	左	口縁部歪みあり
169	35	坏蓋	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（11.70） 器高　－ 最大径　－	10	良	密　白色粒子、径１㎜白色小礫、灰色小礫わずかに含む	外：5Y5/1灰色 内：5Y6.5/1灰色	内外：回転ナデ	不明	部分的に剥離のため調整不明
170	35	坏蓋	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（11.50） 器高　－ 最大径　－	10	堅緻	密　白色粒子多く含む　径１㎜白色小礫わずかに含む	外：2.5Y6/2灰黄色 内：5B5/1青灰色	内外：回転ナデ	右	口縁部著しい歪みあり
171	35	坏蓋	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（11.80） 器高　－ 最大径　－	10	良	密　白色粒子、径１～５㎜白色小礫多く含む	外：5Y6.5/3オリーブ黄色 内：N7/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	左	天井部外面に粘土塊付着
172	35	坏蓋	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（12.40） 器高　－ 最大径　－	10	軟	密　白色粒子、灰色粒子わずかに含む	外：2.5Y6/2.5灰黄色 内：2.5Y6/3にぶい黄色	内外：回転ナデ	右	内面は摩滅が著しく調整不明瞭
173	35	坏蓋	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（12.50） 器高　－ 最大径（12.80）	20	良	密　白色粒子、径１㎜白色小礫含む　径１㎜灰色小礫わずかに含む	外：N5.5/0灰色 内：10Y5.5/1灰色、口縁部5Y7/1灰白色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り不調整 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	歪み著しい
174	35	坏蓋	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（10.20） 器高　－ 最大径（10.60）	20	堅緻	密　白色粒子含む　径１㎜灰色小礫、白色小礫わずかに含む	外：5Y6.5/1灰色 内：N6.5/0灰色	内外：回転ナデ	右	
175	35	坏蓋	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（9.90） 器高　－ 最大径（10.40）	15	堅緻	密　白色粒子、径３㎜白色小礫わずかに含む	外：2.5Y6.5/2灰黄色 内：5Y6.5/1灰色	内外：回転ナデ	左	口縁部に著しい歪みあり
176	35	坏蓋	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（10.20） 器高　－ 最大径（10.60）	10	軟	密　白色粒子わずかに含む	内外：2.5Y7.5/1灰白色	内外：回転ナデ	不明	特に外面が摩滅
177	35	坏身	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（9.50） 器高　－ 最大径（12.00）	10	良	密　白色粒子わずかに含む	外：2.5Y6.5/1黄灰白色・2.5Y8/2灰白色 内：2.5Y7/1.5灰白黄色	外：回転ナデ、一部ヘラ切り不調整？ 内：回転ナデ	右	シャープで丁寧な成形
178	35	坏身	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（9.45） 器高　－ 最大径（11.40）	40	良	密　白色粒子少量含む　径１㎜灰白色粒子わずかに含む	内外：7.5Y6/1灰色	内外：回転ナデ	左	丁寧な成形
179	35	坏身	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（9.00） 器高　－ 最大径（11.80）	10	堅緻	密　白色粒子含む　径１～２㎜白色小礫、灰色粒子わずかに含む	外：5Y6.5/1灰色 内：5P6.5/1紫灰色	内外：回転ナデ	左	

表30　入野高岸古窯出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	出土位置・層位	法量（cm）	残存率%	焼成	胎土	色調	調整等の特徴	轆轤	備考
180	35	坏身	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（9.10） 器高　－ 最大径(11.40)	10	堅緻	密　白色粒子、径１㎜白色小礫わずかに含む	内外：N7/0灰白色	内外：回転ナデ	右	
181	35	坏身	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（9.10） 器高　－ 最大径(11.40)	10	良	密　白色粒子、径１～３㎜白色小礫多く含む	外：5B4/1暗青灰色 内：5B5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	
182	35	坏身	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（9.30） 器高　－ 最大径(12.00)	25	堅緻	密　径１～３㎜白色小礫含む	外：5B5/1青灰色 内：5B6/1青灰色	内外：回転ナデ	左	
183	35	坏身	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（6.50） 器高　－ 最大径(9.40)	10	良	密　白色粒子、径１～３㎜白色小礫含む	内外：5R4/1暗赤灰色	内外：回転ナデ	不明	
184	35	高坏	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（16.80） 器高　－ 最大径　－	坏部30	軟	密　白色粒子わずかに含む	内外：2.5Y6/2灰黄色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ？ 内：回転ナデ	不明	剥離及び摩滅のため調整不明
185	35	甕	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（13.60） 器高　－ 最大径　－	口縁部5	堅緻	密　白色粒子、径１㎜白色小礫多く含む	外：N6/0灰色 内：N6.5/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	
186	35	甕	２号窯 前庭部 （改修後）	口径（14.50） 器高　－ 最大径　－	10	良	密　白色粒子多く含む径２㎜白色小礫、径３㎜灰色小礫わずかに含む	外：5Y6/1灰色 内：5B5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	
187		フラスコ瓶	２号窯 前庭部 （改修後）	口径　－ 器高　－ 最大径　－	頸部90	堅緻	密　白色粒子含む　径１㎜白色小礫、灰色小礫わずかに含む	外：2.5Y6/2灰黄色 内：2.5Y6.5/1黄灰色	外：回転ナデ 内：回転ナデ、一部ナデ	右	外面に自然釉付着 湖西産
188	35	甕？	２号窯 前庭部 （改修後）	口径　－ 器高　－ 最大径　－	5	良	やや密　白色粒子、径１～３㎜白色小礫、径１㎜灰色小礫非常に多く含む	外：2.5Y5/2暗灰黄色 内：2.5Y7/2灰黄色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	不明	
189		坏蓋	Ｅ－４ グリッド	口径（11.40） 器高　－ 最大径(11.90)	25	良	密　白色粒子わずかに含む	外：N5/0灰色 内：N6/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	歪みあり 口縁部が被熱
190	38	坏蓋	Ｅ－４ グリッド	口径（11.20） 器高　－ 最大径(11.90)	30	堅緻	密　白色粒子、径0.5～２㎜黒色粒子多く含む径２～４㎜砂礫わずかに含む	外：5B5/1青灰色 内：5B6/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	左	
191	38	坏蓋	Ｇ－８ グリッド	口径（12.30） 器高　－ 最大径　－	25	堅緻	密　径0.5～１㎜白色小礫、径２㎜黒色小礫わずかに含む	内外：N5/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	歪み著しい
192	38	坏蓋	25，26 Trの間	口径（11.00） 器高　－ 最大径　－	20	良	密　白色粒子多く含む径２～３㎜白色小礫わずかに含む	外：5Y5/1灰色 内：N5/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
193	38	坏蓋	Ｇ－６ グリッド	口径（12.00） 器高　－ 最大径　－	20	良	密　径１～６㎜白色小礫わずかに含む	外：N5/0灰色 内：N7/0灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ後ナデ	右	歪みあり
194	38	坏蓋	Ｇ－７ グリッド	口径（11.80） 器高　－ 最大径　－	30	良	密　径１～６㎜白色小礫含む	外：N6/0灰色 内：N6.5/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	左	外面に自然釉付着
195	38	坏蓋	Ｇ－７ グリッド	口径（12.80） 器高　－ 最大径　－	20	良	密　白色粒子、径１㎜白色小礫多く含む　径１～２㎜砂礫含む	外：10BG6/1青灰色 内：5B6/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	
196	38	坏蓋	24Tr	口径（11.40） 器高　－ 最大径　－	20	良	密　白色粒子多く含む径１～６㎜白色小礫、黒色粒子含む	外：N5/1灰色 内：N6/1灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	不明	天井部外面にヘラ記号
197	38	坏蓋	24Tr上 拡張	口径（13.30） 器高　－ 最大径　－	10	良	密　白色粒子、径１～２㎜白色小礫わずかに含む	外：5Y6.5/1灰色 内：N7/0灰白色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	左	外面に自然釉少量付着
198	38	坏蓋	24Tr	口径（12.40） 器高　－ 最大径　－	10	良	密　径１～３㎜白色小礫わずかに含む	内外：10Y4.5/1灰色	内外：回転ナデ	右	口縁の一部に自然釉付着 歪みあり
199	38	坏蓋	Ｇ－６ グリッド	口径（10.60） 器高　－ 最大径　－	25	堅緻	密　径１～２㎜白色小礫、径４㎜砂礫、径１㎜灰色小礫わずかに含む	外：2.5Y7/2灰黄色 内：N6.5/0灰色	内外：回転ナデ	右	歪みあり

表30　入野高岸古窯出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	出土位置・層位	法量（cm）	残存率%	焼成	胎土	色調	調整等の特徴	轆轤	備考
200	38	坏蓋	E－4 グリッド	口径（12.40） 器高　－ 最大径（2.40）	50	堅緻	密　白色粒子多く含む 径１～４㎜白色小礫含む	外：5BG6/1青灰色 内：5B5/1青灰色	外：回転ナデ、一部不調整 内：回転ナデ後ナデ	右	火ぶくれ多い 歪み著しい
201	36	坏蓋	E－4 グリッド	口径（13.20） 器高（3.40） 最大径　－	60	堅緻	密　白色粒子多く含む 径１～３㎜白色小礫わずかに含む	外：N5.5/0灰色・口縁の一部は灰白色 内：5B5.5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ・不調整 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	不明	全体的に歪みあり
202	38	坏身	F－4 グリッド	口径（10.20） 器高　－ 最大径(12.80)	20	軟	やや粗　白色粒子わずかに含む	外：5Y6.5/2灰オリーブ色 内：5B5.5/1青灰色	内外：回転ナデ	不明	
203	36	坏身	24，25 Trの間	口径（10.00） 器高　－ 最大径(12.30)	40	良	やや密　径0.5～４㎜白色小礫多く含む　径８㎜白色小礫わずかに含む	外：N5/0灰色 内：N6.5/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	左	底部外面が過度の被熱か
204	36	坏身	G－7 グリッド	口径（9.70） 器高　3.55 最大径(11.50)	30	堅緻	密　白色粒子多く含む 径１～２㎜白色小礫わずかに含む	外：N6/0灰色 内：N5/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ナデ後粗いナデ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	不明	底部外面にヘラ記号「×」
205	37	坏身	G－7 グリッド	口径（11.00） 器高　3.40 最大径(13.50)	40	良	密　径１㎜黒色小礫多く含む　径１㎜白色小礫、径３㎜白色小礫わずかに含む	外：2.5Y7/2灰黄色 内：N6/0灰色	外：回転ナデ、一部不調整 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	不明	歪みあり 火ぶくれ多い
206	38	坏身	E－4 グリッド	口径（10.60） 器高　－ 最大径(13.40)	20	良	密　白色粒子多く含む 径２～３㎜白色小礫わずかに含む	外：5Y7/2灰白色 内：5BG5.5/1青灰色	内外：回転ナデ	不明	口縁部歪みあり 外面に自然釉付着
207	37	坏身	G－8 グリッド	口径（12.70） 器高　－ 最大径(15.20)	10	良	密　白色粒子少量含む 径１～２㎜白色小礫、径３㎜砂礫わずかに含む	外：10YR7/4にぶい黄橙色・口縁部は5B5.6/1青灰色 内：5B5.6/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	歪みあり
208	37	坏身	E－4 グリッド	口径（10.20） 器高　－ 最大径(12.40)	30	良	密　白色粒子多く含む 径１～２㎜白色小礫わずかに含む	外：5GY4/1暗オリーブ灰色 内：10BG4/1暗青灰色	外：回転ナデ、一部ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ	不明	
209	38	坏身	F－7 グリッド	口径（11.80） 器高　－ 最大径(13.50)	20	良	密　径１～２㎜白色小礫、白色粒子わずかに含む	外：5Y7/2灰白色 内・外の一部：N6.5/0灰色	内外：回転ナデ	不明	
210	38	坏身	25Tr	口径（9.00） 器高　－ 最大径(10.80)	10	堅緻	密　径１～２㎜灰色小礫わずかに含む　白色粒子多く含む	外：N5/0灰色 内：N5.5/0灰色	内外：回転ナデ	不明	歪みあり 外面に自然釉少量付着
211	38	坏身	F－7 グリッド	口径（8.70） 器高　－ 最大径(11.20)	20	堅緻	密　白色粒子わずかに含む	内外：2.5Y7/1灰白色	内外：回転ナデ	不明	歪みあり
212	37	高坏蓋	G－7 グリッド	口径（14.40） 器高　3.50 最大径(14.60)	20	良	密　白色粒子多く含む 径１～２㎜白色小礫わずかに含む	外：5B4/1暗青灰色 部分的に灰白色 内：5B5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	歪みあり
213	37	高坏蓋	G－7 グリッド	口径（14.10） 器高　4.00 最大径(14.50)	20	良	密　白色粒子含む　径１～２㎜白色小礫わずかに含む	外：5GY5/1オリーブ灰色 内：5B5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	歪みあり
214	37	高坏蓋	E－4 グリッド	口径（14.20） 器高　5.15 最大径　－	50	堅緻	密　白色粒子、径１㎜白色小礫多く含む　径２～３㎜灰色小礫わずかに含む	内外：N5/1灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	外面に粘土片付着 歪み著しい
215	37	高坏蓋	G－7 グリッド	口径（11.40） 器高　5.90 最大径　－	20	良	密　白色粒子、径１～２㎜白色小礫多く含む	外：7.5Y6.5/1灰オリーブ色 内：5BG5/1青灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	右	口縁部歪みあり
216	37	高坏	25Tr	口径（14.10） 器高　－ 最大径　－	坏部20	良	やや密　白色粒子・黒色粒子やや含む　径４㎜白色小礫わずかに含む	外：N4.5/0灰色 内：N5.5/0灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	右	
217	37	高坏	G－6 グリッド	口径　－ 器高　－ 脚部径(13.20)	脚部20	堅緻	密　白色粒子多く含む 径２～３㎜白色小礫わずかに含む	外：10BG5/1青灰色 内：5B5/1青灰色	内外：回転ナデ	右	

表30　入野高岸古窯出土遺物観察

挿図No.	図版No.	器種	出土位置・層位	法量（cm）	残存率%	焼成	胎土	色調	調整等の特徴	轆轤	備考
218	38	盌	25Tr	口径（6.60） 器高　－ 最大径　－	30	良	やや密　径１～２㎜白色小礫、径２㎜灰色小礫わずかに含む	外：7.5Y6/1灰色 内：7.5Y6.5/1灰色	内外：回転ナデ	右	
219	38	壺蓋	Ｇ－５ グリッド	口径（9.40） 器高　－ 最大径　－	口縁部20	堅緻	密　白色粒子、径１～７㎜白色小礫含む	外：5YR4/1褐灰色・7.5Y6/1灰色 内：N4.5/1灰色	外：回転ナデ、一部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	不明	
220	38	瓶	25，26 Trの間	口径（11.70） 器高　－ 最大径　－	口縁部10	堅緻	密　白色粒子、径１㎜白色小礫わずかに含む	内外：5Y6/1灰色	内外：回転ナデ	右	
221	38	瓶	25，26 Trの間	口径（13.00） 器高　－ 最大径　－	20	堅緻	密　白色粒子多く含む径１～２㎜白色小礫含む	外：5B5.5/1青灰色 内：5Y6.5/1灰色	内外：回転ナデ	右	口縁部の歪み著しい
222	37	広口瓶？	Ｇ－８ グリッド	口径（14.70） 器高　－ 最大径　－	口縁～頸部20	堅緻	密　径１～２㎜白色小礫含む	外：10BG5.5/1青灰色 内：5BG6/1青灰色	内外：回転ナデ	右	火ぶくれあり
223	37	平瓶	25Tr	口径（8.10） 器高　－ 最大径　－	口頸部20	堅緻	密　白色粒子、径３㎜白色小礫わずかに含む	外：N5/0灰色 内：N5.5/0灰色	内外：回転ナデ	不明	歪みあり
224	37	提瓶	25Tr	口径（8.50） 器高　－ 最大径　－	口頸部30	良	やや密　径１～５㎜白色小礫、径２～５㎜黒色小礫わずかに含む	外：5Y6/1灰色 内：5Y7/1灰白色	内外：回転ナデ	右	歪みあり
225		陶臼	Ｆ－７ グリッド	口径　－ 器高　－ 底径（9.40）	30	堅緻	密	外：10BG5.5/1青灰色 内：剥離のため不明	外：回転ナデ・タタキ・工具によるナデ 内：剥離のため不明	不明	内面は剥離
226	37	甕	Ｆ－４ グリッド	口径　－ 器高　－ 最大径　－	口頸部5	良	密　白色粒子多く含む径１～５㎜白色小礫わずかに含む	内外：2.5Y6/1黄灰色	外：回転ナデ、一部波状文 内：回転ナデ	不明	部分的に過度の被熱か 歪みが大きく口径推定不能
227	37	甕	Ｅ－４ グリッド	口径（18.80） 器高　－ 最大径(19.00)	口縁部20	堅緻	密　径１～３㎜白色小礫わずかに含む	外：2.5Y7/2灰黄色 内：N5/0灰色	内外：回転ナデ	右	内外面に自然釉付着 歪みあり
228		坏身	Ｂ－８ グリッド	口径　－ 器高　－ 最大径(10.90)	底部20	良	密　白色粒子多く含む	外：5B5/1青灰色 内：5R6/1赤灰色	外：回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ後ナデ	右	貼り付け高台 猿投産

※残存率は、全体に対しての割合を示す。ただし、坏部・脚部・つまみ部などの表記がある場合には、その部位の残存割合を示している。

※焼成は、「堅緻」が還元状態で、硬く焼き締まったもの、「良」が堅緻と比べてやや焼成が悪い、あるいは酸化状態が残るもの、「軟」は焼成不良で、軟質のものをそれぞれ示す。

表31　その他の出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	出土位置・層位	法量（cm）	残存率%	焼成	胎土	色調	調整等の特徴	轆轤	備考
229		かわらけ	SF-1	口径（8.00） 器高　1.35 底径　4.80	80	良	密　白色粒子少量含む	外：2.5YR5/1黄灰色 内：10YR5/2灰黄褐色	外:回転ナデ、底部糸切り 内:回転ナデ	左？	摩滅気味
230		かわらけ	SF-1	口径　－ 器高　1.15 底径　4.50	60	良	密　白色粒子少量含む	外：10YR5/1褐灰色 内：10YR6/2灰黄褐色	外:回転ナデ、底部糸切り 内:回転ナデ	左？	
231		かわらけ	SF-1	口径　8.10 器高　2.05 底径　4.30	90	良	密　白色粒子少量含む	外：7.5YR4.5/1褐灰色 内：7.5YR5/1.5褐灰色	外:回転ナデ、底部糸切り 内:回転ナデ	左	歪み著しい
232		かわらけ	SF-1	口径　7.80 器高　2.20 底径　4.20	70	良	密　白色粒子わずかに含む	外：7.5YR5.5/1褐灰色 内：5YR5/1褐灰色	外:回転ナデ、底部糸切り 内:回転ナデ	不明	歪み著しい
233		坏蓋	SF-3	口径（12.30） 器高　－ 最大径(13.00)	25	良	密　白色粒子含む	外：5B4.5/1暗青灰色 内：5B7/1明青灰色	外:回転ナデ、一部不調整 内:回転ナデ、一部回転ナデ後ナデ	良	

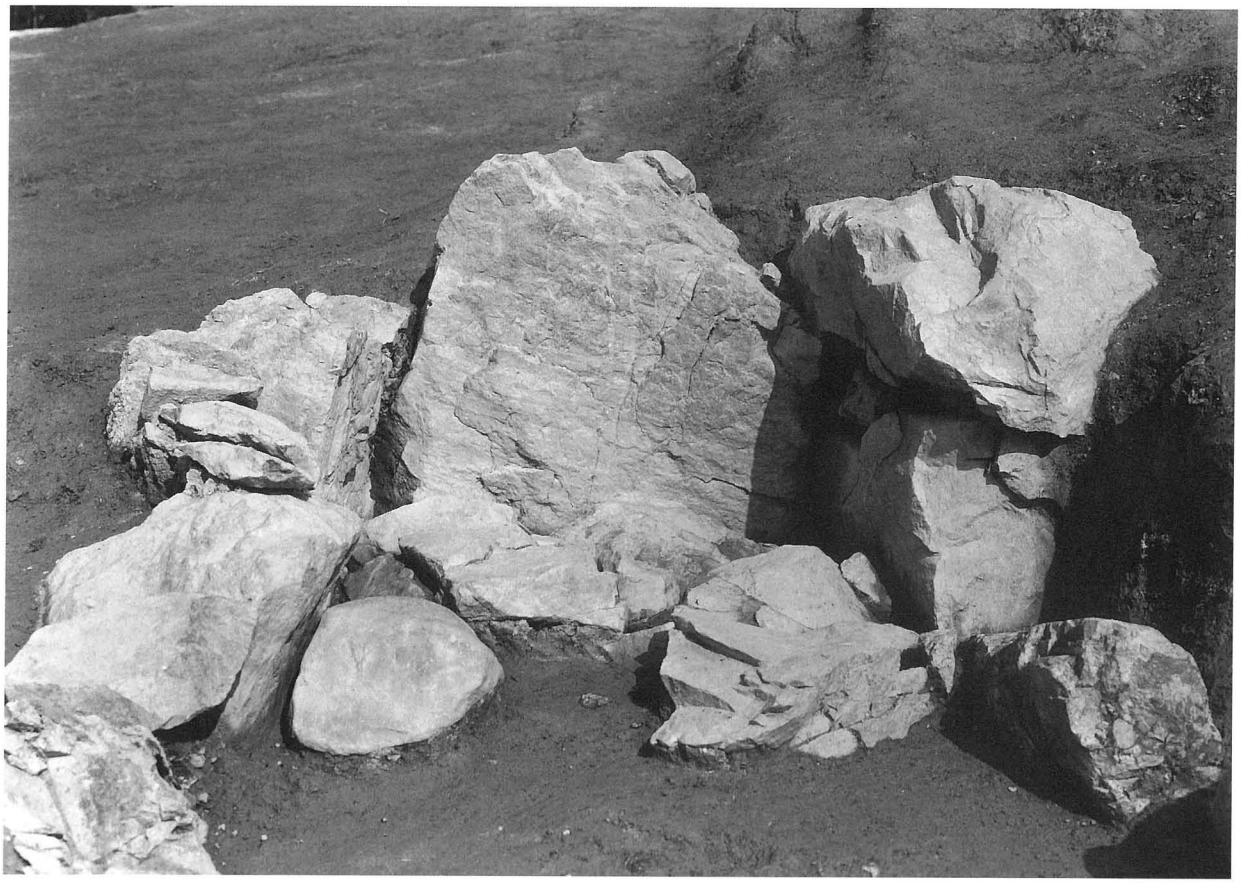
図　版

１．調査前の状況（北西から）

２．古墳全景（南から）

図版２

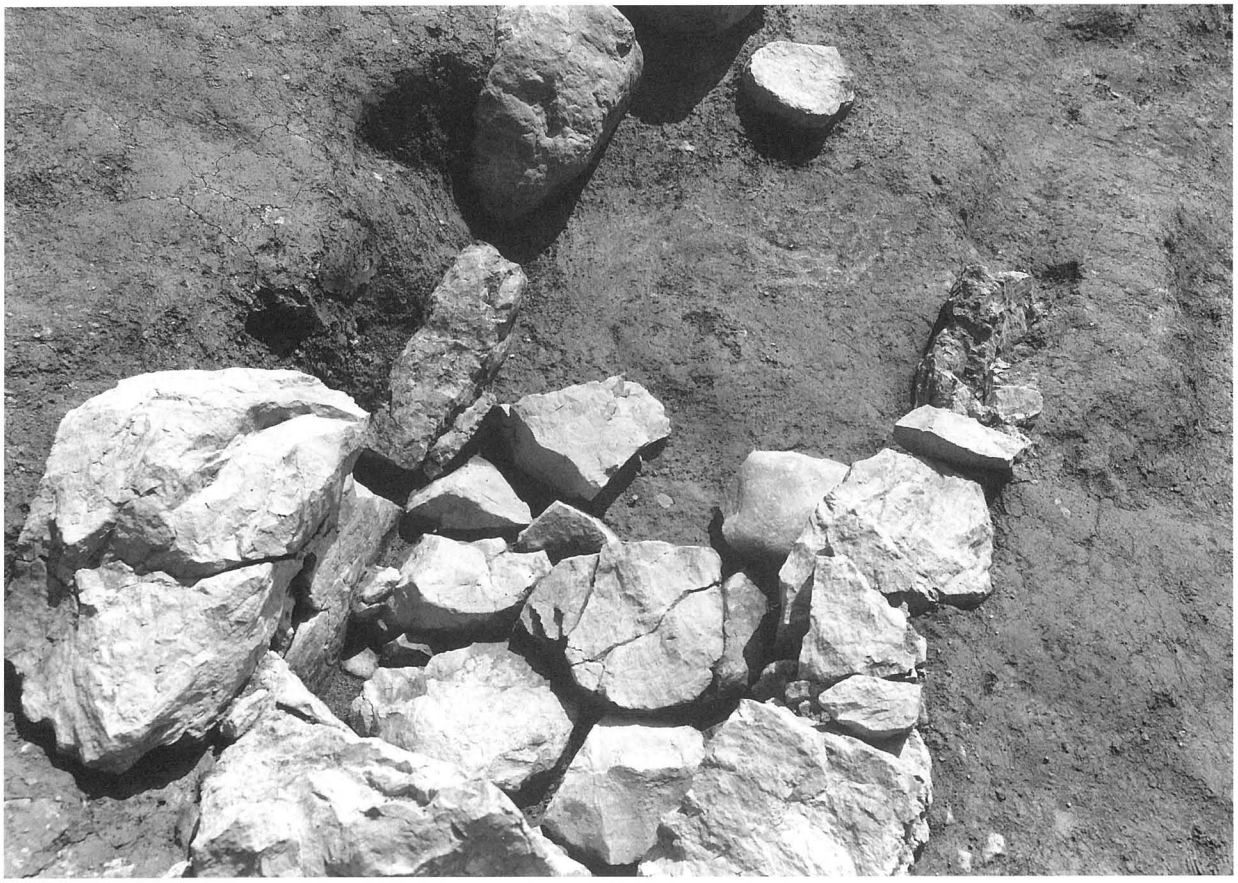
入野東９号墳



１．奥壁（南から）

２．西壁（東から）

１．東壁（西から）



２．床面の状況（北西から）

図版４

入野東９号墳

１．遺物出土状況（北西から）

２．基底石と掘形（南から）

1

2

3

5

4

6

7

8

9

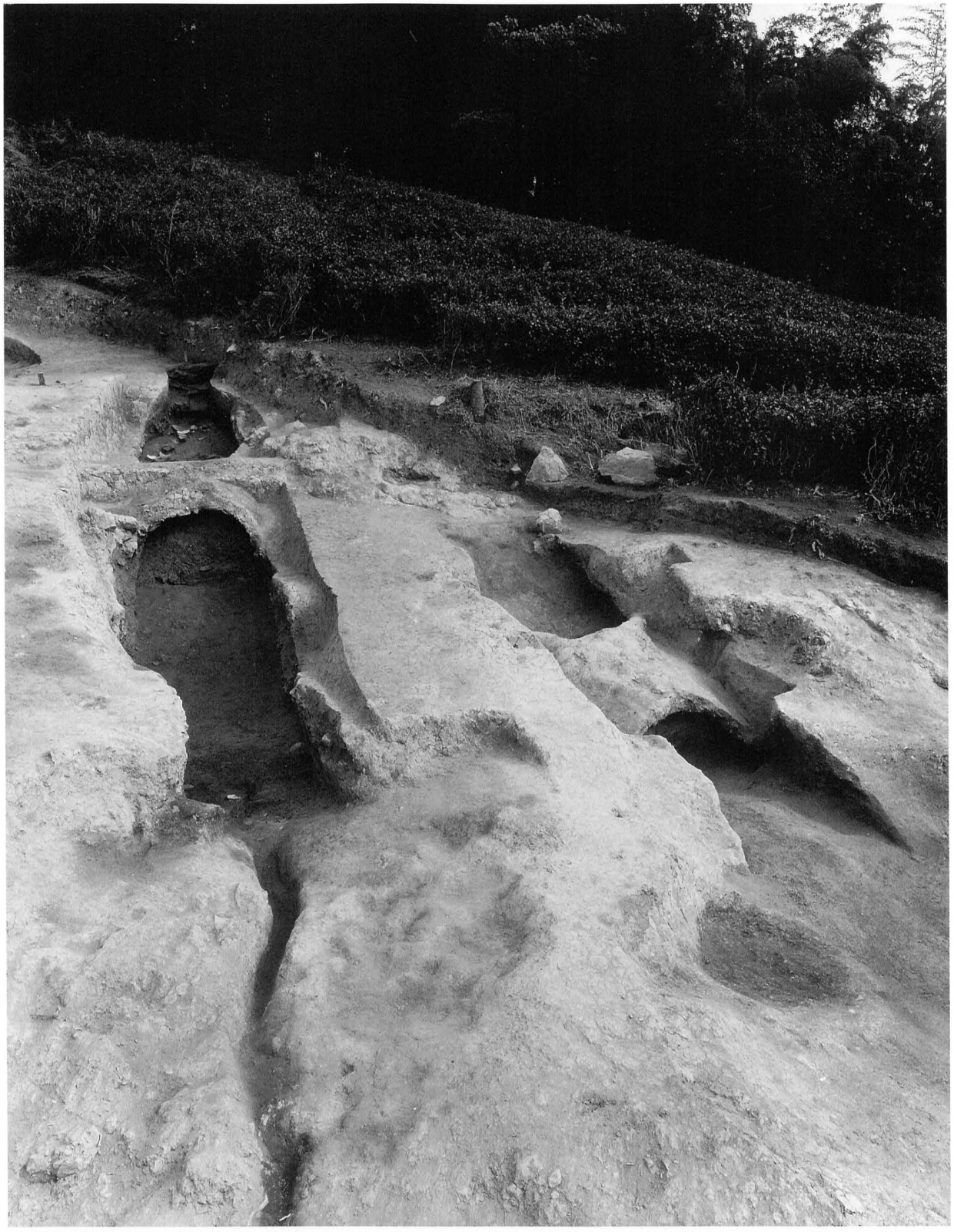
９号墳の出土遺物

図版６

入野高岸古窯

１．遺跡遠景（西から）

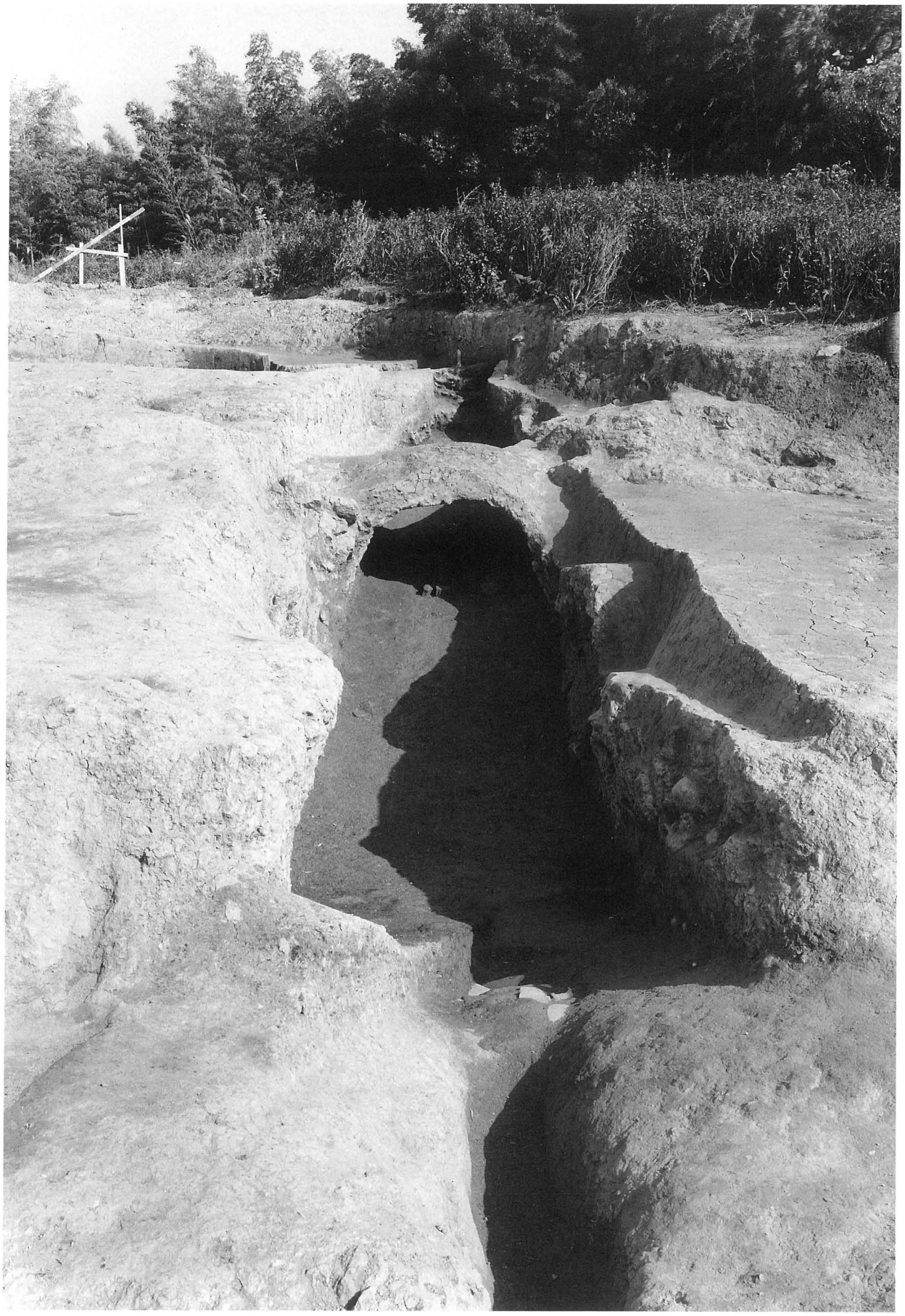
２．調査区全景（北から）



１号窯・２号窯全景（西から）

図版８

入野高岸１号窯



１号窯全景（西から）

１．天井残存部の堆積状況（西から）

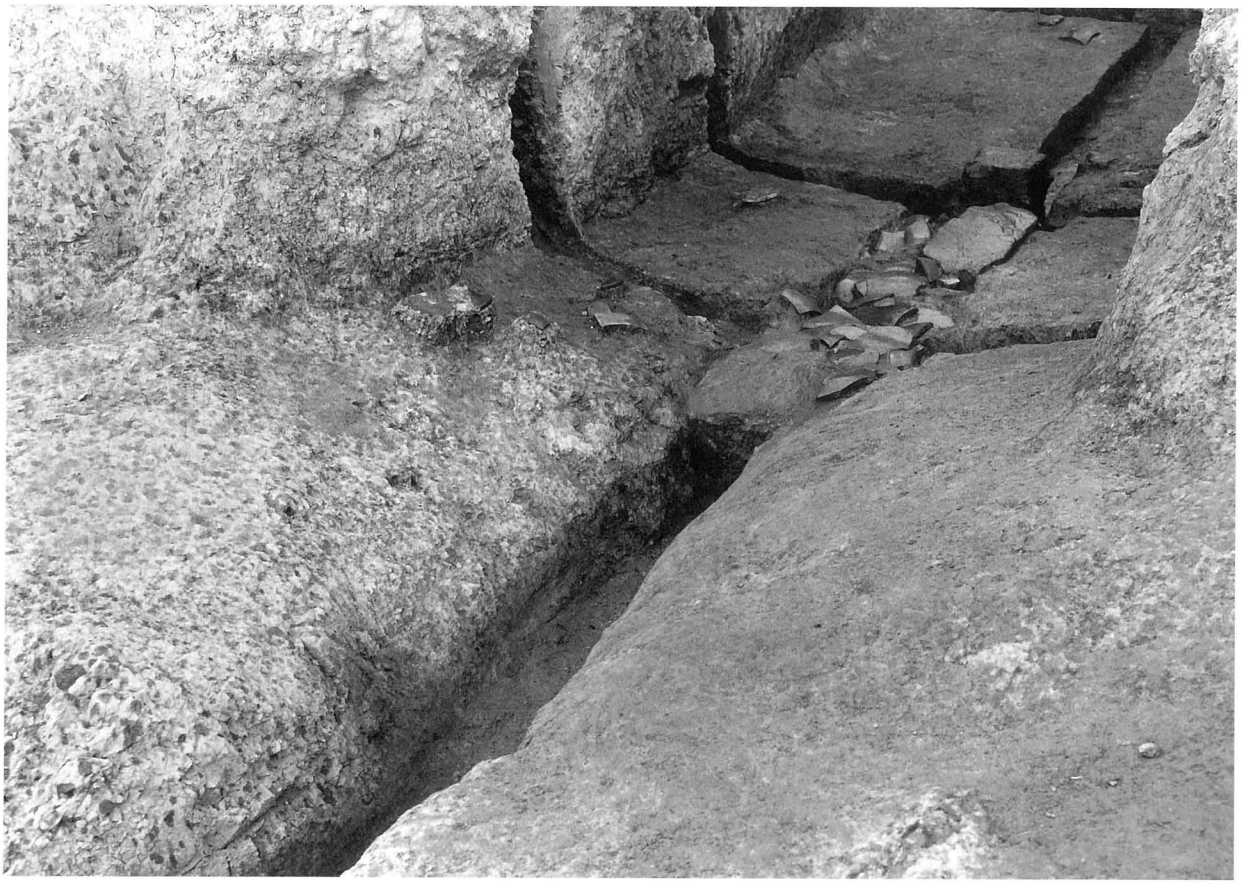
２．煙道部　遺物出土状況（西から）

３．焼成部　遺物出土状況（北西から）

図版10

入野高岸１号窯

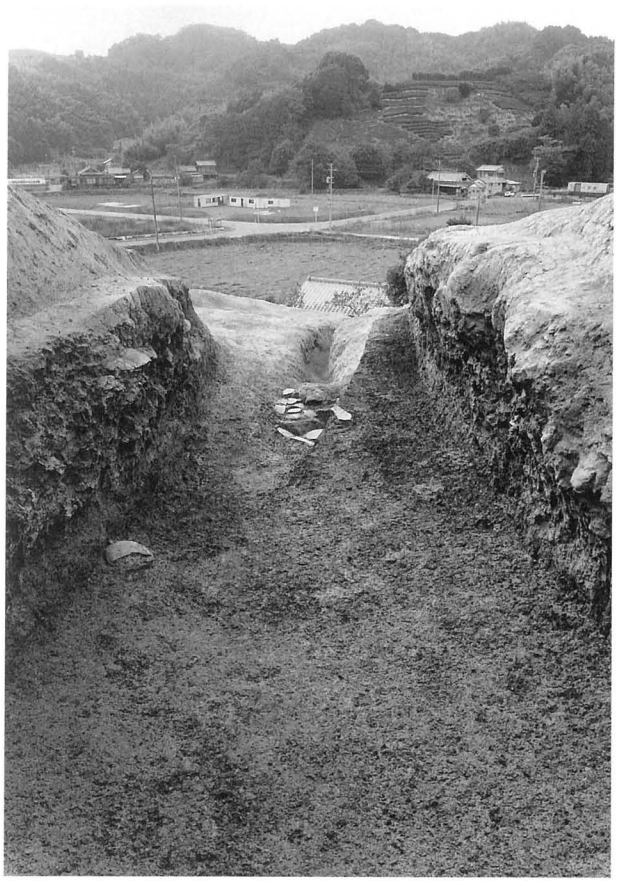
１．天井残存部北壁（西から）



２．焚口と排水溝（南西から）

１．天井残存部南壁（西から）

２．燃焼部付近（南東から）



３．第Ⅴ次床面　遺物出土状況（東から）

図版12

入野高岸１号窯

１．完掘状況（西から）

２．排煙調整溝完掘状況（東から）

２号窯全景（北西から）

図版14

入野高岸２号窯

１．窯体横断面（西から）

２．天井部残存状況（西から）

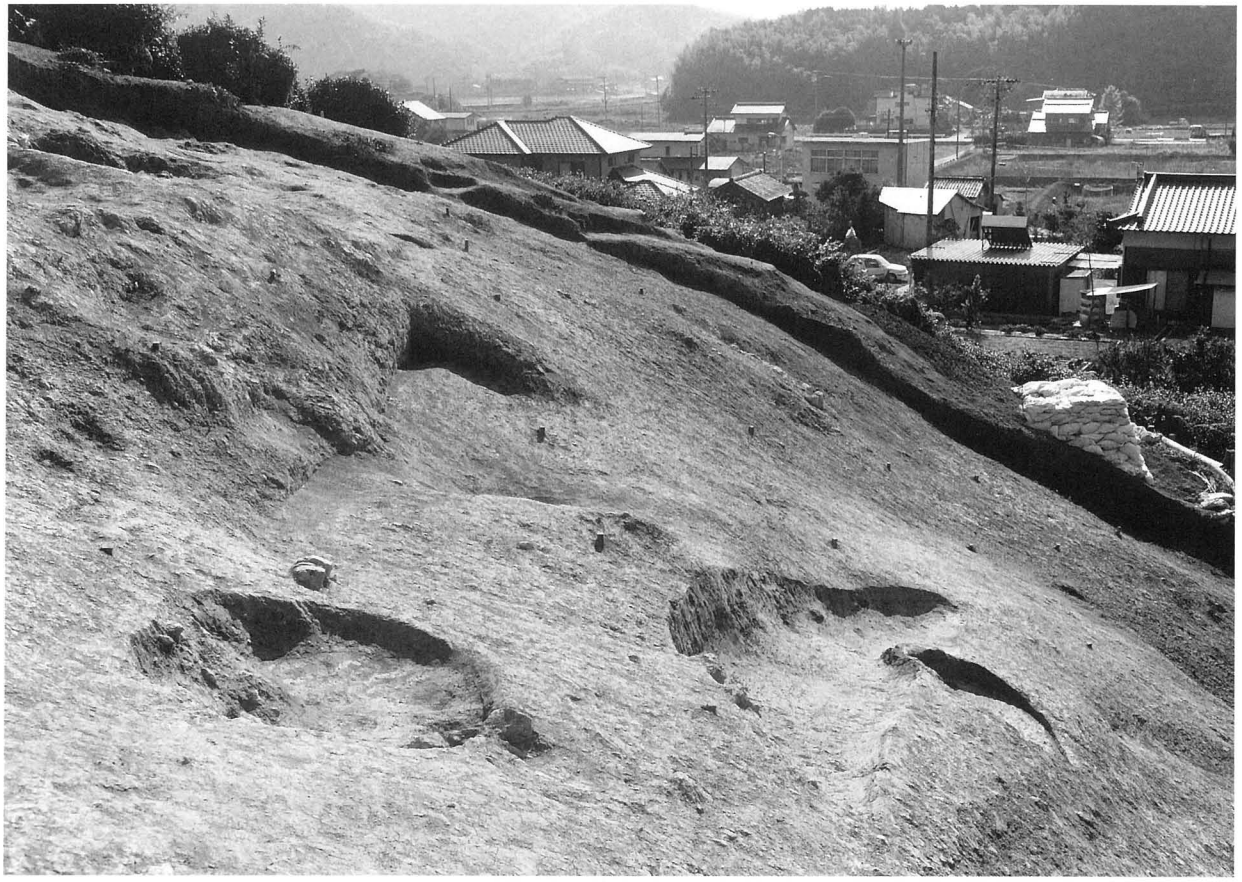
1．全景（西から）

2．遺物出土状況（北東から）

図版16

入野高岸２号窯

１．２号窯完掘状況（西から）



２．その他の遺構（北から）

1．SF－3（西から）

2．SF－1（北から）

図版18

入野高岸１号窯

１号窯主要出土遺物

Ⅰ～Ⅳ次床主要出土遺物

14

17

15

19

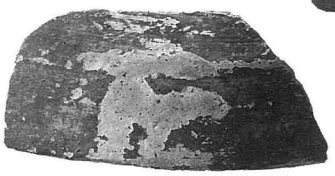
Ⅰ次床出土遺物１

図版20

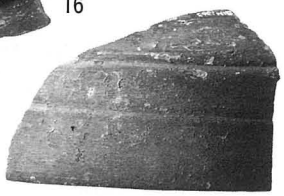
入野高岸１号窯

11

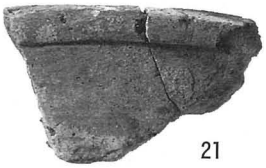
13


12

16


18

20

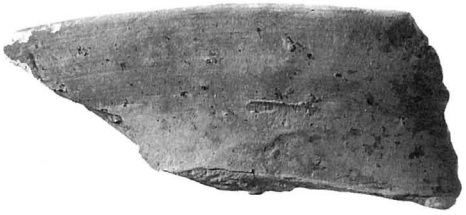

21

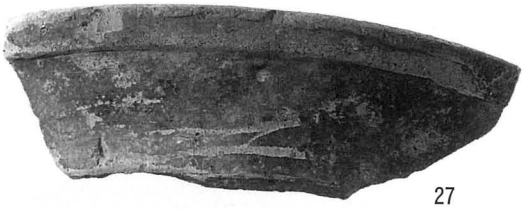
Ⅰ次床出土遺物２

23

24

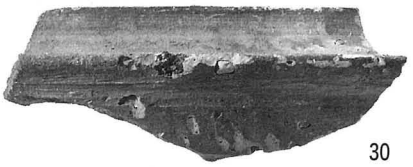
26

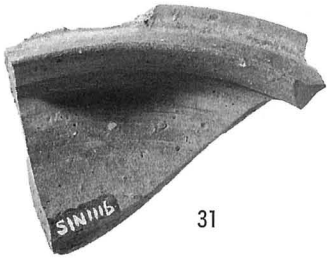

28


27

Ⅱ次床出土遺物１

29


30


31

32

III次床出土遺物１

38

34

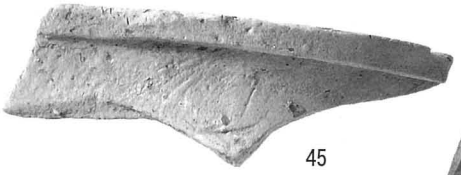
35

36

37

39

40


45

41

42

46

IV次床出土遺物１

図版22

入野高岸１号窯

Ⅴ次床主要出土遺物

22

33

25

44

Ⅱ次床出土遺物２・Ⅳ次床出土遺物２

47

67

49

51

66

52

70

69

Ⅴ次床出土遺物１

図版24

入野高岸１号窯

74

57

61

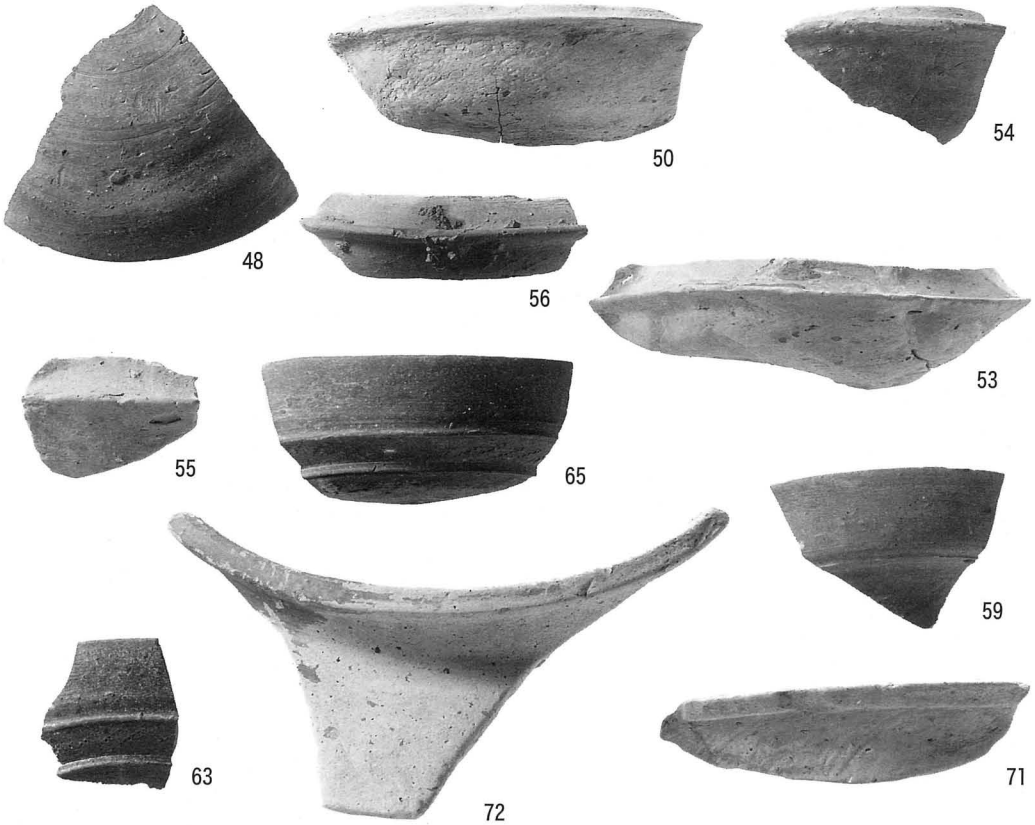
58

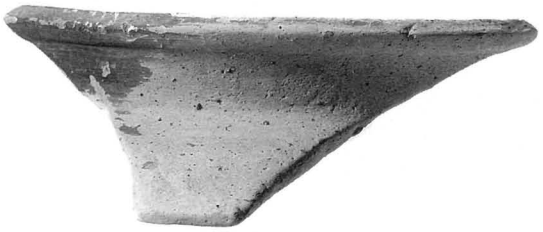
62

60

64

Ⅴ次床出土遺物２





Ⅴ次床出土遺物３

図版26

入野高岸１号窯

前庭部主要出土遺物

75

79

77

80

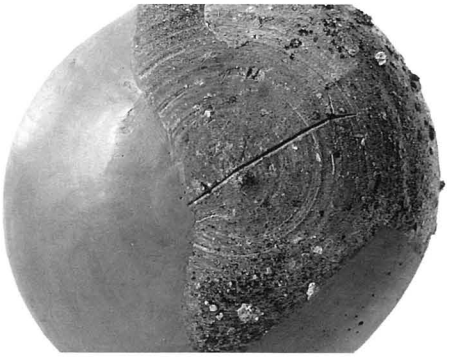
前庭部出土遺物1・窯体内出土遺物

81

82

87

88


88

91

97

99

100

109

前庭部出土遺物２

図版28

入野高岸１号窯

138

101

105

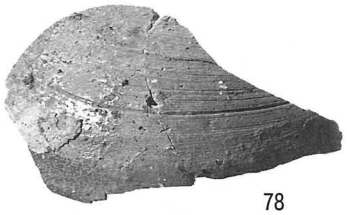
102

110

104

111

前庭部出土遺物３


78

94

96

98

85

115

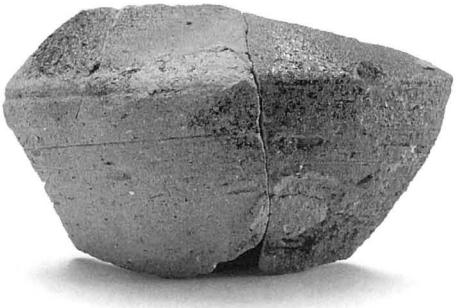
106

103

116

86

132

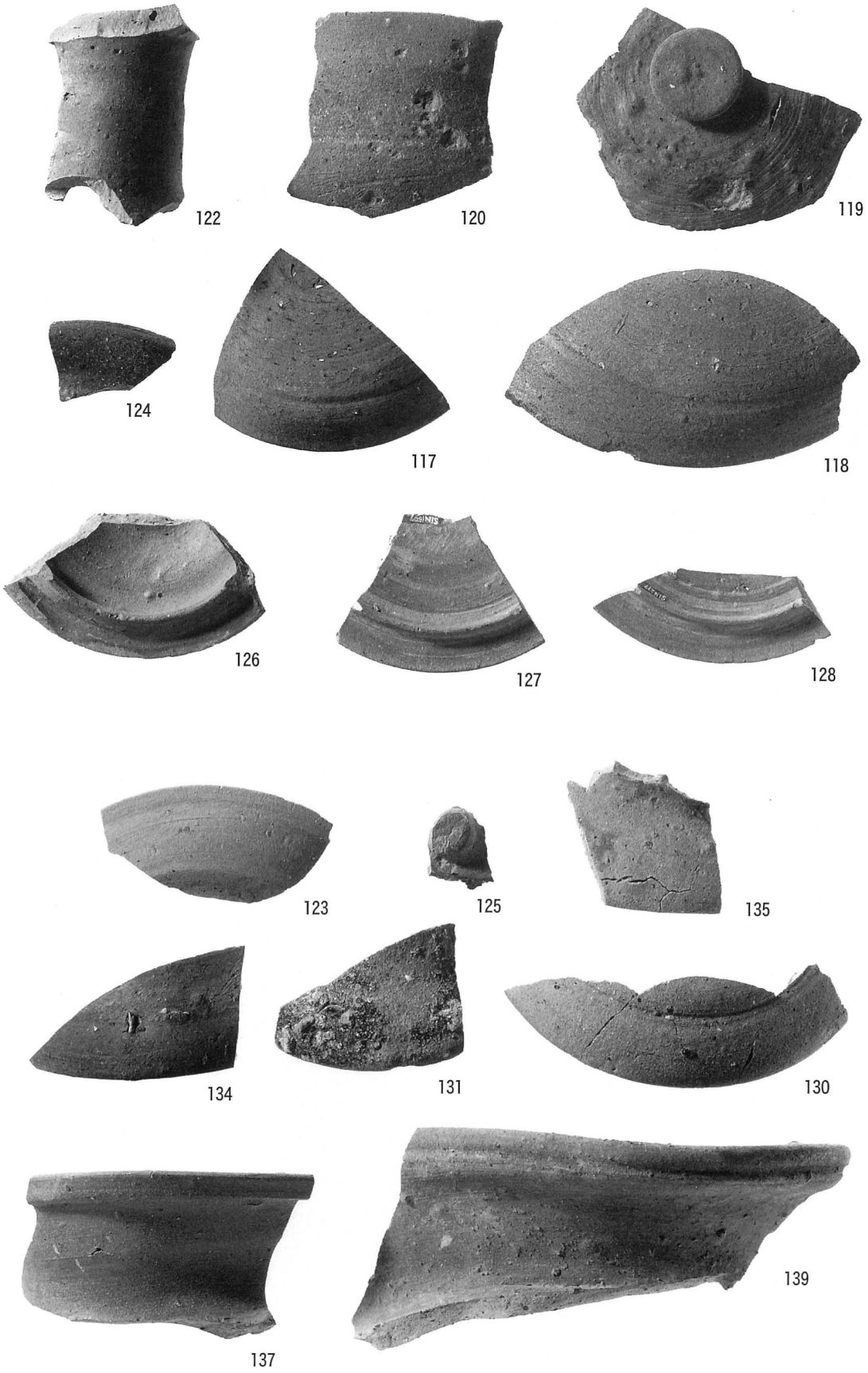

129

133

前庭部出土遺物４

図版30

入野高岸１号窯



前庭部出土遺物５

２号窯主要出土遺物

図版32

入野高岸２号窯

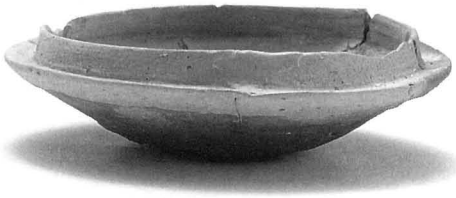
II 次床主要出土遺物

III 次床主要出土遺物

143

144

146


147

148

150

151

152

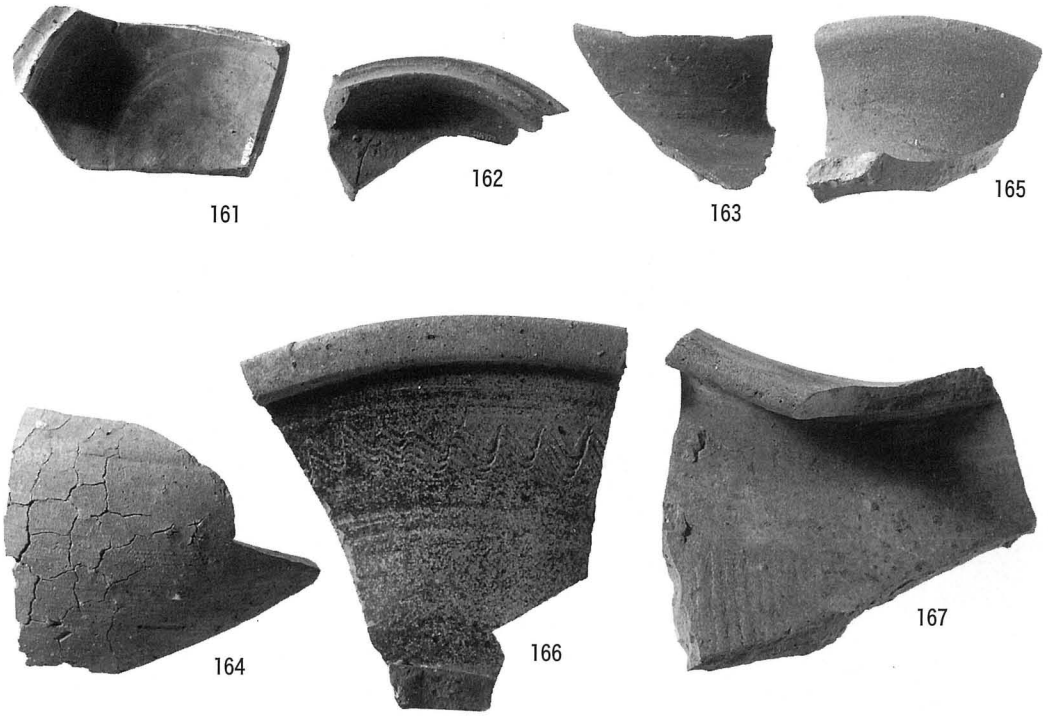
153

154

II 次床出土遺物１・III 次床出土遺物１

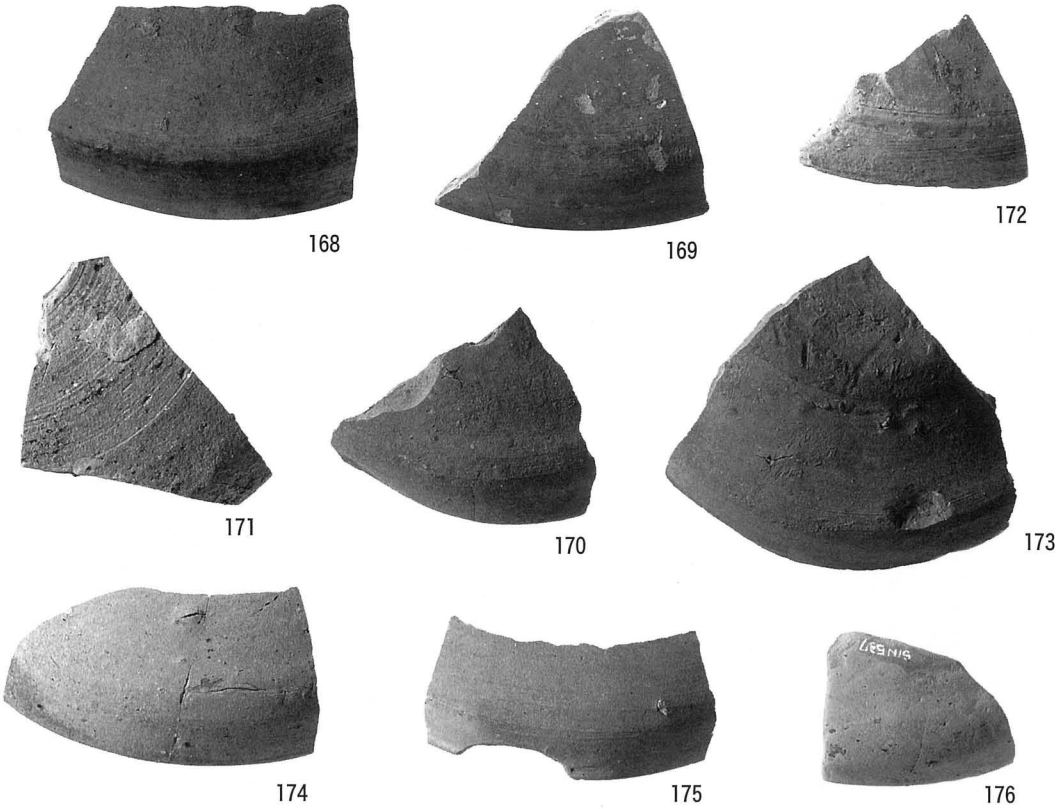
図版34

入野高岸２号窯

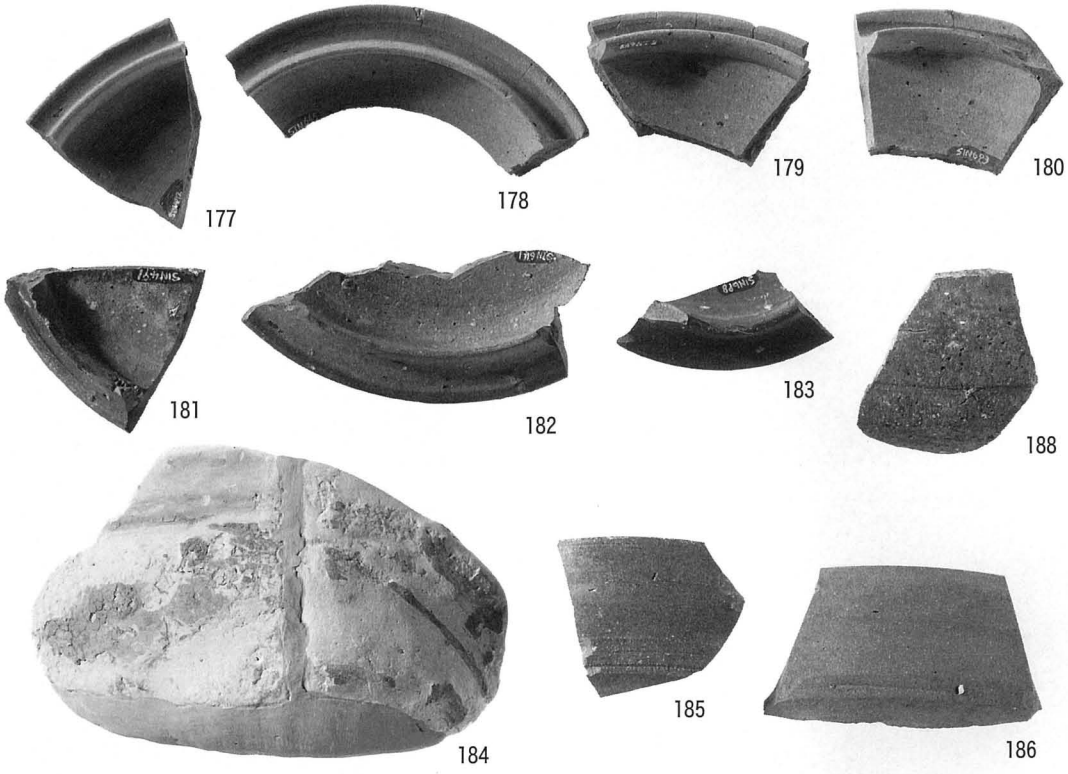


前庭部出土遺物１

Ⅲ次床出土遺物３・前庭部出土遺物２



前庭部出土遺物３



前庭部出土遺物４

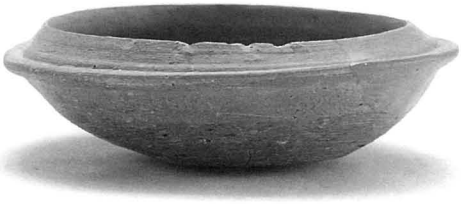
図版36

入野高岸１・２号窯

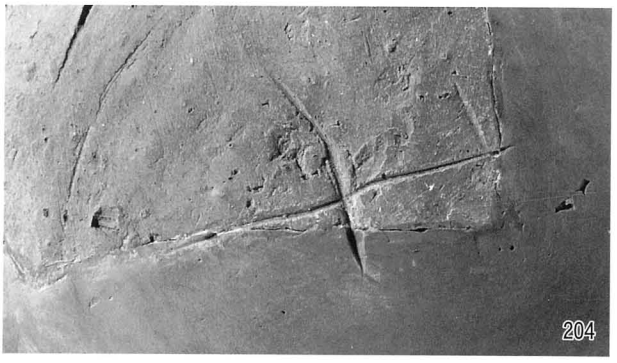
灰原主要出土遺物

201

204

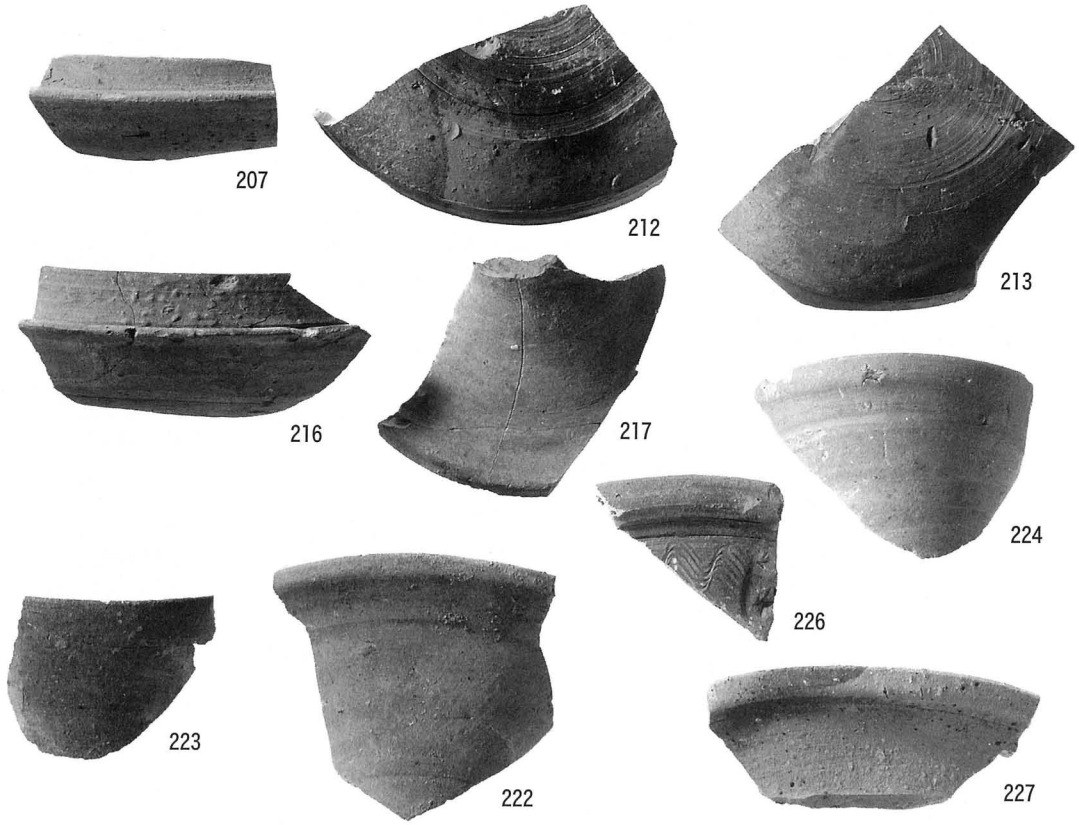


203

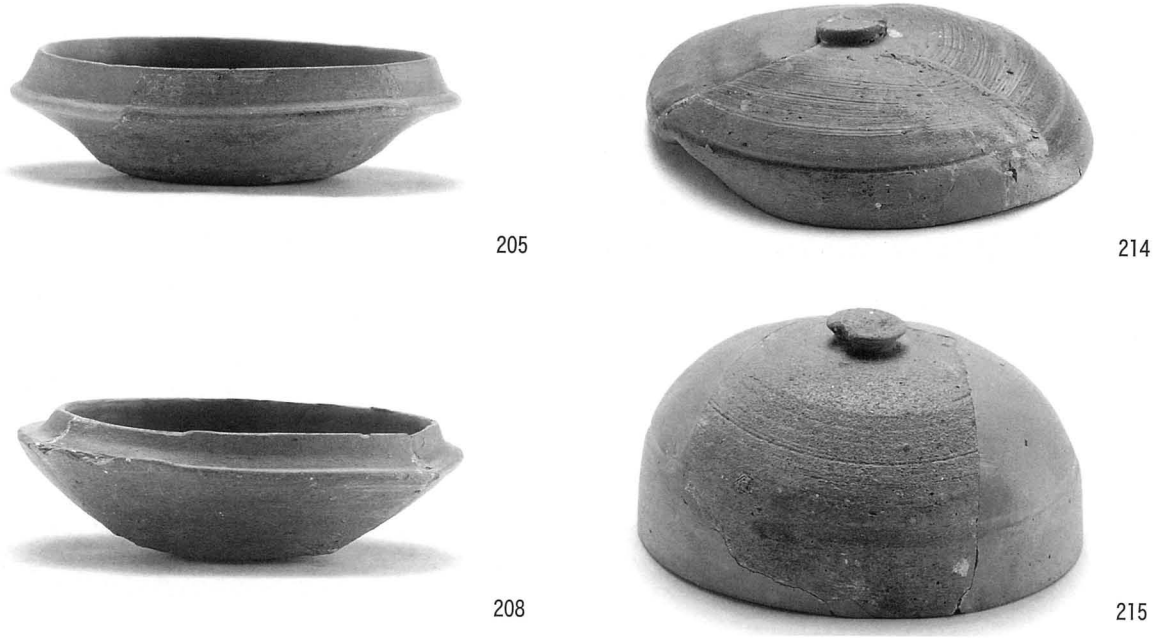


204

灰原出土遺物１



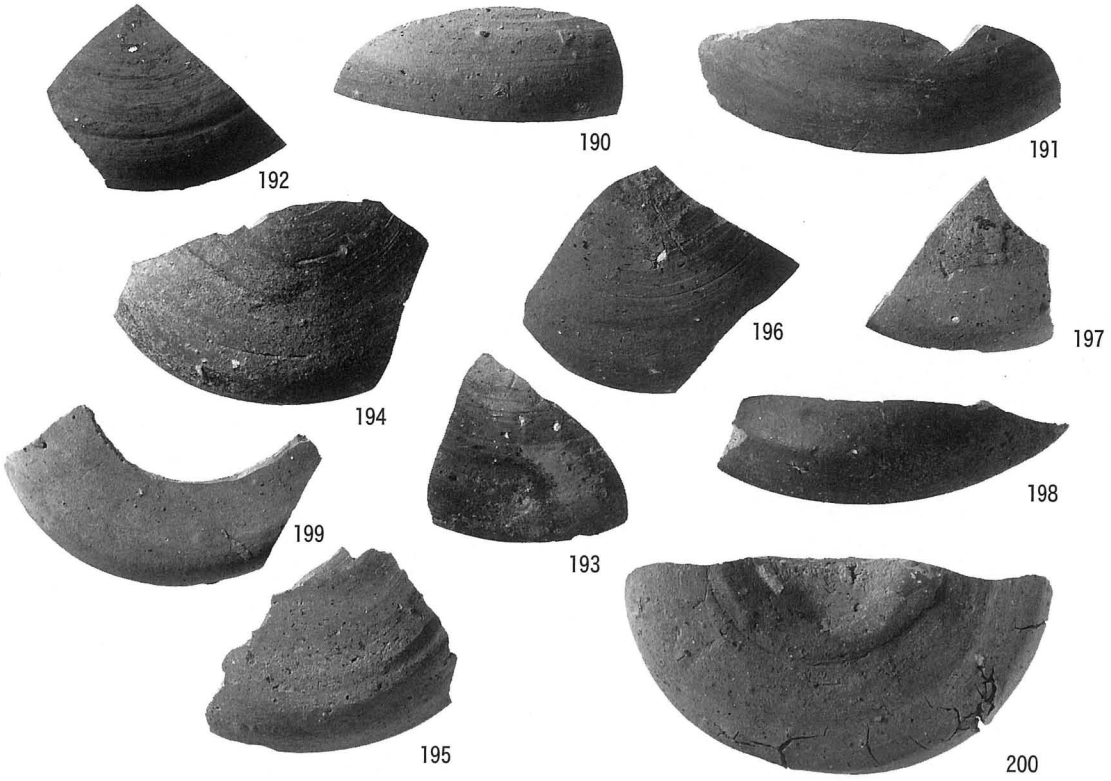
灰原出土遺物２



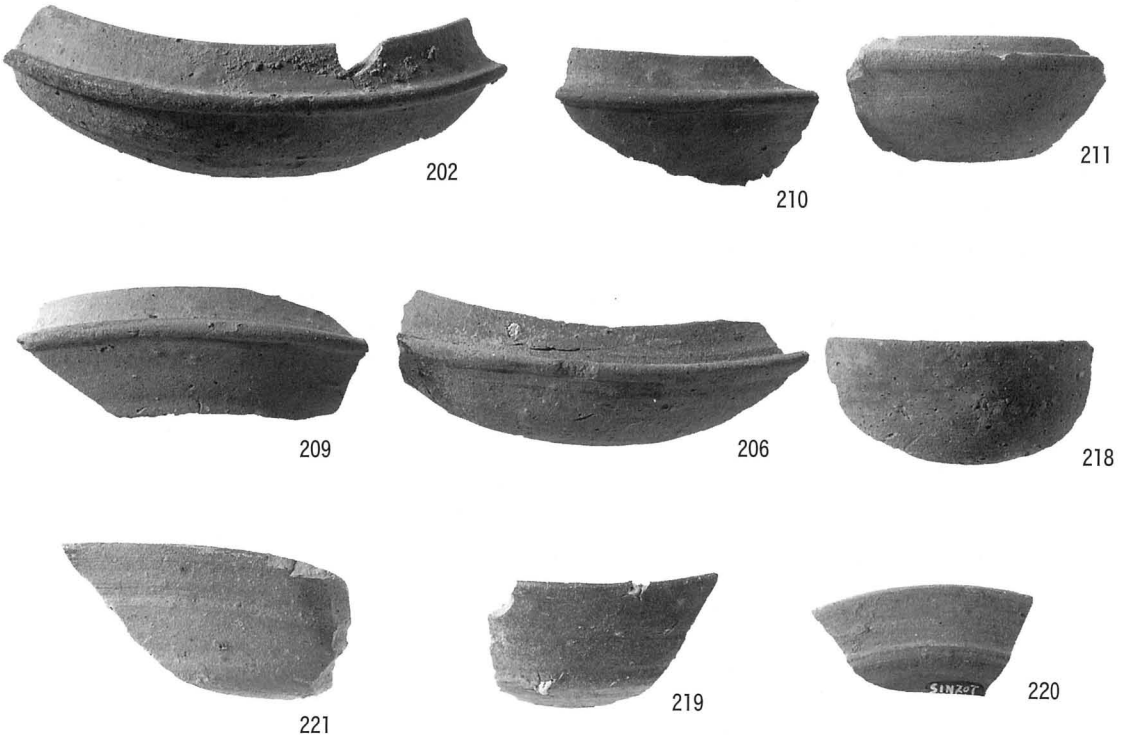
灰原出土遺物３

図版38

入野高岸１・２号窯



灰原出土遺物４



灰原出土遺物５

報告書抄録

ふりがな	いりのひがしこふんぐん・いりのたかぎしこよう
書名	入野東古墳群・入野高岸古窯
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　岡部町
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第177集
編著者名	菊池吉修／福島志野／長谷川睦／及川司／三辻利一／広岡公夫
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20　TEL 054－262－4261㈹
発行年月日	西暦2007年３月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町名	遺跡番号					
いりのひがし 入野東 こふんぐん 古墳群	しずおかけん 静岡県 しだぐん 志太郡 おかべちょう 岡部町 いりの 入野250-2 他	22401	17	34度 55分 １秒	138度 15分 46秒	20000904 ～ 20001113	225㎡	道路建設に伴う発掘調査（第二東名）
いりのたかぎし 入野高岸 こよう 古窯	しずおかけん 静岡県 しだぐん 志太郡 おかべちょう 岡部町 いりの 入野243-2 他	22401	38	34度 54分 59秒	138度 15分 45秒	20010801 ～ 20020124	750㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
入野東古墳群	古墳	古墳時代後期	横穴式石室１	須恵器（坏身・坏蓋・長頸瓶）	横穴式石室を主体部とする古墳
入野高岸古窯	生産遺跡	古墳時代後期	須恵器窯２	須恵器（坏身・坏蓋・高坏・甕・瓶類・陶臼・甕）	１号窯は６世紀末葉～７世紀初頭、２号窯は７世紀前半の須恵器専業窯
		時期不明	土坑３・溝１		

要約	入野東９号墳は、横穴式石室を埋葬施設にもつ７世紀末～８世紀の古墳である。残存状況は悪いものの、石室内外から須恵器が出土している。入野高岸古窯は、７世紀前葉に位置付けられる窯跡群であり、２基の窯跡を調査した。共に須恵器専業窯である。この調査により、志太地域北東部において古墳時代後期の窯跡が存在することが明らかとなった。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第177集

入野東古墳群・入野高岸古窯

第二東名№76～78地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

岡部町

2007年３月30日

編集・発行　財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡市駿河区谷田23番20号
TEL (054)262-4261㈹
FAX (054)262-4266
印　刷　所　松本印刷株式会社
静岡県島田市横井４丁目８－３
TEL (0547)36-5015㈹